

始



時214
871

八段 高部道平著



圍碁聖典



東京 金竜堂出版部

圍碁聖典 目次

緒言.....一頁

入門篇.....一頁

布石及び生死を圖解して初歩の入門とす

定石篇.....三三頁

九子より互先までの定石の活用を解説す

侵分篇.....二三三頁

侵分の時機と前後を説き利害得失を論ず

妙傳篇……………二五九頁

奇手妙手を集めて圍碁の神秘を指す

名局篇……………二九九頁

古今の名人高段者の對局を詳解して碁道の精神と奥義を研究する
聖典とす

圍碁聖典

八段 高部道平著

緒言

碁の始まりに就ては、餘りに遼として居り、且つ強いてそれを詮議する必要もないが、何れにしても極めて古く、漢土に起つたものであらう。

その日本に傳來した時代とか、徑路とくに就ても、明らかに文献の徵すべきものはないが、既に奈良朝に於て、その存在の事實は認められ、それが平安朝を経て延喜の朝に及び、甚だ盛況を極めたことは、畏くも醍醐天皇 橘寛蓮が、圍碁の御指南を申上げたことや、勅命を奉じて碁式を制定した史實に照しても明白で、この時代にはもう圍碁の何物たるかも、可なり廣い範圍に理解された。

その後鎌倉時代、吉野朝時代、室町時代と、各時代を通じて一盛一衰は有つたが、何れにしてもまた一般には、普及されてゐなかつた。

然るに、足利の末造、應仁の亂から引續く戰亂のため、斯道の將に中絶せんとしたのを、織田信長が京師に入つて、室町時

代に發達した斯道の、名匠を集めた。その中に日蓮宗の僧日海の特に人物の勝れたのを見出し、信長がこれに師事したことにより斯道は勃然として再興し、武士は競つて斯道を學んだ。

豊臣氏の代に基所を設けたのは、織田氏の遺志を繼いだのと斯道を戦術研究の一助としたため。また徳川氏もその制を承けて斯道を善用し、禮儀を正し人心を鎮め治世の一端とした。

愆く日海(本因坊)、中村道碩、その他の名匠は、秀吉の推轂を受け、昇殿を許され、文祿元年には、後陽成天皇の玉座に咫尺して圍碁を天覽に供したといはれる。

かういふ風に次第に發達して徳川氏に迫り、本因坊、井上、安井、林の四家が家元として、公儀から扶持された。

所が、これを日本に傳へた支那の碁は、さしも久しい歴史を有つて居るにも拘らず、光緒時代の國手、周小松を最後として漸次凋落の傾を辿り、私の渡文した明治四十二年には、當時四段の私に二子で八十餘局手合せ、内十三局しか勝てなかつた張樂山といふ國手の外は、張氏より劣つたもののみであつた。今日は唯だ一つの古典的な遊技として傳はるに過ぎず、偶々碁技に志す者は今の日本の手法を學んでゐる。

私が在支十七年間の内十年は、大總統になつた段祺瑞氏の所に、引續きゐて少からず支那の棋界に貢獻したが、この事實は、支那の棋界に名手の無かつたことを最も雄辯に物語る。この事實から推して、日本の碁は、根源は支那にあるが、現在では日本に發達した純粹の國技といつてよい。

棋史に關聯して、碁道といふものにつき、話して見たい。古來、士農工商といつて武士が四民の上に立つた時代に、武士道が尙ばれたやうに、中世ヨーロッパに於て騎士が尊敬された時騎士道の謳歌されたやうに、さてはまた今日所謂紳士なるものが紳士の道を知らなければ、如何にしても識者の嗤笑を免れることの出来ないと同じやうに、苟且にも碁に遊び碁を娯まうと

いふ人々が、若し、碁の道即ち碁道といふものを知らなければ、龍を描いて胸を盟せるが如く、また、玉の杯に底なき心地がせられる。

かういふと、或人はいや碁を打つ者にそのやうな御談は餘計なことだ。碁は打つて勝てば即ち、その目的は足るといふかも知れない。これについてはしかし、私は、よく誰談などに聞く刀鍛冶の、正宗と村正の話を思ひ起す。素より講談にいふ所であつて、それが果して、史實に照し誤ないか否かは、私も遽に斷定し得ないが、兎に角、正宗は刀を打つときに、刀は人を斬るよりも自分を護る、即ち、護身の具だといふことを念頭に置いてゐたらしい。これに反し、村正はたゞ單に、自分の打つ刀がよく斬れるやうに、よく斬れるやうにと、そのみ心懸けたといはれる。そして今日、私の聞く所に誤がなければ、正宗の打つた刀は非難のない名刀と賞美されてゐるに反し、村正の劍は、斬れることは滅法斬れるが、邪劍といはれてゐる。また畫の巨匠菊地容齋が赤貧洗ふが如き中に、或る大名より狸々の舞の畫を頼まれたが狸々の舞を見たことがないので當時の能の大家に乞ふてその舞を見せて貰ひ、その求めの責を果したが、その能を見たり、その他の雜費を併せた額は、貰つた謝儀に及ばなかつたことが、後に、頼んだ大名の知る所となつて、「かくてこそ、その畫も眞に尙ばれる」と、容齋の人格を讃えられた。これも、容齋その人の胸中には畫道のみあつて他を顧みなかつた高雅な心懸けによるものである。これ等の例は幾多あるが、これは、本來、藝道に志す専門家に望む所である。しかし、また、碁に親しむ大衆にしても、その二例の心懸けを味ひ、碁局に對するときは、勝敗の念は第二第三に置いて、大にしては盤面を世界と見て、如何にして世界人類のため善い事をしやう、即ち、碁の手段を正々堂々の争にして、些の邪念なく、一局を打終らうと心懸けねばならぬ。

この意味は、一國內に在つても、また小にしては一家の内に於ても、打つその人の大宰相なり家長なれば、世界、一國或は一家を第一義として、自己の忿念は顧みる所は無い筈。かくてこそ、名局も現はれるものである。が、碁は、君子の樂しむも

のといふが、實は然らず、茲に一局の大勢を計算して、正に勝敗の岐れ目となれば、「吾等は君子であるからさやうな手は打てない」と、坐して減じるのを待つものではなく、假令人道に反すと雖も一國の爲ならば多大な損害も顧みず敢然と、勝たんが爲めの手段を遂行する。これ、「大義親を滅す」とか、また犠牲とかいふ言葉の現はれる所以であつて、即ち、この點より推すも、碁は覇者的のものである、其處にまた、碁道の面白味も大いに湧くもの。

十九路縦横の線は、三百六十一目の筋があつて、石を對者各一手づゝ圍みあふのだが、その形勢は變化百出、窮りなく、幾千萬局圍むといへども、決して同形のものはない。それが、一路加へて縦横各二十筋または二十一筋にすれば、十九路を一家と見れば、二十路、二十一路は、一國または世界の廣範圍となつて、出來事の處理はむづかしい。それが、十八路、十七路となれば小範圍となつて判り易くなる。

この理は、或は碁に初めて入る人は、碁盤を四分の一にした將棋盤で碁を打つことも上達を速かならしむることと思ふが幾千萬の變化窮りなき碁も、詮じ詰むれば、根源は四つに歸する。即ち、一子置いたそれより一路も間を置かず恰かも手足の如く四ヶ所へ角道に打出すのを「尖み」といひ、一路も空けず上下左右に打つのを「並び」といひ、上下左右に一路空けて打つのを「一間飛」といひ、また、一路空けて斜走に出るのを「小桂馬」といふ。そしてこの小桂馬には、將碁の桂馬が動くやうにその出る方向は八つある。

この四つの形が抑も幾千萬の變化を生む母胎であつて、その尖み、並び、一間飛び、及び、斜走即ち小桂馬が、必ずしも眞能の好手ではないといふ場合を見分けることが、その人の碁才。

才のことで一寸言つておく。碁の上達の著しい人を天才といふが、その天分のみでは決して上達するものではなく、この本に於て希望してゐるやうに、「名局」なりまたは全巻を一度や二度見て「あゝ判つた」といはず何百遍何千遍も繰返しく

一時即でも二時間でも暇ある毎に盤上に並べ見、また素見の出来る所は盤に向はすとも見ることが、濶古知新即ち古きをたづね新しきを知るといふことになつて、この挽まない勇氣と努力によれば、延いては盛夏にあつて暑さを忘れ、嚴冬にあつて寒さを忘れる澄心の境に入ることが出来、即ち碁徳が顯はれる。天才のみに頼つては決して上達するものではなく、要するに、上達はこの挽まない精神の勇氣と努力とに依るのである。

序に言つておくが、「妙傳」は殆ど解決を興へてあるが、研究心を以て先に白丸黒丸のみを盤に並びまたは素見にしても白丸黒丸の外には頼らないことにするのがよいことは、言ふまでもない。

手前味噌に見られては迷惑だが、私の、親が發明のみに没頭した故次第に貧困となり、殆ど學事を學ぶ餘暇がなくなつて、早くも生活のため碁を學ぶことになり、二十二歳始めて四段に入り、そして渡支、二十九歳歸朝、半年餘東京に居て成績を收め五段に進み、六段、七段を経て今日八段となつたのも、在支十七年間に二十局足らずの名人の譜を挽ます幾度となく復習したため。また今支那第一の人格者といはれる段祺瑞氏の計には十年居り、或は大養、頭山などの人格者よりも厭はれず、何かと指導を受けたことも、常に無學を恥ぢ暇ある毎に本もい成り讀んだり、人の善い所は採つて自己の範としたりなぞで、常に自己の陶冶に心懸けたため。

今は二人とも故人になつた山縣有朋公、宇佐川一正男との對局の話――

山縣公は、實に心事の清い人であるに拘らず、私と碁を打つときには、「待つた」をいつて逃しきに至つては二手二手を割がしてしまふ。それ面白くないから碁を打ちに行かないと、「モウ、待つたはしないから」といふ使なので打ちに行くと、突然「宇佐川様電話です」と公家の書生の知らせに電話口へ出て見ると、友人よりの話らない用事なので、碁の方が心配になり戻つて見ると、形勢が知らぬ間に變つてゐて、自分の方が百目も取つたと思つてゐた所が反對に百目も取られてゐたり

その他自分に悪き局面の變化に驚いて、一寸子見に公の顔を見上げると、公は眞面目な顔で、「サア、いや、君、打つぞだが、俺れの形勢が悪い」とつぶやき乍ら打つた。しかし、自分の方はどうすることも出来ないで、「敗けました」といつたが、どうもこれは電話に出てゐる間に、公が自分の都合のいゝやうに直してしまつたのだと思つたが、さて自分も碁が弱いで何う動かしたのか判らない。で、到頭お仕舞にしたが、翌日電話をかけた友人に、「よく僕が昨日公家におたのを知つたね。それに、用も電話にも及ばないことぢやないか」と言つたら、「實はその電話をかける一寸前に公が、『今、宇佐川が内にゐるから、何でもよい、一寸宇佐川を電話口へ呼出して話せ』とのことだつた。」「あゝ、それでか、俺れの電話口へ出る前公の一寸座を立たれたのは」てなことで、公府は碁を勝ちたいのも、公の性格の勝氣からのことである、と諒してはゐるが、「さて、待つたをされると頼に障つてならない」と、宇佐川男が私に語つたとき、私は、「待つたをいふことの悪いのはいふまでもなく、これが話にしても、『君、今の話は取消してくれ給へ』なども、男の面目に係はることであつて、これは事その物に一定の方針が立つてゐないからでもあり、また上達の妨げともなる。が、相手に「待つた」をされ相手に更に善き手を打直され自分が困るなら、もとく自分のその前に打つた手が悪いのだと、自己の注意を増すことになる得がある。相手は「待つた」をしても、自分は「待つた」をしないに限る。」と、私は言つた。

この話は、「待つた」の悪きことに就ての挿話。

平民宰相といはれ、政友會の大を以て大に鳴らした原敬氏は、碁を打ち出すと一人の相手を離さず、何十番でも、幾ら負けても打續け、相手が厭になつて敗けるのを待つて「勝利は最後の五分間にあり」と、莞爾として碁を止める。

高段者同志にあつても、相手が形勢が悪く、一見その勝敗もついているのに投げないと、有利な方は焦れてつい勝を急ぎ一着の失着はまた氣分を悪くして更にまた失着、また失着と悪手を重ね、遂に有利の方の敗けてしまふことが間々ある。これは、

相手の術策に乗ることであつて、即ち、みつともない外交手段に引掛ると同じこと。さういふ際には氣を焦慮らず、打始めたときの平靜の氣分を失つてはならない。例へば、取引にしても、五月蠅いほど氣長に相手に値切られても顔色を變へず根氣負けしないと、まけずに済む。

依藤太秀郷が平將門と會つて共に食事をしてゐる際、將門が飯粒を食ひ滞して秀郷から、「この人は將の器でない」と、見てとられたといふ俗説も、對局中茶菓が出たのも知らず茶を引繰返したり、取つた石を菓子の上へ乗せたり。また樽柿などの果物の出たとき碁笥の蓋の上へ乗せたりなどの不行儀は、相手に、餘裕のないことを見て取られ、それが相手に策を立てさせる一助ともなる。

碁は相手の碁風によつて方針を立てることが必要。といふことも、一國と一國と戦争の起つたとき、「戦争を敗けるのは新聞記者のためである」といふ如く、自國の何といふ將軍はどういふやうなことに趣味を有ち、どういふやうな性格であると、餘りに詳しく報じるため、敵國の諜報機關が、常に何といふ將軍はかういふ趣味または性格だからかういふ戦ひ振りをするだらう」と、その諜報機關の報道に役立てられ、自國が少からぬ損害を受けることは、實際上のこと。

用を控へて、「君、二三十分あるから一局打たうぢやないか」と打始めると、「つい用があつたから負けただ、ユツクリやつたら敗けるもんか」なんて口惜し紛れの捨臺辭を遺すことにもなる。

碁は、最も冷靜の頭腦を持続する者が勝つ。これは獨り碁のみに限らない。

或學者は、「二百十五歳の高齡を保つた人が百八十歳のとき、十五歳の少女に結婚を申込んだので、百五十歳以上の長命の人は何職に従事してゐたらうかと調べて見たら、殆ど全部が冷靜の頭腦の持主でなくば出来ない職業に従ひしゝゐた。これから推すと、腹を立てゝ熱するのは、長命には最も悪い」といつた。

すると、碁に長ずる人は、長命。碁も、怒つてはいけない。この男はかういふ手をこつちからやるとその手に乗り、腹を立て理性を失ひ滅茶々に打つて打つて遂に自分で打ち負けてしまふ。「腹が立つならこの碁を『費』』といはれるまでには、女房を打つて打つて遂に怪れなどさせ、醫代を出す收け方もする。この情歌も味はなくてはならない。

といつて、一杯飲んでる前に「お前の顔が『御菓子食』と、女房がフクレ面をして菓子を食べるのを笑つて見ても居られない。

碁の戦の起ることは、無論兩者の地域の均衡が破れた時。それで、地域の劣つた方から無理な一手を投じる。敵國は怒る起る。この碁の見地から見ると、平和などは、人の顔・美醜もなく、その他萬事同一の物が、人間の智鈍に拘らず、平均に分配される時。それは吾人の時代には到底現はれはしない。

終に臨んで一言するが、本書の互先に専らであつて置碁に意を注がなかつたのは、上達を圖るには、互先の碁を早く憶えた方がよいからだ。それは、互先の碁は一着と雖も、不正な手は許されず、正着を尙んで早く碁の本懐が備はるからである。置碁は相手を弱く見て、つい澤山置かれた苦し紛れに、相手の失着を期待して、それが期待通りの局面に現はれるとそれに興味を覚えて知らず／＼のうち邪道に陥るからである。

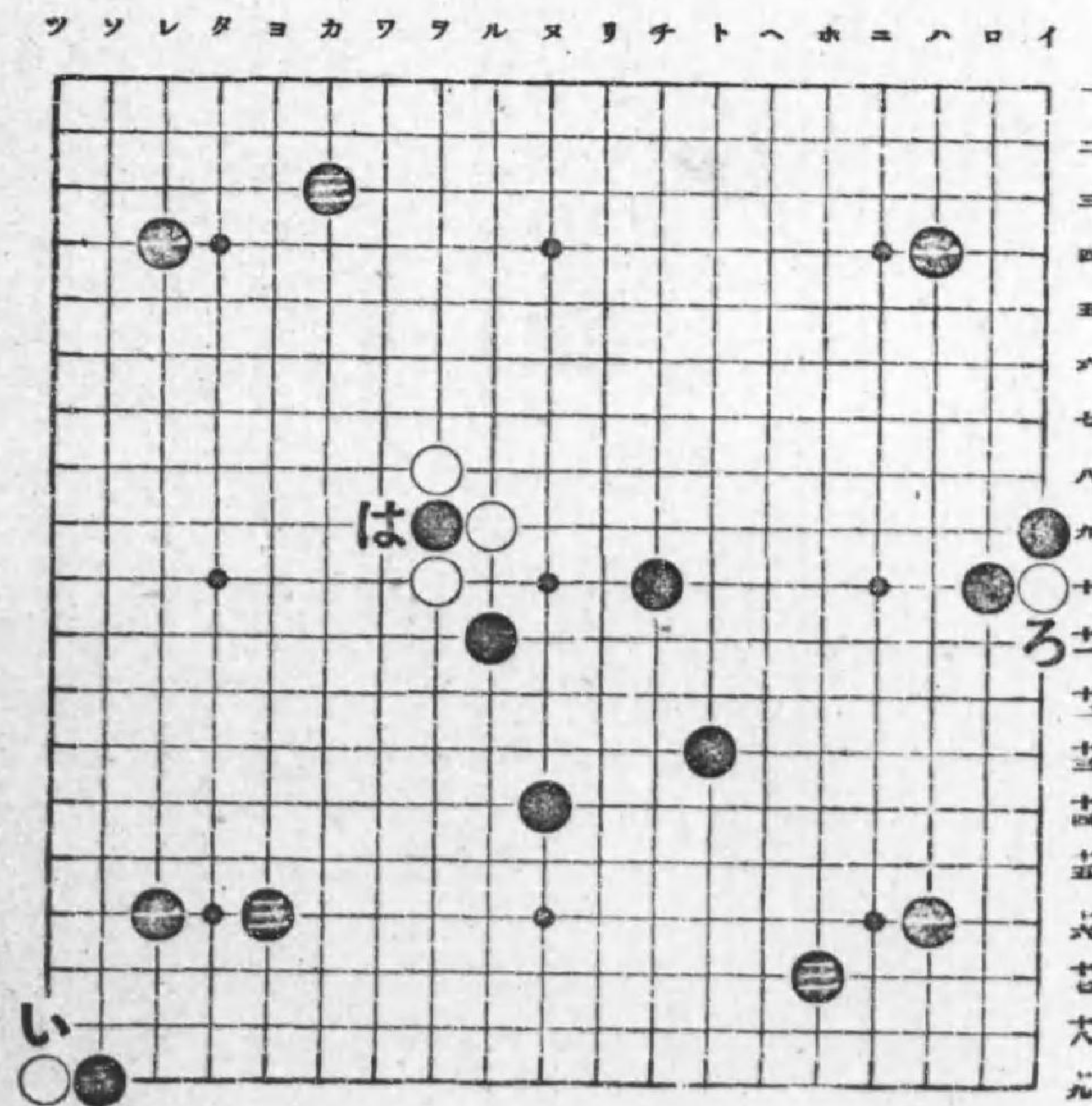
これは白の立場であるが、黒の立場からいへば、井目より互先までに進むには甚だ勞が多い。これを互先より入ることは、互先の理により井目より入る方の理が早く判り、その勞を多分に省くことになる。

何度負けてもよいから、常に強い人、強い人を相手に選ぶがよい。假令、大學を出ても、醫者なら十年以上も助手をするのと、同じく、人間も學校を出たからといつて直ちにその智が役立ち、一路平安の出世は出来ない。そのやうに、碁も失敗が成功の碁。

入門篇

右隅に黒一と打出したのは、次に一、三となつて各隅の如き三様のいづれかを選んで、其處へ一城を築く目的。即ち、一の地點は、これを人間に譬へれば整面を大きく世界と見て、將來志を伸ぶるに最も善き所であつて、先人が其處を選んだが、今日も亦將來も不變と稱してよい。だが、一を「ハの五」、「ニの五」または「ニの四」と打出すこともその人の碁風により悪いとは限らぬ。

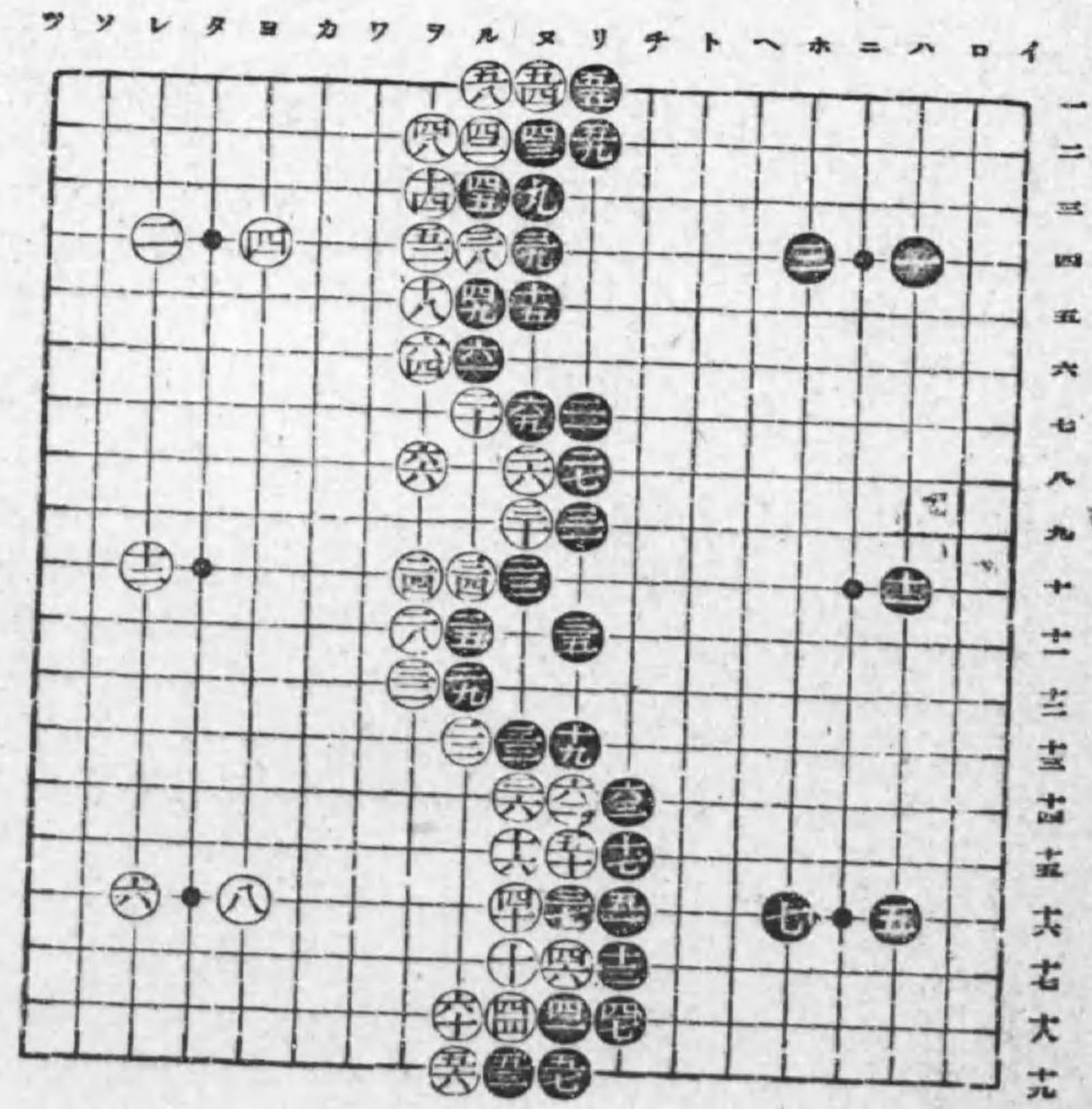
各隅一、三となるのがよいといふのは、隅即ち海邊の天險を擁し二着で一城が築ける。これに反し、中央即ち山地へ築城するには、左上隅の如き一、三を四着費すとも、地域は左上隅に見劣る。此理は、黒が白と白を二着で取れ、また、黒ならば三着、はならば四着を費さねばならぬといふことによつても、い即ち隅よりはる即ち邊が劣り、る即ち邊よりは、は即ち中央の劣ることが判る。但しこれは、原則を示すための簡單に譬へていつたに過ぎぬ。繰返し言ふが、隅が最も大切で次で邊、中といふ順を取らねばならぬ。



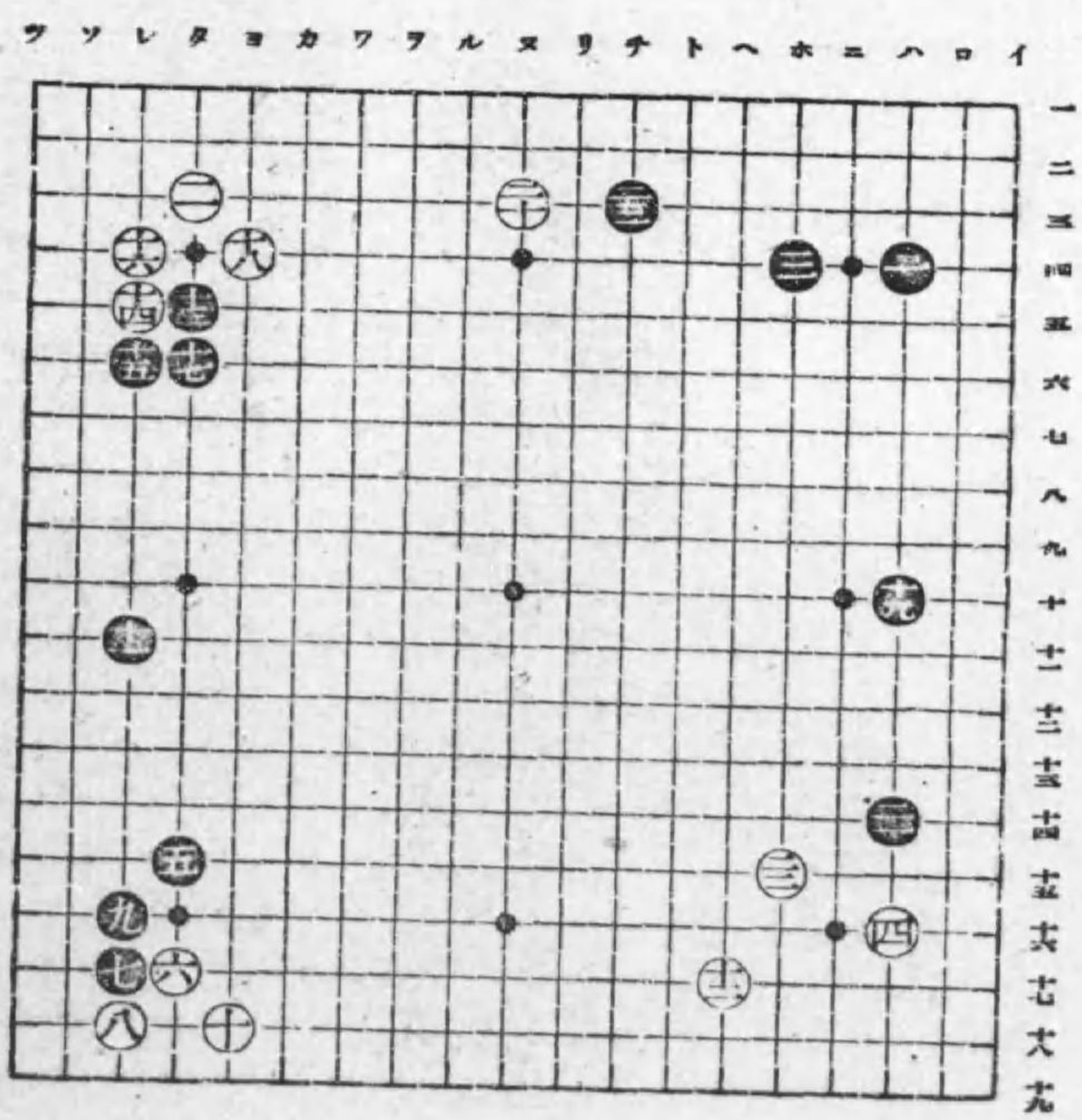
本圖は、白が黒と同じことをやつてゐては、いけないことを示すので、即ち假りに本圖でいへば、黒二三となつて、白は二四と凹むことになり、戦争も起らず、終末に入つて六六で終つた。これは數ふるまでもなく、白の敗。

即ち碁は(先着の効を假りに五目と換算すれば)、黒を持つては、無事平穩に過し、終局に於て黒が白よりそれだけ多い現はれとなれば満足といふ態度。

白は、それではいけないから、黒の先着の効を種々なる手段によつて消すべく策を廻らすが、その手段たるや正々堂々にして、第三者をして無理でないと思はせる態度でなければならぬ。だが、時に、奇道を探ることがあつても、それは大勢が自己に非であると打算の上のことであつて、これまた、第三者を首肯せしめねばならぬ所。要するに、碁は黒を持つても白を持つても、右の二様の態度の外はないのである。

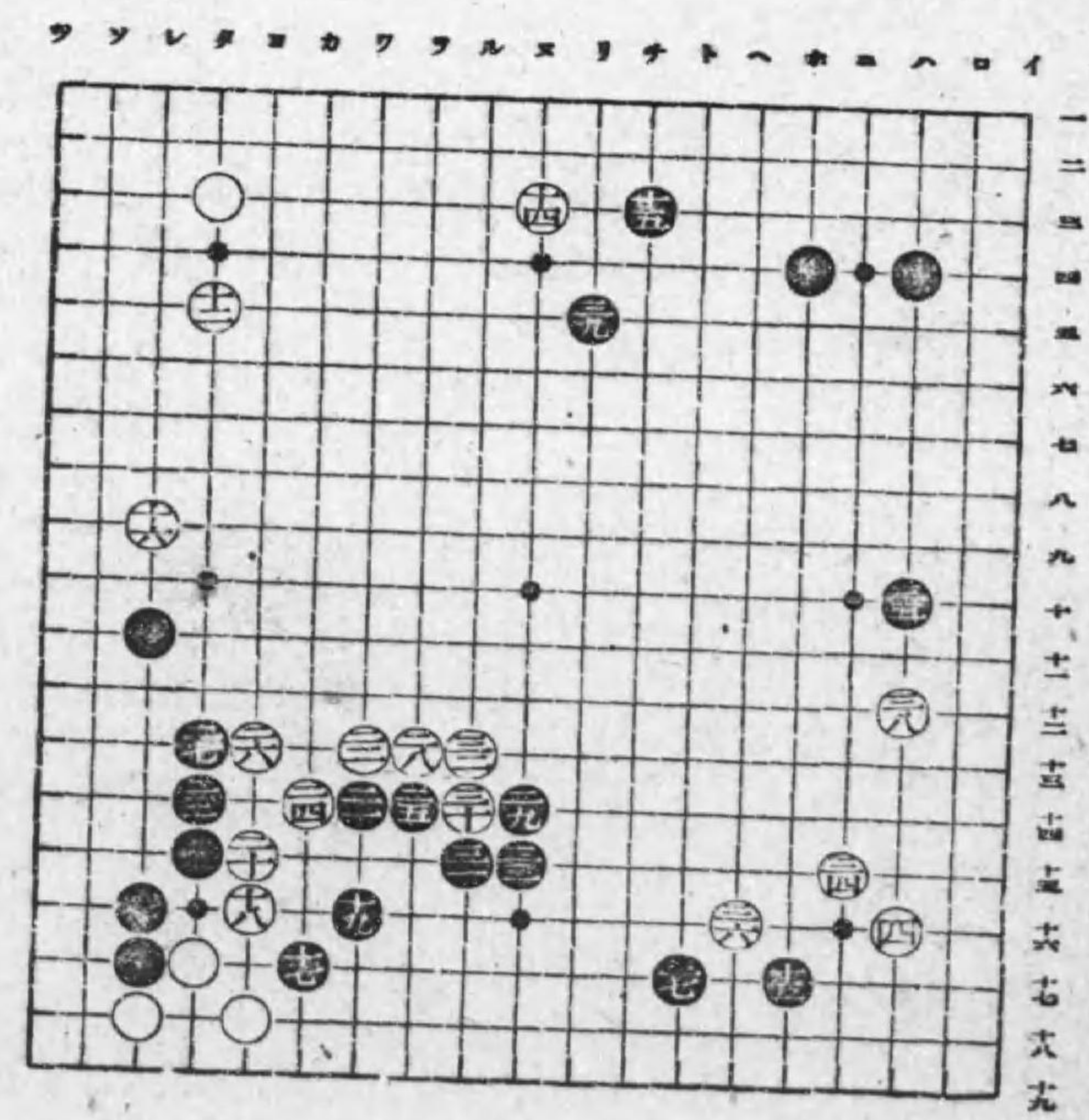


本圖は、正しい布石であつて、白四を假りに九だと、黒「ニの十七」、白「ハの十五」、黒「ハの十一」となれば、黒は右上隅一と「ハの十一」との間は六路あつて、豊富に地が出来やう。また、白の「ハの十五」にある一子を、攻めてる有利の立場にある。それで、白は四。
 白六を假りに十三だと、黒は六。すると、黒は右上隅とに二ヶ所本據が出来、前途の運びは、見易くなる。それで、白は六。
 白十、黒十一となつた型は、二者とも定石。また十八までとなつた所も、白黒共に定石。
 黒十九を二十だと、白は十九。
 白「二」を「トの三」だと、黒は「ホの十四」で、右邊の登厚にし、四と十二の白の一隅を壓して薄くさせる。
 黒「三」は、一、三となつてゐる所故、位高くて甚だ好點である。



本圖は、前圖白十二よりの變化。
 黒十三を十四だと、白は十三、「ホの十六」または「への十七」で、十二の方と二ヶ所本據が出来、白は前途形勢を有利に導く。
 黒十五で「レの七」だと、白は「トの三」。

白十六は、「レの十三」に打込みを含む。それで黒は十七から二七までと地を固定し、また三三までの方は下邊に形勢を張つた。
 白「二」は、奇抜なやうであるが、これは、三三までとなる定石の要點の一であつて、その如何なる意味か、悟れれば、著しい上達。
 黒三五を「への十五」だと、白は三五。
 白三八を「ヌの五」だと、黒は「ハの十四」。



黒三を「ホの四」とばかり限つた事はない。かう三でも、又は三を五でもよいのである。また白二も、かう二と限つたことはない。二を「ヨの三」、二二、「レの四」、十一、「タの五」または「タの四」で、局面の變化を圖ることもある。白かう二以外のそのいづれかに對しては、黒も三を何とか工夫することは、いふまでもない。

白八を「ヨの十七」だと、黒は「ハの十一」。

黒十一を「ヨの十六」だと、白は「レの六」。

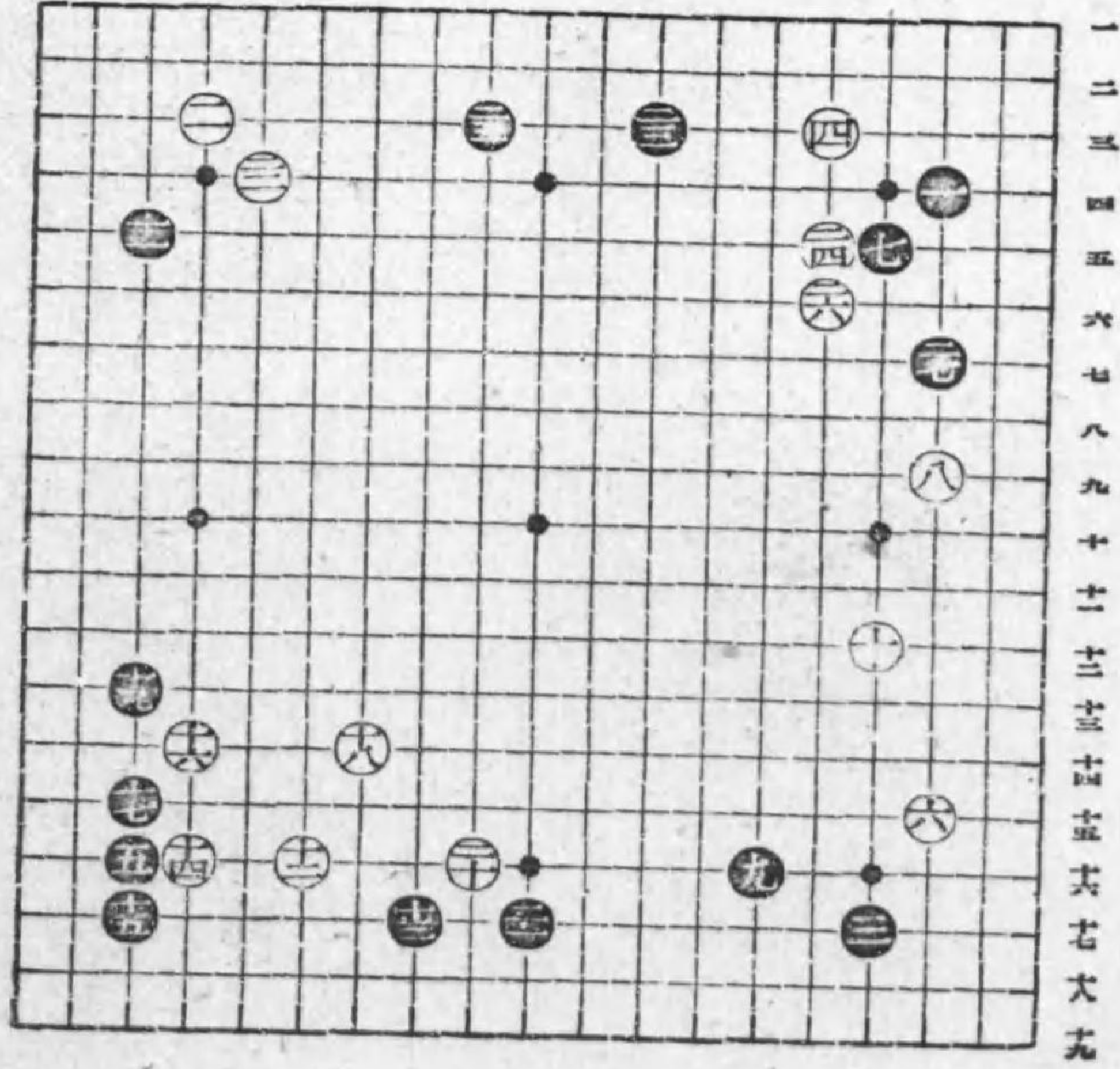
白十二を「ヨの十七」だと、黒は「ルの十七」。それは、白にとつて工合が悪い。即ち、白十二は、黒十三を定石通り十六に受けさせ、そして二一で下邊に地歩を占めやうといふのである。

黒十九は、白に「レの十四」と來られては悪いから。

黒二五は、白に「ヌの三」と來られては、悪いから。

黒七で「ハの十一」と行けないこと、また白二二で「ヌの三」と行けないことは、次譜に於て示す。

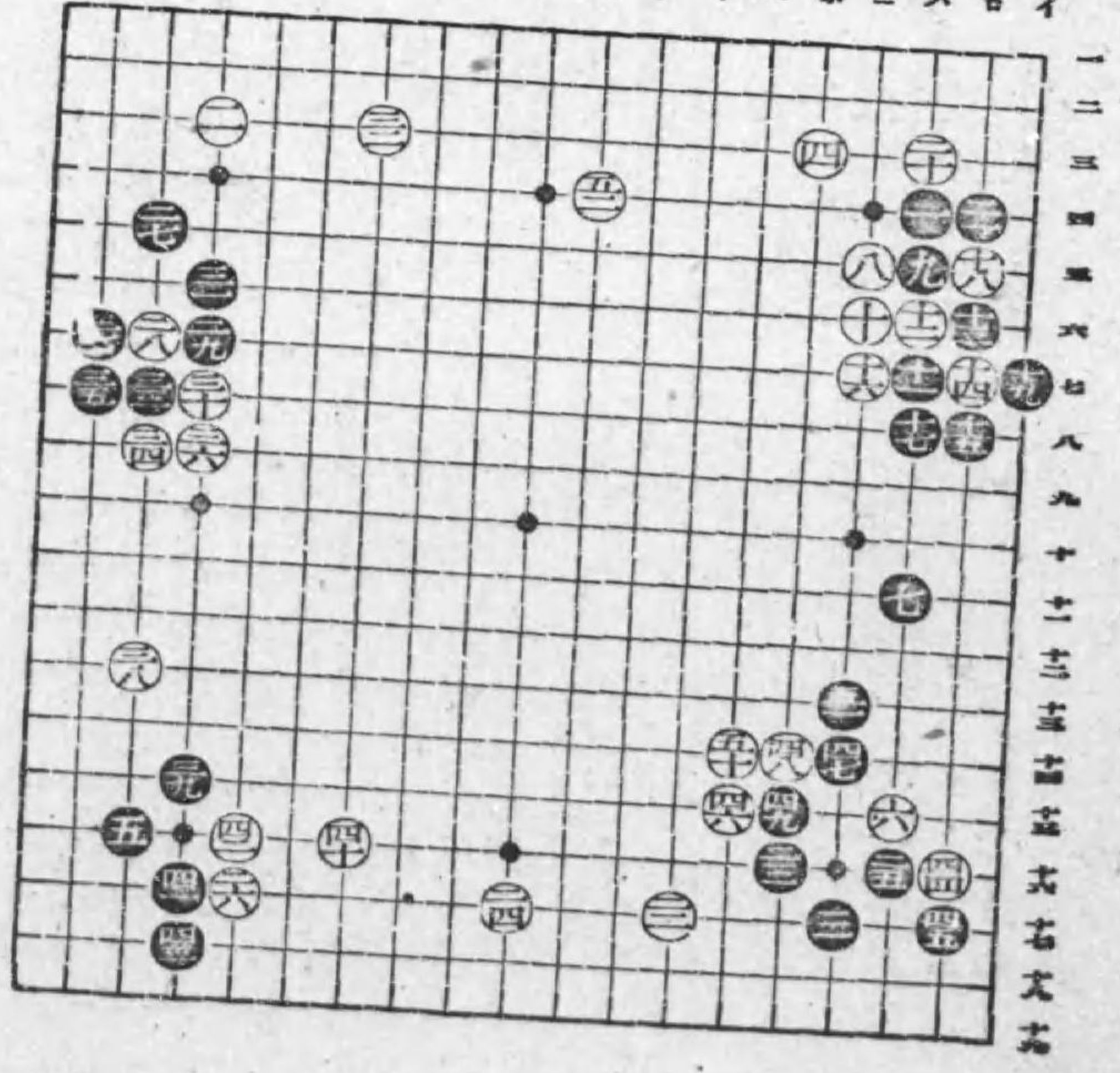
フツレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



黒七を八でなくかう七だと、白は直ちに二十まで。白に二一と二子取られては大きいからの、黒二一までは、定石。だのに、黒七は、黒十五、十七、の堅固至大の面を覆つて、黒の威力を遮つたことになつた。これを判り易くいへば、黒七を除くと、黒十五、十七の面の堅固至大の威力により、遠く「ハの十三」までをも、少くとも自己の権力内と見得ることが餘りにも明か。その處へ黒は七と行つたことになり、黒は味方を討つこともならず、これに越した當惑はない。即ち、黒七の一着は殆ど無効にも等しく、先着の効は解消する。黒二五を四二だと、白は四五で、黒は右邊に地がなくなり、白六は地を持つて活きる。などで、五二までの現はれとなつては、黒の形勢の非なるは、一目して判らう。

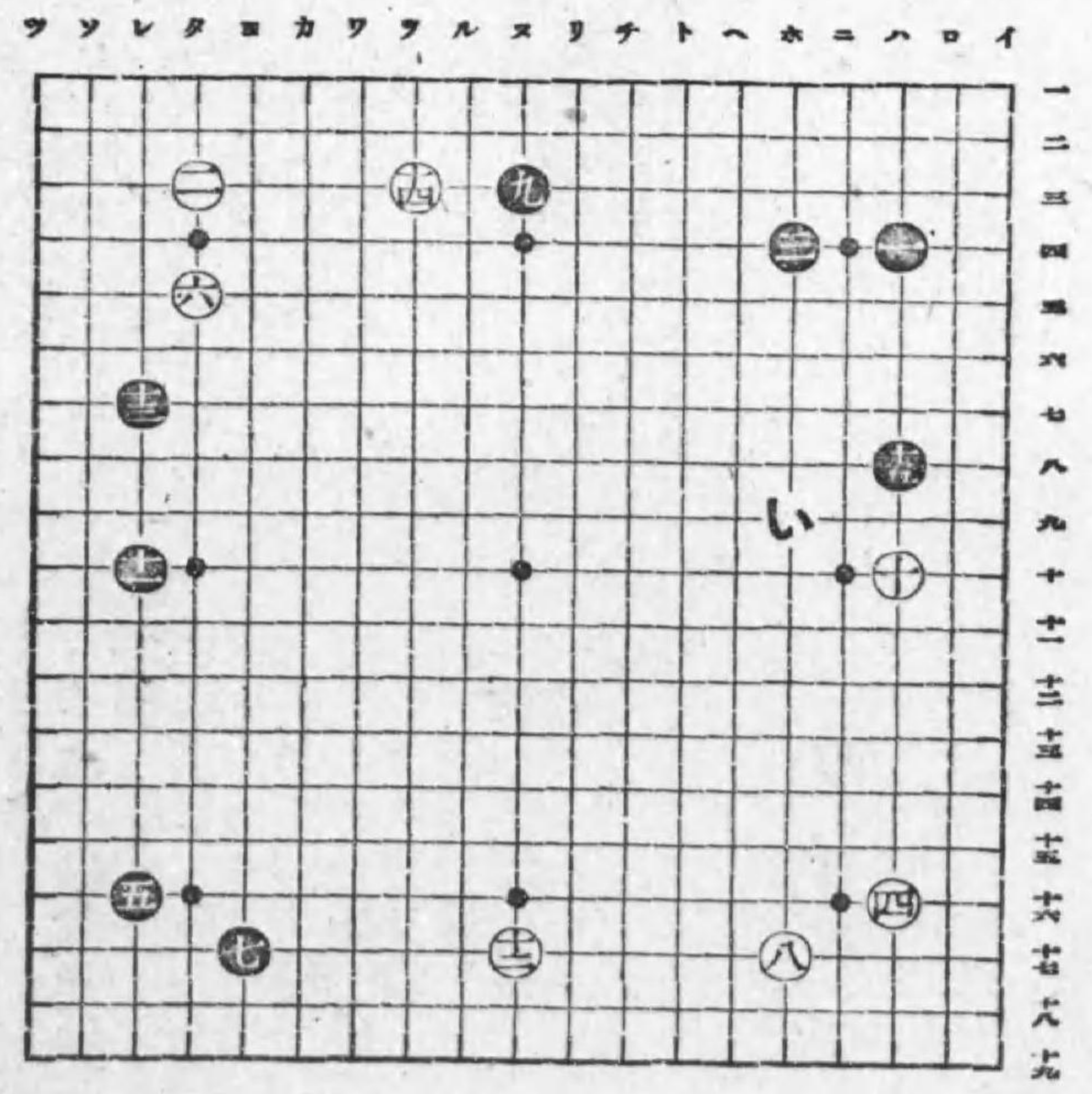
重ねて言ふ、かう黒が七と行くことによつて、二二までとなり、七の一着が殆ど無効のため、先着の効を失つて敗となることは、道頓時代に究められた。この理は布石第一の初歩であつて、これを知ると知らぬとが上達不上達の岐れ目。

フツレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



布石の正論を徹底的に示すことは、幾千圖に達し容易の業ではない。まづ以上にて略々判らうから、後は、實戦によつて、究めるがよい。

本圖は、これまた、同じやうなことをやつてゐてはいけない例。即ち、黒は十五と最後の好點を占め、黒の先の効力は顯著。だが、白は黒十五までとなつたとて、白の敗局の現はれまでには、正道權道によつて、黒を惑はし、また自己を好轉せしむる途は幾多ある。即ち白は、黒十五の次に「トの三」または「チの三」に打込み其處の黒地を破壊に行くとか、またはその方ではなくして、十より十二までの自己の方を旺んにし、その白の方へ黒を何とか來させ、それによつて局面を展開するとか、要するに、或る程度まで白黒同じ途を踏むでも、碁道は手段洪大にして決して狭きものではないといふことではあるが、布石に利を失つては、白は悉く苦戦を免れない。



本圖は、劫といつて、今や黒にいと取られる白七子を活きるため、白はろと取る。その白ろに對し、黒直ちに「ロの二」に取り、また白がろに取り、また黒が「ロの二」に取りでは、果てしがつかない。それで、白ろのとき、黒は、白にはに取られて活きられるまでを假りに二十五目と見て他へそれ相當な代償を求めため打つ。その求めに白が應答したとき、黒は「ロの二」。白はまた、黒にいと取られることを同じ價值と見て、他へ打つといふことを繰返すのでなくば、劫の意義は成立しない。

白イに、黒ロでは、白ハで、黒は全部取られるから、黒はロを二と受ける、これが劫。

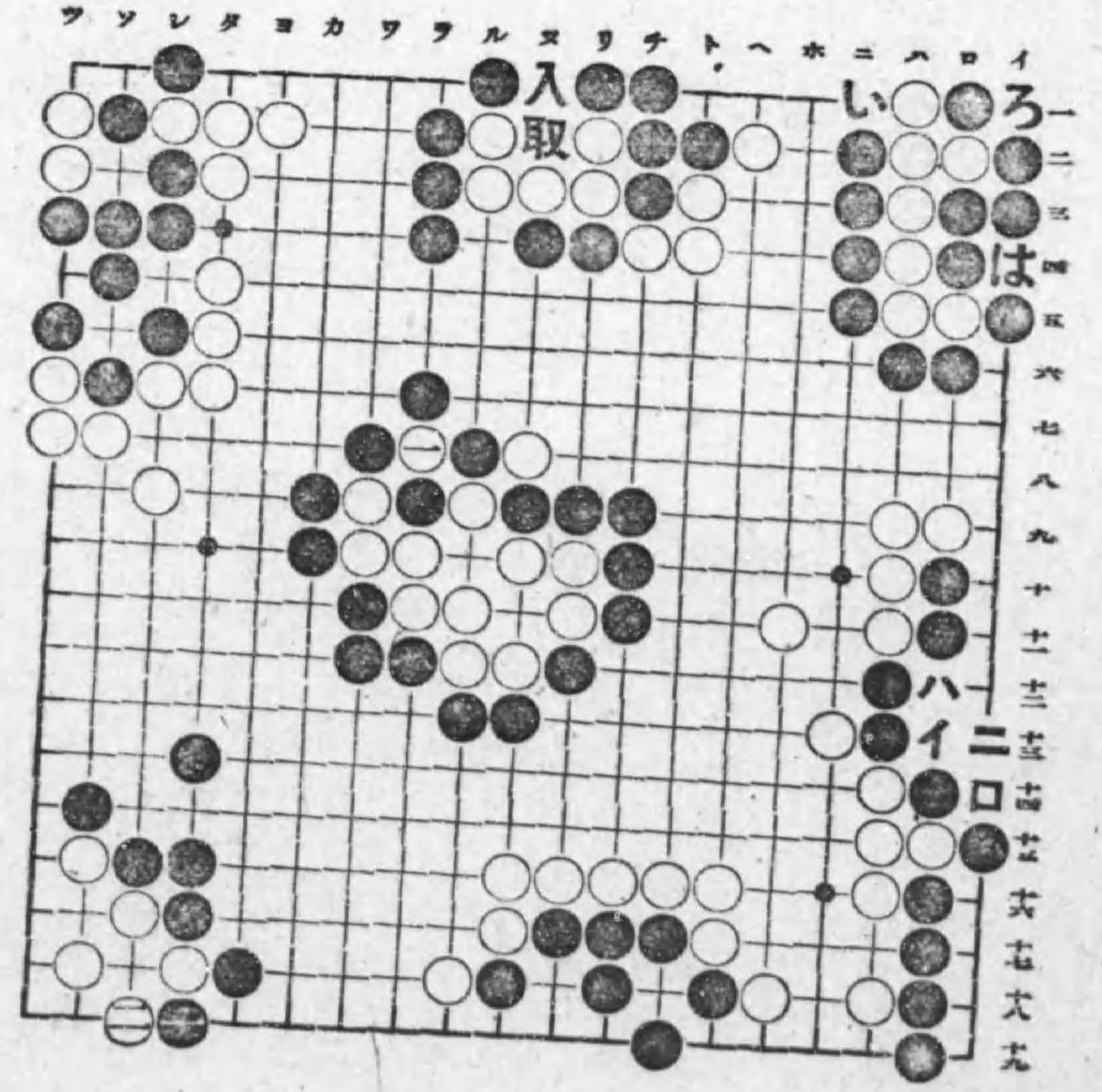
白入、黒取が、劫。

白一が劫。この劫に白が勝つときには白は「ルの七」。

白ヌの十九に黒「リ」の十八は、白「リ」の十九で黒は取られるから、黒は「リ」の十八を「リ」の十九が劫。

白「ソ」の「一」、黒「ツ」の「一」、白「ソ」の六は、兩劫で黒が取られる。で、黒先に「ソ」の六、「白」の「一」が劫。

黒一に、白二が劫。



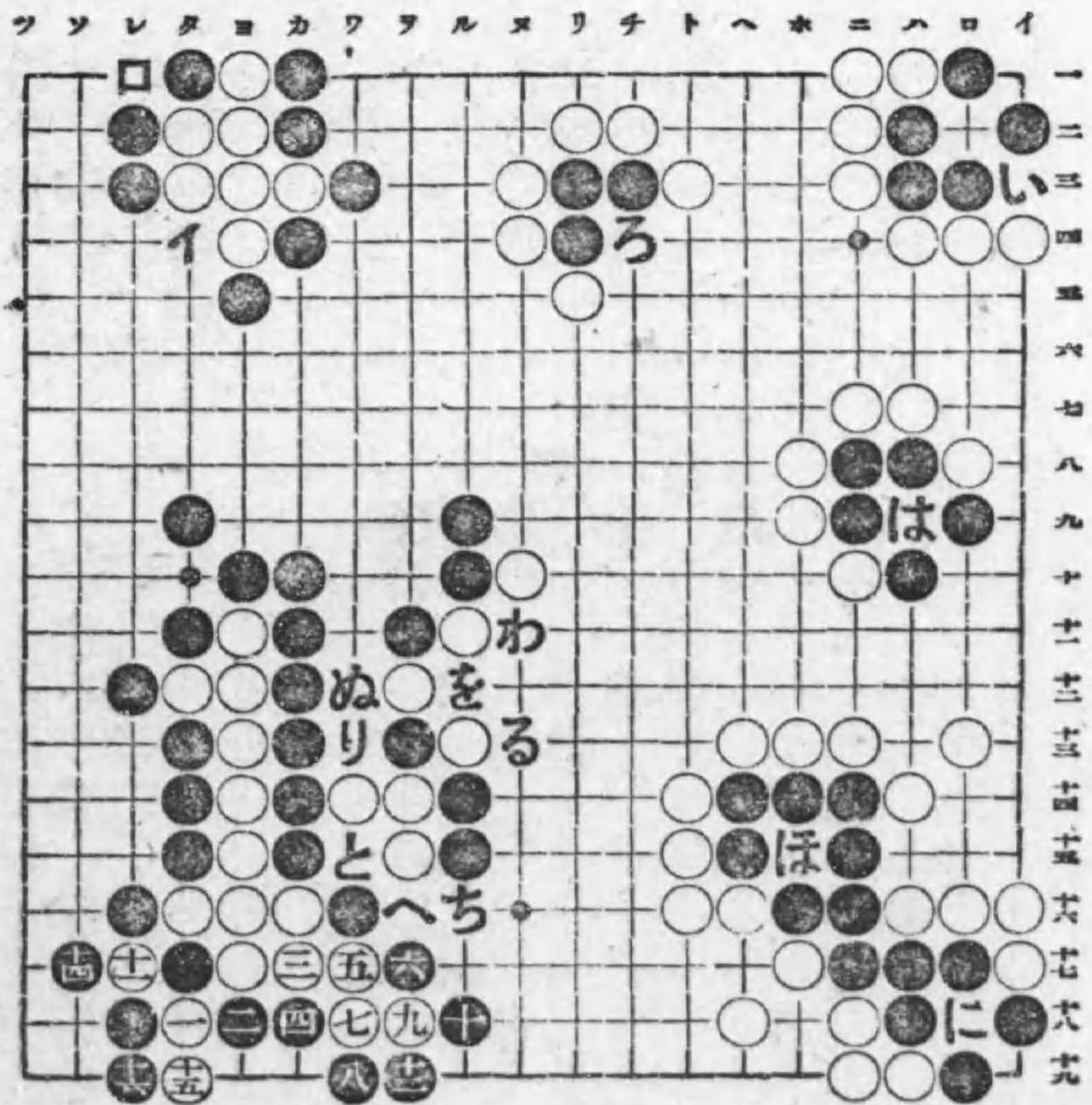
取られる原因

白にいと來られては、黒五子は取られた。白にいと來られない前黒いだと、黒は完全な活。白いで何故黒が取られるかといふに、白がろまたははと先へ行けば、黒の三子が取れる如く、白の次には白は「ロの二」で黒の三子が取れるからである。

右下隅 黒には、白にいと來られた「ロの二」と同じく虚眼ではあるが、ほに完全な一眼ある故、黒の全體は活。これが、黒丸「ニの十七」または「ニの十六」が、白丸になつてれば、白に切られたことで、黒は全部取られ。

白は「ヨの一」から「ヨの四」までと根が張つてゐるの如きものではないが、これまた白は黒に包まれイの一手しか空いて居らず、黒にイと七子は取られる。白ロと黒の一子を取れば、黒イで、「タの一」の所がイと同じ。

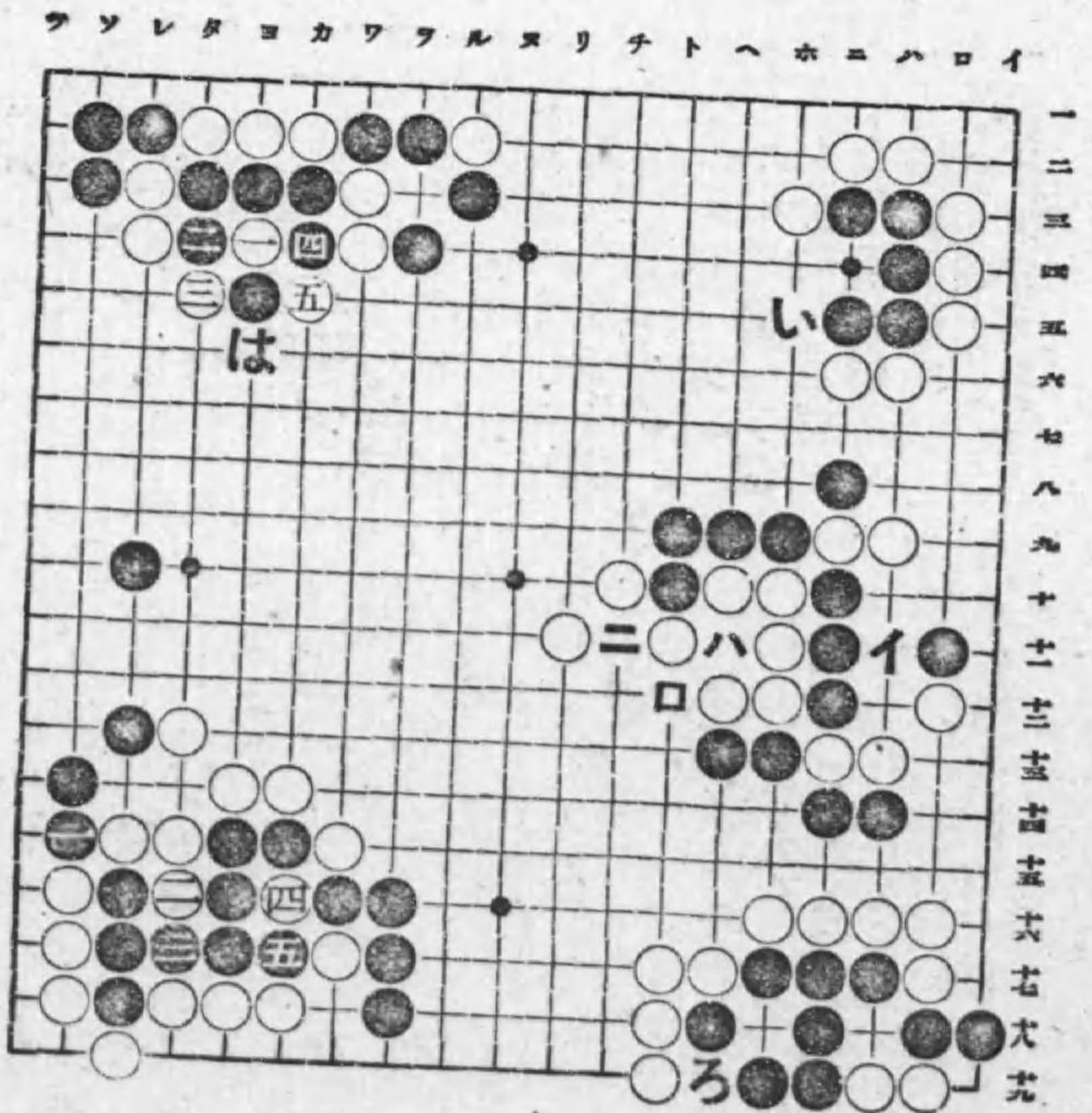
一から十六まで、白は取られた。白一を五だと、黒二、白三、黒六、白へ、黒七、白と、黒四、白「ワの十六」に粘ぎ、黒ち、白り、黒ぬ、白「ヲの十三」に粘ぎ、黒る、白を、黒わで、白は取られる。



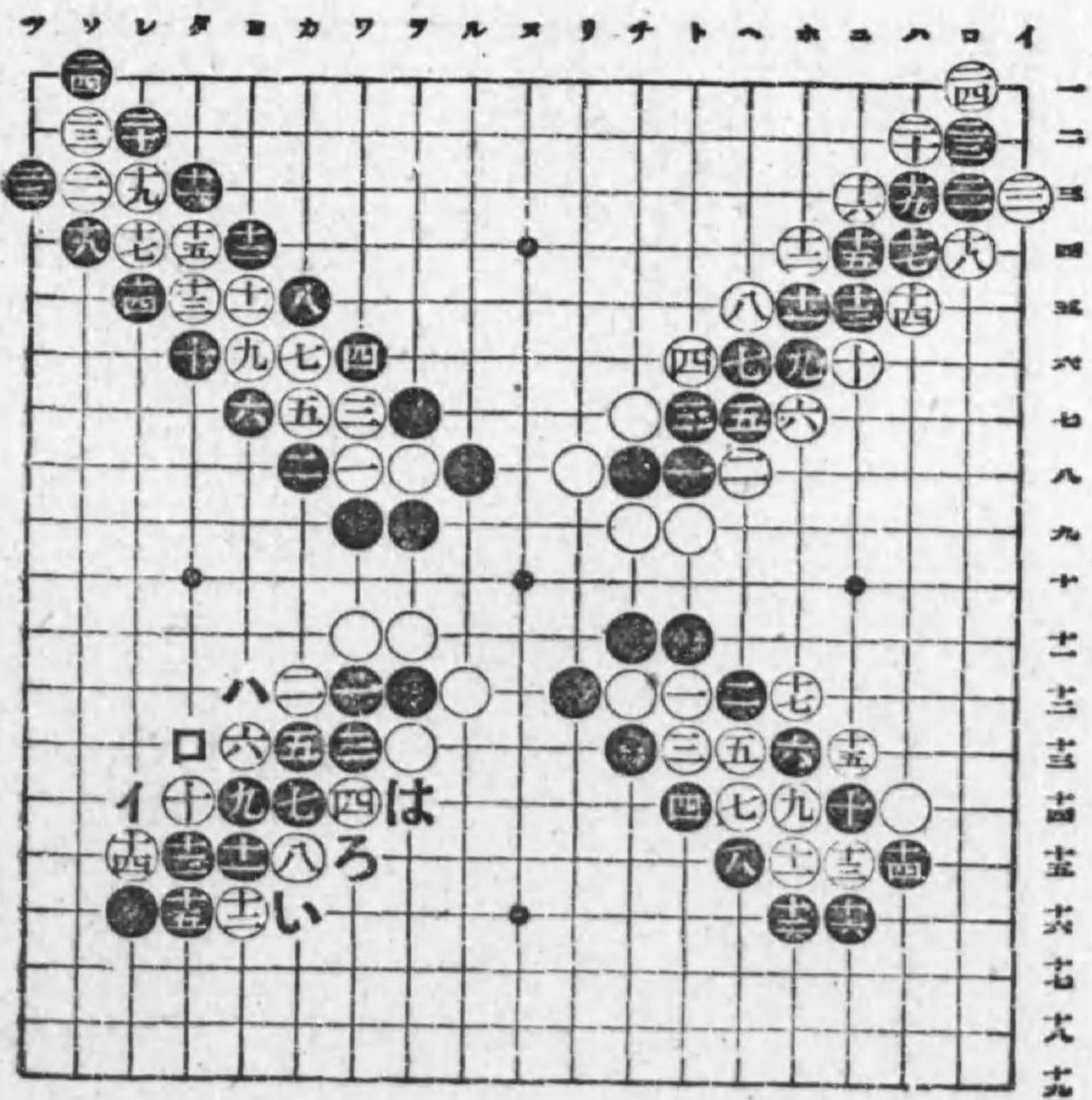
十三粘ぐ(タの十七)

白にいと來られると、黒はその白の一手でどうにもならず五子はそのまゝ見棄てる外はない。その意味に於て、白にいと來られると、黒の九子は白に取られる。この虚眼の形は、白一、黒二、白三、黒四、白五で、黒はなら白に一と五子は取られるのと同じ道理。それを白イと行けば、黒にロと來られ、白はハに粘ければ、黒にニと取られる故、白は黒にロと來られては大變。黒一と切つて、白の八子を取らうとすると、白は二。その白二に黒三だと、白は四。その白四に黒五は、白に四の所へ取返されて、黒は九目になつて白に取られる。

此形の如き關係、又は前圖の如き形の關係が、一局の戰爭中には多く現はれて、その見損じにより大敗を招くことが多い、この二圖の形に關したことは、未だ全部は盡してゐないが、これ位知つておけば、殆ど基礎的に知ることが出來たといつてよい。

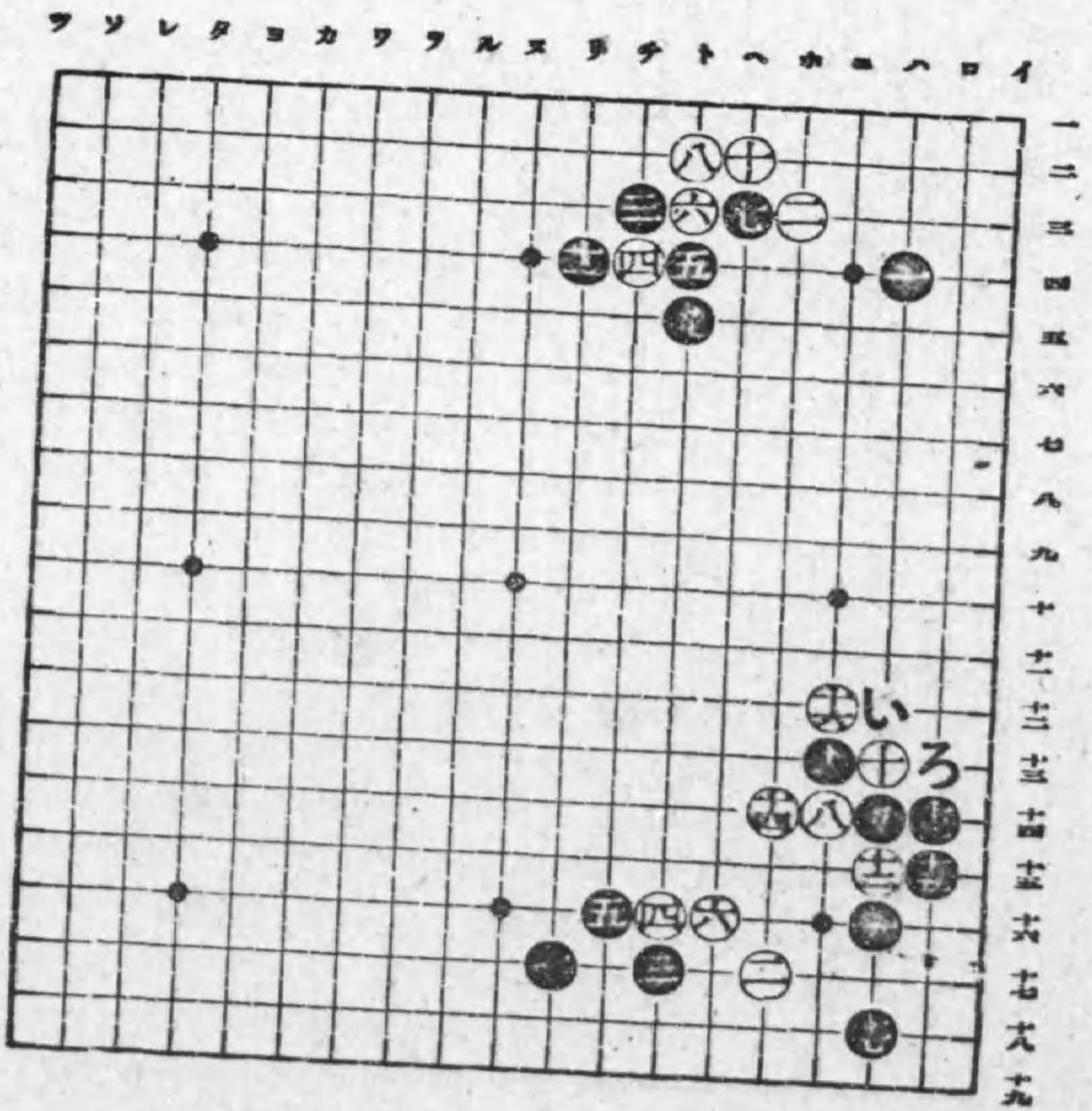


黒一と出て、白に二と追はれた右上隅白二四、左上隅黒二四までを征しほといつて、この征を知らないといふ俗に「征知らずの碁打かな」といはれる如く、碁を知らないと言はれる。この征の關係によつて一局が、有利に又は不利に導かれることのあるのはいふまでもない。しかし、まゝを要することは、右下隅の方へ黒が征に追つて十七までとなつては、黒が大いに悪い。それは、白が「ハの十四」にあるからである。また左下隅へ追つた白二より十四までは、黒が「レの十六」にあつて、黒十五となり白はい、る、は、イ、ロ、ハの各所に切れが違つてこれがために大敗。「レの十六」の黒丸が「レの十三」または「カの十七」にあれば、黒が征にかゝつて白に取られる。また「ハの十四」の白丸が「ハの十三」または「ヘの十七」にあれば、白は征にかゝつて黒に取られる。それで征を追ふときには、その角道をよく見究める必要がある。



征の起る原因は、右上隅白十を「リ」の三だと、黒十、白「チ」の二、「黒」ホの四となつて、黒は地が多いのに反し、「チ」の二までの白地は、黒とは比較にならない。それで白は十、黒は十一と、白四を征にかけることになるのは定石。だが、黒十一のとき白が「レ」の十五邊にあつて、十一と征にかゝらないと氣づいても、最早や遅い。十一と黒が白四を征にかけ得ないと見るのは、五の時。即ち、黒五で十一、白六、黒「リ」の三、「白」ハの七、黒「ニ」の五、「白」ホの六、「黒」ニの三、「白」ホの五、「黒」ワの三」までの、黒は、これまた定石を擇ぶがよい。

右下隅 黒十七までも、これまた定石。定石とは、白黒互角で、共に損のない分れをいふ。黒十五をい、白十五、黒ろだと、黒は損。それで、白が十六と征をかけ黒が十七と白に其處へ來られない備までが定石。



丈和先生は中村道碩に私淑してゐた。

丈和先生以前の碁も、布石は重要な一つであつたが、力戦を主とする風があつた。丈和幻庵の二雄は當時の代表的なものである。然しそれより後の碁風は、主として布石によつて勝を占めんとするやうになつて來た。

蓋し丈和先生の時代は、力戦と智戦の劃時代である。茲に掲げる二子の一局は、上野輪王寺の宮の御催にかゝるもので、四宮米藏は淡路の出身、地方的にはその驍名を誦はれてゐた。丈和先生對四宮米藏の對局はその數も可成多數に及び當時棋壇の注目を聚めた。

本局については、布石と、戰爭を一寸説明して、駄目の詰め方と地の作り方を示し碁の概念を興へることにした。

黒三二をいだと、白ろ、黒は、白に、黒ほ、白へで、黒は攻合敗。

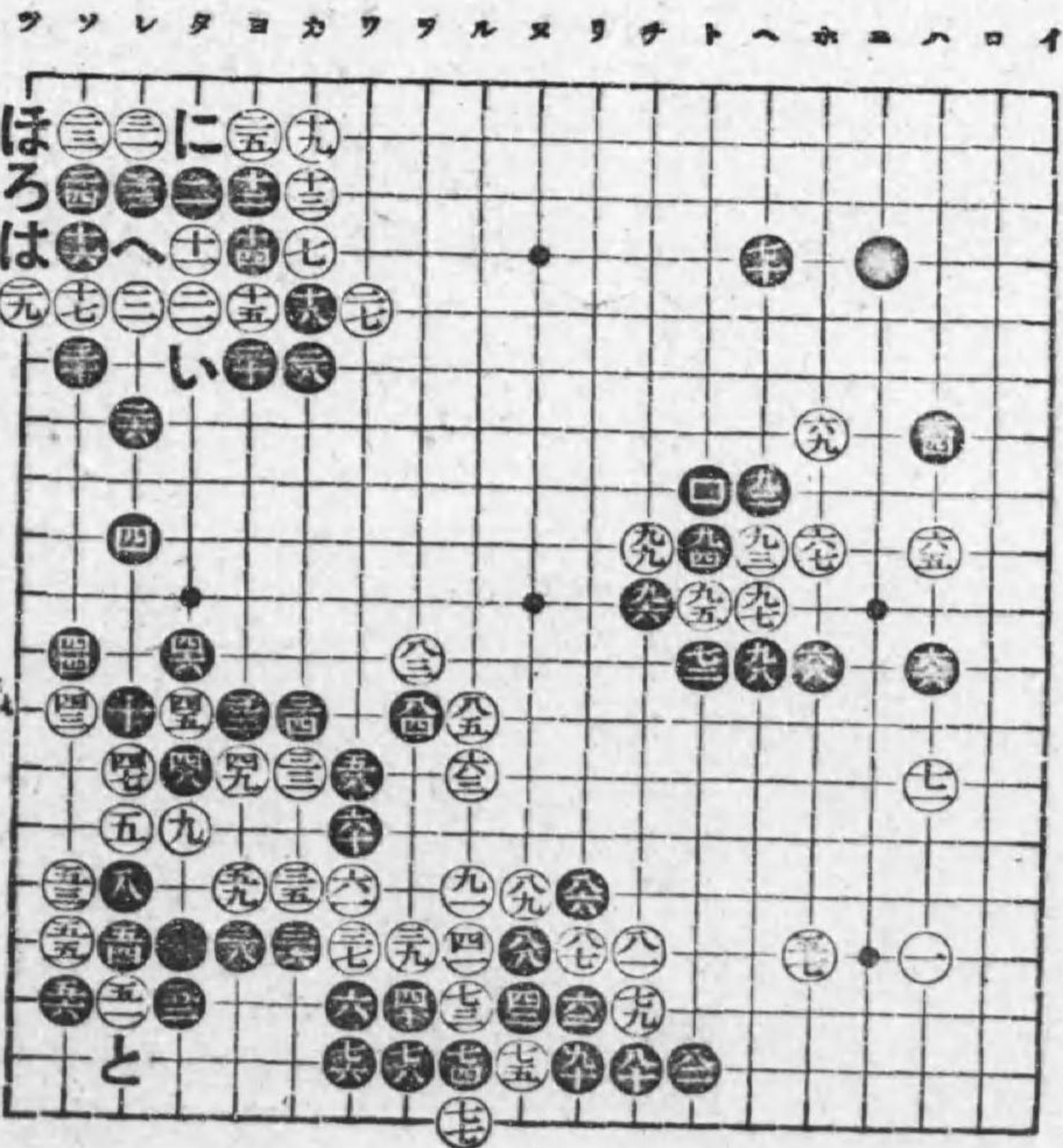
黒五二を五三だと、白七三、黒七四、白七五、黒七八のとき、白に六二と、四二の一子は征に取られる。

白六五までが、布陣の一段落。黒六六は挑戦である。黒七六を九十だと、白とで、黒五六は取られる。

文政三辰年十一月廿八日

九目勝 本因坊丈和

二子 四宮米藏



五十粘ぐ(四五の處) 一より百まで

黒四を五、白十六、黒十七だと、白七三、黒三十、白い、黒四、白ろ、黒八、白はで、黒は四子となつて取られる。

黒十のときには、黒「ハの十一」より「トの十一」までの四子と、白「ハの九」より「トの十」までの七子との攻合であつて、この結果によつて、いづれかの勝が定まる。

白十三を十八だと、黒十五、白十四、黒四二、白になつて、白は「ホの十一」以下三子の黒は取るが、黒に四二までと右邊に地を興へて、白が悪い。

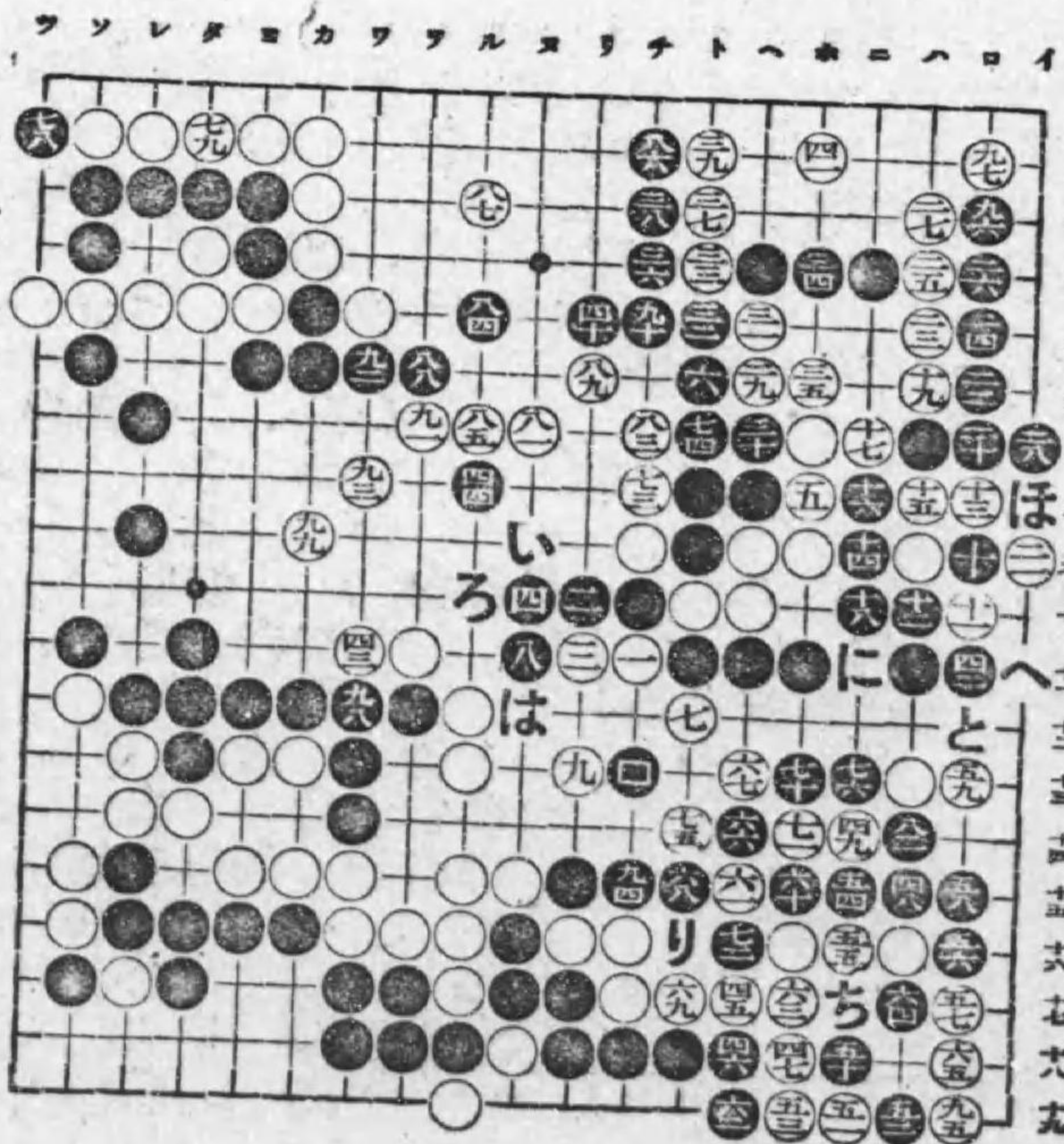
黒二八までとなつて白十五以下はまづ取れたが、白に二七と出られ、黒は右上隅が破れ結果は芳しくない。

黒三十を三二だと、白七四、黒七三、白八三となつて黒が悪い。その黒七三を八三だと、白は七三。

黒四二は、白ほ、黒四二、白へ、黒と、白九六と、白に劫手段に來られる防ぎ。

白五五を六十だと、黒ちで、白が悪い。

黒六八を六九だと、白六八、黒り、白七二、黒九四、白七五となつて、黒は三子と六子の交換で面白くない。



七七劫とる(六一の處) 八十劫とる(六六の處) 一より百まで(通計二百まで)

盤面の終りまでに

黒の取つた白石は、六子。
白の取つた黒石は、五子。

(一)駄目を詰める順

黒「ソの九」に手入れ。白「ハの十八」に取る。黒「カの七」白「カの八」黒「チの六」白「ヌの六」黒「ヘの十五」白「リの二」黒「チの二」白「リの四」黒「ヘの三」白「ヌの三」黒「レの十一」白「トの十六」黒「ヨの九」白「タの十五」黒「チの十三」白「ヨの十六」黒「ホの十」白「ヨの七」黒「タの七」。以上で駄目を詰め終る。

駄目を詰めた後の

白の取つた黒石は十七子。
黒の取つた白石は、十一子。
即ち、總計は黒石は二十子、
白石は十七子。

(二)地の作り方

甲、黒地の作り方

先づ白の取つた黒石(即ち揚げ石)を黒の地へ埋める。これは何處へ埋めてもよいのだが説明の便宜上、假りに、黒石二十二子を左の如く埋める。
(イ)「チの五」、「ツの五」、「ソの七」、「ツの七」、「ハの八」、「ツの九」、「ソの十」、「イの四」、「イの五」、「イの六」、「ハの八」、「ロの八」、「イの八」、「ハの九」、「ロの九」、「イの九」、「ロの十」、「イの十」、「ホの十二」、「ニの十一」、「イの十一」、「ホの十四」。
(ロ)「ニの十三」と「ハの十四」にある黒石を「ロの十三」と「ハの十三」とに判り易く並べる。此地は十目。
(ハ)「ツの十八」と「ソの十八」の黒を「レの十七」と

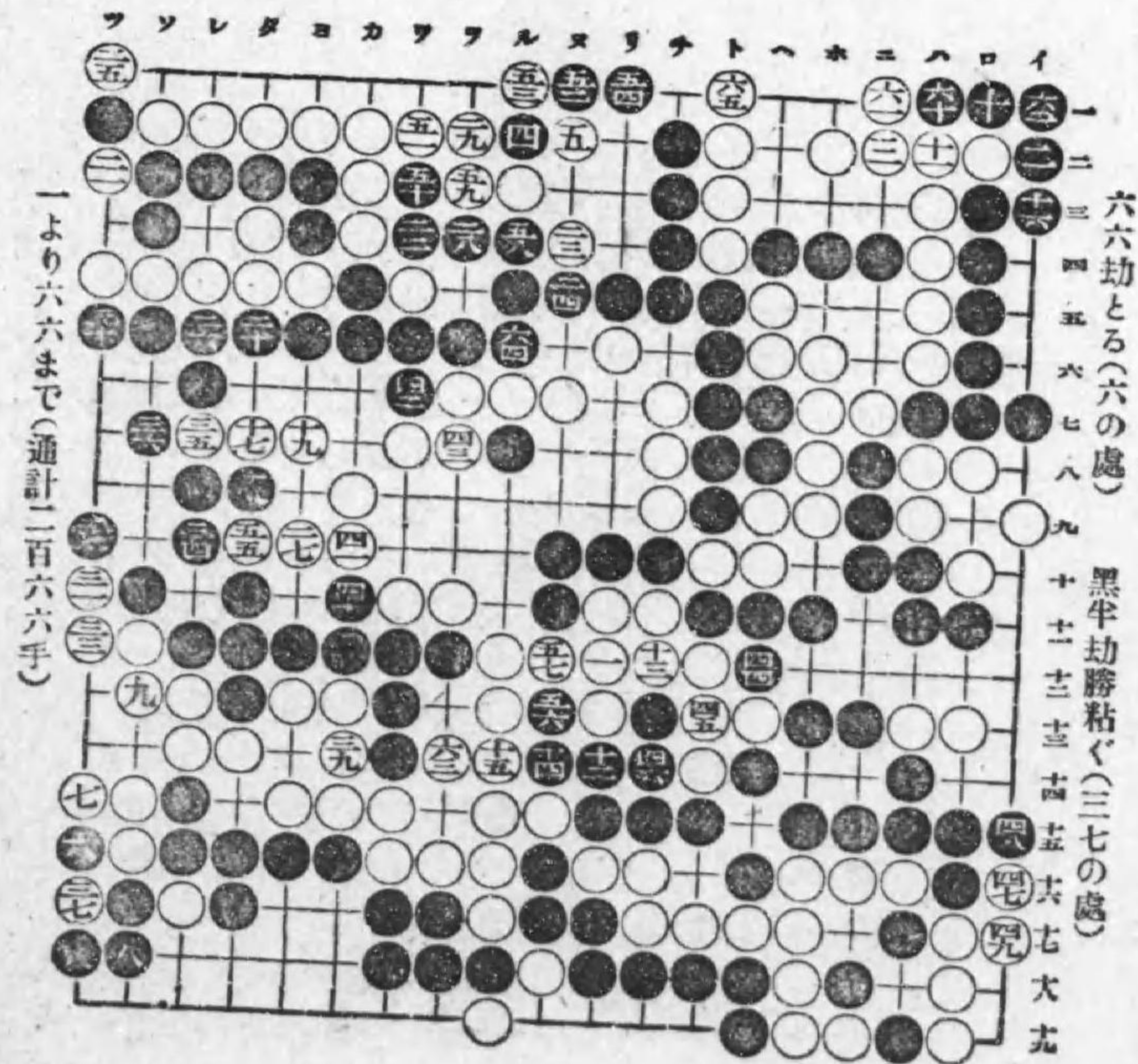
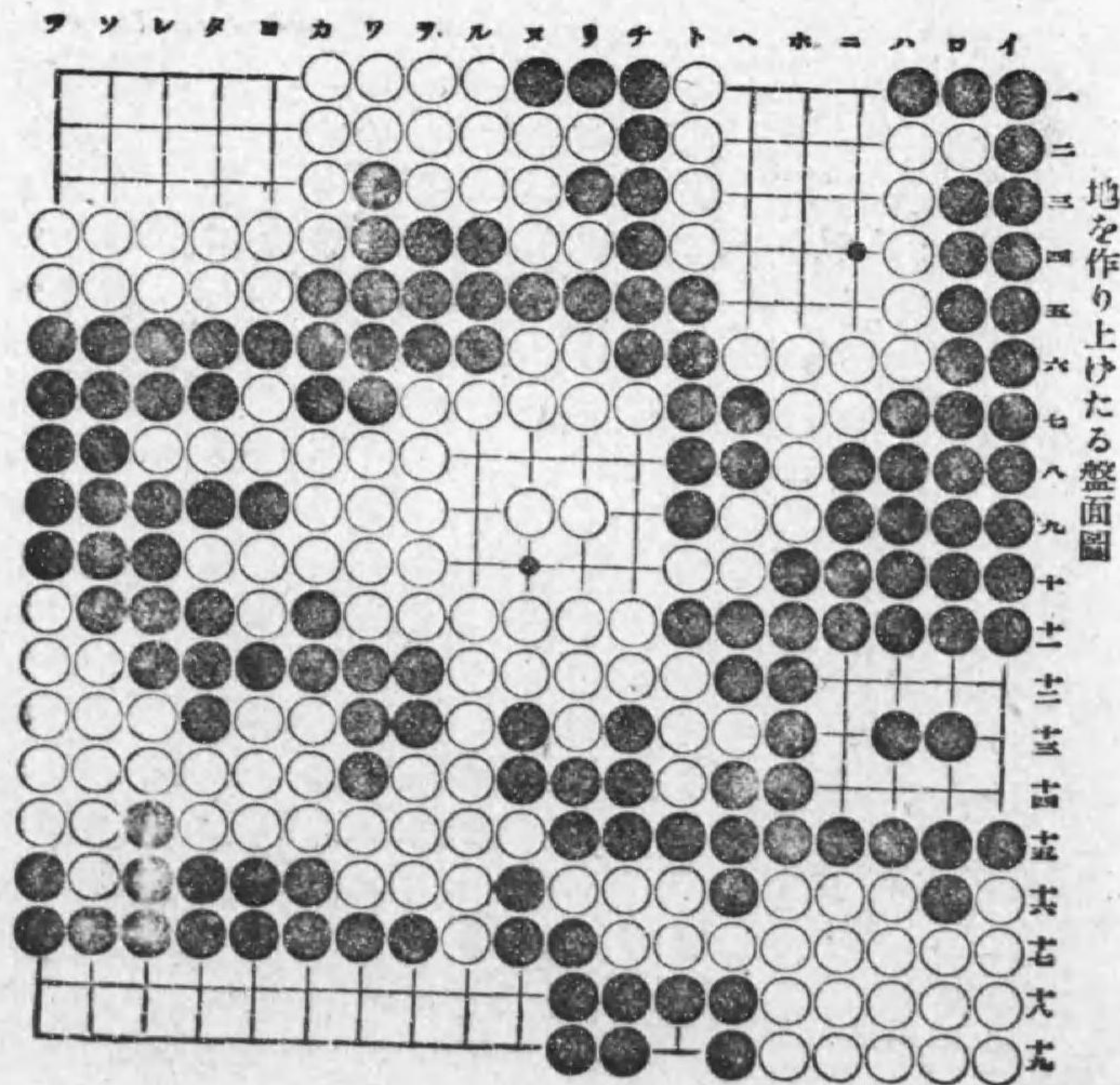
乙、白地の作り方

先づ黒の取つた白石(即ち揚げ石)總計十七子を白地に埋める。これも何處へ埋めてもよいのだが便宜上、假りに左の如く埋めて説明する。

(イ)「イの十八」、「イの十九」、「ハの十七」、「ハの十九」、「ニの十七」、「ニの十八」、「チの十五」、「ヨの十四」、「ソの十四」、「ツの十四」、「ソの十三」、「ツの十」、「ヌの九」。
(ロ)「チの八」の白を「リの七」へ動かす。「チの九」の白を「リの九」へ持つて行く。すると白地は十一目だから、計算の都合のよいやうに「ホの二」の白を「ヌの九」へ移す。この白地は十目。
(ハ)「ヘの五」の白を「ニの六」へ移す。「ニの二」と「ニの三」の白を「ルの二」と「チの二」へ運ぶ。するとこの白地は十五目。

(ニ)「ヨの二」と「タの二」の白を、「ツの二」と「カの二」の所へ持つて行く。「レの二」、「ソの二」、「ツの三」の白を、「レの四」、「ソの四」、「ツの四」に持つて行く。「ツの二」の白を「ヨの四」へ移す。これで、左上隅の白地は十五目。

で、白地は總計四十目。
結局、白は四十目、黒は三十一目で、白が九目勝。尙ほ参考まで、右の説明に従つて地を作り上げた圖を示す。(下圖を見よ)



右上隅 黒一に、白二を四、五、または六と正式に來す、かう二と、即ち人間同志なら直接にぶつつかつて來た如き白の亂暴には、黒は自衛上かう三と強硬に出るのがよい。此處に、黒三をいなど、尻込みをすると、白にこの弱蟲奴と三に來られて、一の體面は失はれる。黒は七と打抜いたことにより、白二の亂暴は、忽ち悪く現はれて、黒は白二を取つたことにより立派な地が出來たに反し、白四と六は尙ほ治らない。

黒に一手で七と取られるといふことは、この上もなく白が悪い。これは、黒の立場に於ても同じこと。

右下隅 白十をろだと、黒は十。白二は亂暴。

左上隅 黒五は、七でもよい。白六を七なら黒は六。

左下隅 黒三を四、白三、黒はだと、黒は隅に地が出來白は地が出來ないから、黒三を四でもよい。白二の亂暴の爲、白は一目二目三目四目と、各所を取られた。

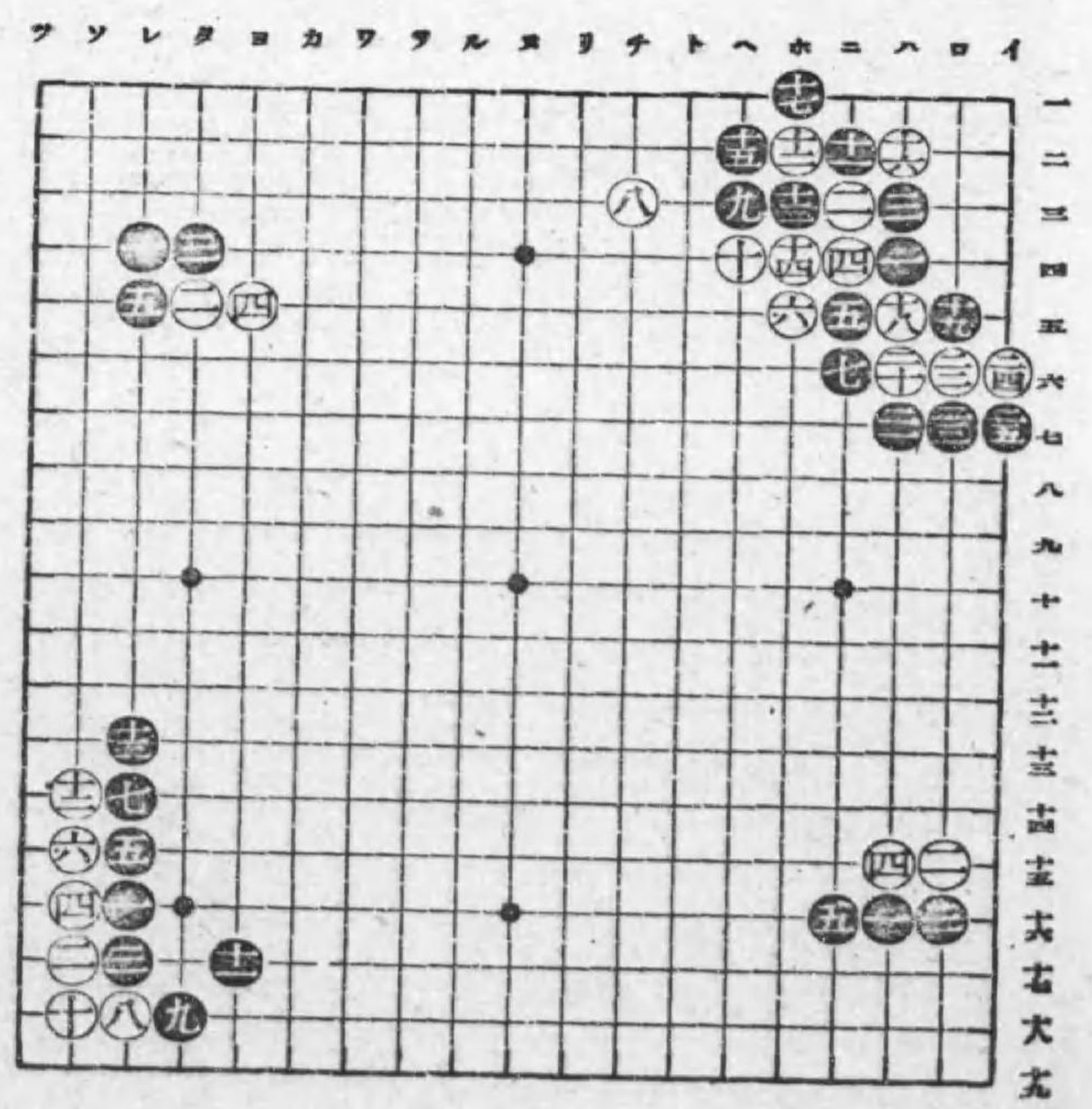
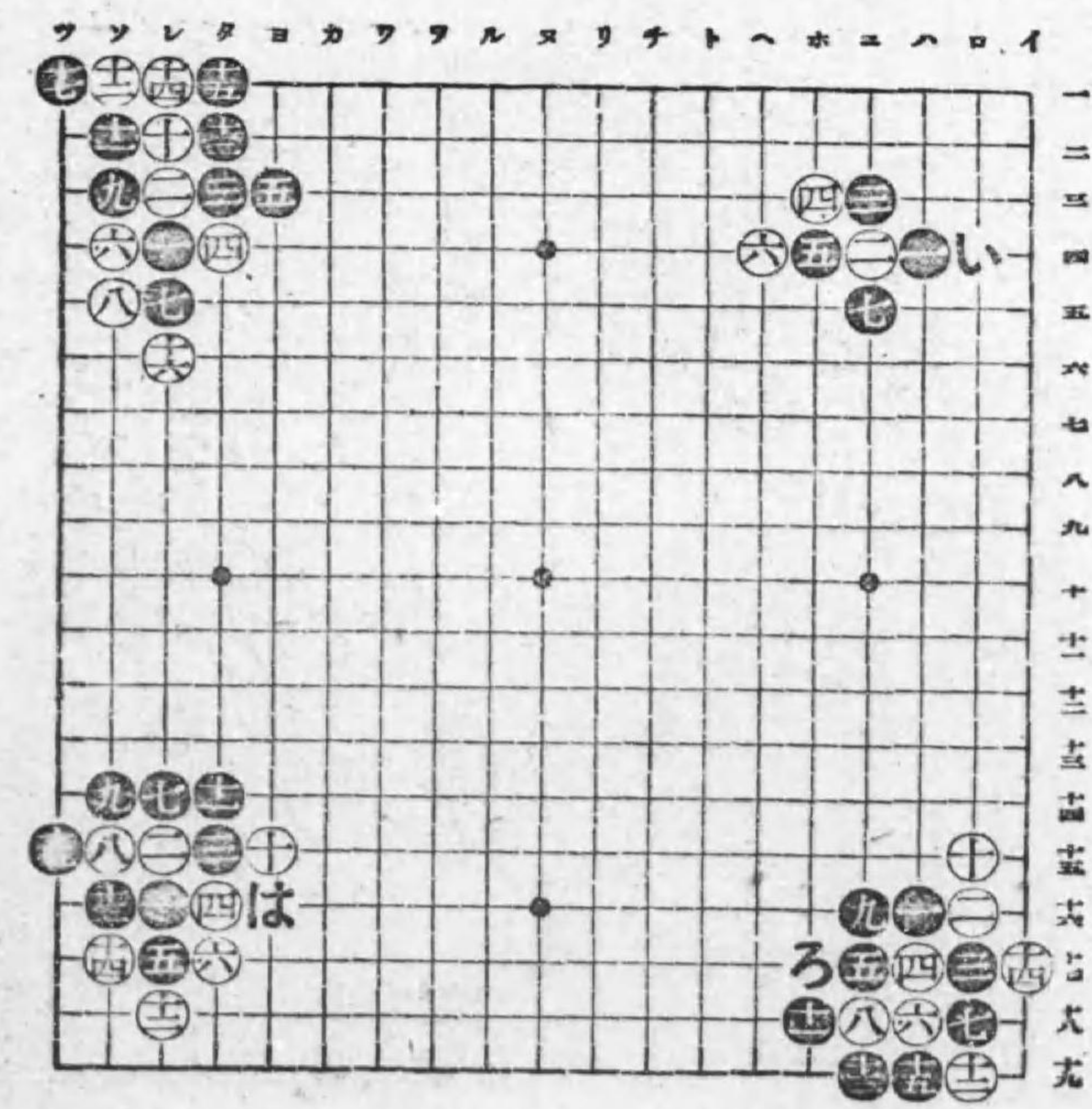
右上隅 白二は、人間同志に譬へれば、人の行く手の直角に出て遮つた如きであつて、不穩の態度と、黒より見られる亂暴の一手。それで、黒に三の要點を占められ七までとなつては、黒は隅に確實の地となつたに反し、白は八を手抜きだと、黒に十四に切られるから、かう八と備へた。八を十だと、白は黒に八と攻められる。黒九は、白の急所である。

二五までは、白が十八に切つたらかう白は取られるといふことを示したもので、尙ほ三の所は、白に其處へ來られるのと黒がかう行くのとは、大變な違ひで、三の所は、最大な要點。

右下隅 白二は、人の足許へ出た如き亂暴の一手。

左上隅 白二は、人の肩を衝いた如き亂暴の一手。

左下隅 白二は、これも人の足許に出た如き亂暴の一手。要するに、亂暴だとかう各所の如き白の悪き結果。

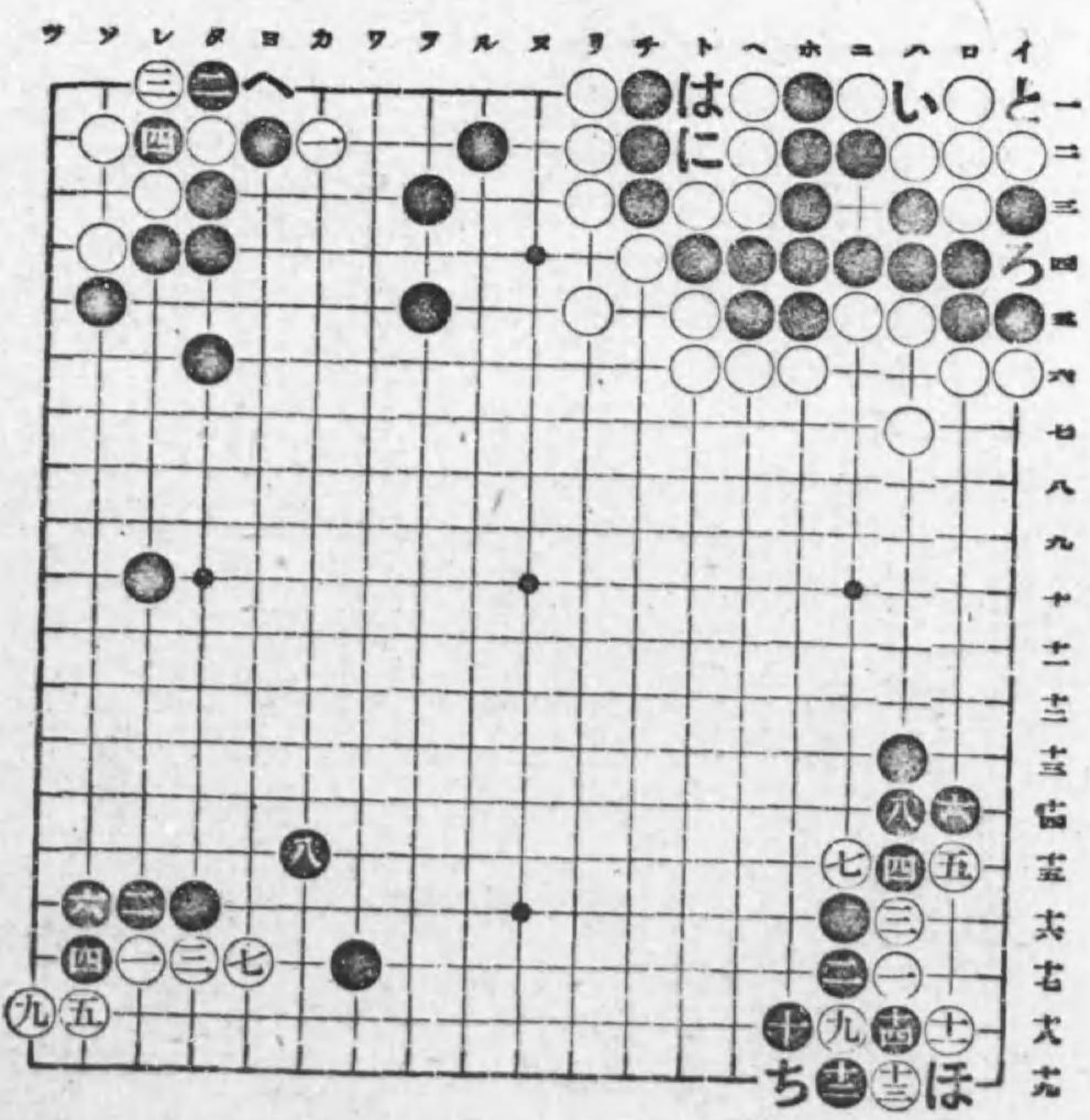


右上隅は、黒いなら白ろ、また白ろなら黒い。即ち
 兩劫で、どちらも取られないから、持。簡単な持は、隣
 接白はだと、黒ににと白の五子を取られる。また、黒が
 はは、白ににと黒の四子を取られる。持といふことは、
 國に譬へれば、如何に小國で獨立の力なくもそれが大國
 間に至大の關係を有つてれば、他國に取られないのと同
 じこと。さて、兩劫のあるとき、

左上隅 の如く、黒四と劫を始めると、白ろ、黒い、
 白「タの二」で、黒はその劫には勝てない。また、

右下隅 黒十四と劫を取つても、白ろのとき、黒は
 白「ニの三」と黒を取ると、「チの一」から「チの三」までの
 持と破れて、併せ白に取られる。からこれまた、黒は十
 二はいけない。それで、

左下隅 白三のときには、黒は八まで、白を九と活か
 すがよい。要するに、白小黒大の、かういふ關係の兩劫
 を白に作られるといふことは、黒の嵌り。即ち、左上隅
 白「タの二」のとき、黒いは、白へ、黒ととなつて、黒が
 損。また、右下隅さう黒となり、白ちとなる結果は、
 これまた黒の損の大なるは、いふまでもない。



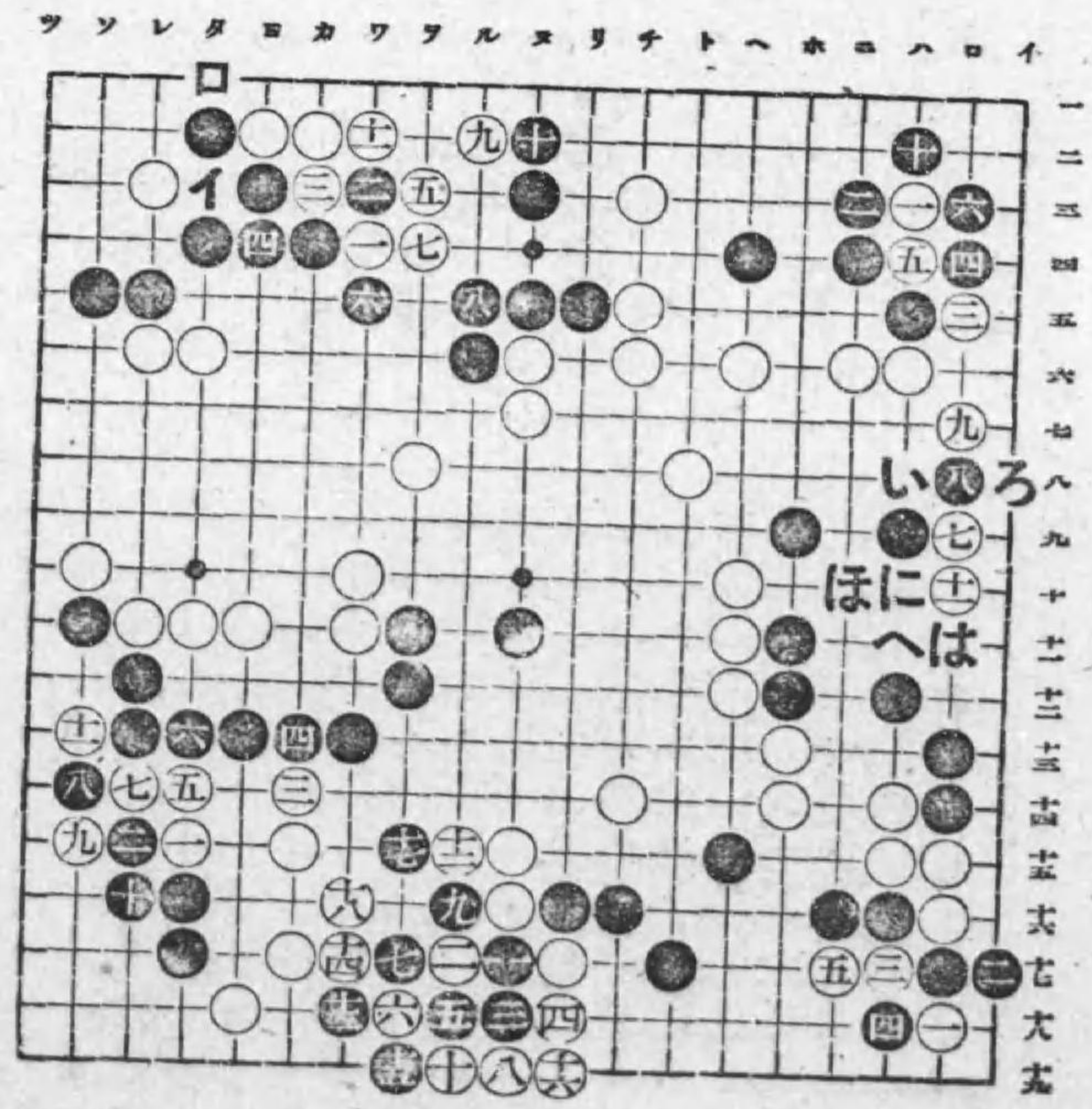
右上隅より右邊 白十一迄は、黒の嵌り。黒い、白ろ。
 黒は、白に、黒ほ、白へで、黒の七子は活きない。だ
 とて、黒十を十一だと、白は十。で、黒八は十一。

右下隅 五となつては、黒は嵌つた。で、黒二は四。

左上隅 黒二は嵌つた。黒四を十一だと、白い、黒四
 白ロで、白に活きられる。で、黒二は六。

左下隅 白一には、黒は九と應ずるのがよい。そのと
 き白二なら、黒は「ソの十六」。黒は十一までとなつては
 白一に嵌つた結果。

下邊 黒一は「リ」の十七にある白の一子を取らうとい
 ふ目的。その黒の目的を達しられては、白は損。即ち、
 黒十一を二に粘ぎ、かう十八までとなつて、黒「チの十
 六」は、白は「チの十四」。白十八までは、白が嵌めたの
 ではない。黒自らが悪い結果を招いた。で、黒一は四。

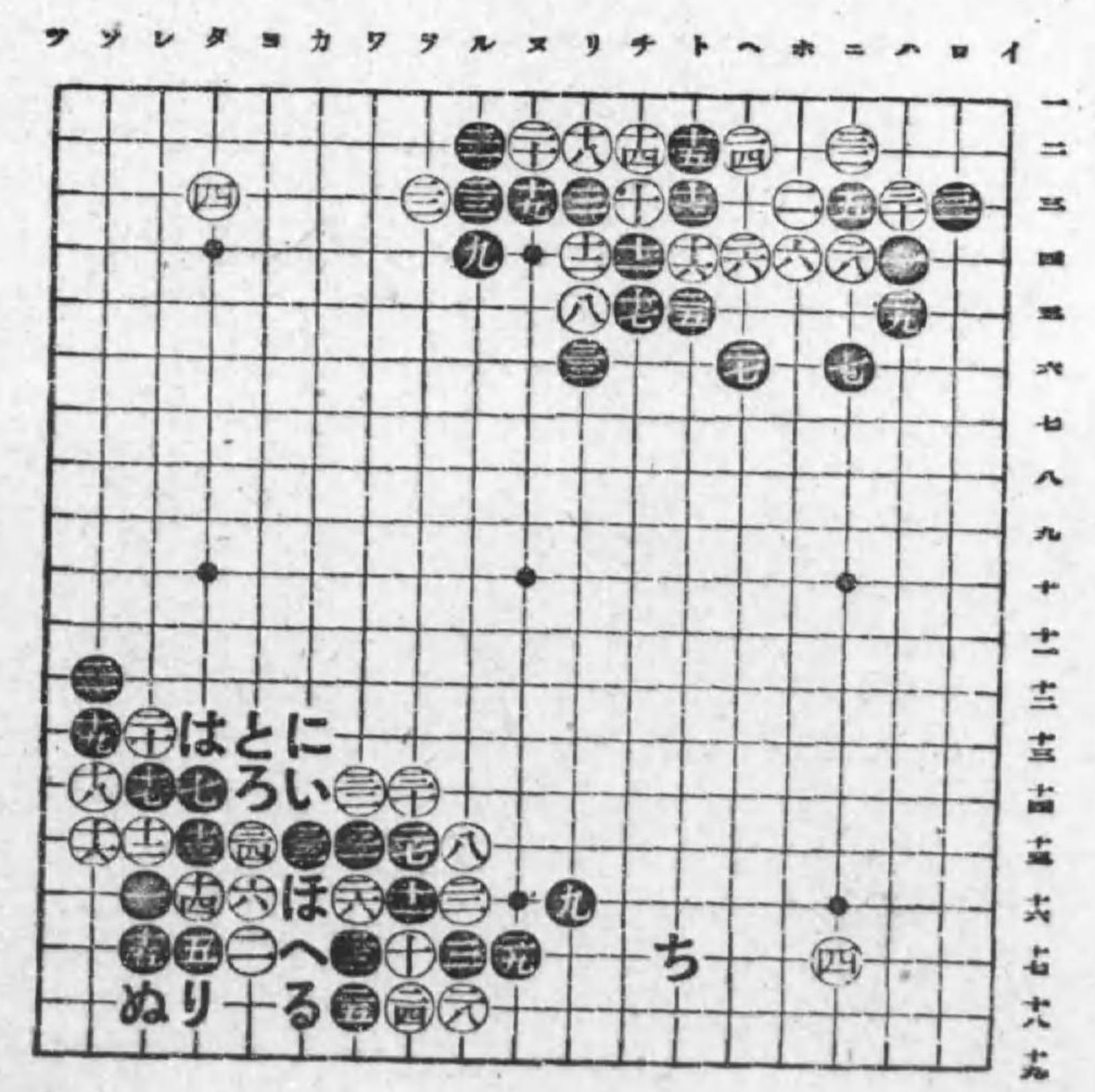
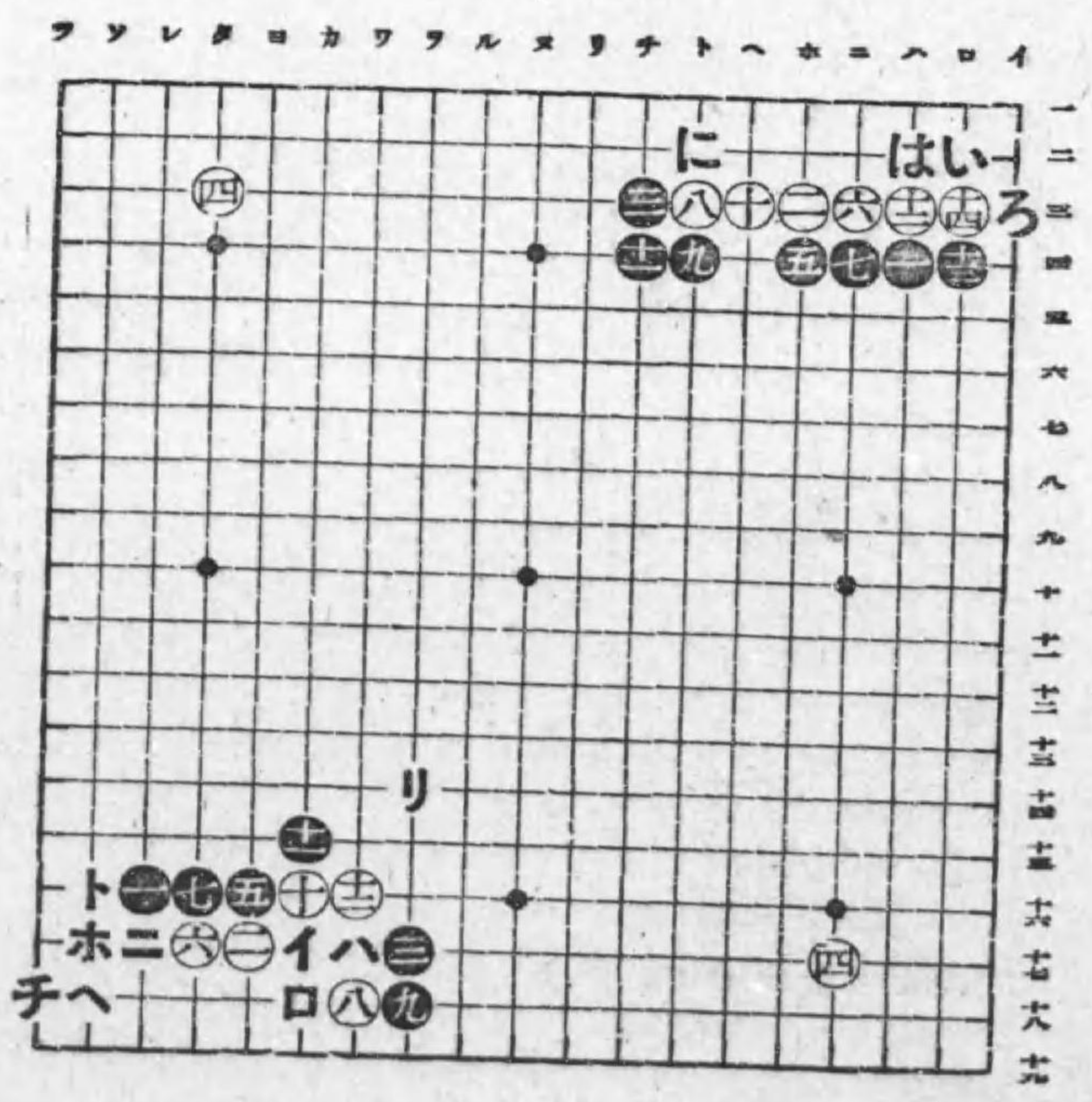


右上隅 黒三は、三間夾みといつて、五より七までが三の目的。白八を十七なら、黒は「ヌの四」または二二と應じるまでが、基本定石。黒九より三三までとなるのも基本定石。それを、

左下隅 白十二から變化せられて、三四までとなつては、黒は嵌つた。かう三四となつて、黒いは、白ろ、黒は、白に、黒ほ、白へで、黒はどうすることも出来ない。その黒いをほは、白は、黒ろ、白い、黒と。のとき白はこれまたへ。それで、黒がかう三四までと嵌らない爲には二二までの方は、白は大なる損故、黒二三を二四白二三、黒二九と、黒は受けるがよい。そのとき、白なら、黒二五、白り、黒ぬ、白二六、黒ろで、黒九以下の前途は安心。嵌手は、相手が嵌らないと損を招くことは當然。損を招かずして、相手に當惑させる着手は、嵌手でなく妙手である。

右上隅 十四までとなつては、黒は三の二間夾みの目的は達した。白十四を手抜きだと、黒にいと飛び込まれ白十四、黒ろ、白はは、黒にで、白は取られる。白十四までとなることは、白地は小さく外部の黒は厚くして、白はその厚味を消すには、勢が多い。だから、基本定石にはなつてゐるが、白のためには、全局面の布置の關係を見てからでないか、かう十四までと受けることは採らないのである。

左下隅 黒五は、白二を外へ出さない目的。それをかう十二となつては、白に外へ出られた。それは、白は八のとき、黒が十一で十二へ受けることを知らないと思つて黒を嵌めた。黒十一を十二だと、白十一、黒イ、白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒リで、黒が善い。その白十一の出をイなら、黒は十一。黒十一を十二の要領は、實戦に當つて、大いに必要の一手。



右上隅 黒十三までとなつては、黒の間夾みは、目的を達した。これまた十三までが基本定石となつてゐるが、黒い、白は、白にと、白は僅に地を六目にされることになり、黒の十三までの堅固な厚装は、白は寄りつくべくもない。しかし、名人上手の實戦に白は平気でかう十三まで受けてゐるのは、これまた、周囲の布置によることであつて、それ相當の覺悟があるからである。

前譜二間夾みと、この一間夾みとの論は、高等戦術に屬し、それが判れば進歩は顯著だが、そうむづかしいことではない。

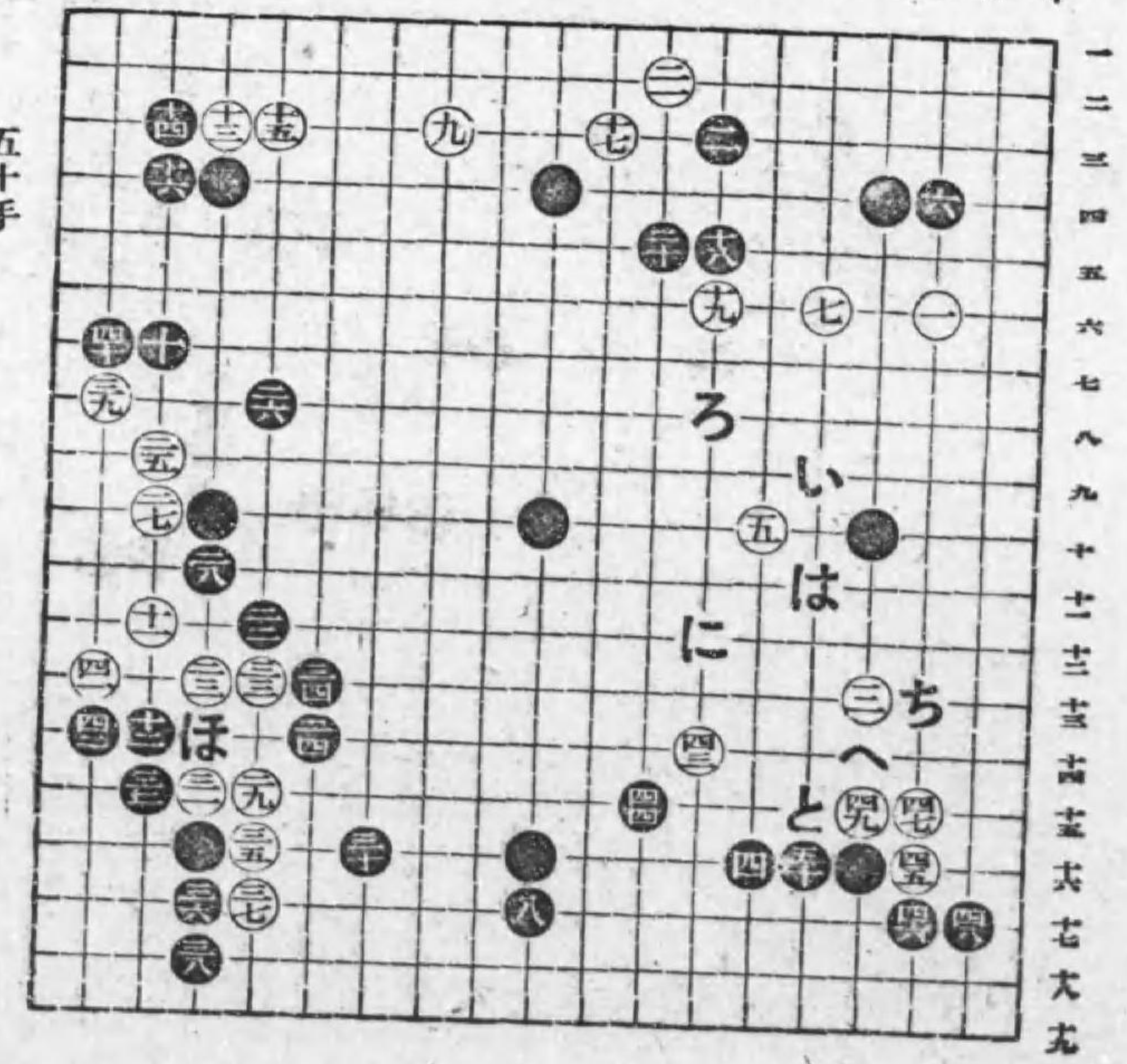
左下隅 十四までとなつては、五の目的は達せられず、黒三が、白十四の堅い所へ附着して、結果は黒に悪い。白六は嵌手である。黒七を十だと、白イ、黒八となつて、白が悪い。黒七を十の要領は、實戦に多く必要。

井目置いた必勝法などは餘り必要でもないが、参考のため此處に出す。

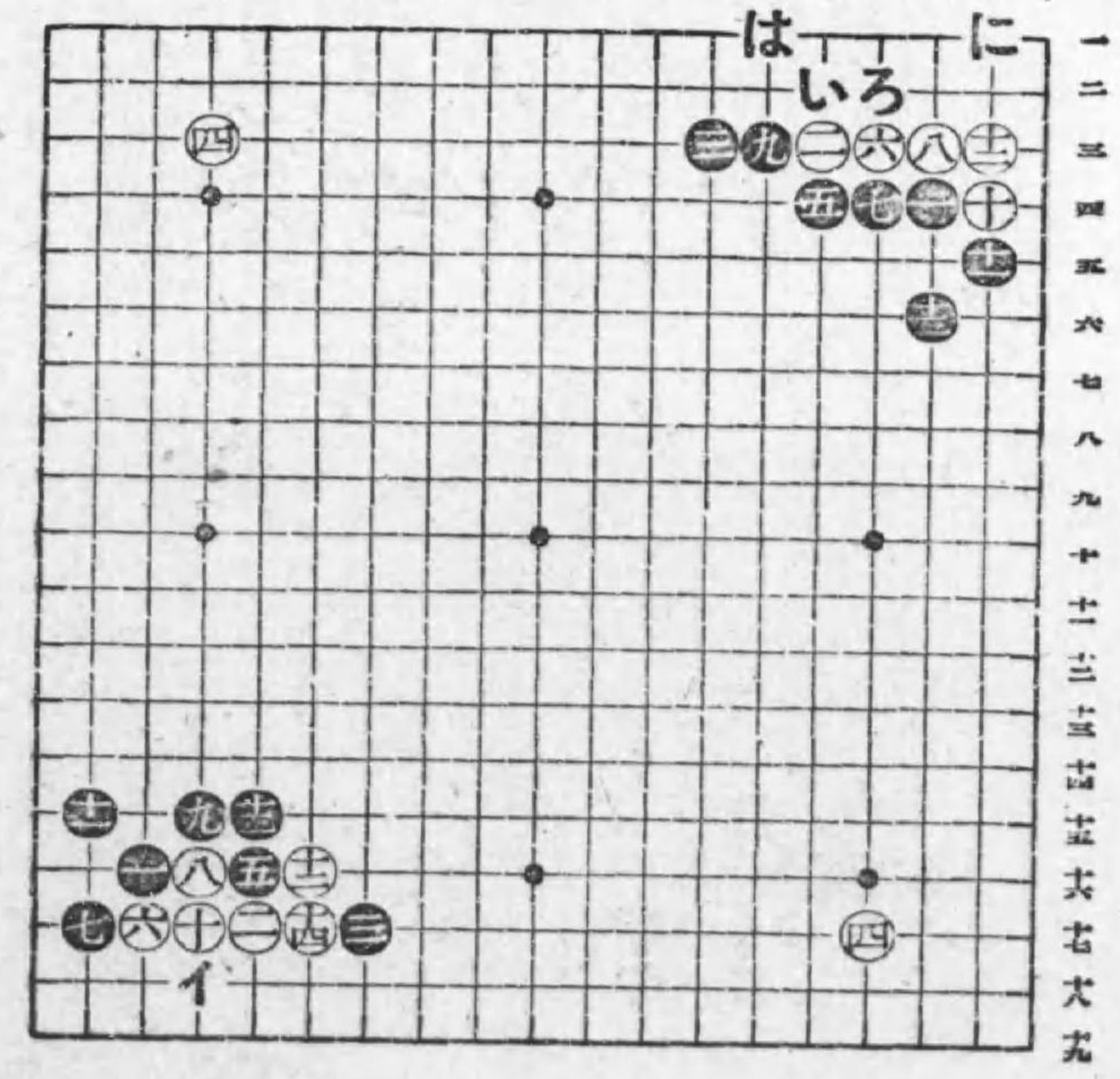
白五は、「ニの十」の置石を脅した。が、黒が六、八と平然として白五に拘らないのは、黒六でいと出れば白はろと追ひ右上隅を、またはの方へ出れば白はにと追ひ右下隅を破らんとする白五の、術中に陥らないため、黒はかう八で地域は充分。

黒二四は、恰も騎兵が敵を追撃する如き一着であつて好手。二四をほまたは三三と、白に直接は、黒が悪い。黒四四は緩い。また四六は四七、白四九、黒へ、白と黒ちと、黒は變化を圖るが善いが、かう五十までと穩かに受けてゐても、黒地は白地より甚だ優勢であつて、これでも、勝てるといふ受け方。だが、穩かな方法のみを學ぶのは、苦勞を避けることであつて、上達は遅々。速な上達を圖るには、働き手だといはれる人の如く、望んで苦勞に就く男性的意氣がなくてはならない。

イロハニホヘトチリヌセヲカゴサシヤチノ



イロハニホヘトチリヌセヲカゴサシヤチノ



此處では、碁の經濟のことに就て少し話さう。

遠くは普佛戰爭のとき、戰爭にはプロシヤが、勝つたが、後の經濟戰にはフランスにしてやられ、近くは世界戰爭の時、多數の成金が簞出したが、後の、即ち碁でいへば收束といふ所が悪かつたので、没落した。かういふ譯で、碁も、侵分が最後の勝利を決定する。

が、布石にだとして、經濟はある。四と六との五路の間を十と一手で守つたのは首肯されるが、二と八と八路の間を、白が十二の一手で地になさんとするのは、蓋し、黒が十三で「リ」の三に打込み来れば、その影響を一と五の方へ與へやう、また、十三で三十に打込み来れば即ち白十三、黒「ワ」の五、白二三と運んで白は左邊に地を取らうといふ、ことにあつて、白十二は散漫の一手ではなく優秀な經濟の一手。

黒は「三」の三の要點即ち十五の一手により其處に有利な地歩を作らう、白は作らせまいといふことによつて、此處に早くも戦端が開かれ、四十までと黒の四子は白に取られたが、その代りは黒も四一までと損はない。かう

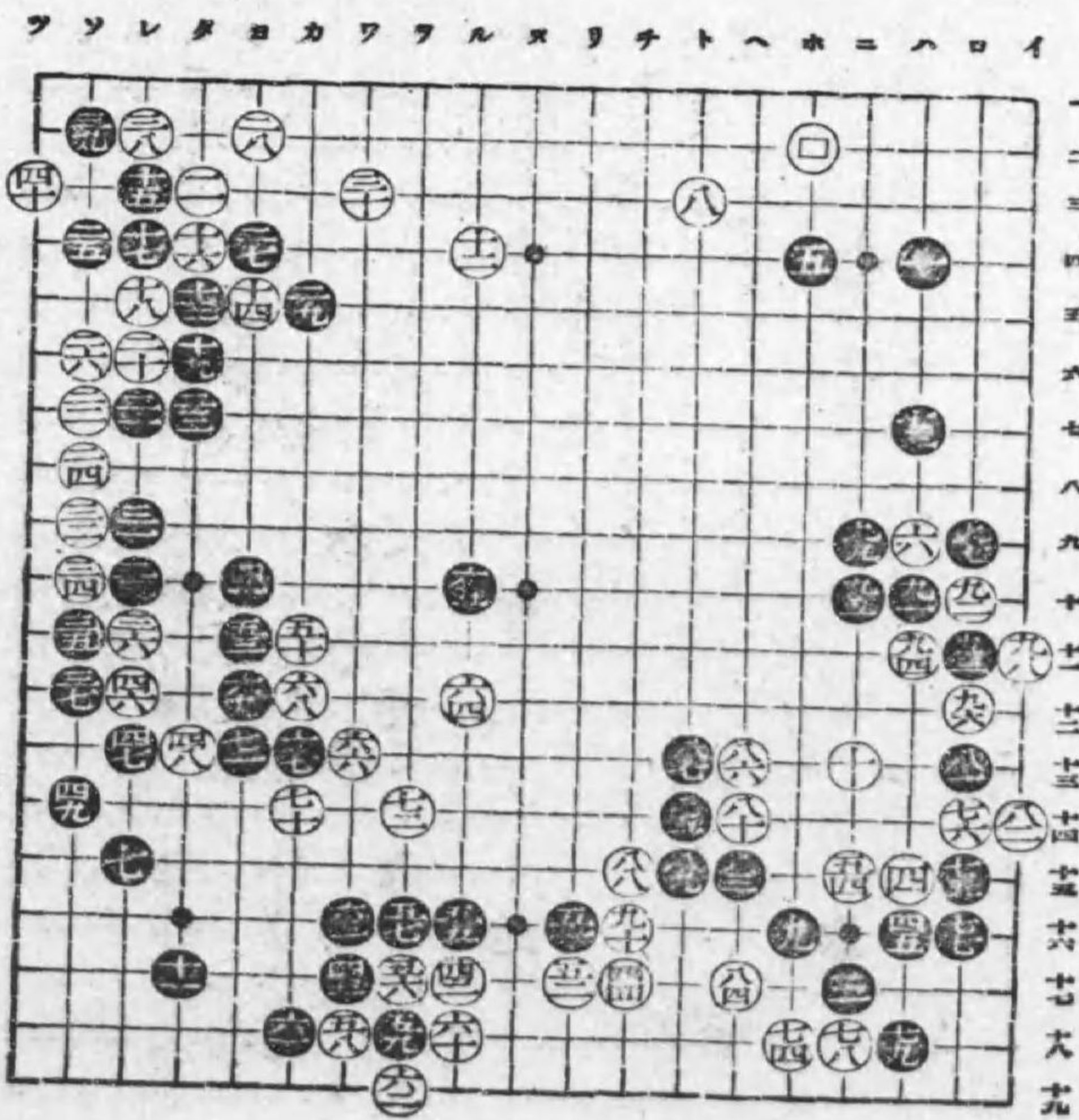
いふ戰爭の始つてより終りまでのうちにも、假令一發の銃砲丸にも無駄はない、といふ經濟はある。

白は四十までと左上隅に得をした。その得の代りとしては、黒は四一までの模様得。即ち、白四六はその模様を消すことにもなれば、四十までは全く白の得。それで白は軽く引上げやうと六四。さうはさせじと、黒は六五。といふことによつて七二までとはなつたが、黒は追撃しても果して白が取れるかどうかといふ見透しがつかないので七三と好點を占め、兵を休めた。のも、これまた經濟。(以上三〇頁)

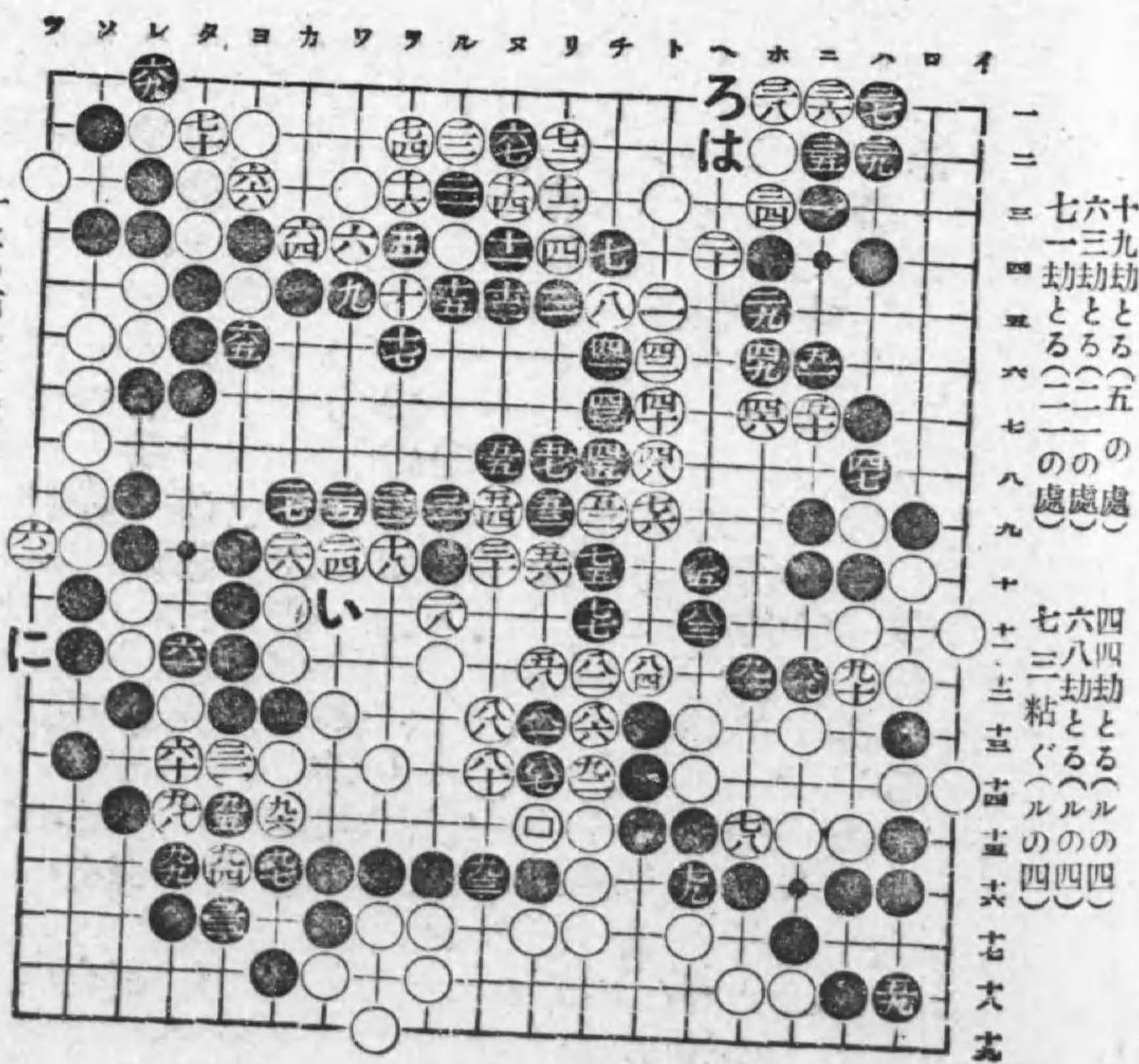
白二六は、黒に其處へ當てられると、黒は二七の所へ一目預え、白はいに粘がされて一目減る。即ち二六は先手二目。

白三六は、黒に三八と來られ、白ろ、黒三六、白はとになると、白はろ、はの二目が減り、黒は三八、三九の所に二目減らないから、即ち三六は先手四目。

白六二は、黒に其處へ來られると、黒の四子が攻取る、こゝと、又次に白はにに行くから、大きな手。(以上三一頁)



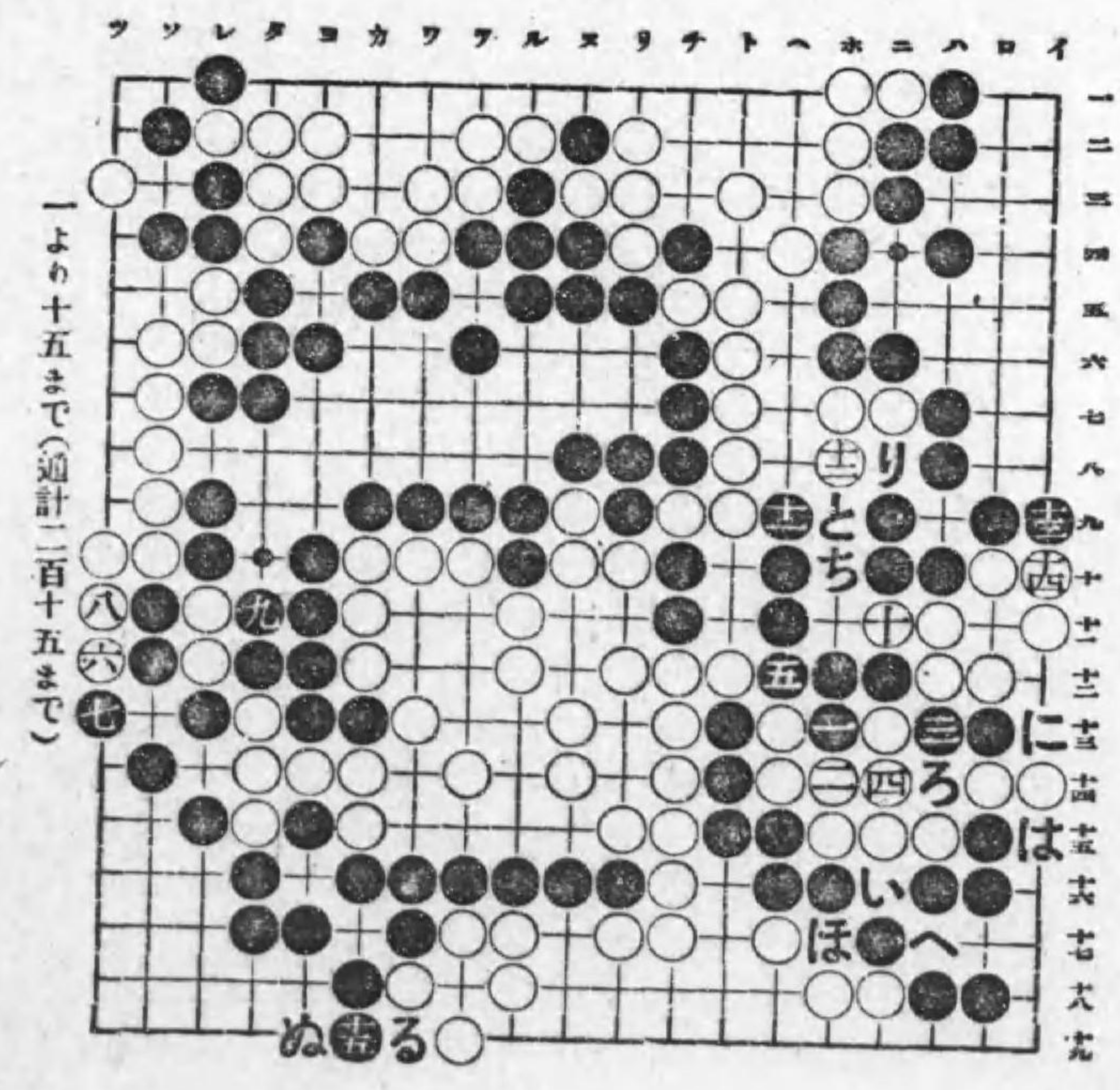
三〇



三一

定石篇

黒五は、黒い、白ろ、黒は、白にと、白をろ、にに打
 上げさせる二目とはよつて「イの十六」に一目殖えたの
 と、また、白に五に粘がれると白い、黒ぼとなり、黒は
 への所が一目減るので、合計四目に當る。が、黒五の後
 手切りは、尙ほその他にも意味のある大きな侵分。
 白六は、黒に八に來られると、六、七、九の所へ黒が
 三目殖えるから、即ち、六は先手三目の侵分。
 白十二は、黒に其處へ來られると、白「への七」となつ
 て、と、ちに土地が黒は出來、かう十二で次にりと黒の
 「ハの九」を虚眠（おぼ）にすることを省かれる。
 白十四は、其處へ黒に來られると、「ロの十一」の眼が
 缺けるばかりでなく、其處全體の白の死活に關する。
 黒十五は、白に十五に來られ、黒ぬ、白るとなると、
 黒はぬの所に一目減ると、次に黒る、白「テの十八」と
 白は一目減るとで、合計二目の手。
 黒二目勝の新局は、白は村瀬秀甫黒は初代中川鶴三郎
 兩先生。以上により、最終の經濟即ち終末によつて勝敗
 の決定される概念は得られたであらう。



本篇は定石と布石との關係、または一局大勢より見て其他定石の活用を説く。

右上隅、白一より十三迄の一型は、見らるゝ如く堅固な定石、其目的は健實に、一局を打進めることにある。黒二より十四迄は、十四と中央形勝の大場、先占が目的である。

然るに下邊の如く白が「への十七」、「ヲの十七」と先據の場合、左下隅の如く、黒は白一に對して、二より十二迄と應じることは、定石撰用の誤り。

白が「ヲの十七」と在る際、左下隅白一に對し黒二は手拔が第一。また應じるなら黒四は六、すると次いで白四黒八「レの十三」、黒「カの十七」となつて、黒は相當に地が出来、白は斯う十三迄の堅固とはならない。また黒二で六、白二、黒「ヨの十七」も悪くはない。

右上隅、白一に對して、黒二と白一を攻めることも定石である。

白三に黒十四迄は、黒二が十五迄となつた、白の堅固に接して、悪い結果である。

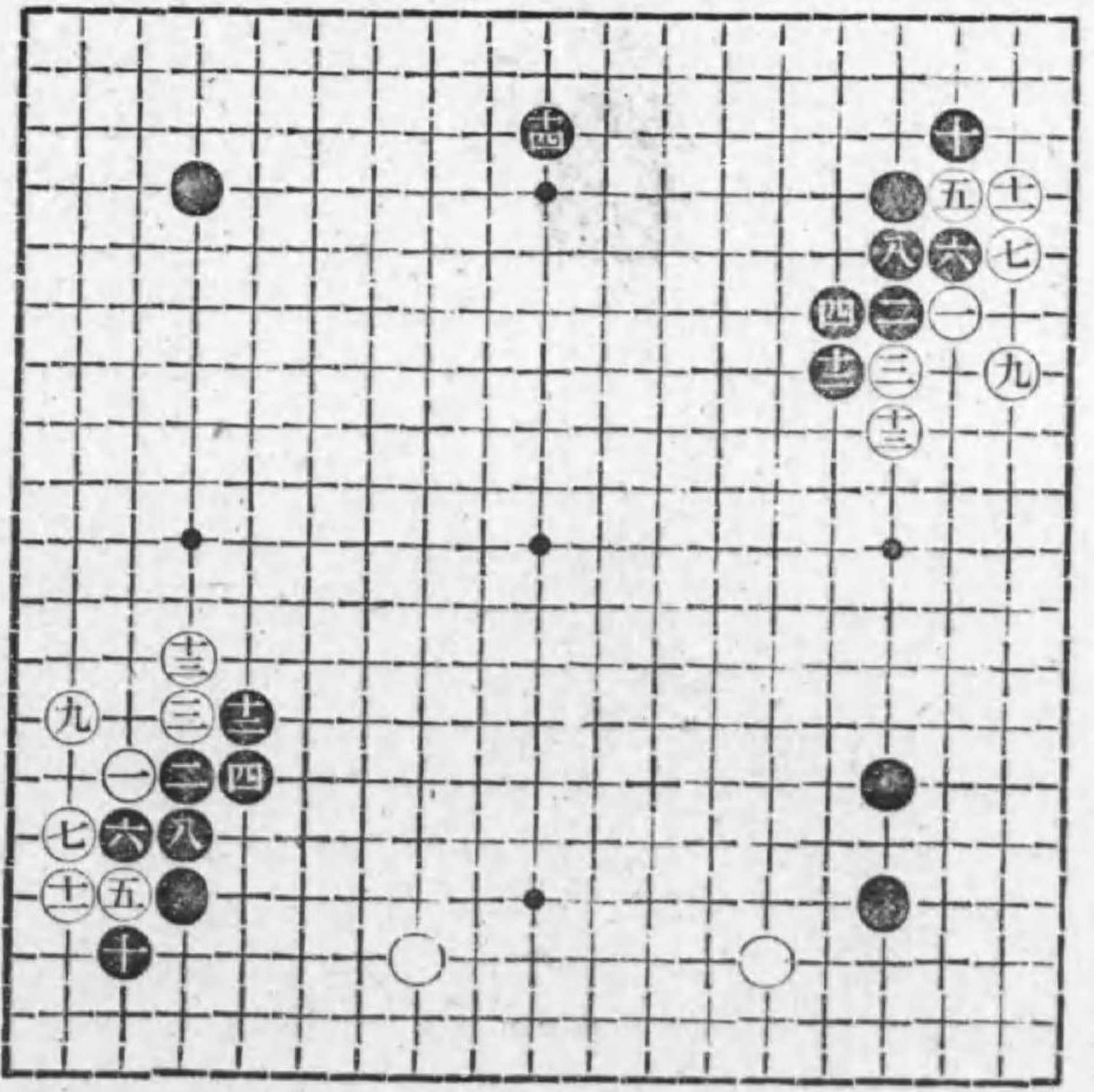
黒八を十二、白八、黒「ニの三」だと、黒二が白の占めんとする、要點に在つて、善い結果となる。

また黒六を八、白六、黒十、の時白「への五」なら、黒は十四に切るのが、黒二を活用の道。

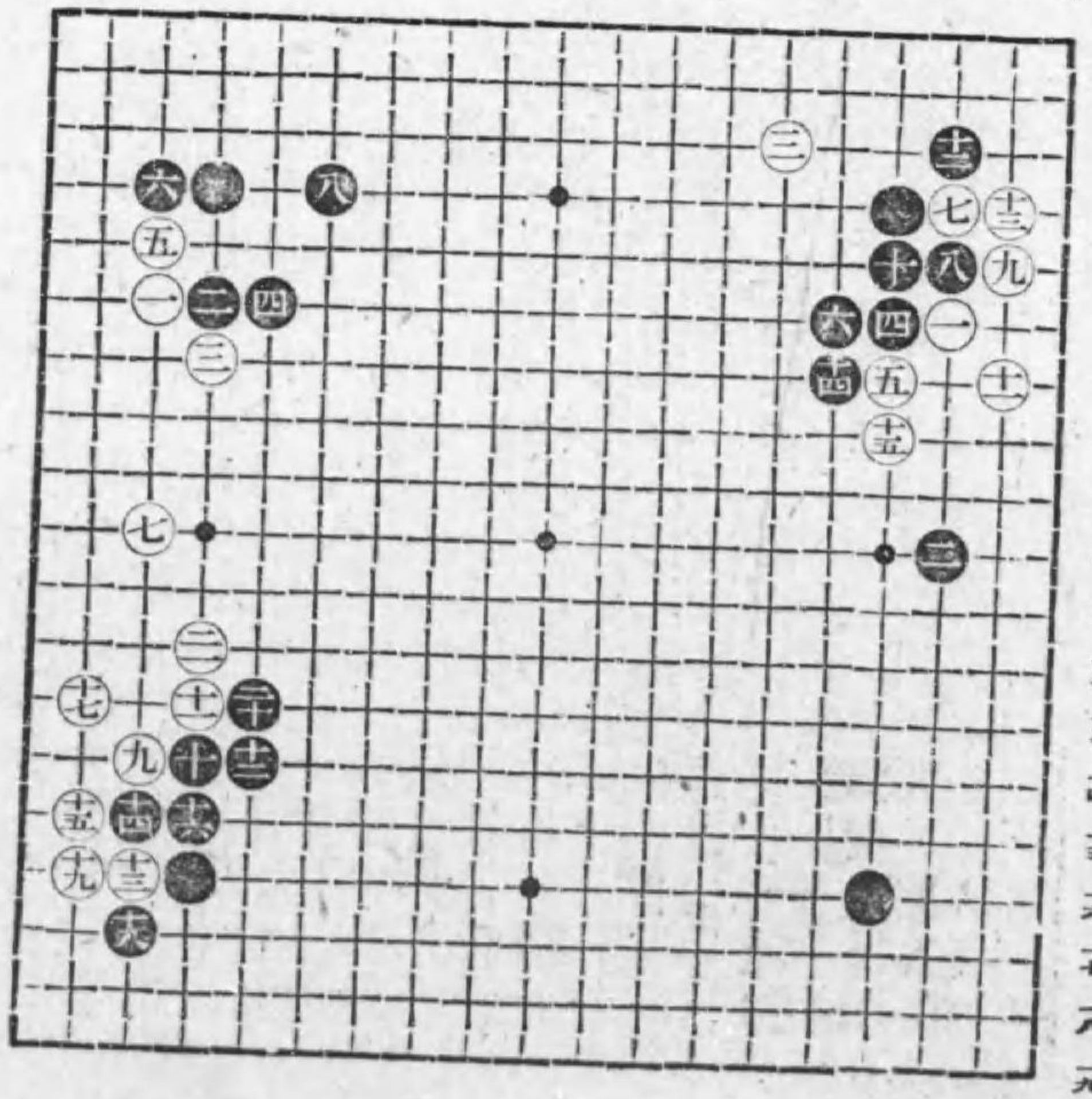
左上隅、白一より七迄、黒二より八迄、は共に定石。七迄となつてゐる左上隅よりの定石の所へ、白九より二十一迄の定石を、用ひることは、二十一の強い行路を、味方七が、ジャマ、して働らきに困る。

七と在る場合は、白九は「カの十七」の方へ廻るが定法である。

フソレタヨカヲチルヌヲチトヘホニハロイ



フソレタヨカヲチルヌヲチトヘホニハロイ



右上隅、黒八は定石であるが、其の八の備へは、初心者の爲に定めた。

左上隅、の如き白黒の在る際は、ことに黒八を(い)に占めるが定石。斯う八だと、白に(ろ)と來られて、黒は白の意中を行くもの。

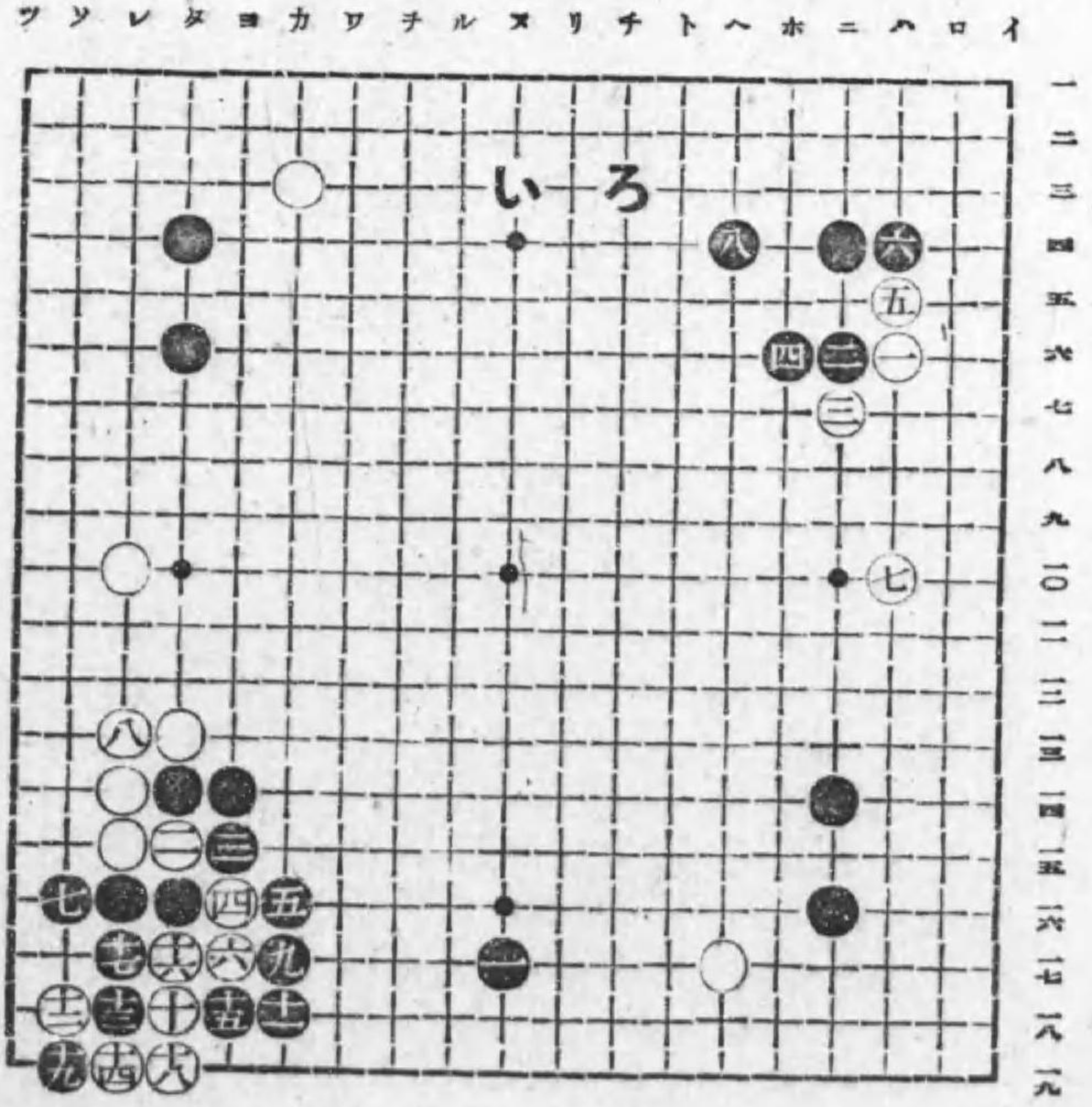
黒八の備へを(い)でも差支へないことは、下邊より左下隅を見られよ。即ち(い)が黒一となつて。

白二と出て四と切つても、十九迄の結果となつて、白の大悪。

白八を九だと、黒八と切つて、黒に損はない。

黒十三で十六、白十五、黒十三でも、黒の攻合勝ちだが、四と六の白二子を取れば、問題はないと、十三より十九迄の、調子と手筋を採つた。

白十四で十七、黒十六、白十四、黒十五、白「ソ」の十七の白の活は、問題外だが實際に當つても、白は不可。



右上隅、白九を「ニ」の二、黒十、白十二、黒十一、と來る黒の定法は、黒が四、八、と應じた時、ハ、ア、知つてゐるなと白が敏感する。

そこで白は斯う九、十一、と手を變へた、それは白十一に對して、黒が應手を誤まり、一擧敗を招く列が多いからだ。

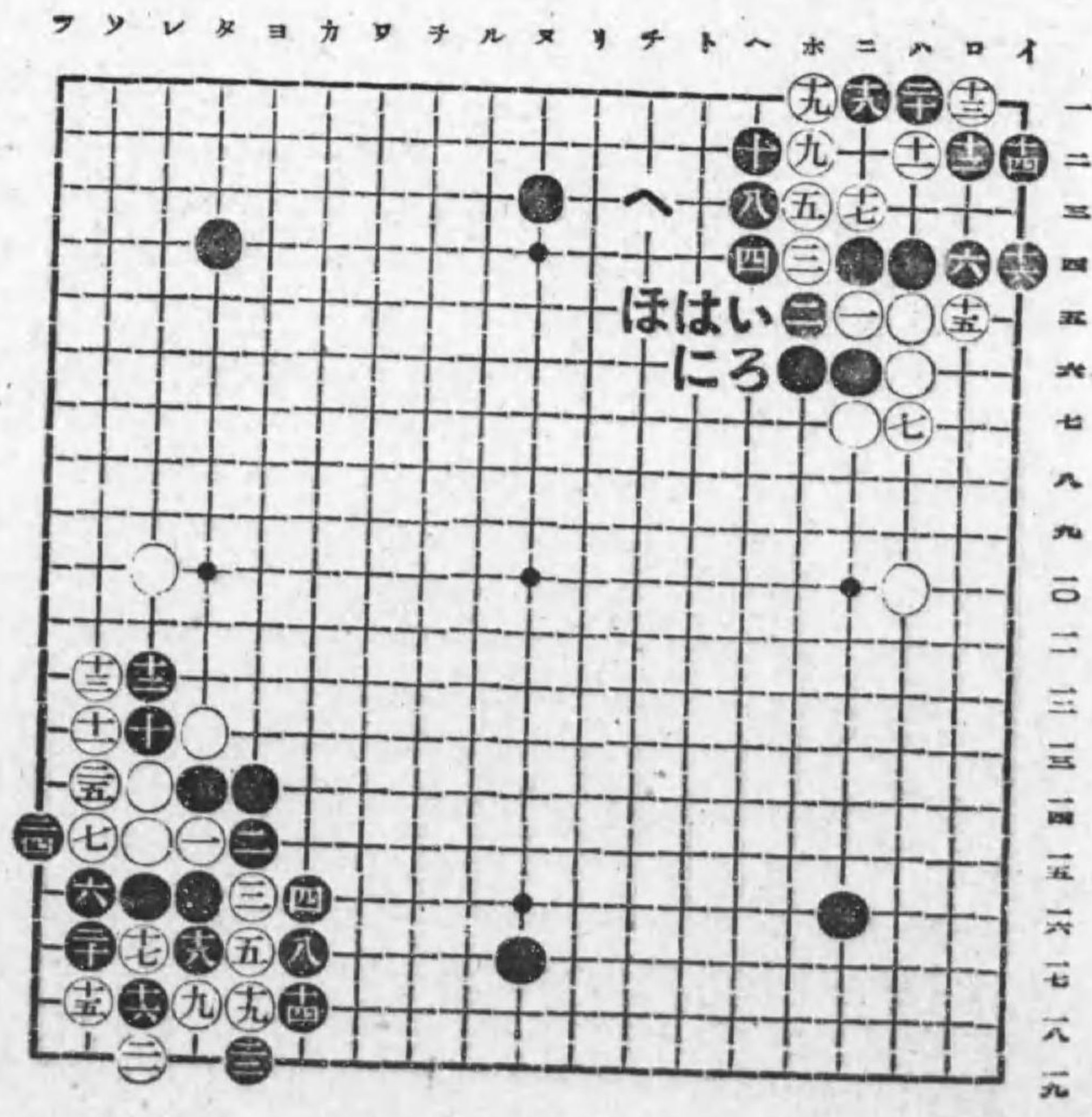
白十五でも又た十七でも(い)なら、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)、と黒は應じるが危険なし。

左下隅、白が斯う劫手段に來ることは、黒は覺悟に置かねばならない。

黒十、十二、は二十四と劫立の爲だ。黒二十六、十六に劫取りで白に劫立はない。

實戦に當つて、白が二十目位の劫立なら、黒は「タの十九」と取つて、得こそあれ損はない。

また大きな劫立が白にあつて、黒が劫立及ばないと見れば、黒「メの十七」は四に備へることだ。



右上隅、白黒共に定石である。黒十を「ニの三」に粘ぐと、白は十に切り取る活路あつて、十一とは備へず、「リの三」または其の近くを占め、上邊に優越の立場に就く。白十一で「ニの五」なら、黒は「ホの五」に受止が肝要。すると其の黒「ホの五」を一とする、左下隅の變化となつて、白が大悪。

左下隅、白四を十八だと、黒四で白は問題にならない。白十で「ヲの十八」だと、黒十、白「ツの十九」、黒十八、白二十一の粘ぎとはなるが、黒は堅固無比となり、左右の白は痛く黒に攻められる。

即ち一方は(い)、一方は(ろ)と。黒(い)の攻めは斯ういふ際には斯うかと、特に注意を望む。

白二十六を手拔は、黒二十六、白「ツの十六」、黒「ソの十一」となつて、白の大敗。

白九に對して、黒十は定石である。が十で(い)の時、白十の處又は(ろ)の處でも、黒(は)と天元の一子に連続も、黒の布石として白の大いに困るところ。即ち八と備へてゐる定石が利いて、黒(に)と白七の頭を壓することが。

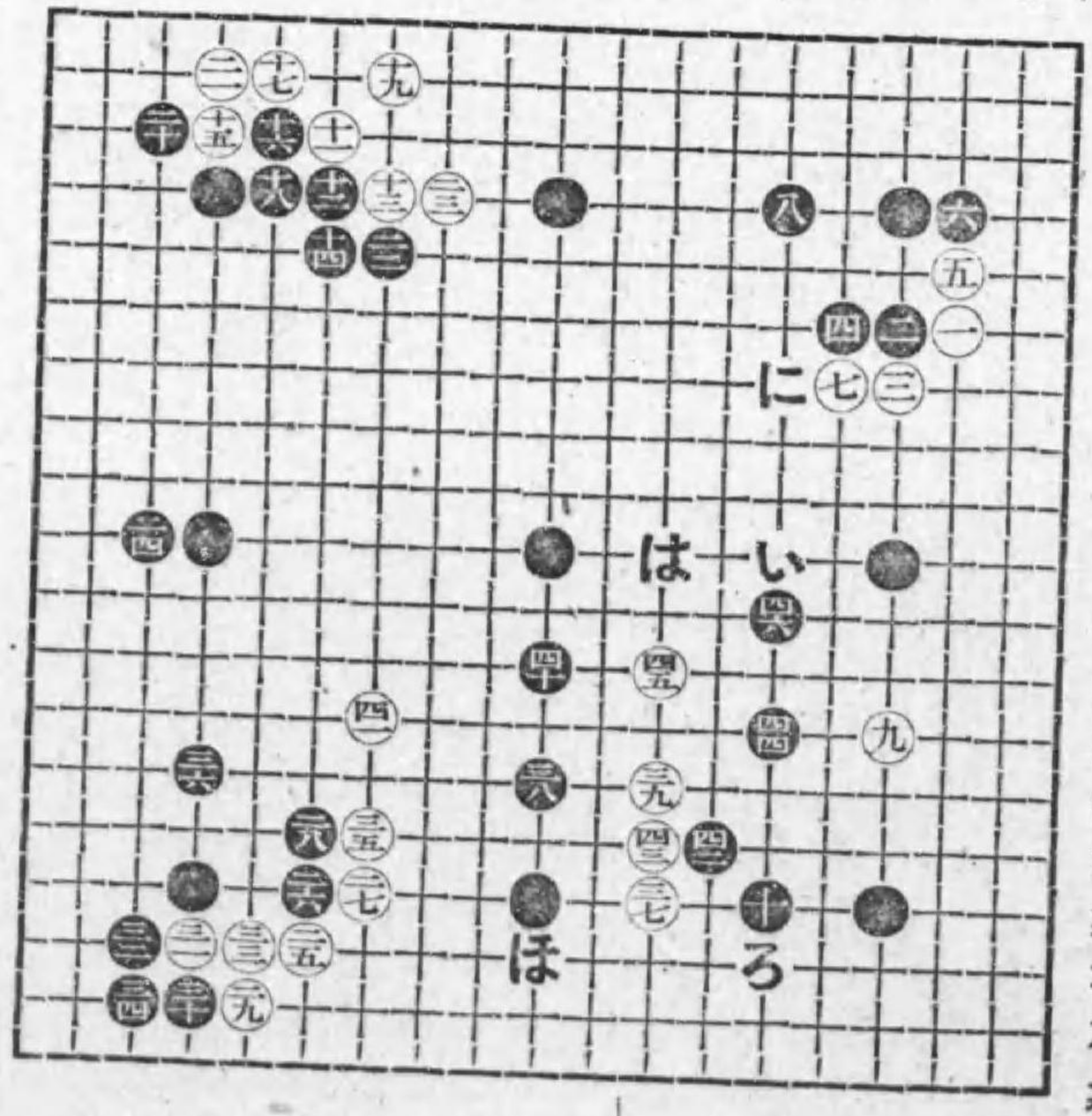
白二十一で二十二なら、黒は二十一に十五の白一子を打抜くが定石。

黒二十四は二十二迄に伴ふ、其方面固めの定石である。白は黒の斯の布石に困る。

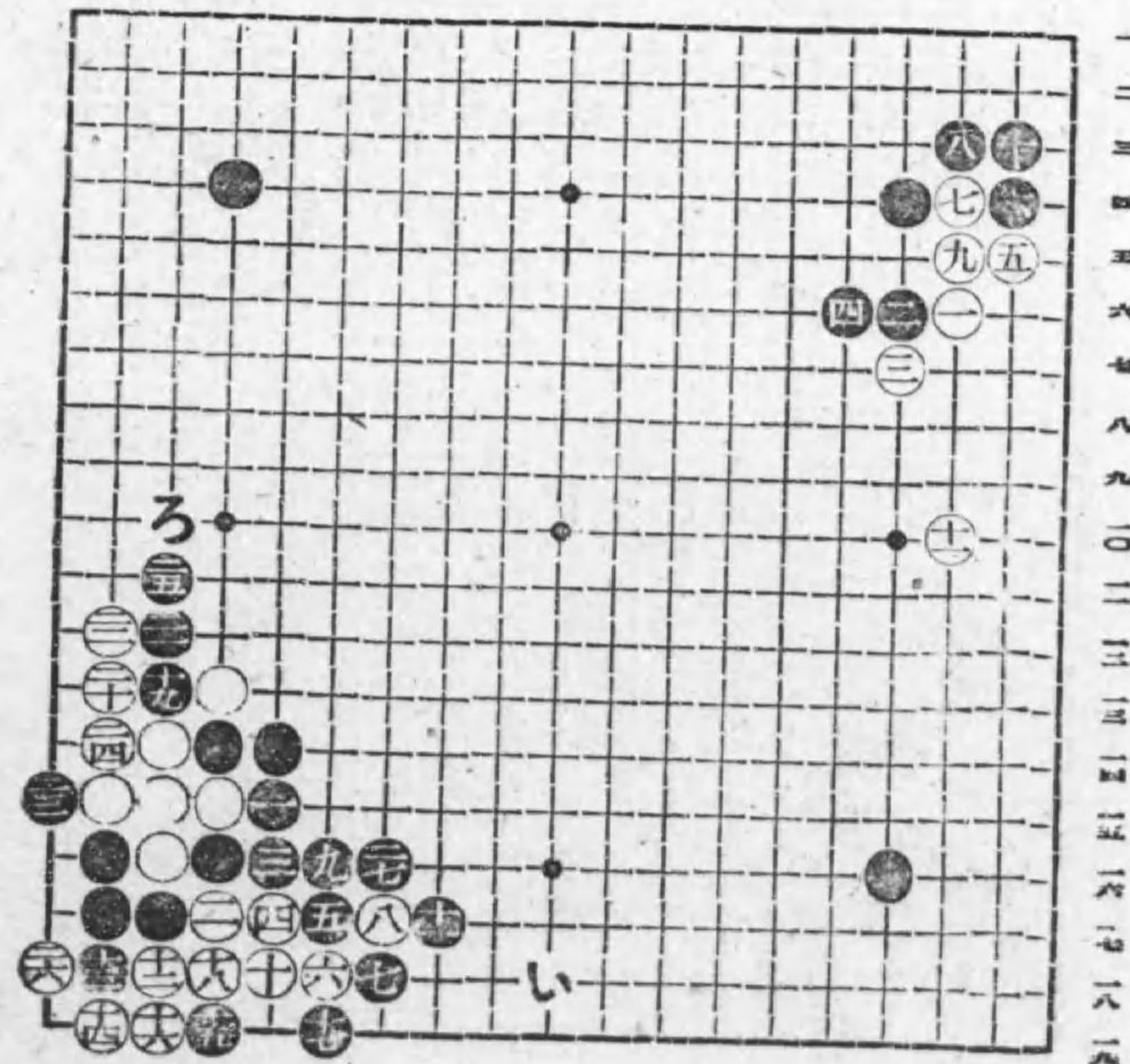
白三十七で(い)なら、黒は(ほ)。其の(ほ)は、次ぎに「ツの十八」と行く筋が定石。

四十一迄で布石は殆んど終つた。さて黒は大勢を見て、四十二より四十六迄に、九と三十九との白を兩斷して、戦争に出た、無論白の苦戦は免れない。

フソレタヨカヲヲルヌヲチトヘホニハロイ



フソレタヨカヲヲルヌヲチトヘホニハロイ



前譜黒三十八を一とした、本譜七迄の運びも、黒は左上隅、左下隅、また「レの十」と定石で固めある故、完全な大地である。

目的は戦争を避け、平和の裡に地域の優勢で、勝を収めることにある。

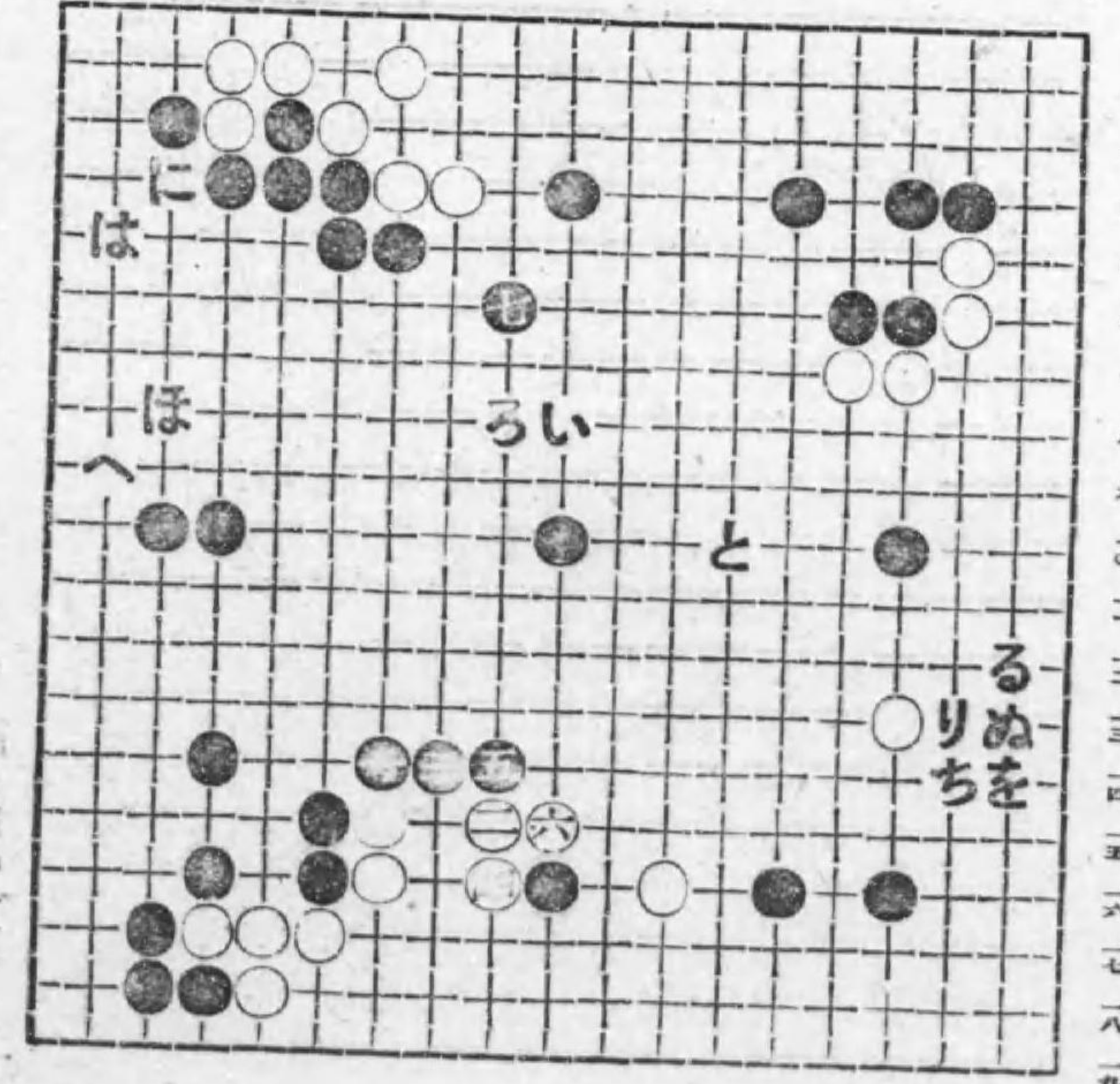
七となつて白(イ)なら、黒(ろ)、白(ろ)なら黒(い)で白は侵入が出来なす。

また深く白(は)、黒(に)、白(ほ)でも黒(へ)で白に活なし。

更に白(に)の切りは、黒「レの五」、白「ソの四」、黒(は)と黒は隅の一子を捨るのである。さう捨ることは二十目位に當るが、黒の先手は其れに換る處がある。

更に白(と)なら「ニの十」の置石の出を計らず、黒(ち)白(り)、黒(ぬ)、白(る)、黒(を)と黒は勝勢を定めるのである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



四〇

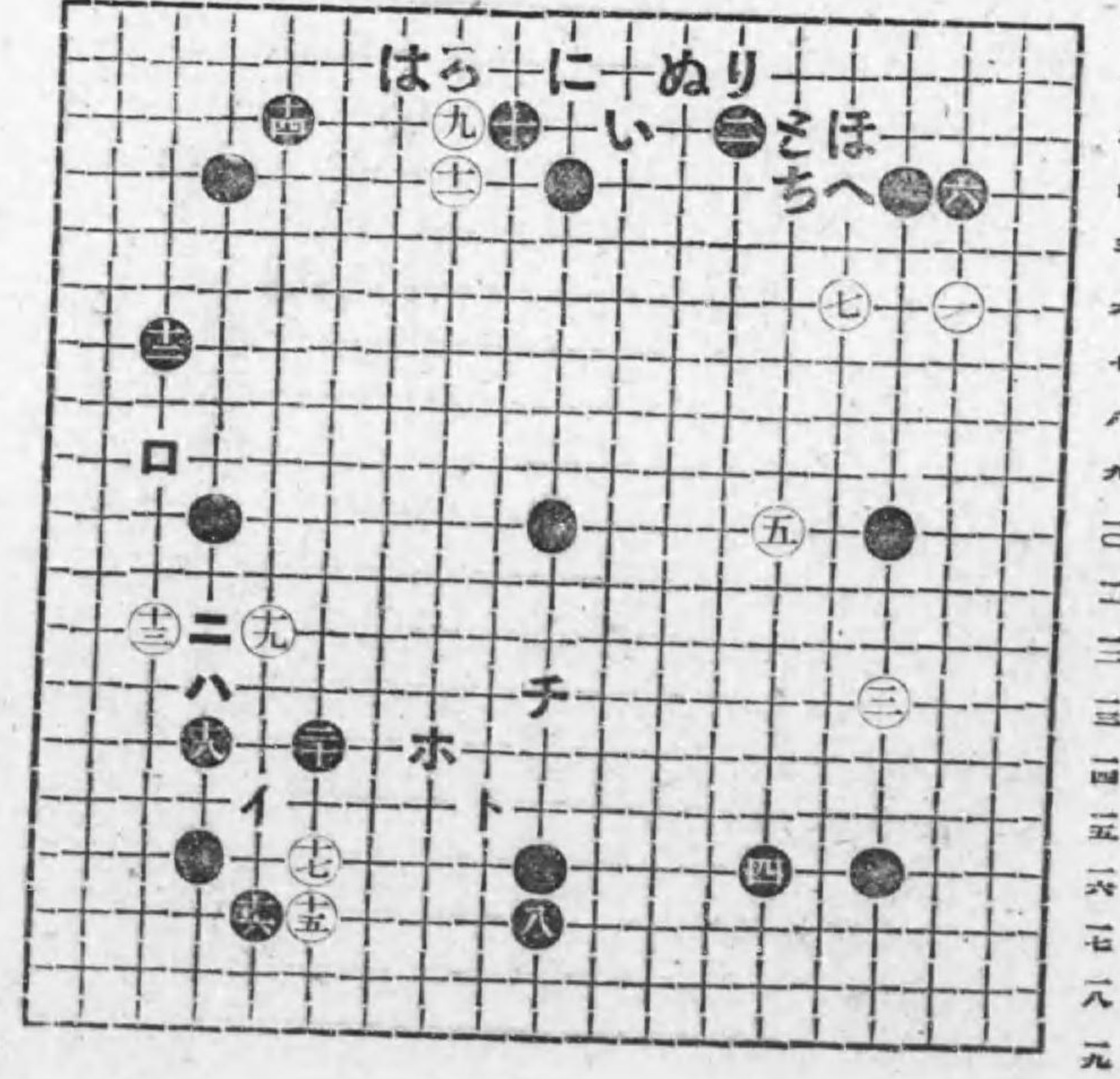
白五は「ニの十」の置石を脅かしである。黒は其れに動ぜず、六と其方の固めが定石にして、また布石の順序である。

黒八も定石である。七と白を飛ばしても「ニの十」の置石は、白にとつて、ジャマ、でこそあれ、黒は動く時機が来たれば、なほ白が其處に一着位ひ費しても、自由自在に動ける。

十、十一、と換つた黒十の意は、白(い)なら黒(ろ)、白(は)、黒(に)、で黒が善いから。黒(に)となつて、白(ほ)、黒(へ)、白(と)、黒(ち)、白(り)は黒は(ぬ)、と二段跳ねが善い。

黒二十となつて、白(イ)なら黒「タの十五」、白「ヨの十四」、黒「ヨの十三」と白を兩断が定石。是れ八と固めある定石の活用にある。白(イ)で(ロ)は、黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)、白(ト)、黒(チ)で十五、十七の白は活ない。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



四一

前譜白七を左下隅へ轉じた變化。

黒に八と直ちに來られ、二十一迄となつては、白が位ひ低くなり、黒は厚装を極める。のみか白五の一子は、ボカン。之れ前譜七が必用なる譯。

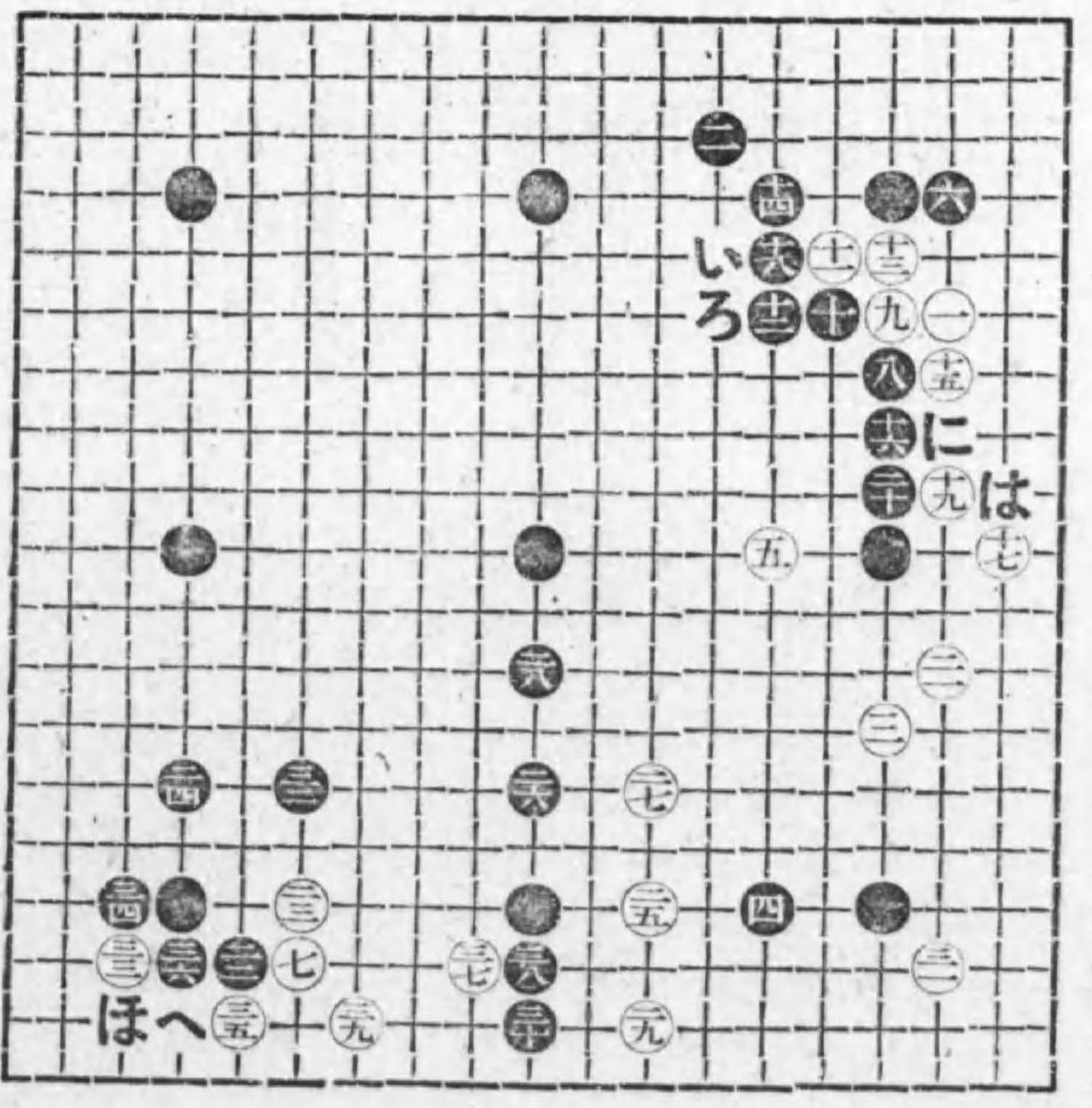
黒十八は、白十八黒(い)、白(ろ)と白に切られる備へと、白十九を怠ると、黒は(は)、白十九、黒(に)で白十五以下が取れるから。

白二十一は、黒「ハの十」、白(は)、黒「ロの十一」となつては、悪いからの備へ。二十一は斯ういふ際即ち、十七と三との連絡に用ひる定石である。

三十一と白が攻め來ても、黒は三十二と其れにトンチヤク無く、七と二十三の白二子を攻めてゐるところに、大勢看取の強さが認められる。

白三十九は、次ぎに(は)で隅に目を持つ定石。である三十九で(へ)、黒(ほ)は、此際悪い。

ツソレタヨカワラルヨリチトヘホニハロイ



前譜の續行。

此の隅に着手なら黒一は此方が善い。一を二白八、黒四白(し)、黒六、白(ろ)だと、黒は「ハの十二」、白「ニの十三」に在る白の強い方へ向つて、活を求めに困難。また白(ろ)は(ち)の線に在る、白へ接續の爲にもなる。

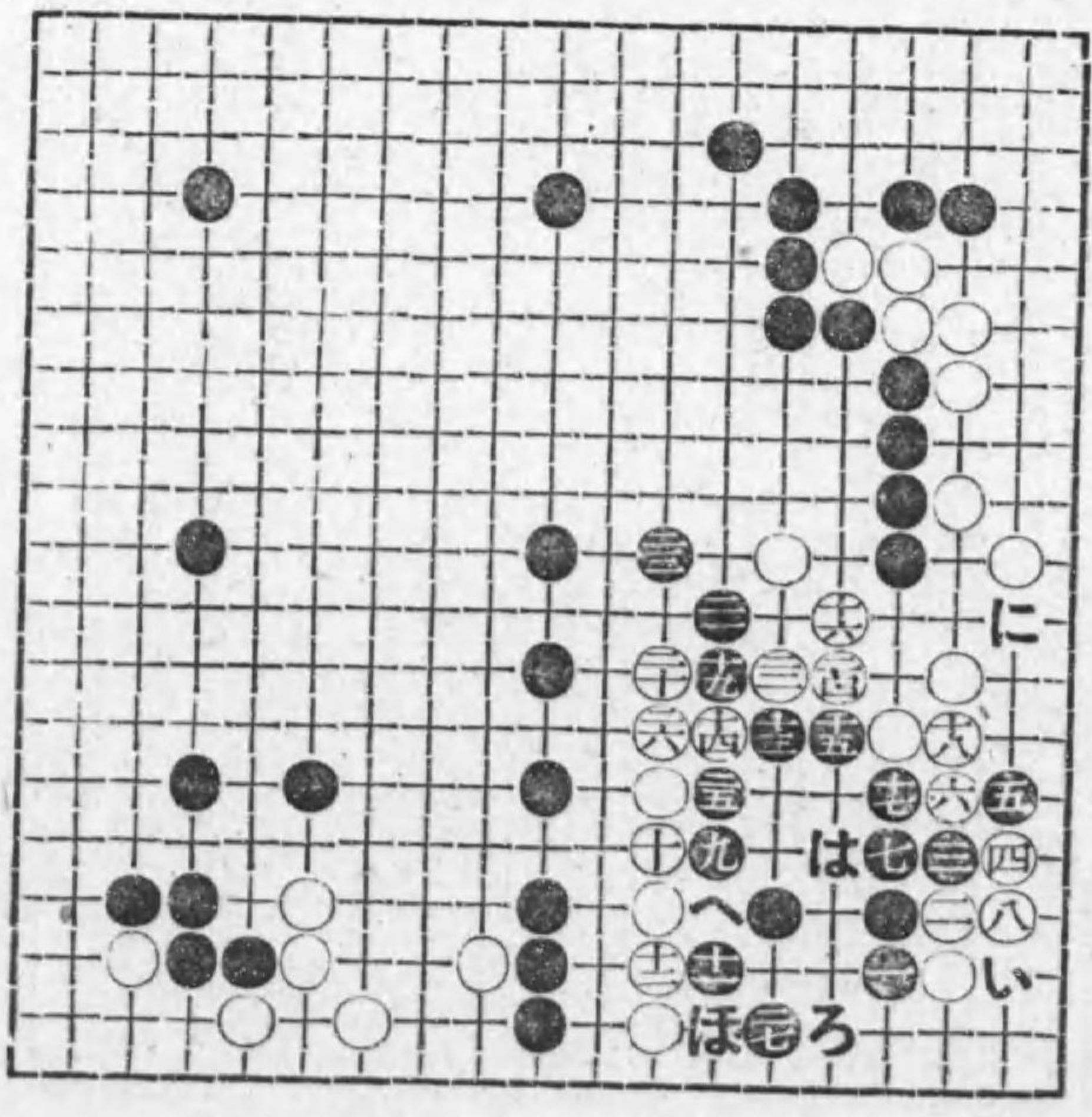
白六で七だと、黒六、白八、黒十七、白(は)、黒「ホの十四」、白への十五、黒(に)となつて、斯の變化は黒に損がない。

白は黒を全部取らうとする結果、二十七迄の現はれとなつて大失敗。

黒二十三で二十四、白「への十一」、黒「ニの十一」、白二十三、黒「ニの十二」と黒の接續などは消極的だ。

エテ斯ういふ際に弱い氣持の出るもの。ヤレ／＼逃げてよかつたと此の氣分で敗ける例は甚だ多い。

ツソレタヨカワラルヨリチトヘホニハロイ



白七で八の處へ行かないと、黒に直ちに八と來られて十五迄となる。

十五迄となつては、白は僅かに活を求めたに反し、黒は外勢雄大。

□

黒八、續いて十と押付けることは、九子より六子迄の定石である。即ち「ニの十」の置石が在つて。

四五子以上の置碁にあつては、大の禁物。

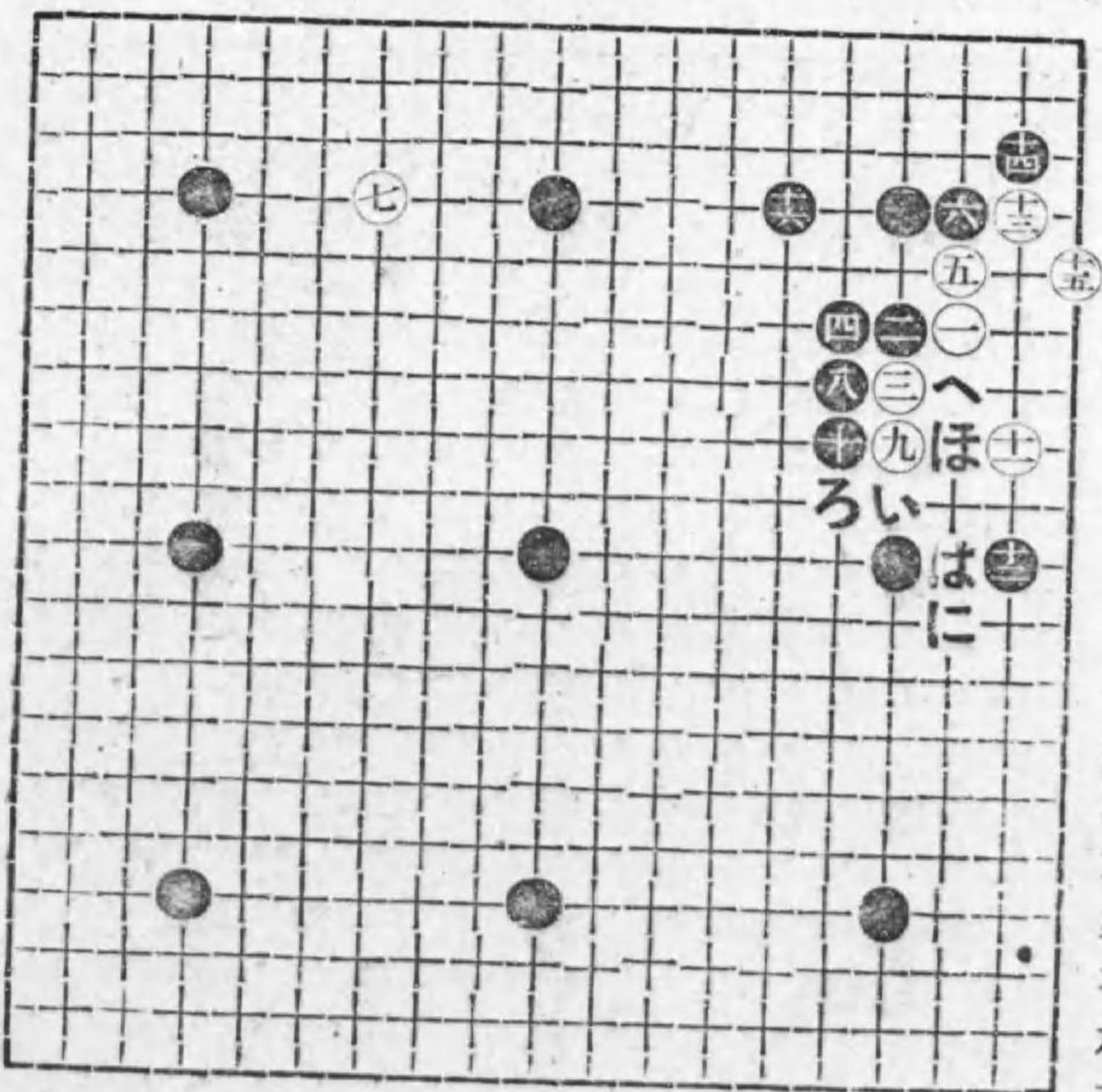
□

白十一で(S)、黒(ろ)、白(は)なら黒(に)で、また白(S)を(は)なら、黒は(に)と應じることが、共に定石。之れは白の俗手であつて味はいなし。

□

黒十六で(い)に突當つてゐることも善い。それは黒次ぎに(ほ)。黒(ほ)に、白(へ)は、黒「ロの六」で、白は大困難。黒十六を(S)に、白「ニの五」、黒「ホの五」、白「ホの四」の切りは、黒「ホの三」、白十六、黒「への三」で黒が良し。

ウソレタヨカヲアルヌリチトへホニハロイ



白十一の意は、黒十二で二十、白十三、の時黒二十一なら、白は十二。

左様黒の行くことは、白の意中に入つて悪い。

□

十二で十四も悪くない。また黒二十、二十二と判り易く示したが、二十で「ハの十」も悪くはない。

□

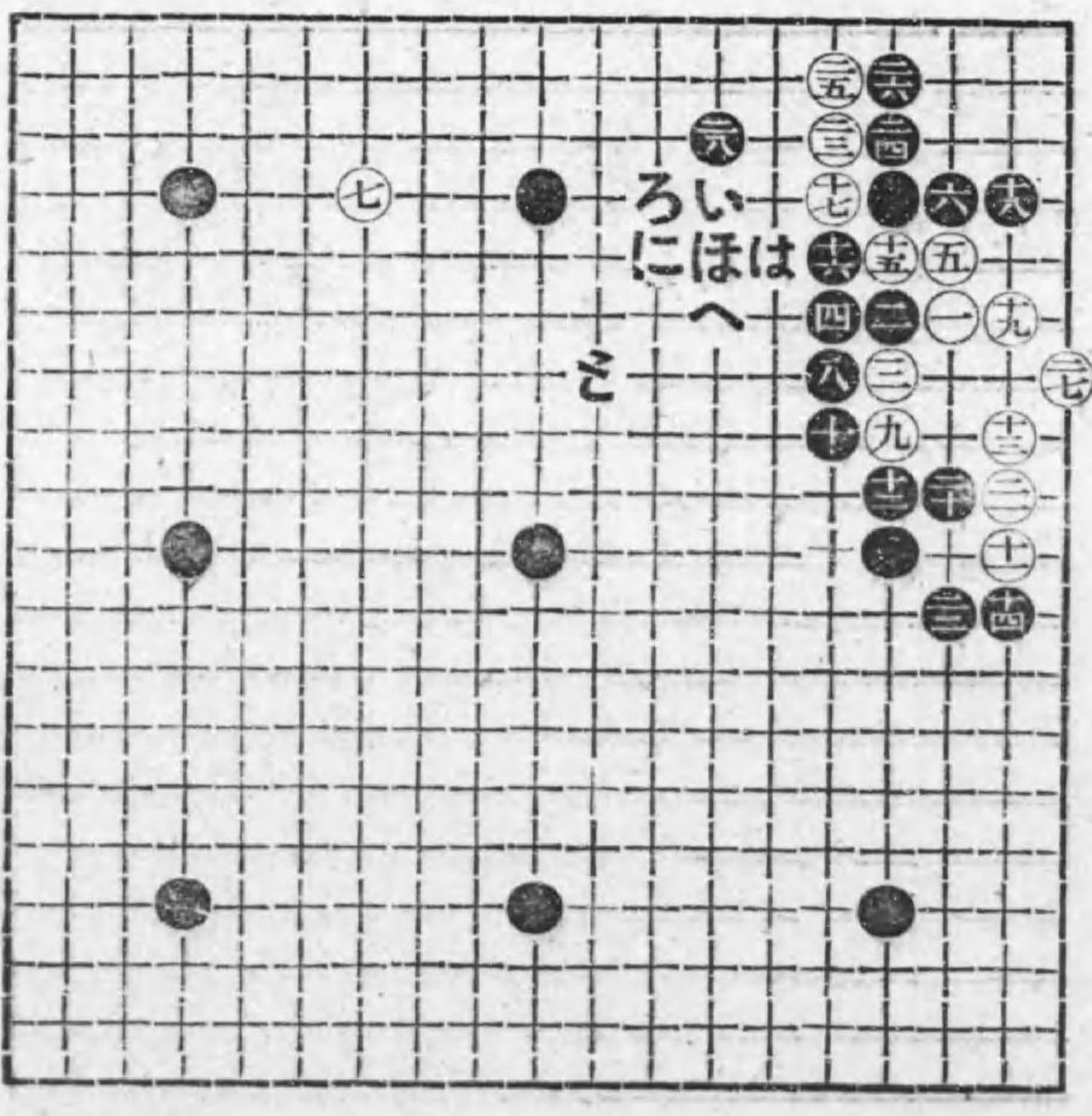
白十九で二十三だと、黒は十九。白十五、十七と出切つても、結果は二十七迄となつて、白は甚だ面白くない。黒十八は好手である。

□

黒二十四を二十六は、白二十四、黒「ハの三」、白二十五、黒「ハの二」となつて、城内が狭くなす。二十四と弛めないところが定石。

黒二十八は、二十五以下白三子を攻める、斯ういふ際の定石。白(S)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)。また其の白(は)を(ほ)、黒(に)、白(へ)、黒(と)となることも、白は前途心細し。

ウソレタヨカヲアルヌリチトへホニハロイ



人間が變つた生活を好む如く、碁も變つて打つが好い
それが又た向上の道である。

黒四は變つた打方、四は次ぎに(い)と行くことを目差
七八子の置碁に於ては、力量を養ふ爲に四と打つこと
は定石に入れても宜い。

黒六は白五に對する定石。六を(ろ)だと、白は(は)。

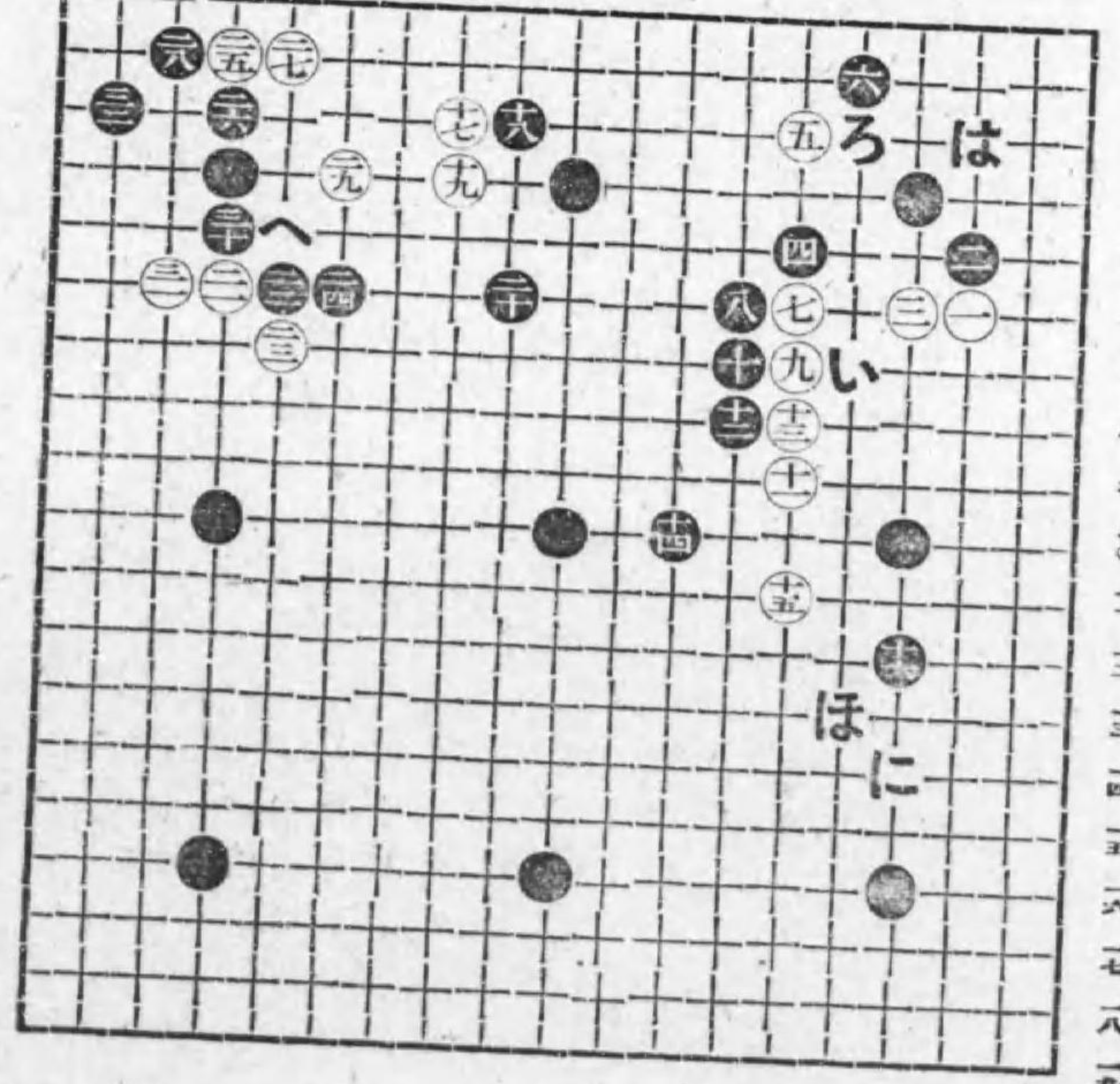
白十七で(に)なら、黒は(ほ)。之れは黒十四が在つて
白は無理だ。

黒十八で「カのカの三」など、普通定石を用ひてゐると、
白に「ヌの二」とでも走られて、四より十四迄の特異な
打方と伴はない。

黒二十二は、二十一と十九、十七の左右の白へ強く響
ひて、強抗に用ひる定石である。

三十二で(へ)などに粘ぐことは、黒は劣弱な手。

フソレダヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒四を五と行くことは、上邊に大地を圍ふ方法である
それも二を十九と普通に應じるよりも、強行である。四
は力量養生の強行手段。

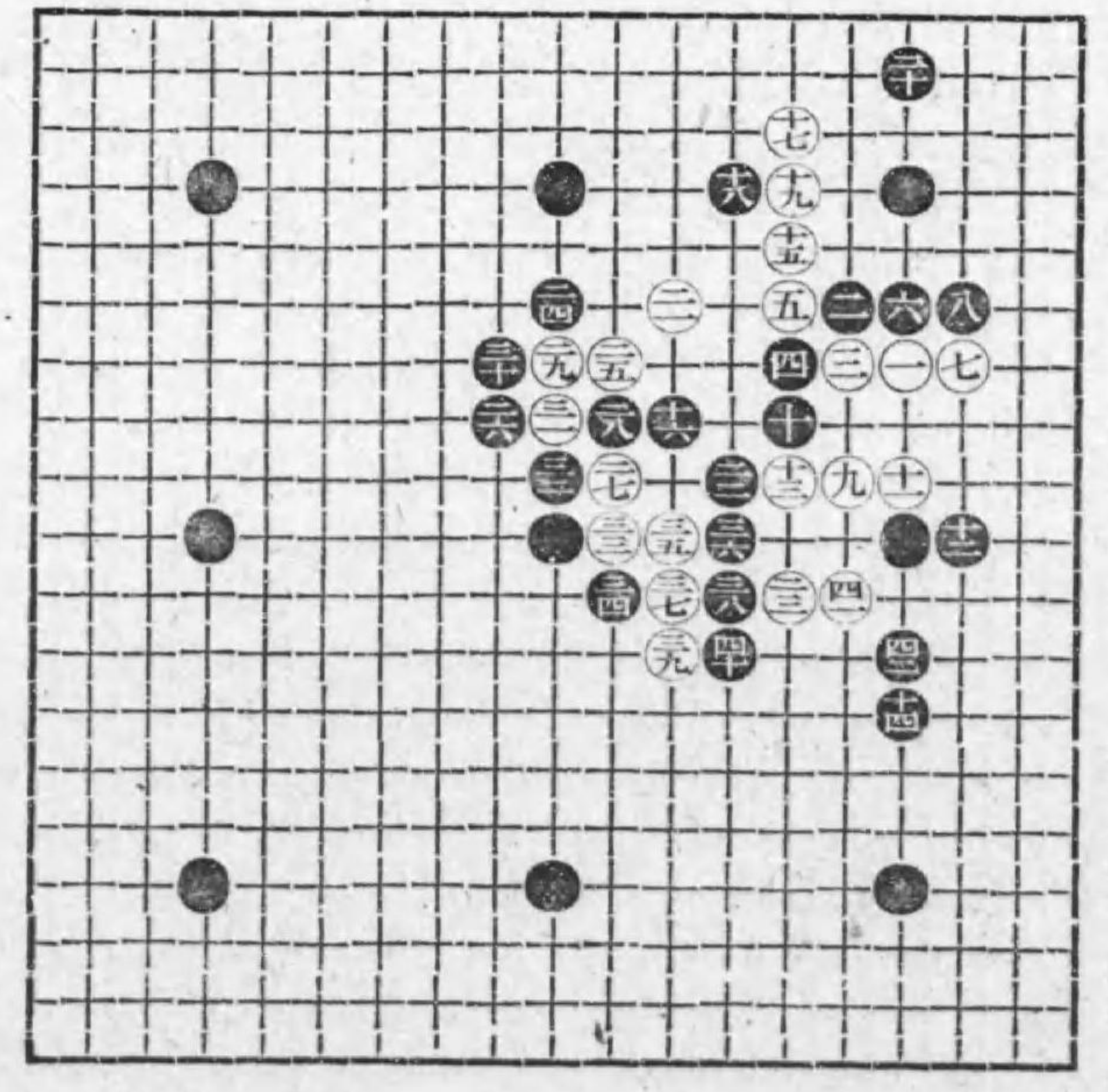
白十三を「トの六」なら、黒三十六、白「ホの十」、
黒四十二、白「ホの十二」、黒十四と黒は應じるのであ
る。白十三に對して、黒四と十の二子が取られないと見
て、十四と備へたところに力量が認められる。

黒十八は二十と備へる前提であつて、調子を取る定石
である。

白二十三を二十四なら、黒は二十三。

白二十七に對して、黒二十八より三十二迄で白の出を
止めたのは、白三十三を三十五なら三十六、三十三なら
三十四に依つて、四十迄の出を二十八の時考へてゐたか
らである。黒三十四は定石である。

ツソレダヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



七子の置碁に於ても、左上隅右上隅の定石は現はれる「ヌの四」、三十四の處の置石は無くならず、白は樂で趣きは變るが、黒は心細がらずに普通に應じゐて善い。
 黒十二で二十五に飛び、其時白(い)なら、黒(ろ)と針路を取り白九を攻めることも、布石に早く有利な立場に就く。

黒二十四は七子の碁でも、此の定石を用ひて善い。「タの十」の置石が密着して、氣の利かない様だが、實は甚だ有意義となつてゐる。

黒二十六は落付が有つて、堂々の布石である。これは十と受けた定石に伴ふ。黒が「ニの十」の置石を動かさないで、白は氣抜けの態。

白三十一は黒に四十と受けさせやうとしたが、三十二と黒に來られて困つた。黒四十二と受けてゐるのは、三十二の一子は取られませんが、の力量にある。

白二十五で(い)の方は、次に白(ろ)、黒(は)、と得が伴ふが、八の備へが有つて其れ以上は黒を攻められなす。二十五の方は九との連絡の意味もあつて、(ス)とは比較にならない、新鮮の大場である。

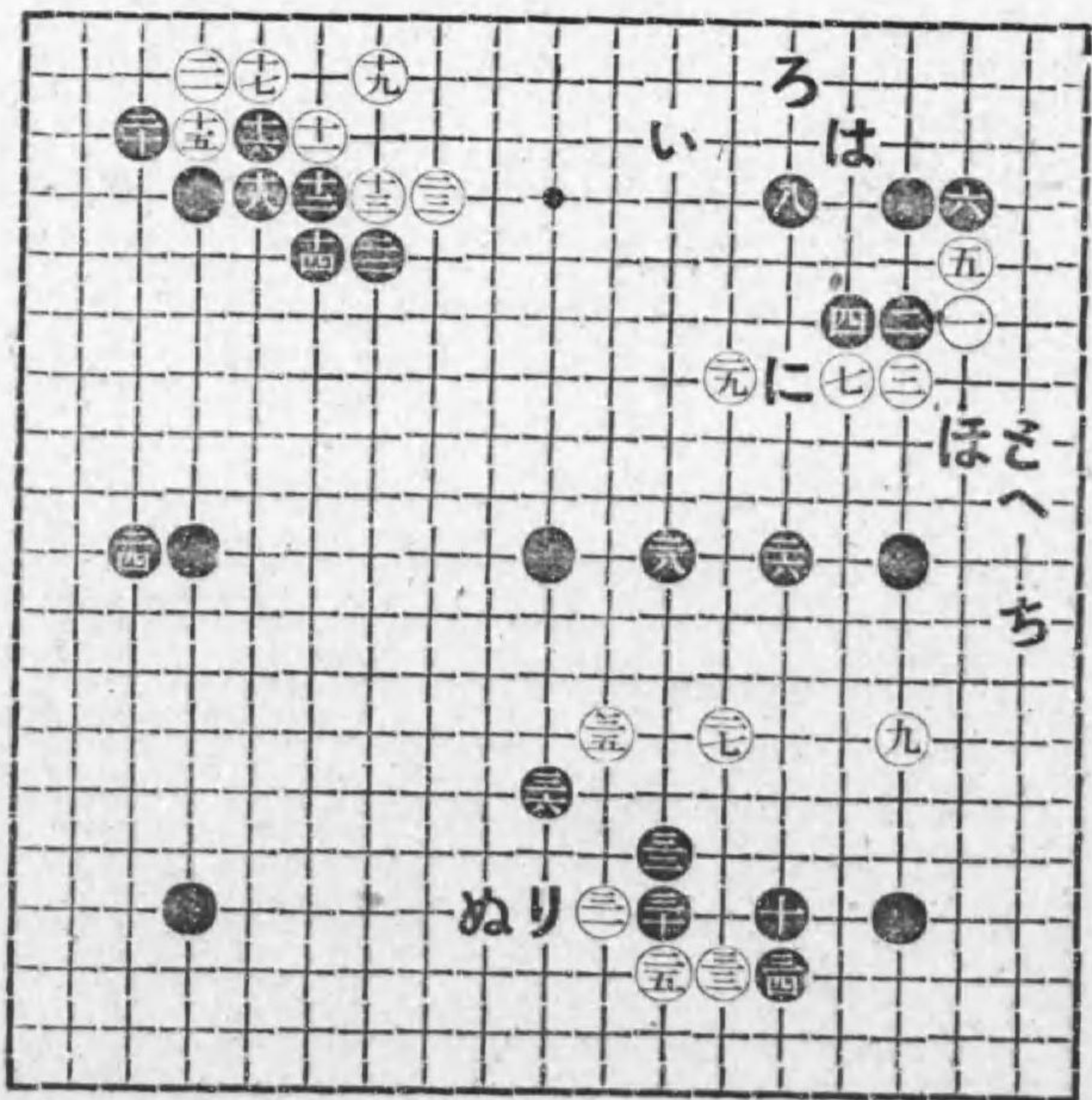
白二十九で「トの十五」だと、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)白(と)、となつて、なほ(ち)が白七の方へ利いて、黒は「ハの十四」などの渡り出來、右下隅の黒の授けとなる。

黒(ち)に白「ハの十四」だと、黒「ニの九」、白「ロの四」黒「ロの三」で白は活るに大困難。

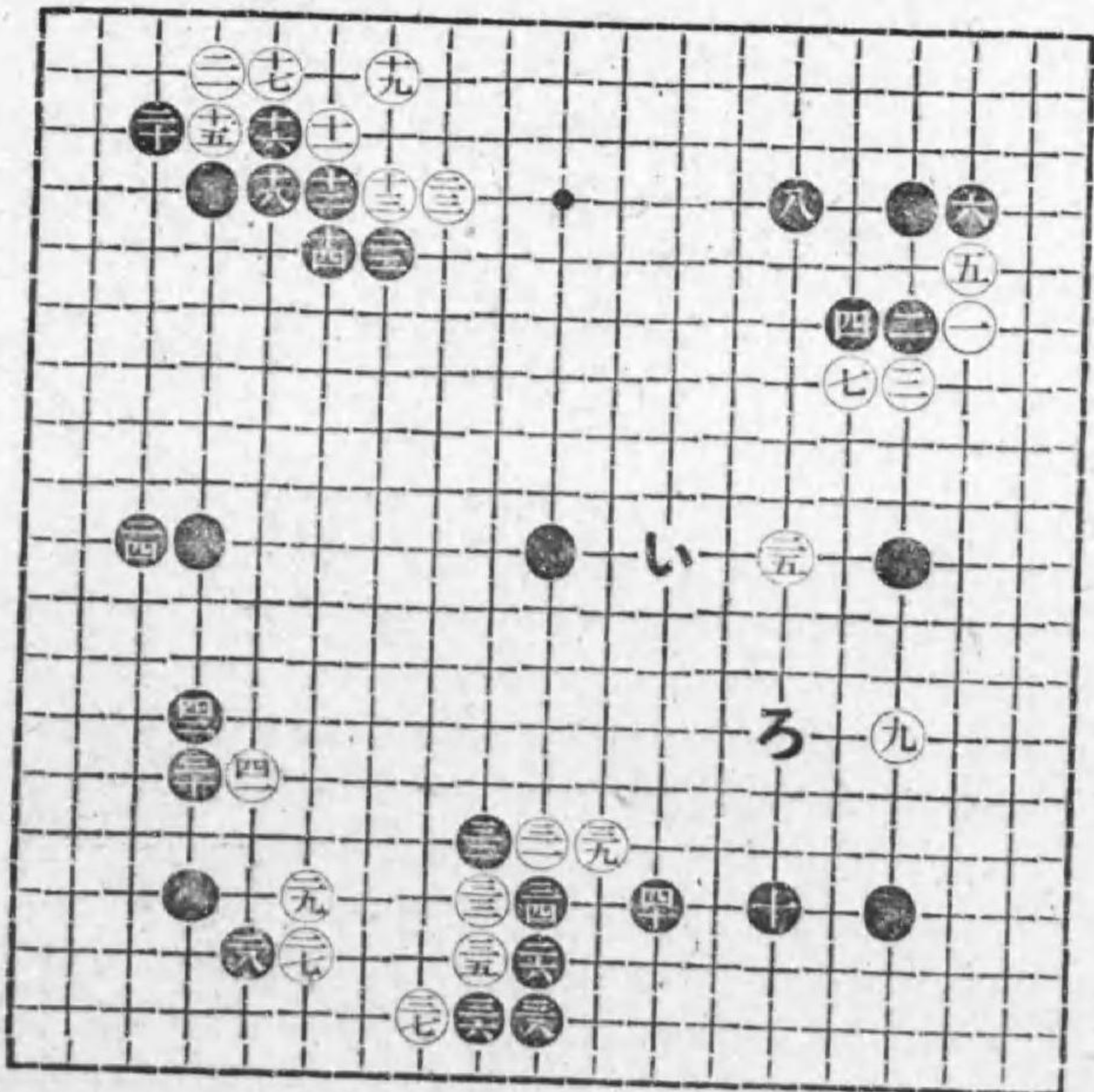
黒三十六は定石である。「三十六」で「リの十六」、白(り)となることは俗手であつて、多くは黒の不利に終る。

白三十五は黒に「リの十六」、白(り)、黒「ヌの十六」白(ぬ)と押して下さいといふ、これを俗に誘い手とも稱する。黒二十八は天元の一子が、先進となつて好手。

ツソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



黒八を(い)だと、一と三の白が左つて、白から十六に
来られて悪い。

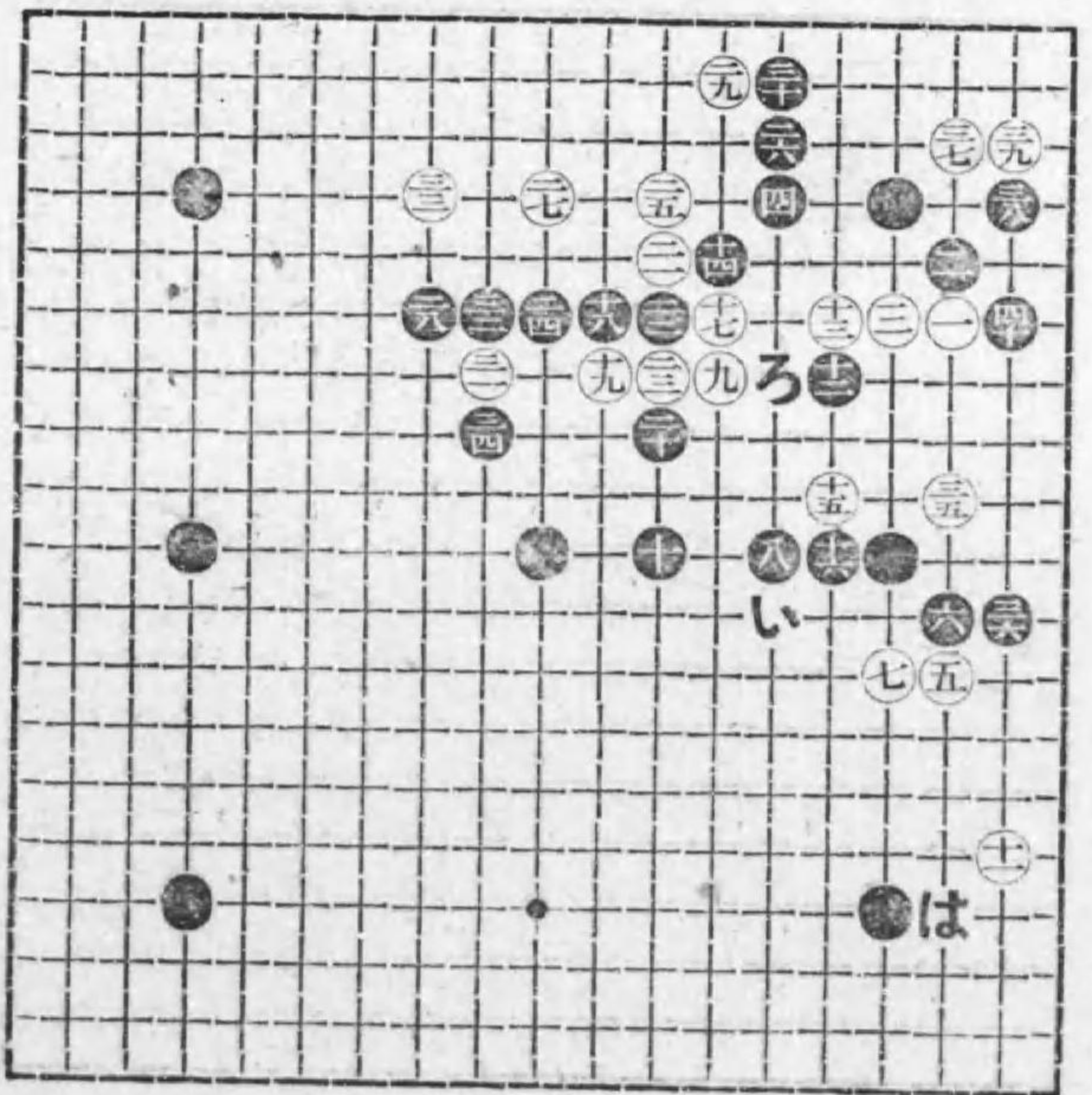
黒十二、十四は白を攻める定石である。白十五で(ろ)
なら、黒は十二の一子に構はず十八の處が善い。黒十二
は十四と打つ爲の捨石。

黒二十は白十七の一子がある故、二十三と粘がして白
を異形にしたもの。尙ほ二十の意は、白二十五でも、二
十七でも、又は其他の白手で「ヌの七」と其の線を押せ
ば、黒は三十二、二十八と其の線を、白の欲するまゝ應
じて、上邊を大いに地とすることにある。

白三十一は三十三と飛ぶ前提で定石である。

黒三十四は三十一以下の白大石を何んとか活かして、
(は)と轉じる爲。白二十七で「ロの五」、黒三十八、黒四
十だと、黒は(は)。

イロハニホヘトチリヌルヲセカヨレツ



前譜黒四十迄を黒丸白丸にして、白一より續行。
黒二を二十六だと、白三、黒四、白七となつて、黒が悪
す。

白三で六なら、黒は十三の處で善い。

黒六迄となれば、白は七より十一迄の、劫争より他に
手段は無す。

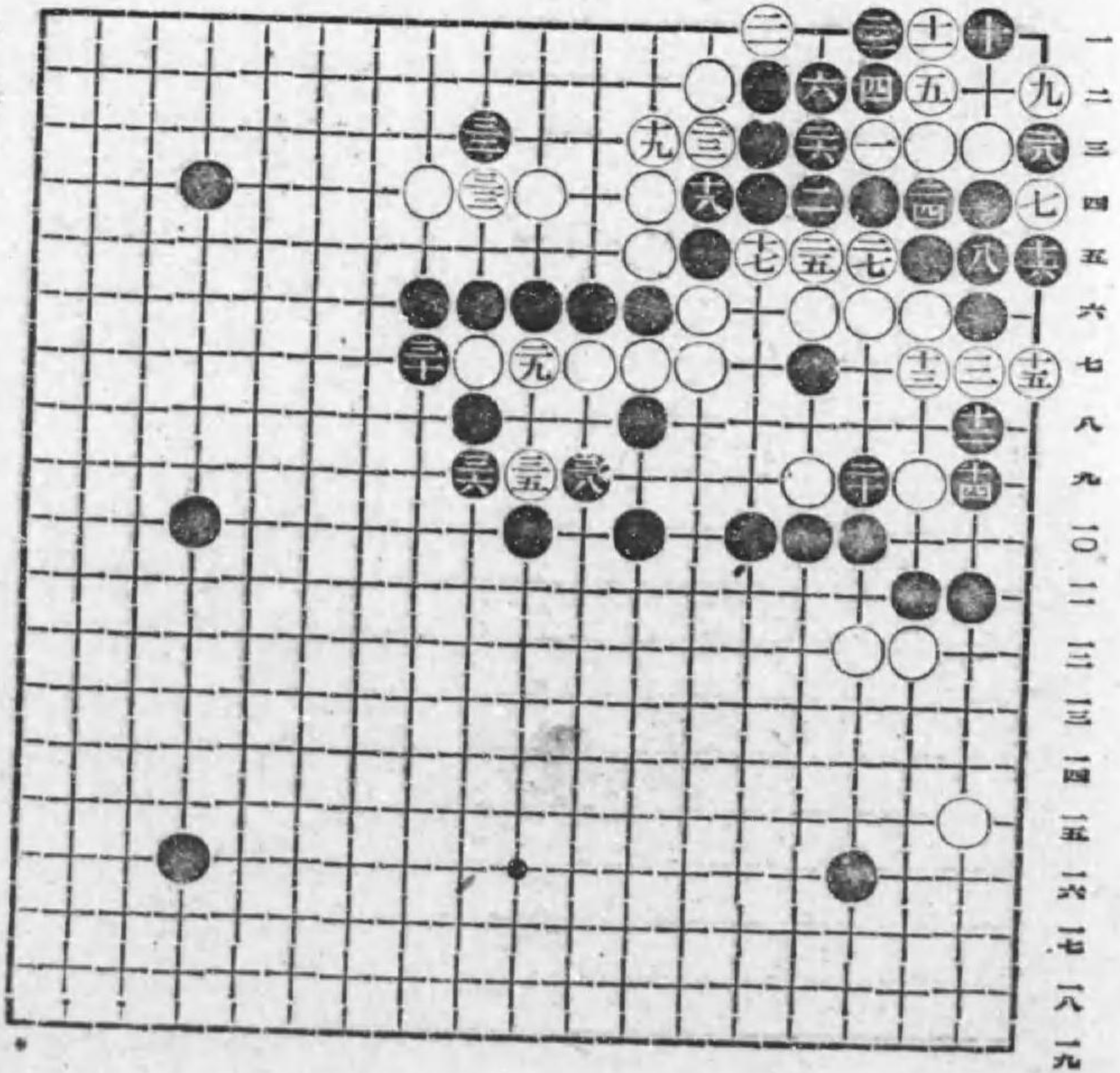
黒十六は、白十六、黒「イの六」となると、黒は攻合に
一手の損。黒十六は其意味の定石である。

黒二十は攻合が寄劫と見て、白の眼形を取る。黒二十
八の劫取となつて、尙ほ黒は一手の樂がある。

黒三十二の劫立は、白三十三で「イの六」、黒二十八、
そして白三十五は、黒「ロの二」、白三十六、黒三十三で
黒が大勢上善いと見てのこと。

黒三十八は白に劫立なきを、見越しての良手にして、
また其處に力量が認められる。

イロハニホヘトチリヌルヲセカヨレツ



白三十一劫取 黒三十四劫取 白三十七劫取

黒四で(い)の打込は不穩と見れば、不穩にも見られるが、黒四で(い)、白十一、黒(ろ)、白「ホの五」、黒(は)と調子を取るのもよいと、それを好む碁風なら、何も悪いことはない。

白七で八、黒「ニの三」だと、白は「チの四」に一手後手備へを要す。白其の「チの四」迄も「但し白一の有る時」一型の定石ではあるが、四五子位ひの置き碁なら宜いが、七子の碁としては布石に後れるから、白が面白くない。で、白は七、九迄を採つて黒に十と後手を引かず白九迄、黒十迄共に定石である。

白十一で(に)なら、黒(ほ)が善い。黒(ほ)に白(へ)なら、黒(と)。白(へ)で(と)なら、黒(へ)が白(に)に對する、黒は魔手の要領である。

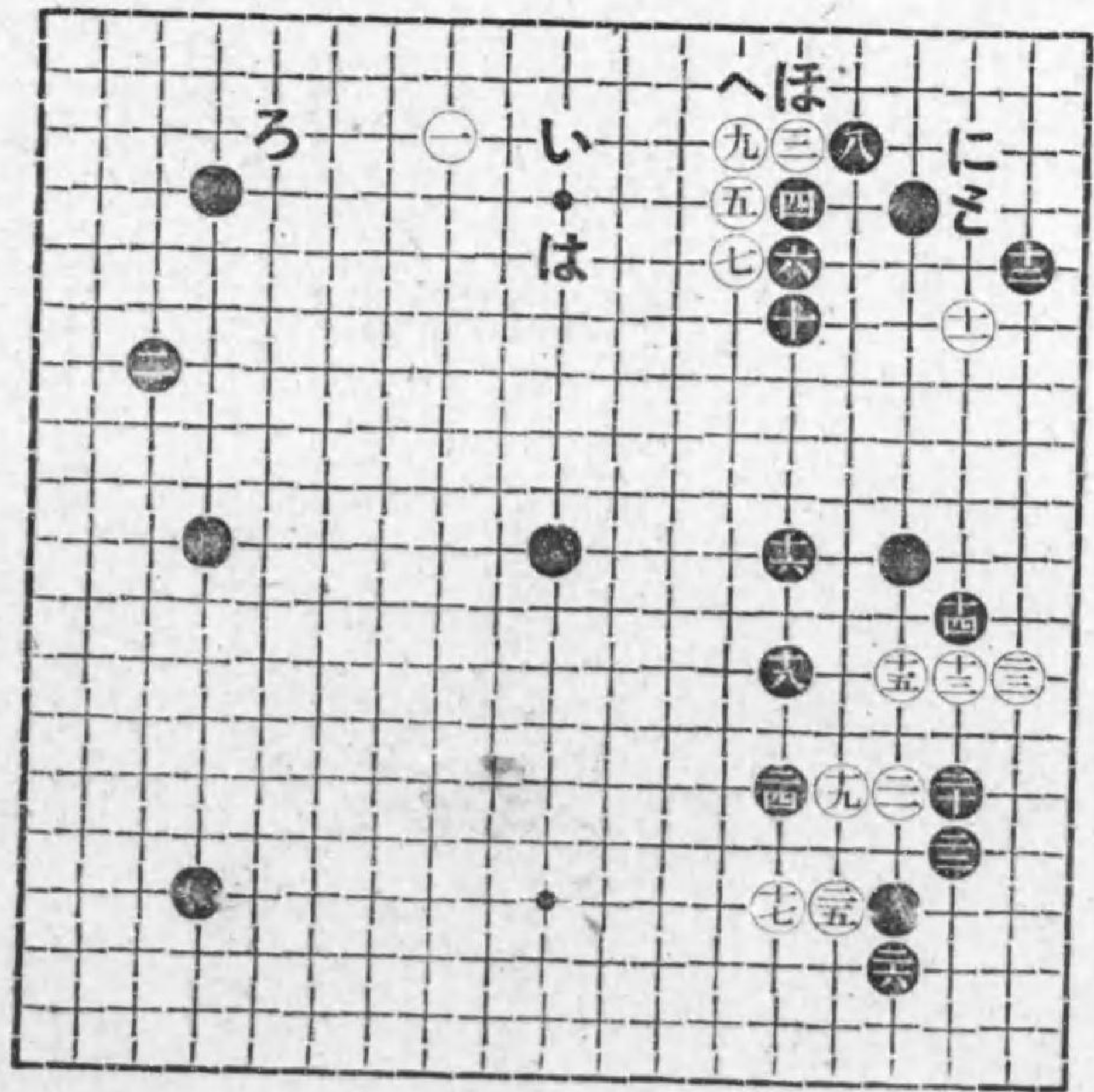
黒十二は白(に)と來られる備へ。十二は定石。黒二十四、二十六の調子も味はつて欲しい。

黒十二で(い)、白(ろ)、黒(は)、白十三、黒十四と黒が應じること定石である。其の黒(は)を「ホの四」、白十三となることは黒が悪い。白十一に對して、黒十二、十四と應じること定石。
白十三で「ホの六」は、黒十三で白が悪す。

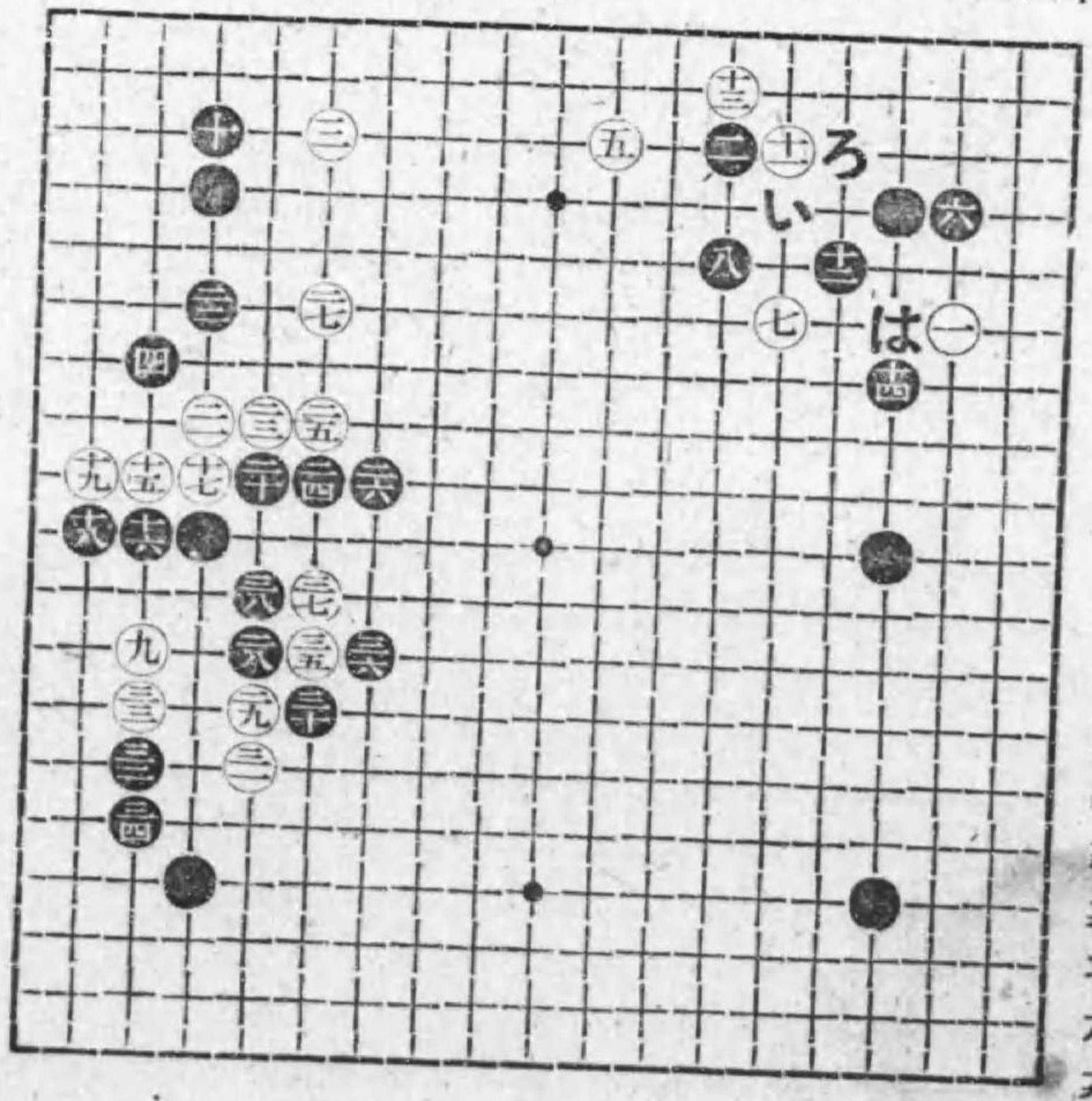
黒十八と下る好手を特に覚える必要がある。白十九で二十なら、黒十九の渡りで善いから、斯う二十七迄となる外ない。白二十一、黒十八、二十の好手の爲に致方ない、其外にない出。

白九のある時白が十五と入つて手段することは、六子七子の碁に於て常用。併し十八、二十の良答を黒に知られては、白十五で黒四と「タの十」の黒を分断しても、白は斯う二十七迄の、反對に逃路を通ることゝなつて、甚だ愚。従て白は三で黒に四と受けさせる布石は、黒「タの十」が在つて、黒に利を與える。

ツソレタヨカロナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカロナルヌリチトヘホニハロイ



白七で九だと、黒は直下七で善い結果を得られる。
六子の碁に於ても、二十四迄の布石は、八、十、二十四の定石の備へあつて、纏かだが確固不拔と言つて宜い。特に二十四は「タの十」、「タの十六」の置石に活氣を與へて、上手の泣手とも稱ふ。

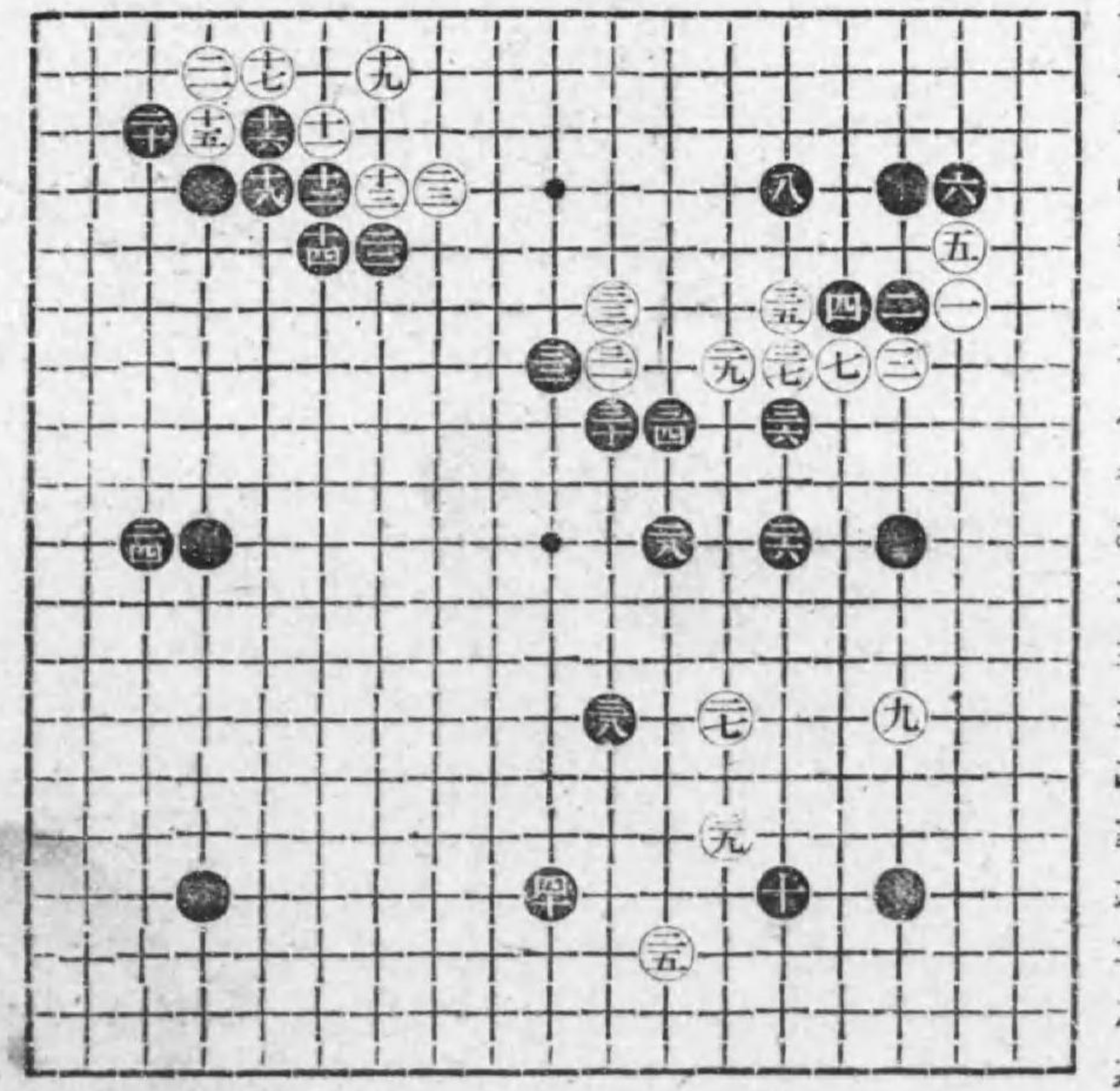
黒二十八で三十九も悪くはない。が二十八も白七の方へ甚だ響く。即ち白二十九で三十九なら、黒は三十七が白は痛し。

白三十一は黒に「チの六」と、來られる筋に備へたもの。三十七迄は白は止むを得まい。

黒三十八で三十九だと、白三十八、黒「リ」の十六となるが、之れも黒は悪くない打方。

黒三十八、四十は中央より左邊を大圍が目的。三十九となつても、黒は十の方に心配は無用。

アソレタヨカヲヲルヌヲチトヘホニハロイ

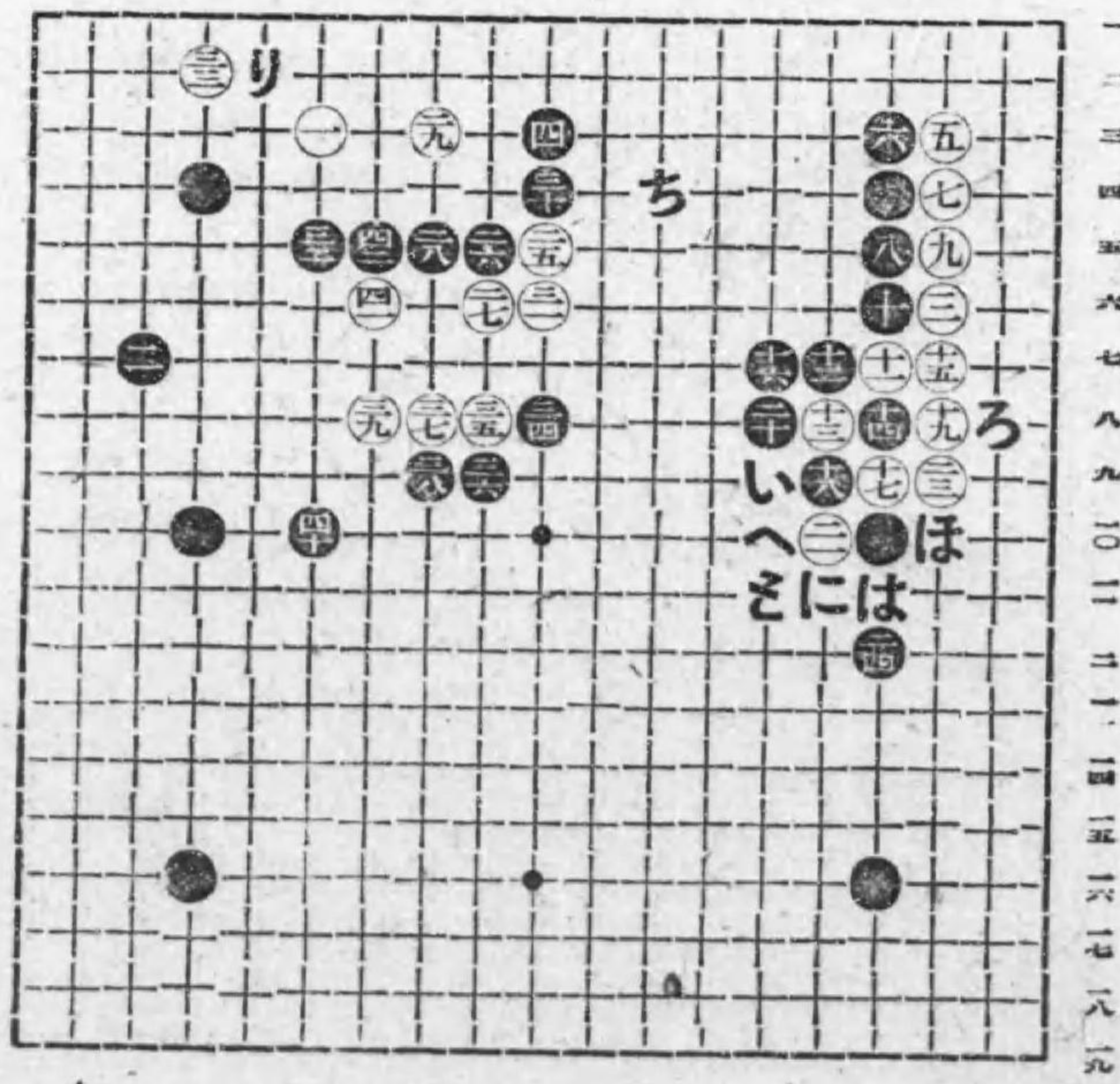


黒十は必要の急所で定石である。白十三で十四なら、黒は尙ほ十三と押付けてゐるが善い。其時白十八黒十七(白い)なら、黒は直ぐ様(ろ)と行くことが定石。

黒十四、十六の要領は定石である。「ニの十」の置石が無い有りに拘はらず。本譜の如く有れば二十四迄となつて、ことに善い。白二十五で(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)は、十七より二十三迄の愚を、白はクリ返すのみ特に注意するが、白(は)で(い)、黒十三に粘ぎ、そして白(は)より(ほ)を運び、黒(へ)の時、白(と)の切りには黒は何處の劫立にも應ぜず、ボンボンと二十三迄白の二子を打抜くのである。

黒二十六を(ち)と受けは消極的にて不可。
白三十三で三十六の邊なら、黒は(り)。黒四十は四十一以下の白を、取る目的ではない、要は白を目二ツに活かし、其周圍を固めて、大勢把握にある。

アソレタヨカヲヲルヌヲチトヘホニハロイ



黒十四で十五へ粘りが、白十三に對する定石であるが「ニの十」に在る新様の際は、十四で善し。白十五以下の推移を見られよ。

白二十三で二十六なら、黒二十三。白二十五で二十六なら、黒二十五。共に白が苦痛である。

白三十三で(い)なら、黒(ち)、白(は)、黒(に)で黒が善し。黒(ろ)、(に)の應答は定石である。白三十三で(ほ)なら、黒は(へ)で可。

白三十五で三十八なら、黒は三十五で可。黒三十六、三十八が新様な際に於ける、俗に手筋とも言ふが定石である。

尙ほ四十二、四十四の要領を見られよ。白(と)なら、黒は(ち)。白十三で十四の黒に十五と受けさせやうとしても、黒が定石通り受けけない例。

黒六迄は右上隅を白に與へて、一局の大勢を收めやうとする、布石の法。

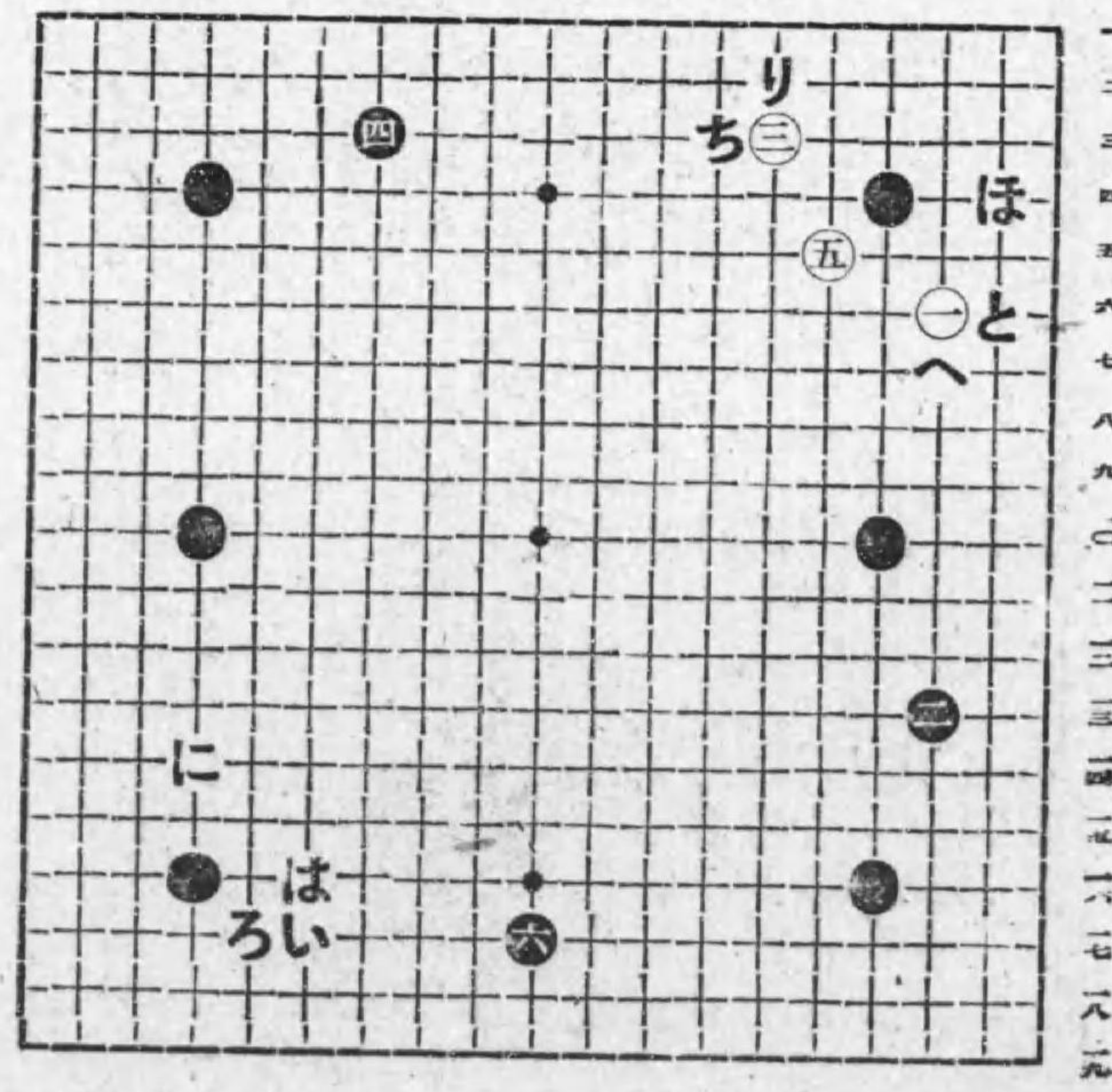
これは四九子の置碁にあつては、「ニの十」、「タの十」の置石が無いから、白に九と掛けさすことは、絶對不可ではないが、局面が廣くなつて、置いた方が六ツカシイ場面を招く。

黒六となつて、白(い)なら、黒(ろ)、白(は)、黒(に)といつた工合いで、白が據點を求めに困る。

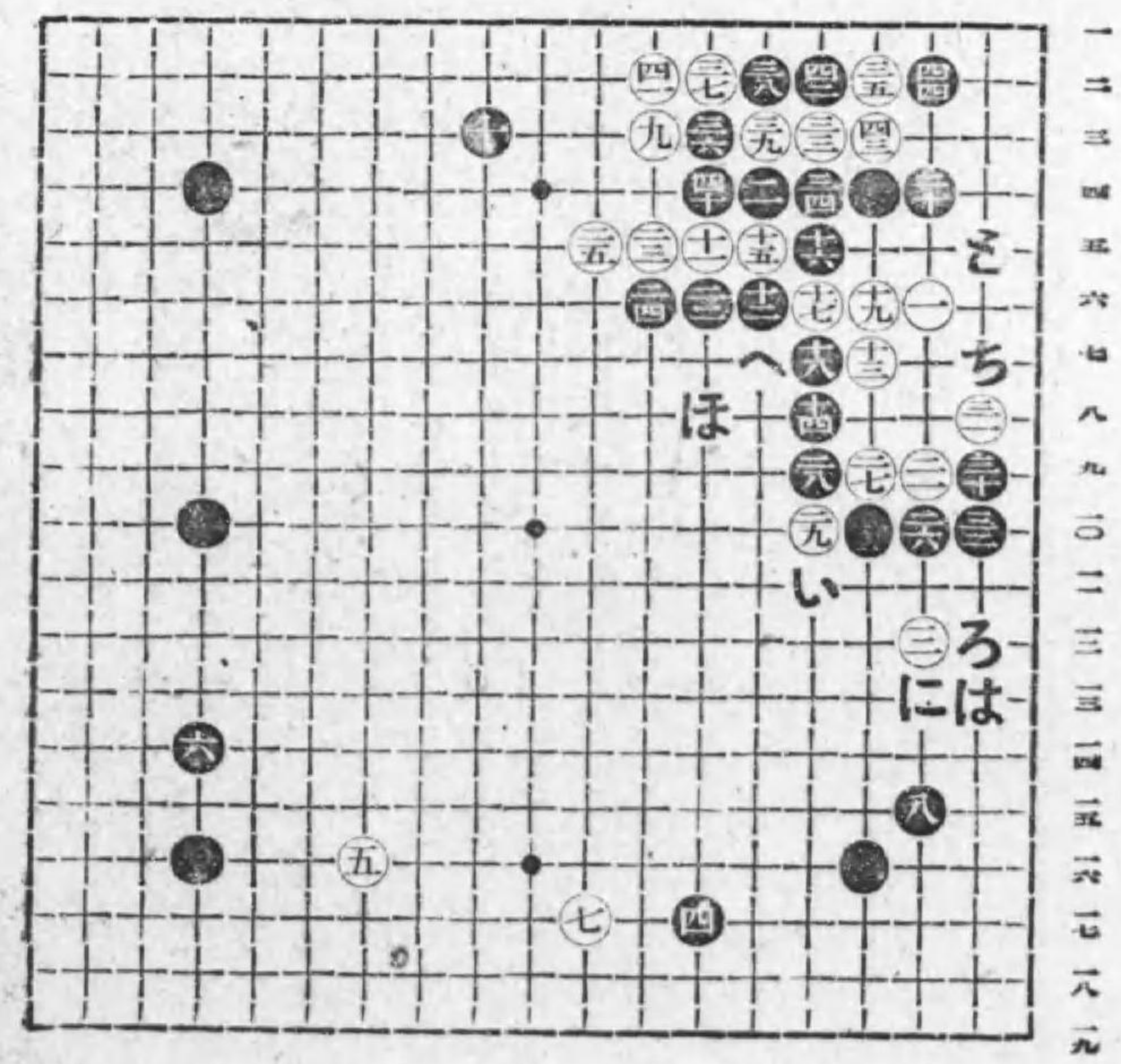
黒六となつて、(ほ)と確實に其の一隅を地にすれば、黒は(に)でも(は)でも善いが、二と有る關係上(に)の方が好い。これは「タの十」の置石に對しての、人情味である。

黒(へ)、白(と)、黒(ち)、白(り)と黒に利されることは白は止むを得ない應手。これは白(ほ)となつてのこと。黒は捨石利用だ。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨネタレ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨネタレ



前譜黒は右上隅を白に與えて、の布石法が出たから、
重復だが本譜を参考にす。

前譜黒六となつて、白は右上隅を二の所、または「ニ
の二」と其隅を取切つてゐることは、大勢に後れを取る
からと、各所に據占を求めてゐる。黒は機會到來と、右
上隅を活きに就く。には、右上隅一より十九迄を定石とし
てゐるが、左様活きけることは、假りに六七子の碁では、
白十六、十二が外面それに接近の、黒に響いて悪い。

左下隅黒一より十三迄となることは、無論白の大惡故
白二で十一なら、黒は二。と活きることが善いので、前
譜黒は白に五と掛けさせても、悪くないといふ譯。

右上隅白十六で(い)、黒十六、白(ろ)、黒十七、白
(し)、黒「ニの二」となることは、斯う十六、十七とな
るより、善いことと言ふ迄もなし。

白七で九なら、黒(し)、白(ろ)、黒(は)、白(に)、そ
して黒は三十七が善い。されば白は七と備へた譯。黒
(し)より白(に)迄は定石である。が白は苦痛であつて、
多くは黒に利を與える。

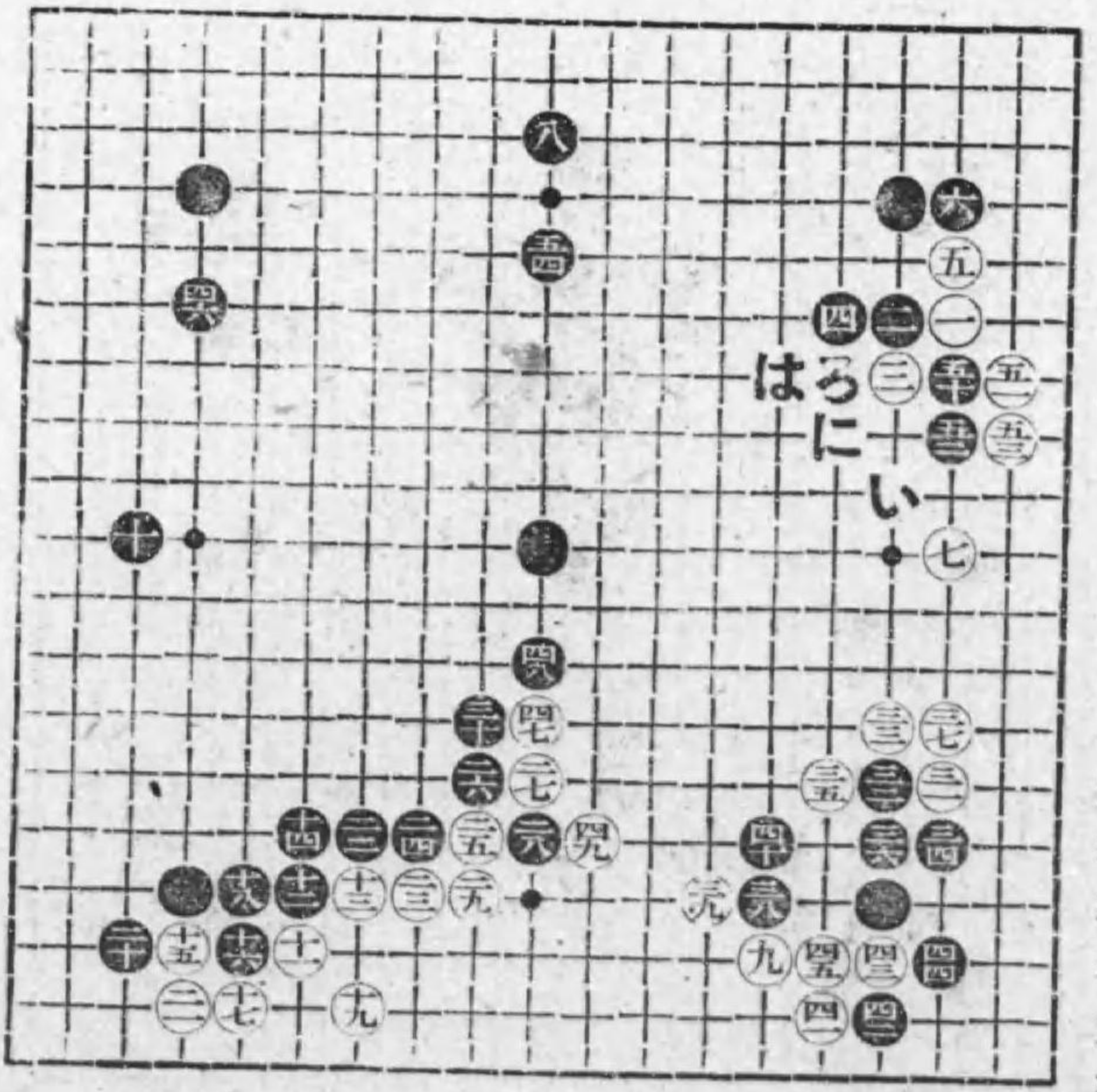
黒八は、白九なら十と、白九と來たることを豫期して
の布石法である。特に白七が有ることに注意せられよ。
即ち白七が在るのに、黒八で三十七は、白に直ちに四十
四と入られて、面白くないことを覺えられよ。

白二十三迄の定石は、白九が有つて勢力の重複で悪い
と悟られよ。それが上達下達の岐路である。此點白の爲
に特に説く。即ち定石の惡用と。

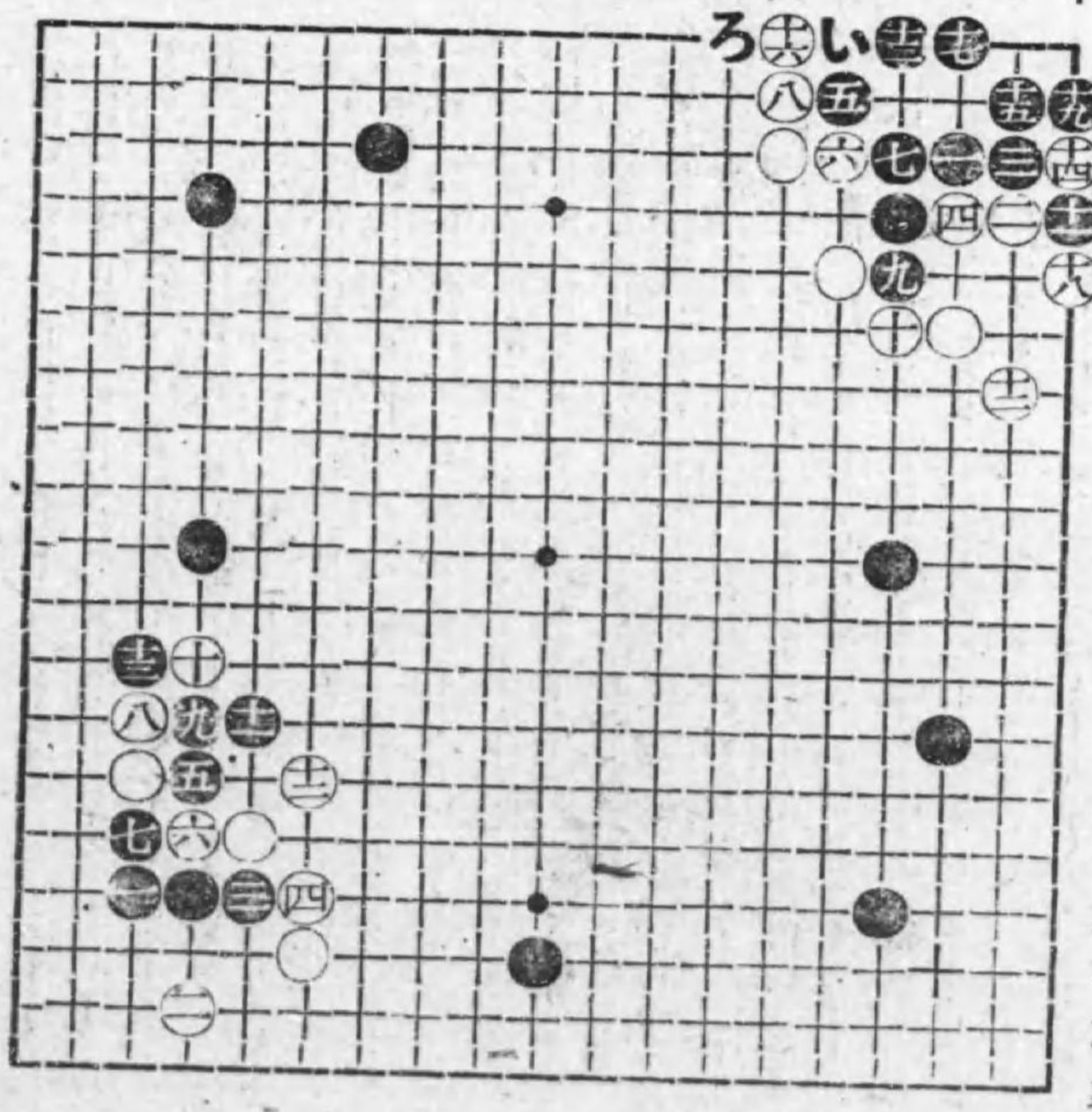
黒二十四は白九が在る故、の布石法で之れは、定石と
布石の關係上、黒は見逃せない重心である。

黒五十、五十二は捨石として定石。また白五十一、五
十三と下から受けても定石。五十一を五十二は白が悪い。

ツツレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



ツツレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



本譜は前譜白三十一からの變化。前譜白は三十一の爲に、四十五と後手を引き、黒に四十六と備へられ打悪くなるからである。

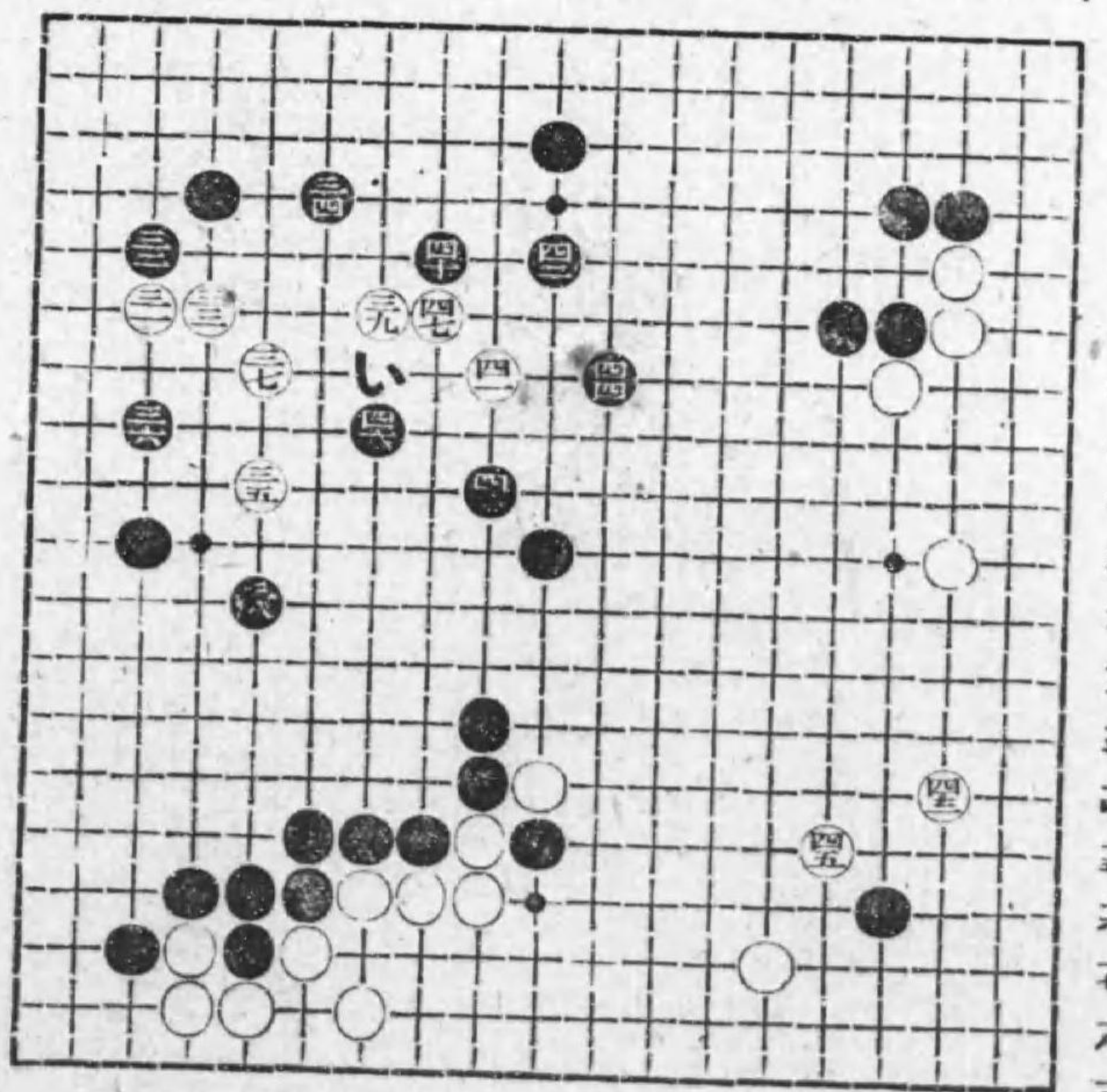
白三十一と行つたが、黒左下隅より「レの十」迄の定石の先據があつて、黒三十八迄となつて、白が面白くない。

白三十九は、黒に「い」と攻められるからである。が之れ又黒に四十二迄と受けられ、白は思ふ様には黒の模様を消されない。

白は四十三と轉じた、其れは四十一の方は黒に任せろと。斯の白の心術は、一局の内に必ず數度出る。黒の手段を見る爲に。即ち白後手活きを、黒に攻めさせ活きて一手得をする爲。白四十五も同じ心術だ、取るなら取つて見ろと。

黒四十六、四十八は甚だ善い。白は活に困難だ。

ツソレタヨカワラルヌリナトヘホニハロイ



黒十は定石である。此の十はことに好い、白九黒八の關係が。即ち白「い」、黒「ろ」、白「は」、黒「に」、白「ほ」は黒「へ」の二段跳ね。そして白「と」、黒「ち」、白「り」、黒「ぬ」は黒が大いに可。白「り」を「る」は黒「り」で之れまた黒が可。

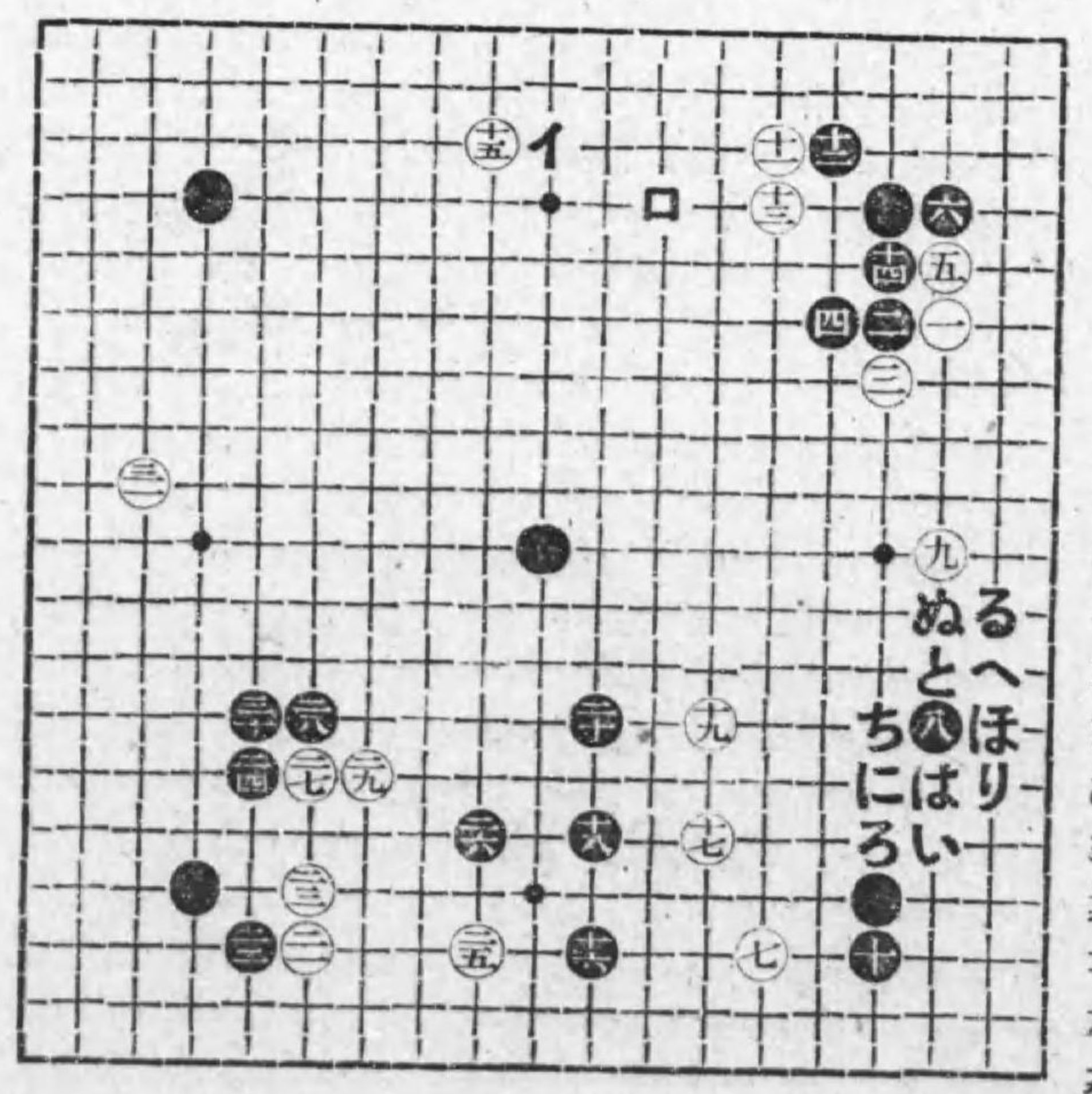
白十一で十四なら、黒は「ホの四」が善い。續いて白「ホの五」、黒十三、白「への五」、黒「トの四」となる意味に於て、黒が甚だ善いといふのである。

これは白九が有るからで、九の如き其方に白が備へ無く、例へば白七で十四なら、無論黒は「ホの五」

白十五は「イ」が本格の備へで定石である。五子も置がしてあるから、「ロ」と黒が打込んで来まいと、白は黒の意を計つて一路廣く構へてゐるが、實は黒に「ロ」と打込まれることは、白の苦痛とするところ。

黒二十四は眞中の置石と二十が在るからの、形勢に於てを注意せられよ。

ツソレタヨカワラルヌリナトヘホニハロイ

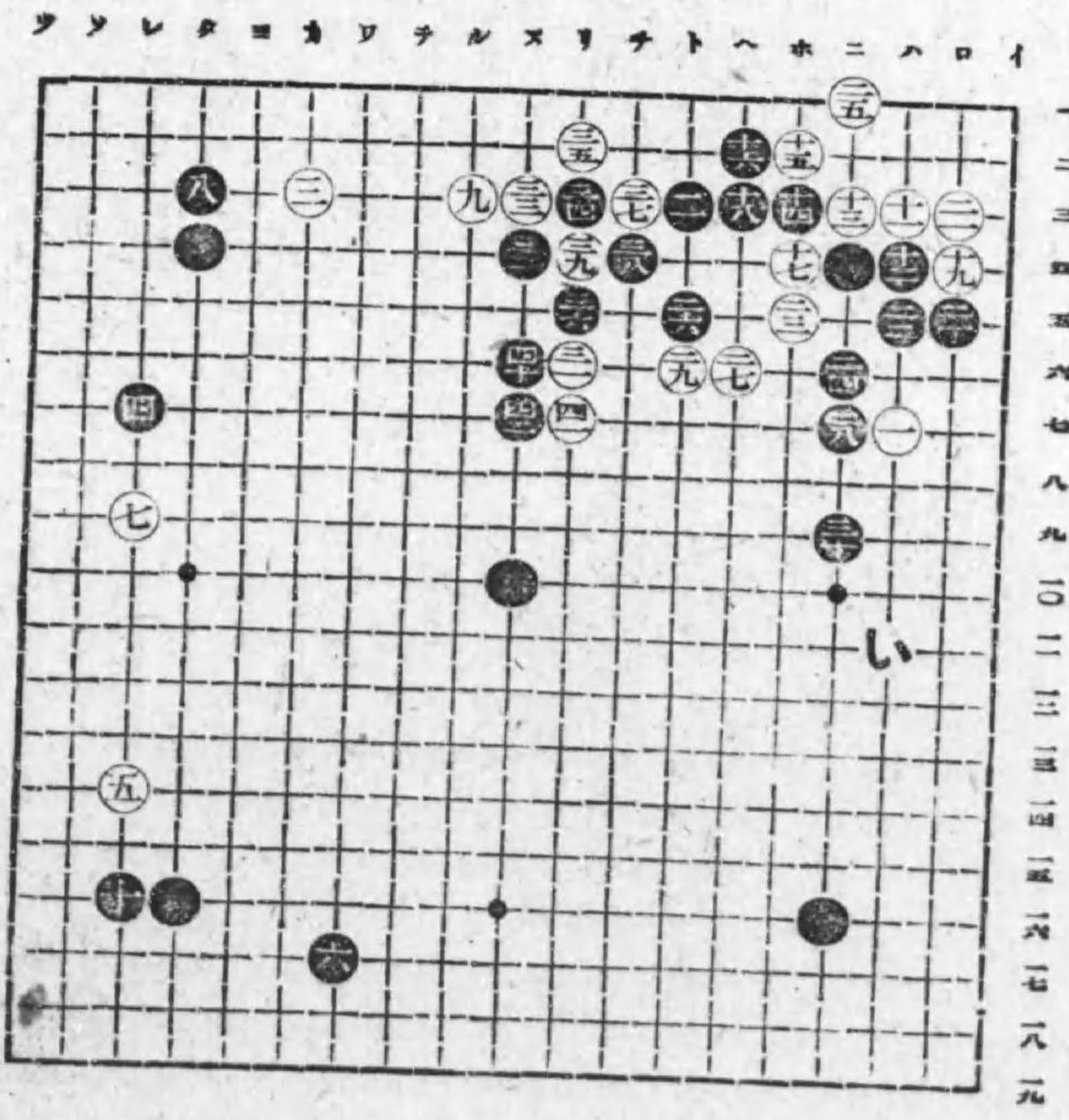


黒十四、十六と強く受けることも定石である。それには二十六より三十迄の次ぎの運びを知る要がある。黒二十六が好手だ。白二十三で二十五なら、黒は二十三と白十七の一子を取つてゐるのが定石。

三十二で三十四だと、白「ルの五」、黒「ルの二」、白「ヲの二」、黒「ヌの二」などの黒は活きとなつて、布石上黒は不利となる。

黒三十四で三十九だと、白「ルの六」、黒「ルの四」、白「ヲの四」、黒「ヲの五」、白「ワの四」、黒「ルの五」に粘ぎ、白轉じて「イ」となり、黒は面白からぬ形勢を招く。黒三十四、三十六の要領が定石である。

黒三十六で三十七などは、黒手の最なるもの。白三十七で四十なら、黒「ルの四」、白「ヲの四」、黒「ヲの五」、白「ワの四」、黒「チの二」で黒が善し。

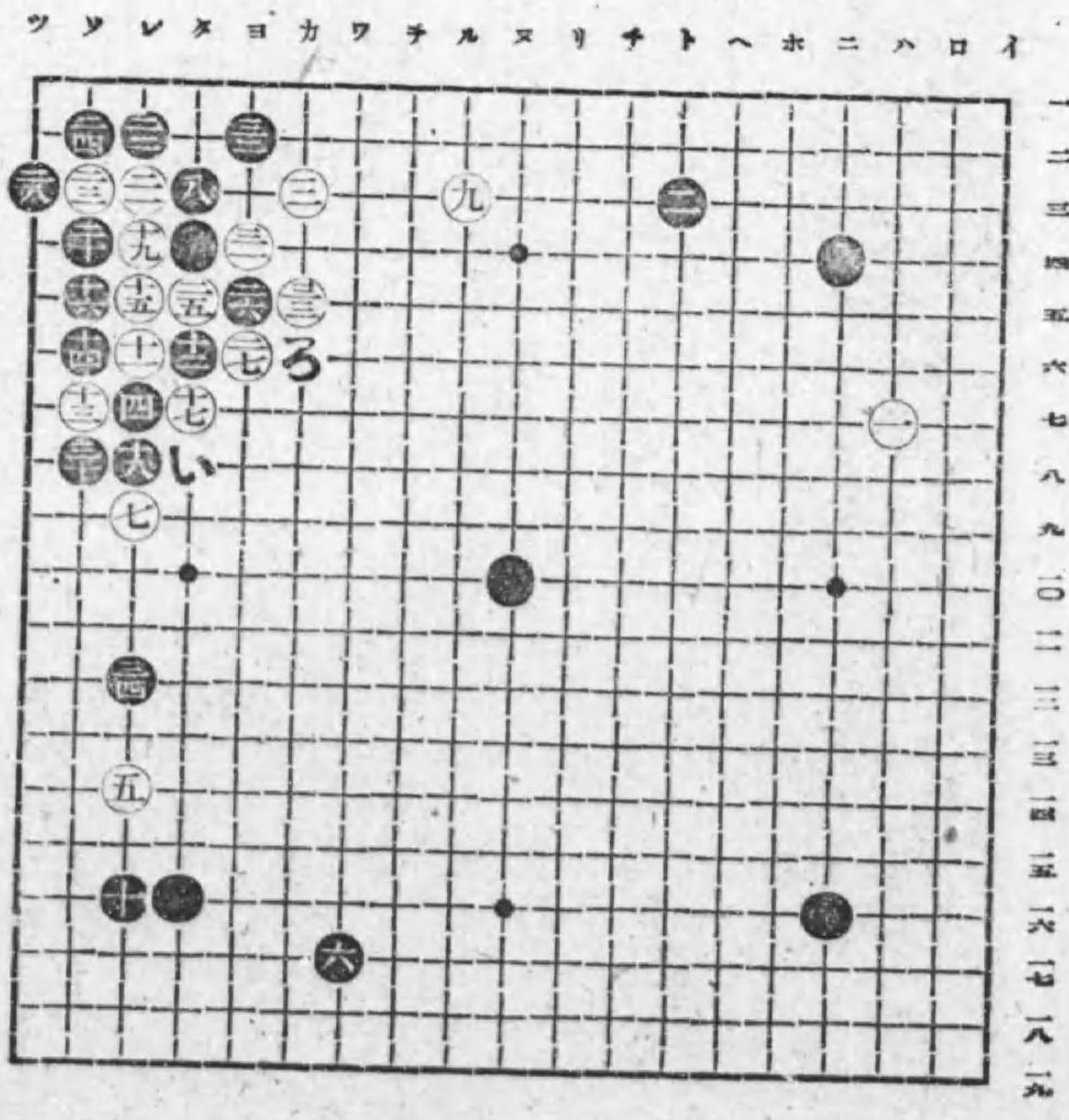


白十一の目的は、其處黒地を少しく侵略して、七と五の間を都合よく守らうといふ時に用ひる定石。

黒十二で十五、白十四、黒十二、白十三、黒十七、白十六、黒二十、白「タの十一」となれば、白十一の目的は達して、五と七の間にも地が増して、白十一で單に「タの十二」に守つたより、心ろよいといふことが白の腹。

黒十二で十五は、前述白の思ふ通りになるから斯うする。白十三で十五だと、黒十三に下り白は手段の施しやうが無い。従て白三十三迄となる。

白十九で三十、黒「い」をして白二十五迄を探ると、黒二十六、白二十七、黒二十八、白十二に粘ぎ、黒「ろ」となつて白は大敗。但し黒十四の時「ろ」で白を征に取れるかを、見定めのある。白三十三となつて快よいが、九が狭く布石として成功でない。



白二十九十二に粘

前譜白九が無い時、黒十で十二と懸じて、前譜の如く白に三十三迄の運びを採らせると、三十三となつた白が堅固で、黒は面白くなる。

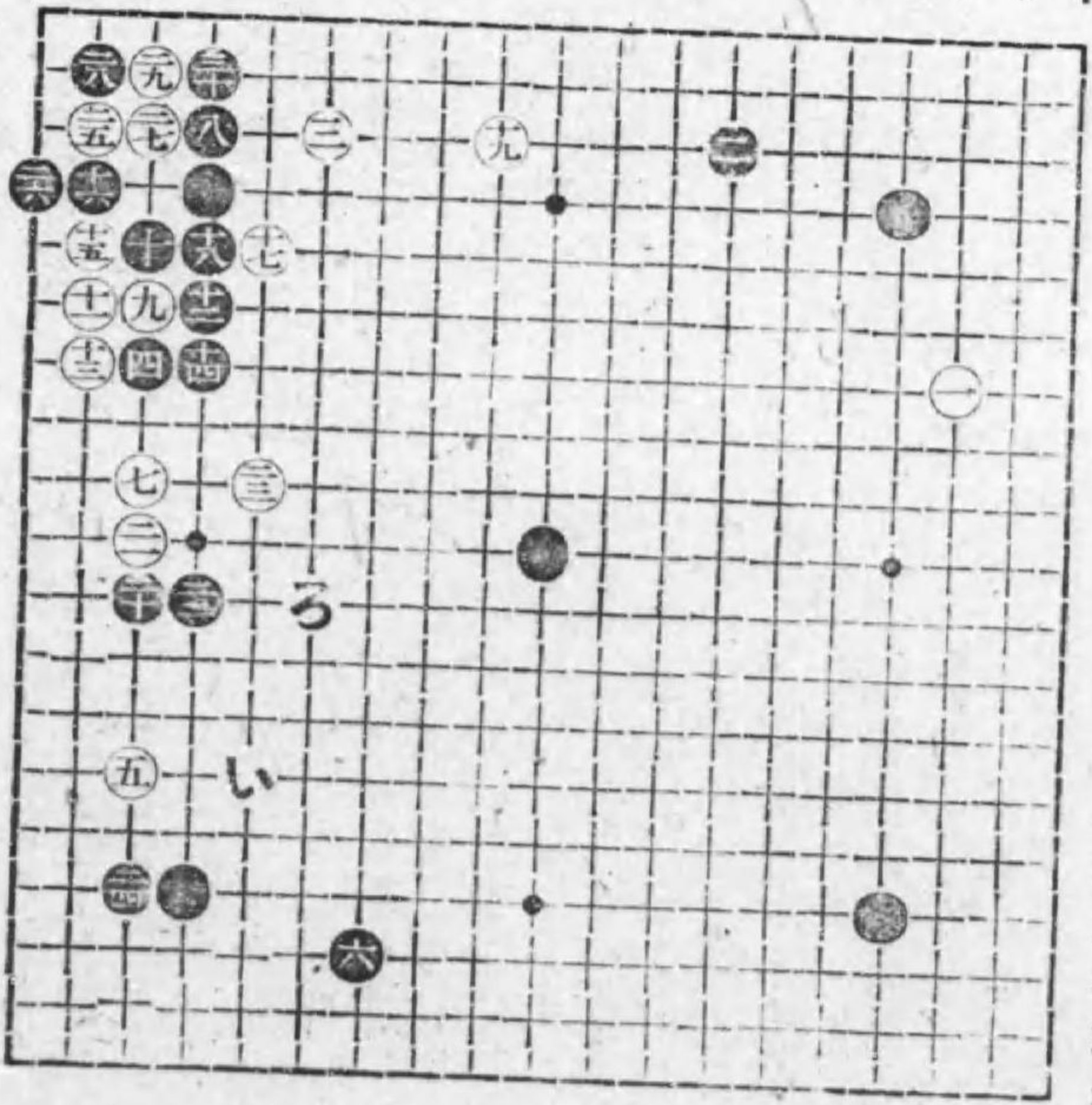
白九を十九の所に備へず、斯う直ちに九だと、黒は十と受け、白の思ふ様黒十八迄と、白の仰せを受納して宜し。

白十九で二十二の備へなら、黒は十九で布石は成功である。

黒に二十と打込まれることの、如何に白の苦痛であるかは、二十四迄となり、白五が出やうか出まいかの態でも判らう。白二十五で(い)なら、黒(ろ)で、白は二十三の方(い)の方、共に急を告げる。

白九の定石は必敗である。白二十五は無理手段である。黒は白に二十五と来られ、よくマゴづく例を見るから三十迄を示す。

アソレタヨカヲアルメリチトヘホニハロイ



黒六で十七又は「への四」と受けず、六と白五に迫り左側に、根柢を作ること定石である。

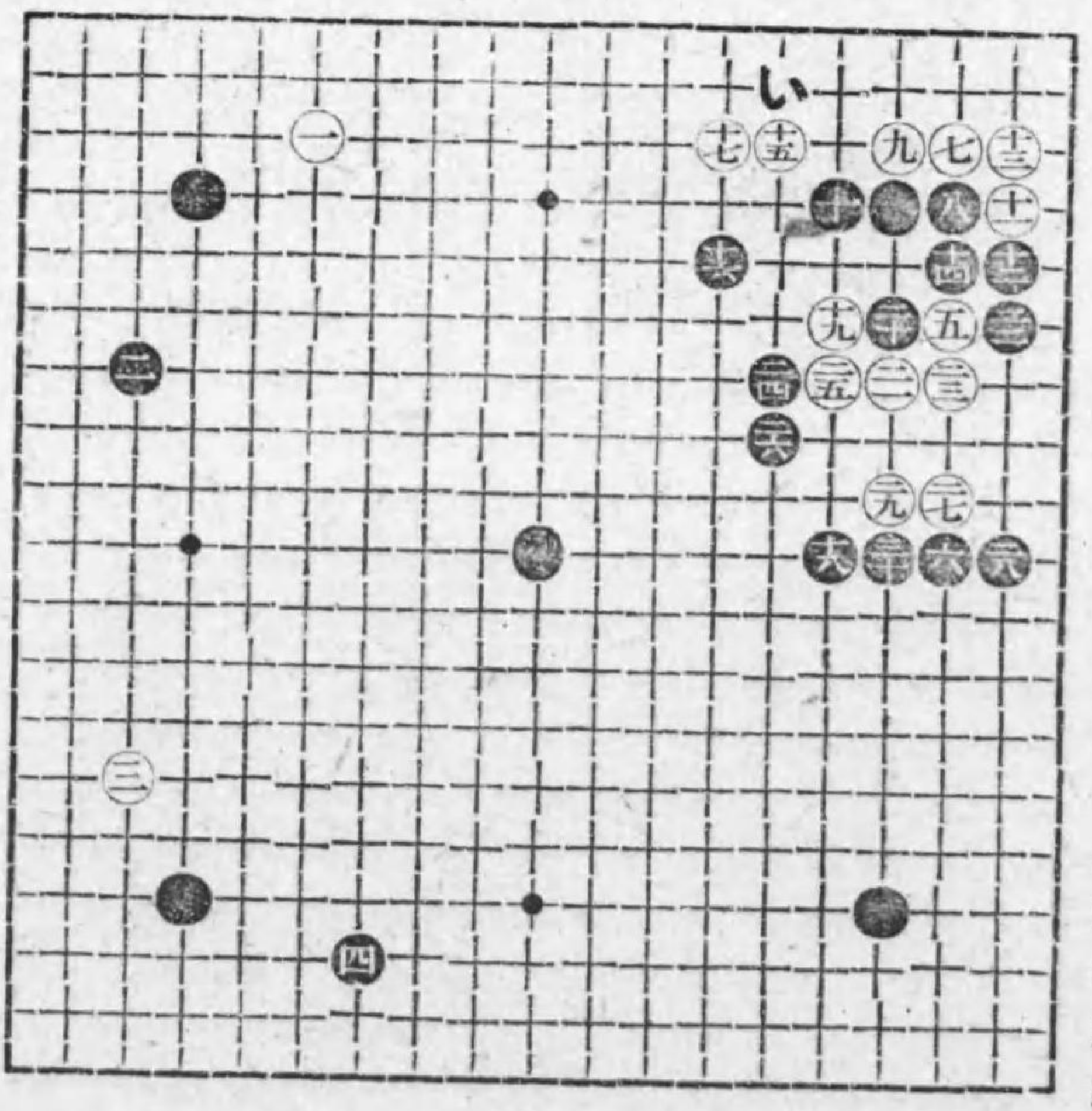
白七と三三即ち「ハの三」に入つたことも、白の布石に用ひる定石である。従て十五迄となる。

黒十二で「ホの三」白十二、黒「タの三」も布石として黒は悪くはないが、十二となつた白が堅く、黒六は頗る薄くなつて、六の方へ不利を招く。

黒十六は定石である。十六で二十と白五の能動を制しをくも、これ又定石である。白が十七と受ければ、黒は十八と飛ぶのが、十六に伴ふ定石である。黒十八は左側より左下隅に優勢を得る、爲めである。

白十七は、黒十七、白(い)となることが辛いからである。即ち白は位ひが低く布石上不利を、將來に來たしで。三十迄は参考に示したまで。

アソレタヨカヲアルメリチトヘホニハロイ



四子となる上局面が廣くなり、別天地の感があらう。
 例えは五子より四子に進んだとしても、四子になると上
 手の方も面白い。だが定石は九子でも、四子でも運用の
 理に大した變りはない。掟ては何他でも同じだからネ。

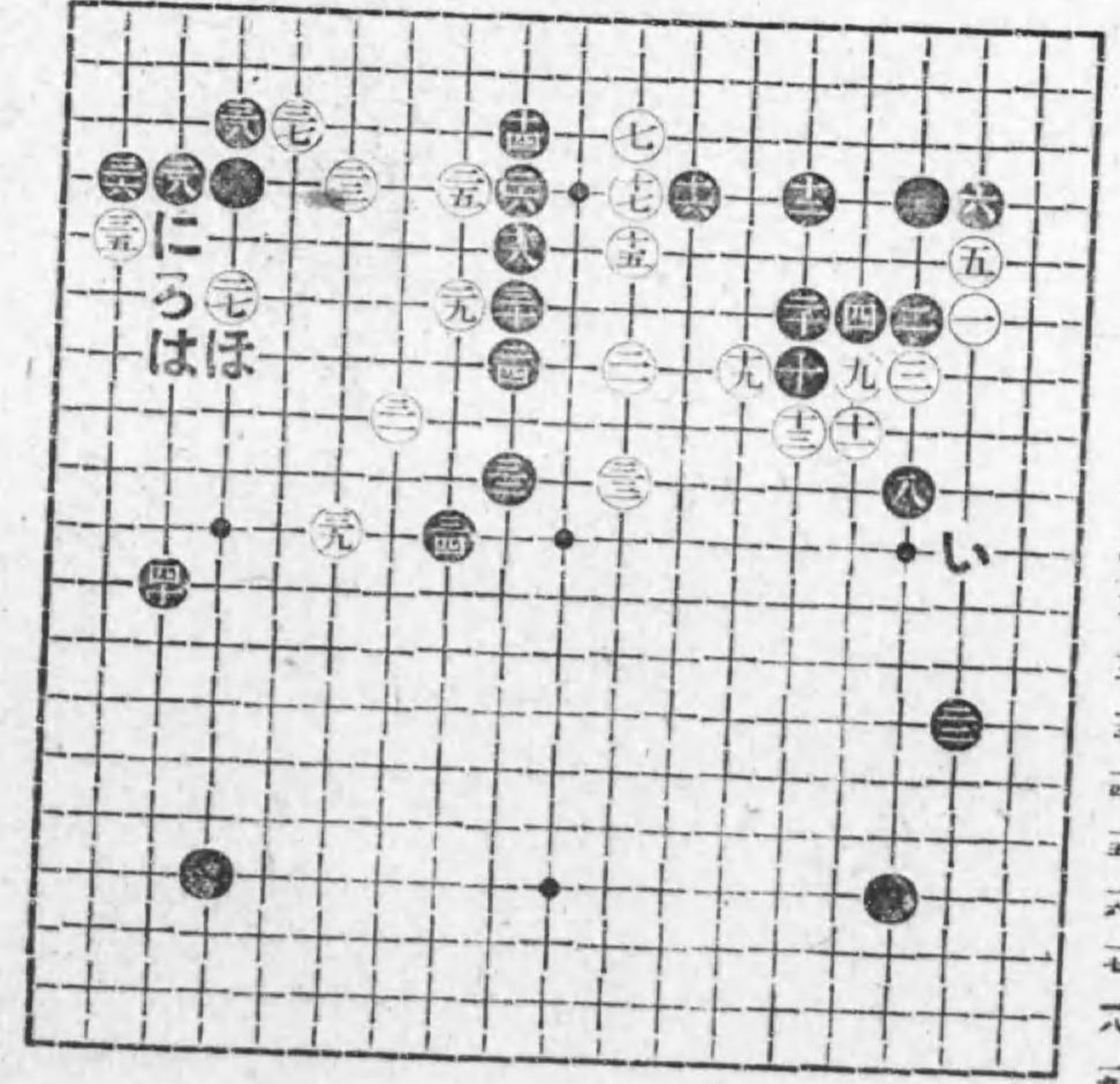
白七で(い)だと、黒八は「ヌの三」。四子になると白は
 黒が左様來ることを知る。で、白は七と先廻りをするの
 が、定石にして布石上利である。併し黒に八と攻められ
 十一となることは覺悟せねばならぬ。

黒十六は十八と飛ぶ時、用ひる定石で、十八を二十三
 なら黒は十六が無い方が好い。

黒二十八で(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、迄は、白
 の外部を厚くしていけな。

黒四十は「タの八」へ行くことを含む。のと三十四の方
 は、白に大した攻撃は受けないといふ腹があるからだ。

ツソレタヨカラナルヌリチトヘホニハロイ



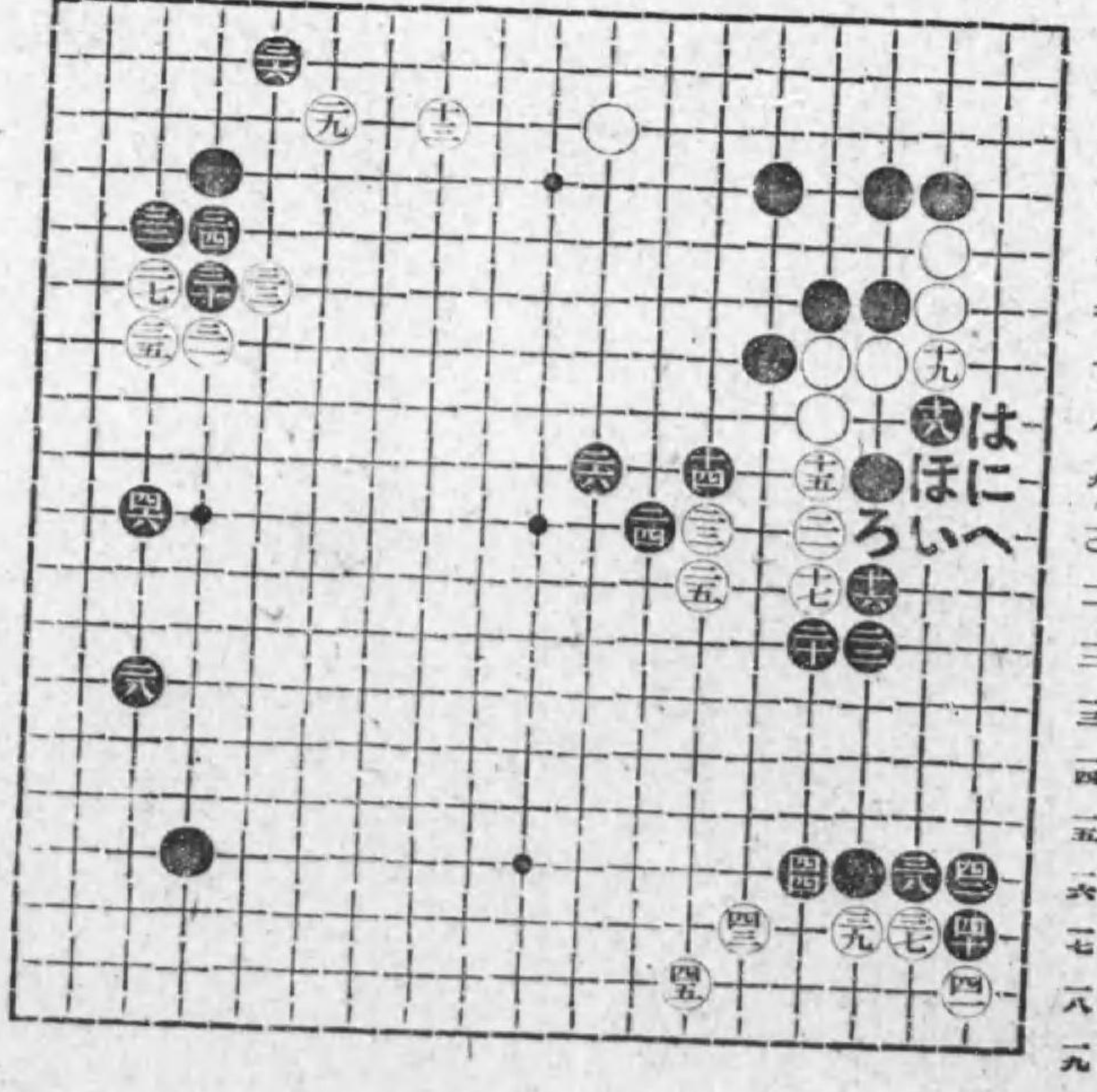
本譜は前譜白十三からの變化。前譜黒十二の備へは、
 本譜十四と行く爲である。十四は定石にして、また此の
 一手け當然の運びとして二十六迄となる。左側は二十二
 迄、中央は二十六迄、共に布石上甚だ有利となつた。

白(い)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)は黒は(へ)
 が定石。

白二十七で「レの十四」なら、黒は三十五が布石上善い
 其の意味に於て黒二十八は、白二十七に對してである。
 黒二十八で三十二、白三十、黒「ヨの三」、白「レの十四」
 となることは、黒が別に悪いといふのではない、要は白
 の意中を行かないことにある。

黒三十六で「カ」の四、白「ワ」の四、黒「カ」の五と定石
 通り受けると、白「タ」の二で此際、即ち白十三が有つて
 黒が悪い。黒三十六は十三、二十九の白があるから、用
 ひる定石である。三十六の如きを獨自案出を望む。

ツソレタヨカラナルヌリチトヘホニハロイ



黒十六で二十四は、白十三の強い方へ向かつて悪い。
白十五を「カ」の十七なら、黒は「ト」の十七が好い。

黒二十を二十一は定石であるが、此際二十を二十一だと、白(イ)、黒二十、白(ろ)、黒二十四の定石となつて白(ろ)迄は十五が安定して隅に地が出来るに反し、黒二十四迄は、白十三の強きが有つて、單に治まるに過ぎず働らきがない。此際二十は好手である。

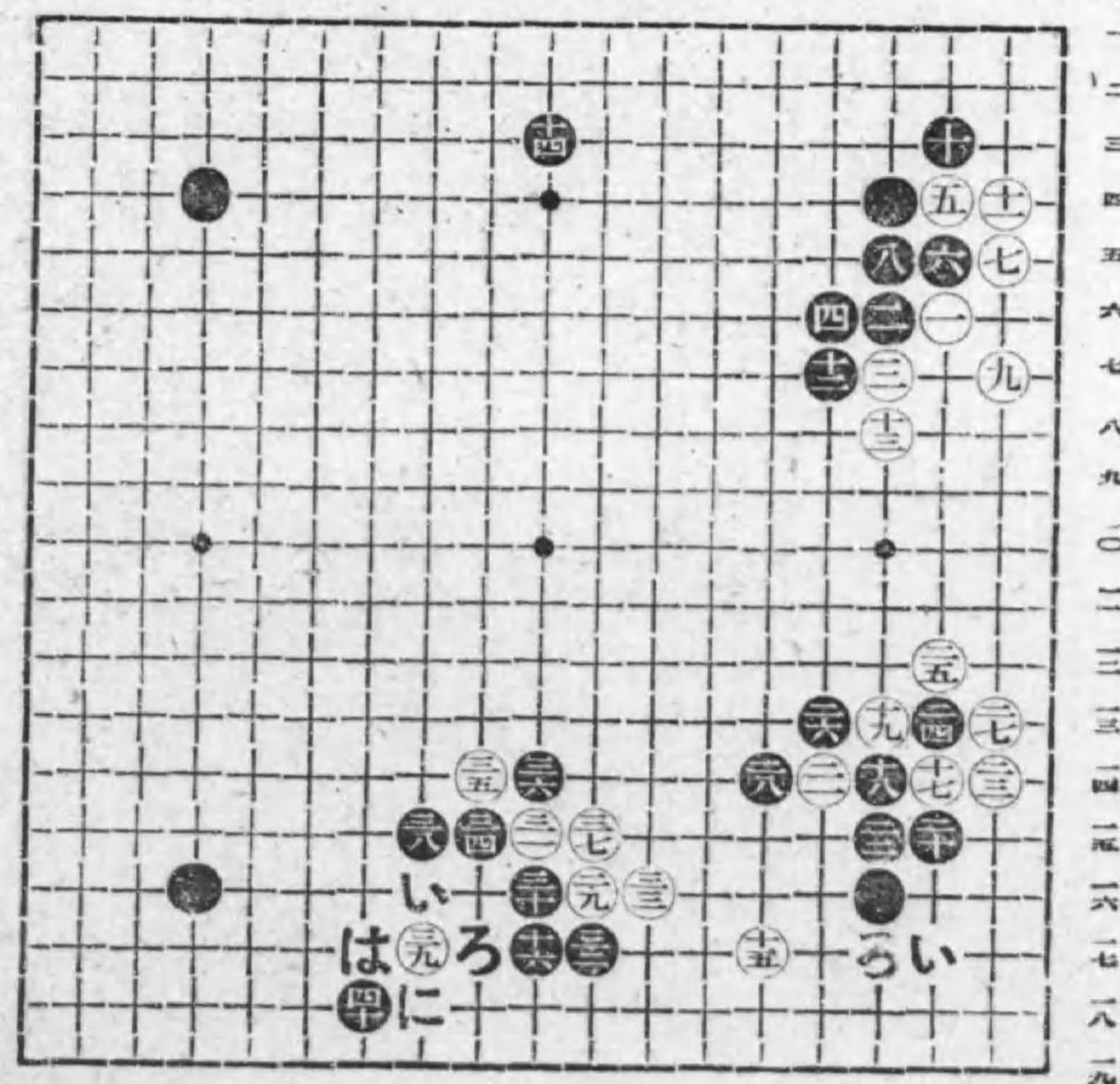
黒三十二は定石である。三十二を三十四は、白三十二で白は根據が出来る。

白三十五を三十六なら、黒は直ちに三十五が定石である。それは布石上白の不利。

白三十五の二段跳ねに對しては、黒三十六をして三八の要領が定石である。三十六、三十八の要領は不斷に出る所である。

黒四十で(い)又は(ろ)の受けは、白三十九が甚だ利となる。四十は定石である。白(は)なら、黒は(に)。

ワツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



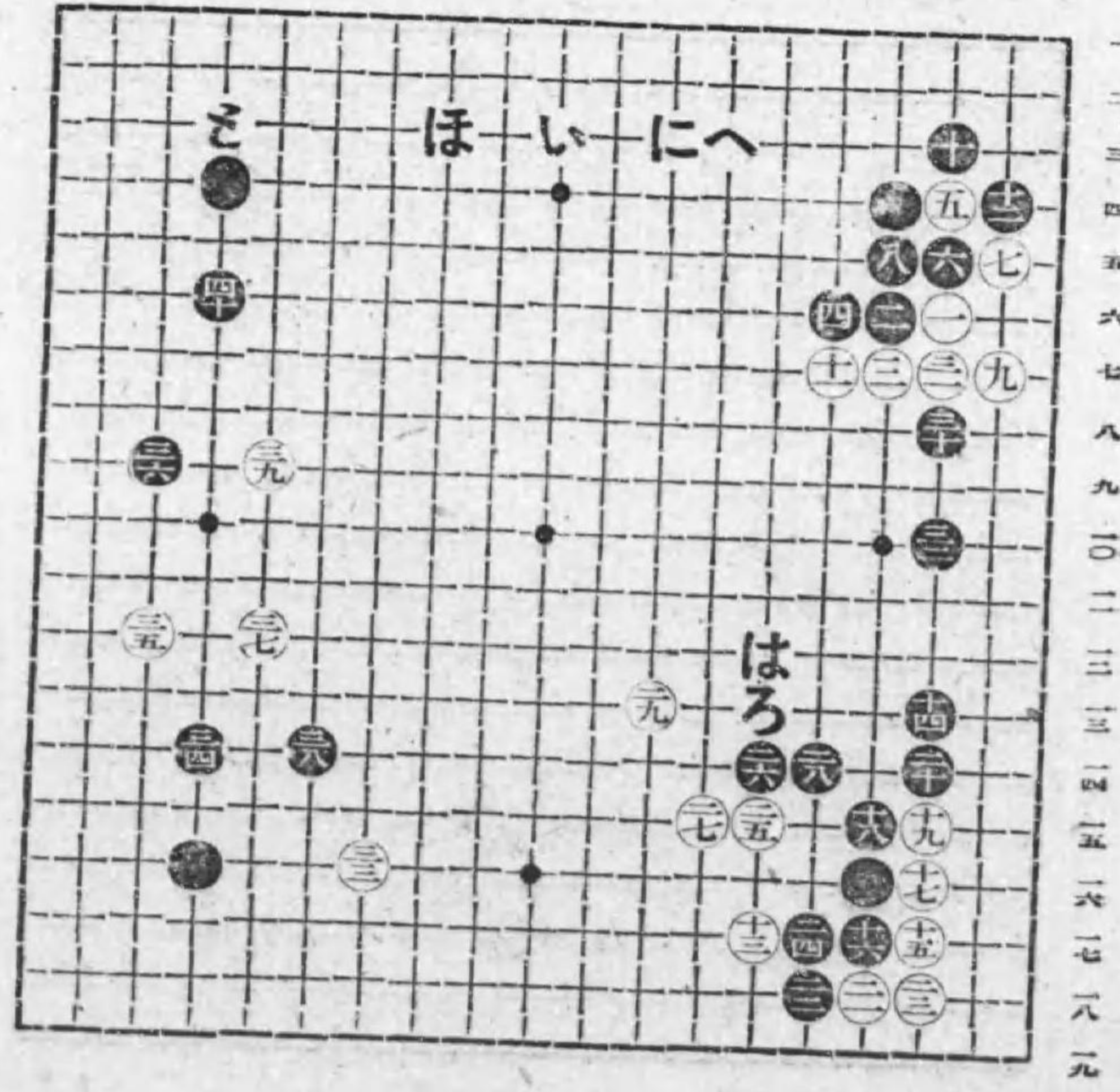
黒十二と白五の打抜きは定石である。白十一を十二なら、黒は十一といふキマリ、キツタ所。黒十二で(い)、白十二となることは、布石上黒の不利。

白二十七、二十九は定石である。黒二十八も。白二十七で「ト」の十四なら、黒(ろ)といふ之れまた、キマリキツタ所。

黒三十二となると、白は十一と探んだ定石が不利となつた。といつて、白二十五で「ハ」の十一は黒「ヘ」の十六。また白二十九で「バ」の十一だと、黒二十九。共に白は面白くない。即ち布石上。そんなら白はどうしたら善いか二十七で「ト」の十四、黒(ろ)、白「ト」の十三、黒(は)の時白は三十二位ひであらう。

黒四十となつて、白(い)なら、黒は(に)ではない(ほ)の方である。(に)の方は十二と打抜いた方が堅いから。黒(ほ)、白(へ)、黒(と)と黒は固めるが好い。

ワツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



「二」と四の定石は、白一と三に對して布石上好い。二で(シ)、白(ろ)は、白(は)と來られることあり。また四で「カ」の四、白「ヲ」の三は、白に「カ」の二と來られることあり。

黒八、十は定石である。八で十だと、白(に)で白五が樂である。

黒十八の受けは定石である。十八で(ほ)は白(へ)で黒が損。

黒二十と轉じたのは、白次いで(と)なら、黒(ち)で好いからである。

黒二十四、二十六は先手を取る爲めの定石である。見たまへ三十二より四十二迄で、白は活きるにしても甚だ苦しい。白二十一で三十九なら、黒「レ」の五で右ト隅と共に、地が白に優ること數等。

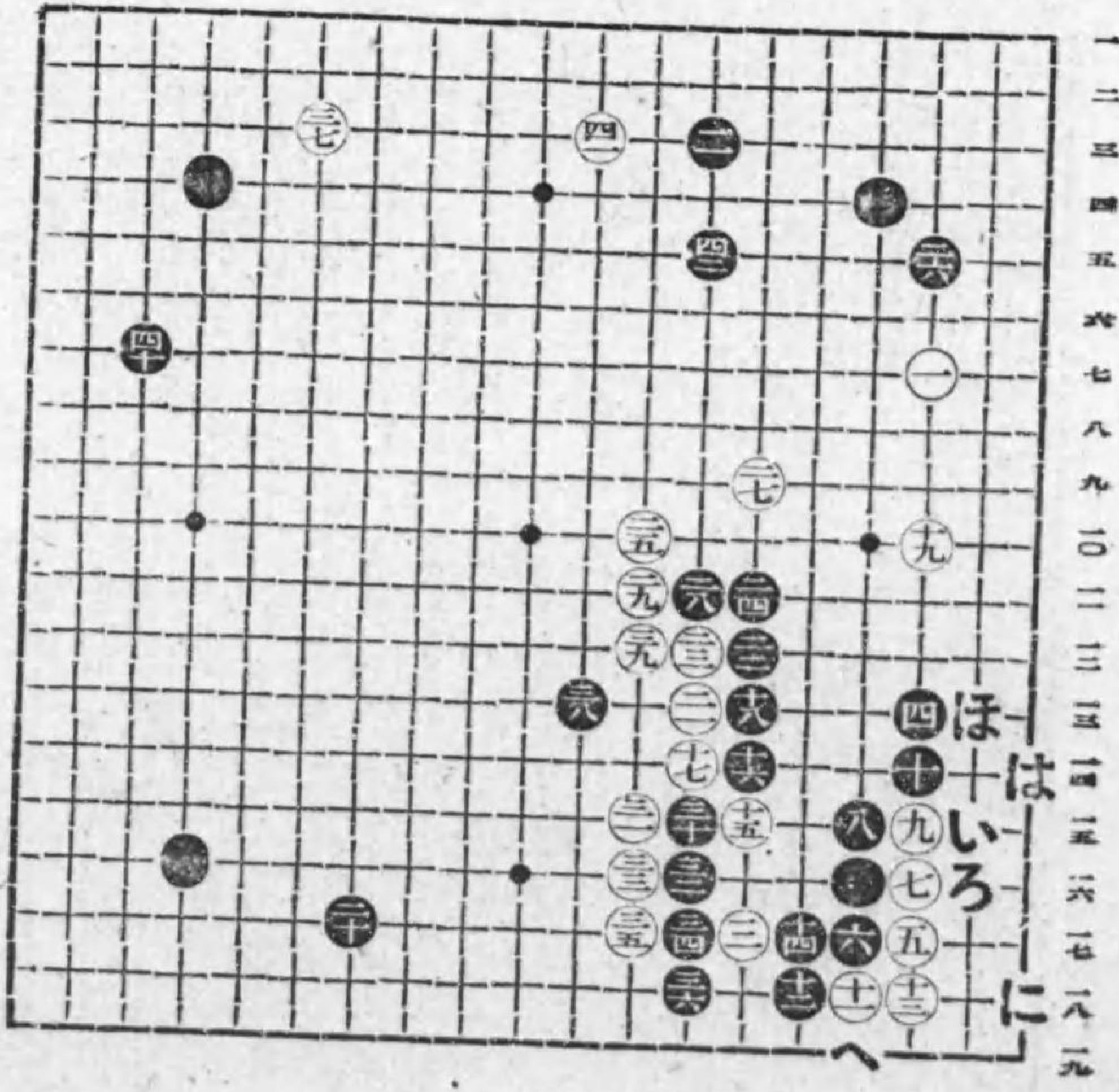
白五と入つて十三迄の活きは、五で「ワ」の十六だと、黒に六と固められる定石が、白一との關係上面白くないと見るからで、一寸六ツカシイ布石の理だが、其の工合を看取して欲しい。即ち白十九となることが、白の望む布石である。

黒二十で二十一、白「チ」の十四、黒「リ」の十二となつても、一と十九の白が在つて、黒は只だ堅いのみで面白くない。次いで白「ワ」の十六となつて。

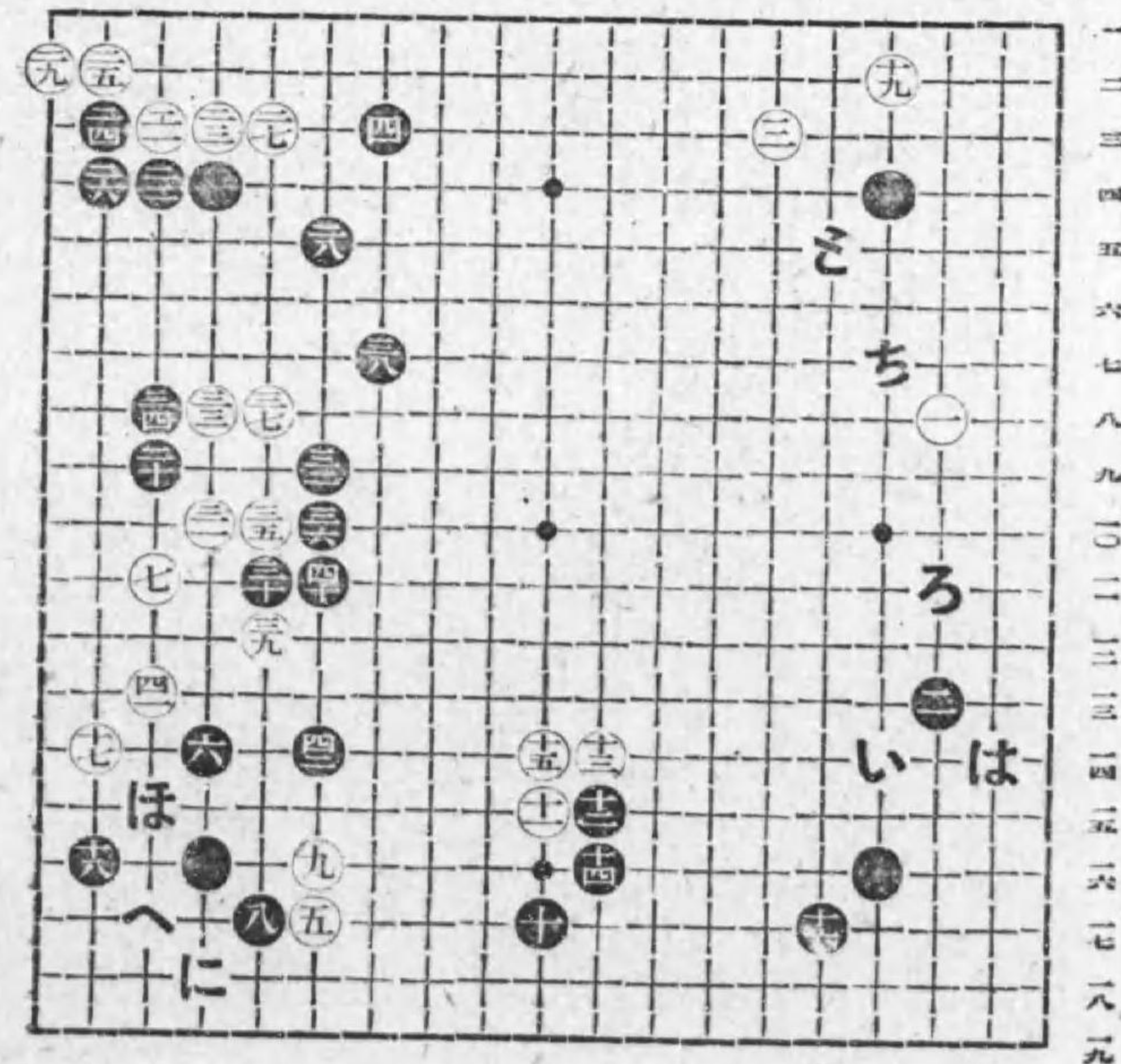
黒二十八より三十六迄は、平常は面白くないが、二十と二十六の要點二着を打つたから、忍んで三と十五の白二子を取つてゐるのだ。それに三十八、白三十九の交換が、黒に利であるからだ。尙ほ黒(い)、白(ろ)、黒(は)白(に)となることの利もあつて。

黒(は)は(ほ)で一と十九を攻める、ことに利用も出来る。黒(は)又は(ほ)に、白(に)を受けないと、黒は(へ)で、白を取るのが定石。

ワツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ワツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



白一は一局の工合を取る、布石の要領で、様々に變化を試みやうの意。

黒二で十一だと、白一に接近して白に、五などに來られる手段を與える。二は白一の威勢を、遠くでヘラシテゐる意。

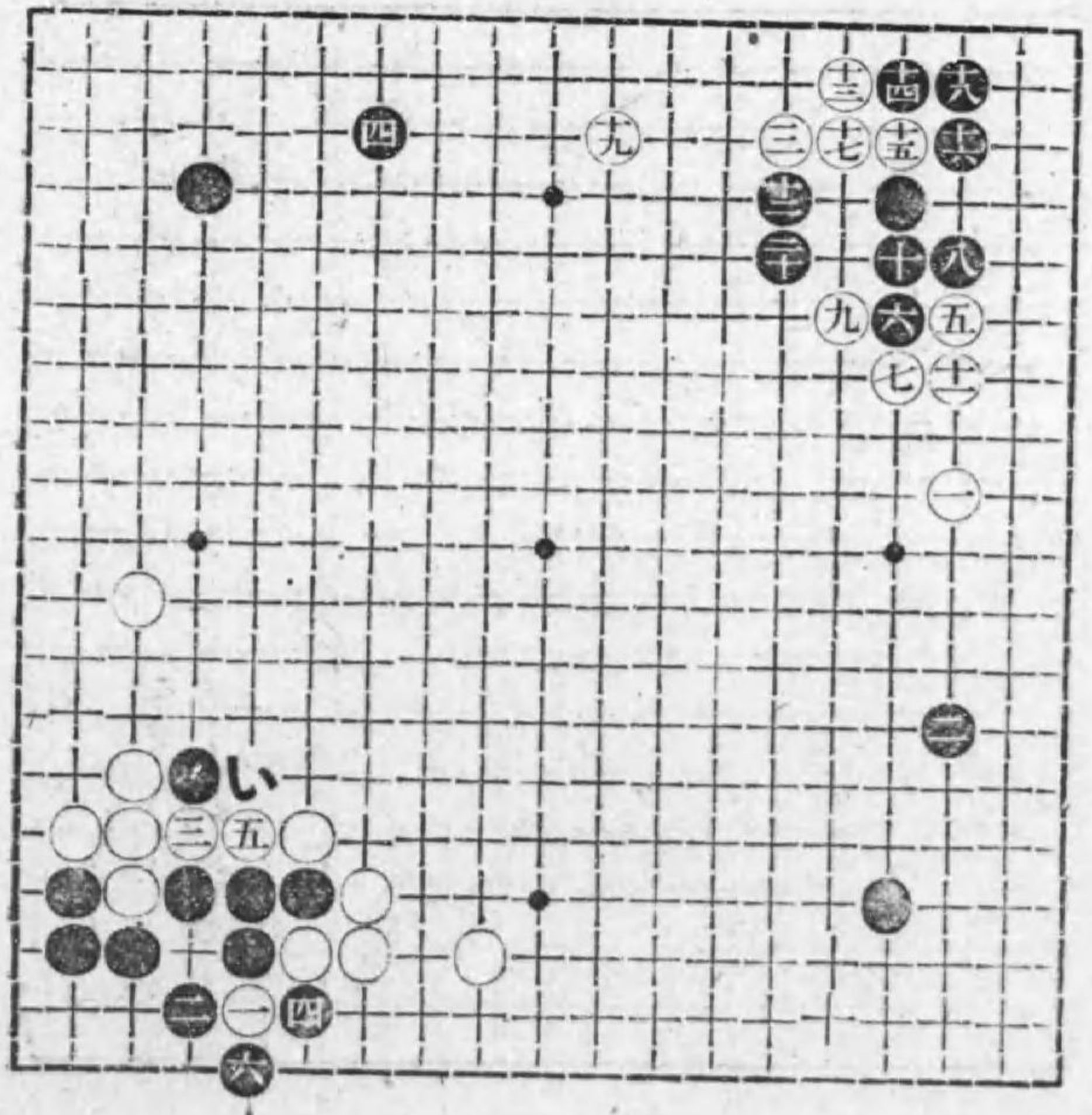
白三を五なら、黒八、白六、黒十二と黒は應じるが好い。すると白一が堅きに過ぎることになるから。で、白は斯う三と行くのである。

黒四で十一だと、白一と三の意中を行つて面白くない白に直下十六又は五と手段せられて。

黒八は定石である。十一となつて白一は、ツマラナクなつた。

黒二十は定石である。二十を怠ると、左下隅六迄となつて、黒が悪い。左下隅、黒二を(い)は白二となつて六となるよりより、黒が悪い。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九



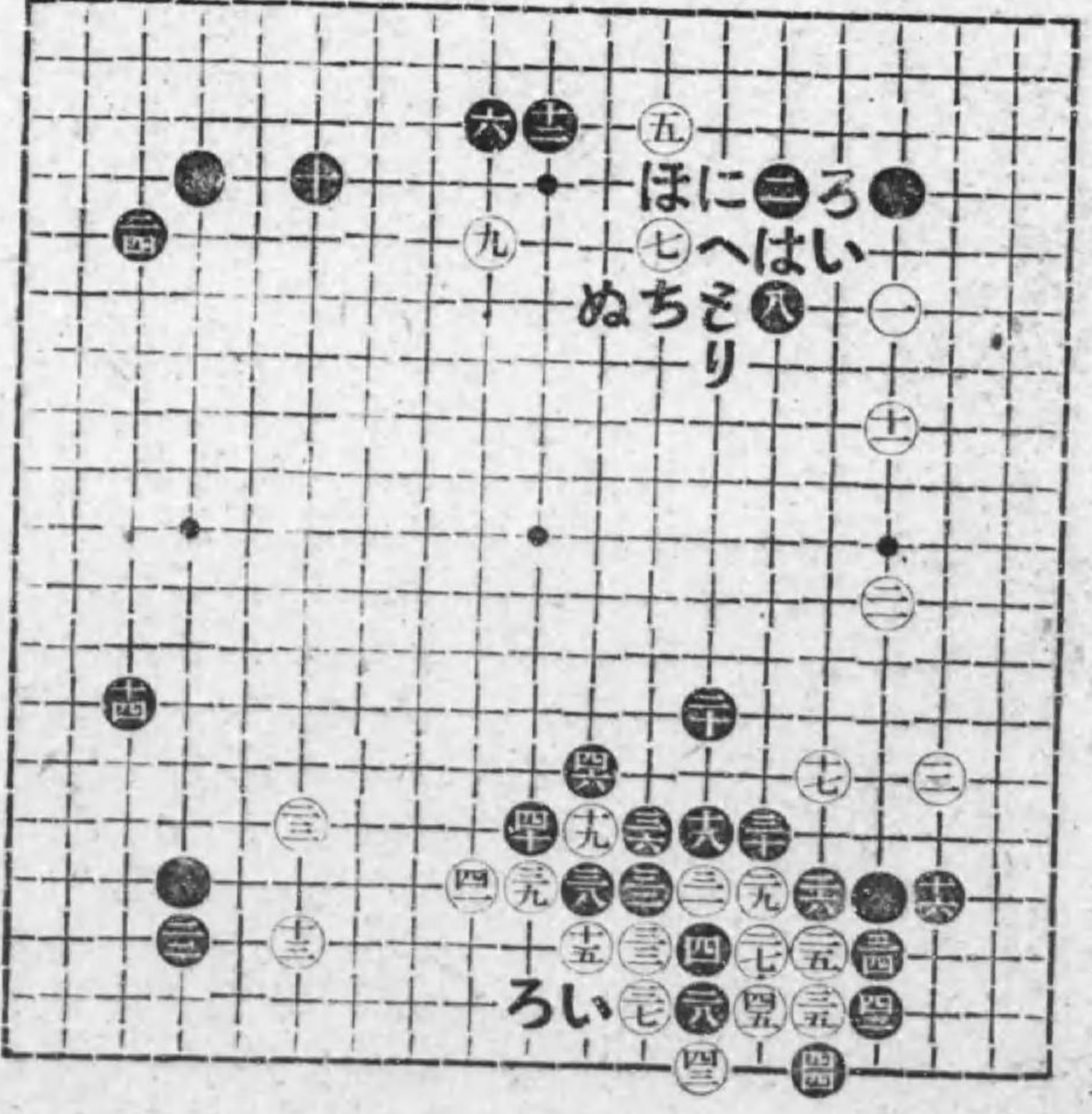
黒六は白五に對する定石である。六で「トの五」白「ヲの三」などは、黒が布石に後れを取る。白「ヲの三」に黒十二の打込みは、白は七に飛付く意味で、其處から戦争が起きて、白の不利とはならない。

黒十二は五から九迄の白三子を攻める定石である。白十三で(い)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)、白(と)、黒(ち)、白(り)、黒(ぬ)となることは決して黒に不利とはならず、有利に展開して行く。

黒十八は定石である。十八を三十又は二十九の所などへ囲めるなら、十八で三十三、白三十八そして黒は二十一の打込などが、心ろ利いた打方である。

黒が白二十五の入りを防ぐなら、二十四で(い)白(ろ)黒三十三、白三十八の要領が定石である。黒(い)で三十三、白三十七は黒が悪い。四十六迄となつても、黒は不利ではない。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九



黒四で六又は「ハの十三」に受けは、定石にして本格の布石であるが、四だとて不利の布石は招ねかない。

黒六より二十迄となる定石を、六を十四の方に採り、同じく二十迄の轉向に換えては、黒は悪くはない。

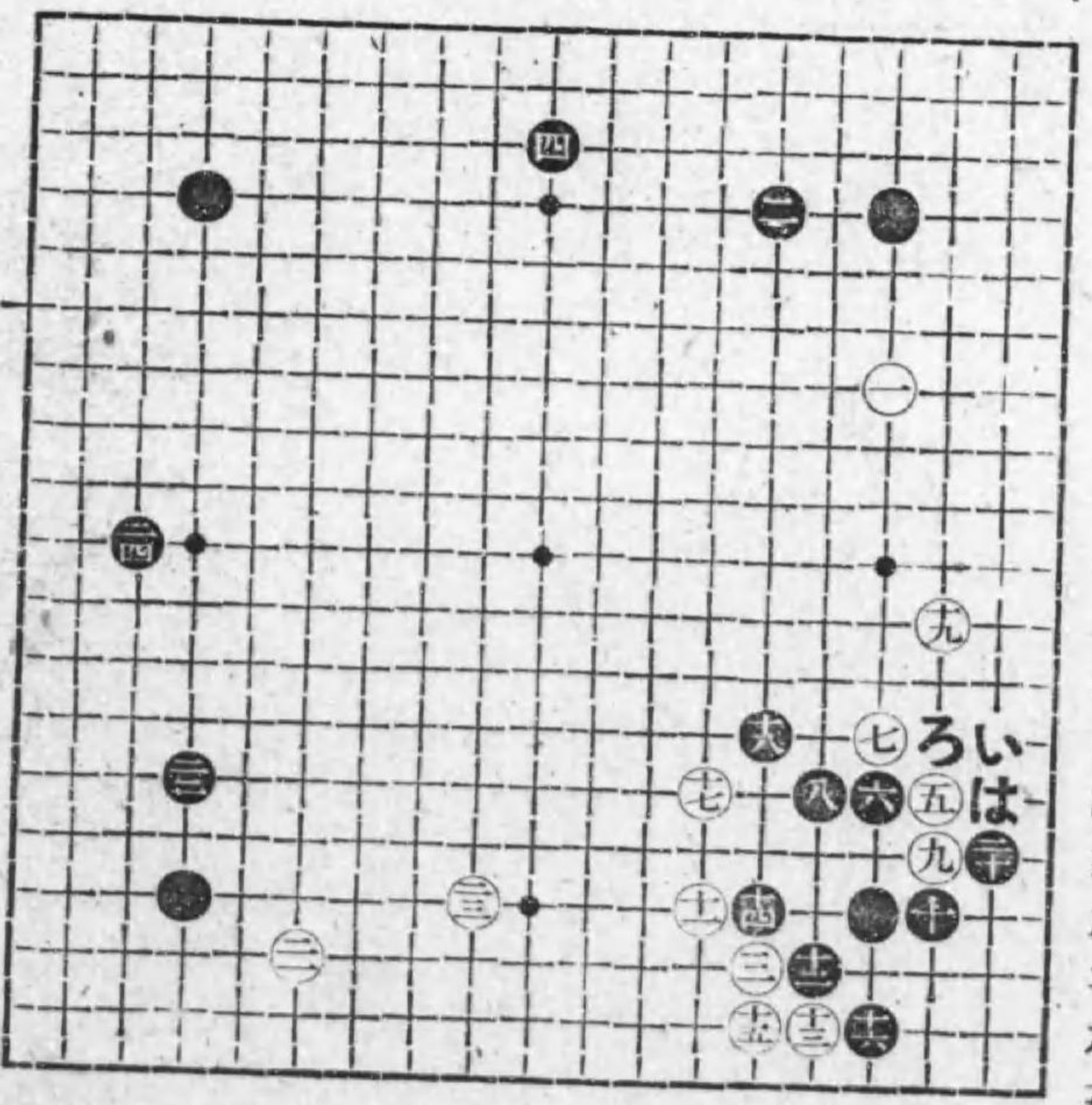
其の轉向即ち六を十四の方が悪いといふ場合は無論ある。其の見分けが判れば、上達顯著。

黒二十は忽がせに出来ない、定石である。黒機會を得れば、黒(い)、白(ろ)、黒(は)の利益が大。

白二十一ではなら、黒は手抜きが定石である。

白二十三で「レの十一」又は「レの十二」なら、黒は此際其方に構はず、二十三と進入が當然である。黒に二十三と来られることは、白は甚だ不利の形勢を招く。黒に二十四と大場を占められ、白が前途面白くないなら、白二十一で「レの十四」の方を採ぶが善い。

ツソレダヨカワタルヌリチトヘホニハロイ



前譜黒二十を手抜きで、本譜一だと十三迄となる外な

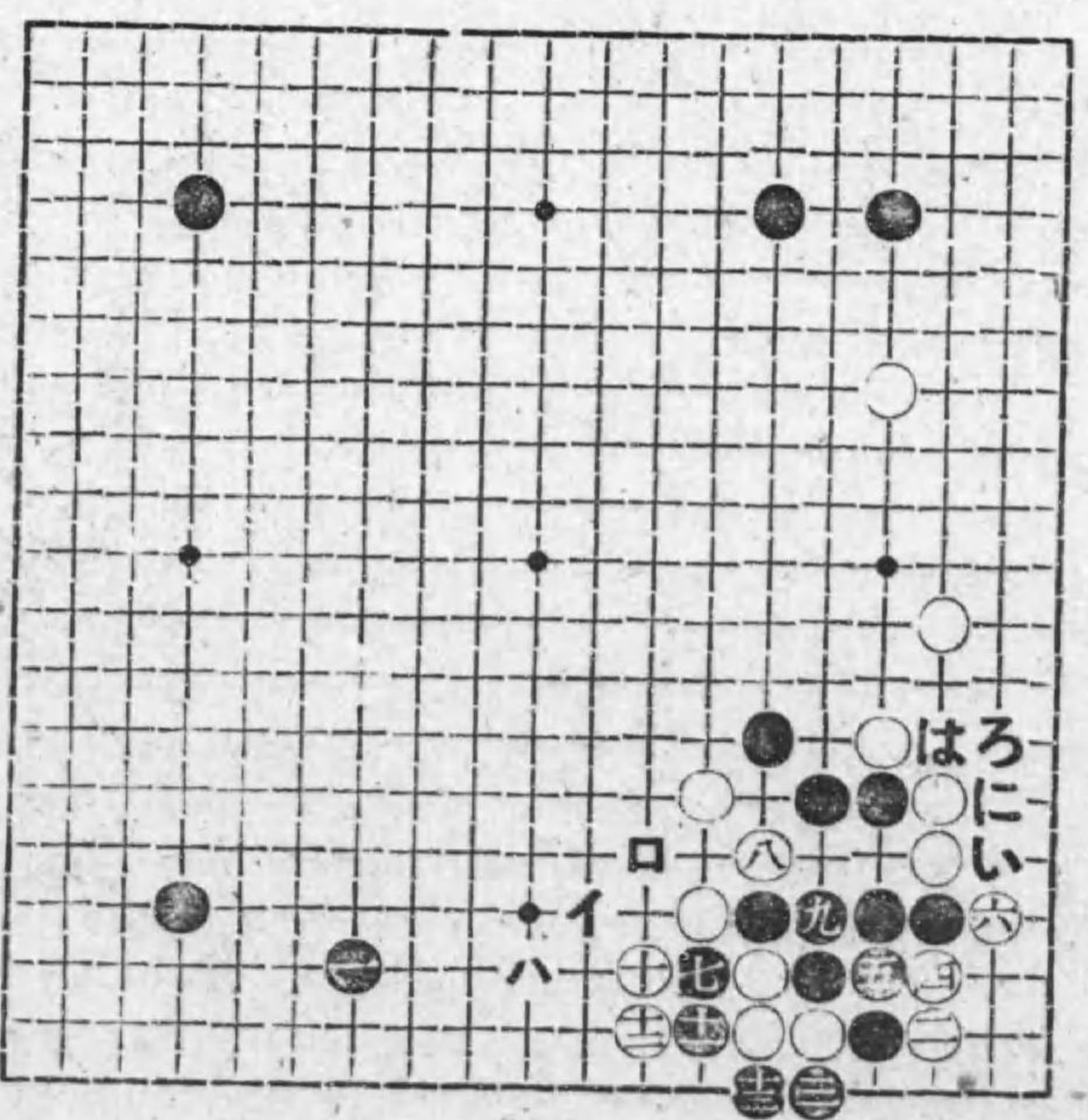
は然らず。黒は十三と白の三子を取つて、善いやうであるが、實

黒一で「S」だと隅に十目以上の地がある、尙ほ黒(ろ)白(は)、黒(に)と白地を消して、自己の地を増し行くこともある。

黒一で「S」に、白(に)の受けは、黒手抜きで宜いことは白に二と防手させない爲めである。

黒十三となつて、多くの人は黒に「チの十六」と切られることを、心配するであらう、要は氣力にある、即ち十三となつて白は「ルの三」と、其方面の工合を取るか、又は「チの三」と進んで、右上隅へ迫るかが、本譜の如き形勢に於ては、要點である。黒が「チの十二」と切つたら白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)で白は軽く捌ける。

ツソレダヨカワタルヌリチトヘホニハロイ



黒六で八の所だと、白に後ち「アの十七」と来られて、「アの十七」に行くことは、其の一手が四と照して位ひが低い。又た六で二十五でも、四との關係が位ひ低い。などの感知で斯う六と行くことは、其の人の高尚にある。即ち棋品高雅といふことである。

白二十三で二十六なら、黒は「カの十一」と、白を攻め其時白「レの十二」なら、黒「レの十一」と突當り、白を小に活かすが善い。白を取らうなどは、第一取れもしないが、悪い考えである。

黒二十四で「タの八」に受けも好いが、二十四、二十六は烈げしくして、白の困る所。之れ黒が二十二と定石の守りが宜いからである。

白二十七などに構はず二十八と攻寄つた、ところに黒の氣力がある。
三十六となつて、白(い)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)と黒は六を捨てるのが定石である。

前譜白三十五を本譜一と行けばの變化である。

白一に對しては、黒二と直ちに行くのが定石である。これは一局の内、多く出る手所で、白一が悪くなる、結果を招くことも、黒二の良手に因る。

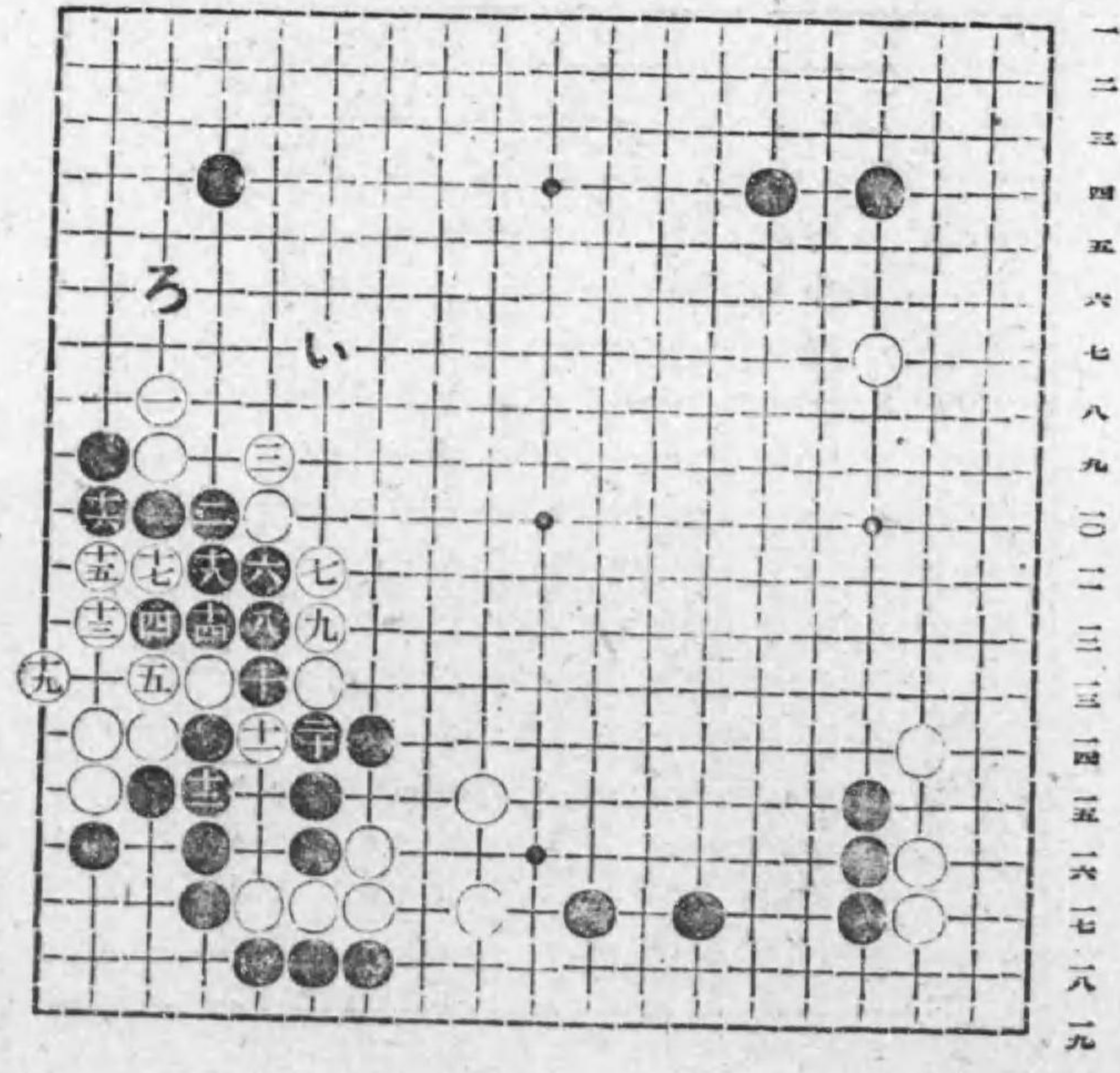
黒四より八迄の好順を得ることも、二の良手に伴ふ。白九で十だと、黒に九と出られ、白は大いに困る。

黒十四で二十だと、白に十八と切られて、黒が悪い。白十九で二十だと、黒に十九と置かれて白が悪い。

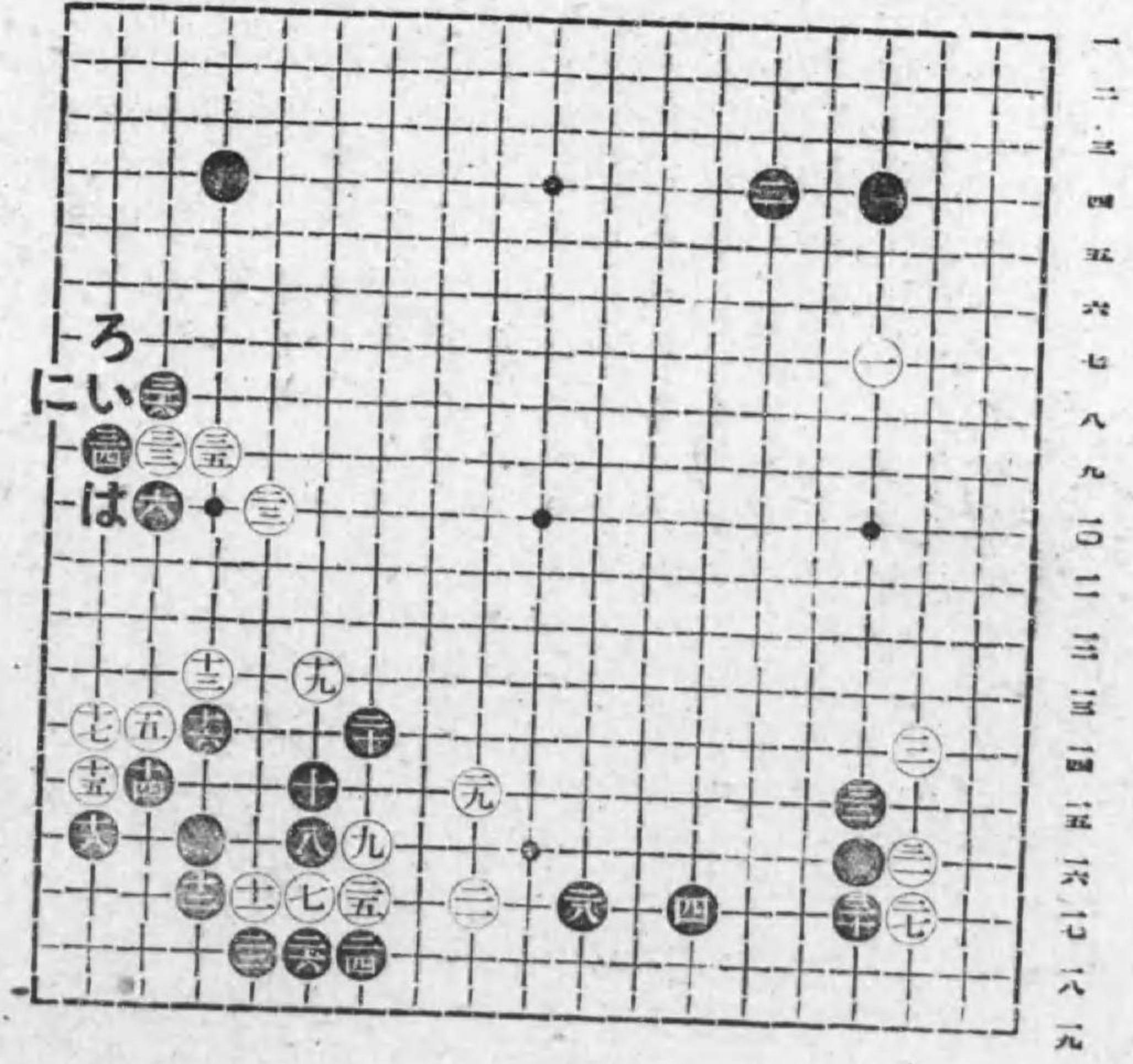
黒二十の切りは確かな手、二十で「ソの八」、白「ソの六」は黒が悪い。

二十となつて白(い)などの備へなら、黒は「カの四」で好い。白(い)を「カの四」なら、黒は形勢が違ふから、鋭意「カの五」と應じて、戦ふが布石上有利となる。其の黒「カの五」で(ろ)などは、黒の爲に採らぬ。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨレソ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨレソ



黒十四は定石である。十四を十五だと、白十四、黒「カ」の十六の時、白に「ソ」の十六と切られて、それが爲め黒は、布石に不利を招く。
 白十三に對して、黒斯う十四と應じなくてはならぬ、ことは不斷に出る。

白二十三で、(い)なら、黒は二十四が宜い。そして白(ろ)の切りなら、黒は二十三。次いで白(は)なら、黒は(に)。(ろ)と黒は兩斷せられても、二十四に有る黒が良手である故、白の方が反つて苦しむ。

白(い)に、黒(ろ)と粘ぐことは、そして白二十三、黒二十四となつて、些少ながらも白に利される。即ち斯う二十四となつて、白(い)なら、黒は(ろ)と應ぜず(ほ)と白(い)を追ふが良いからである。

白三十三、白三十四となつた、双方の定石は、黒二十四が有つて、三十四の方は左邊を地にするに、甚だ好い白は左邊に一寸手がつけられない。

前譜白十七からの變化。即ち白一は前譜十七。

黒二で五だと、白「ヨ」の十七で、黒は「カ」の十六に切れがあつて、味が悪い。

白に一と切られた以上、黒は六迄の變化に應じる外なし。

黒六を「ヨ」の十六だと、白「ソ」の十六で隅を生きられて、黒が不利。

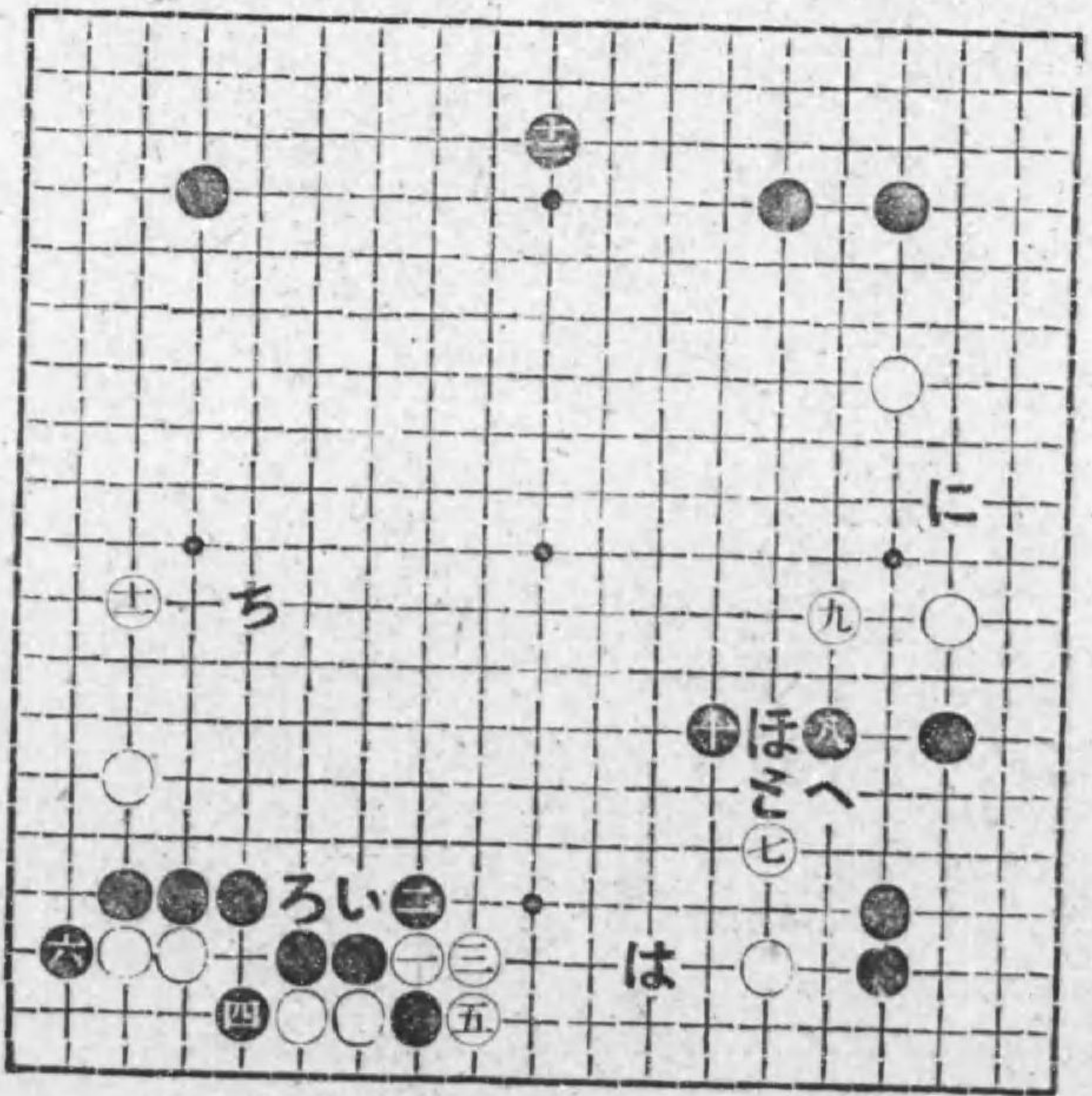
六となつて白七で「タ」の十八なら、黒は「タ」の十九で良い。白(い)は、黒は(ろ)。

白七で十一なら、黒は(は)が良い。

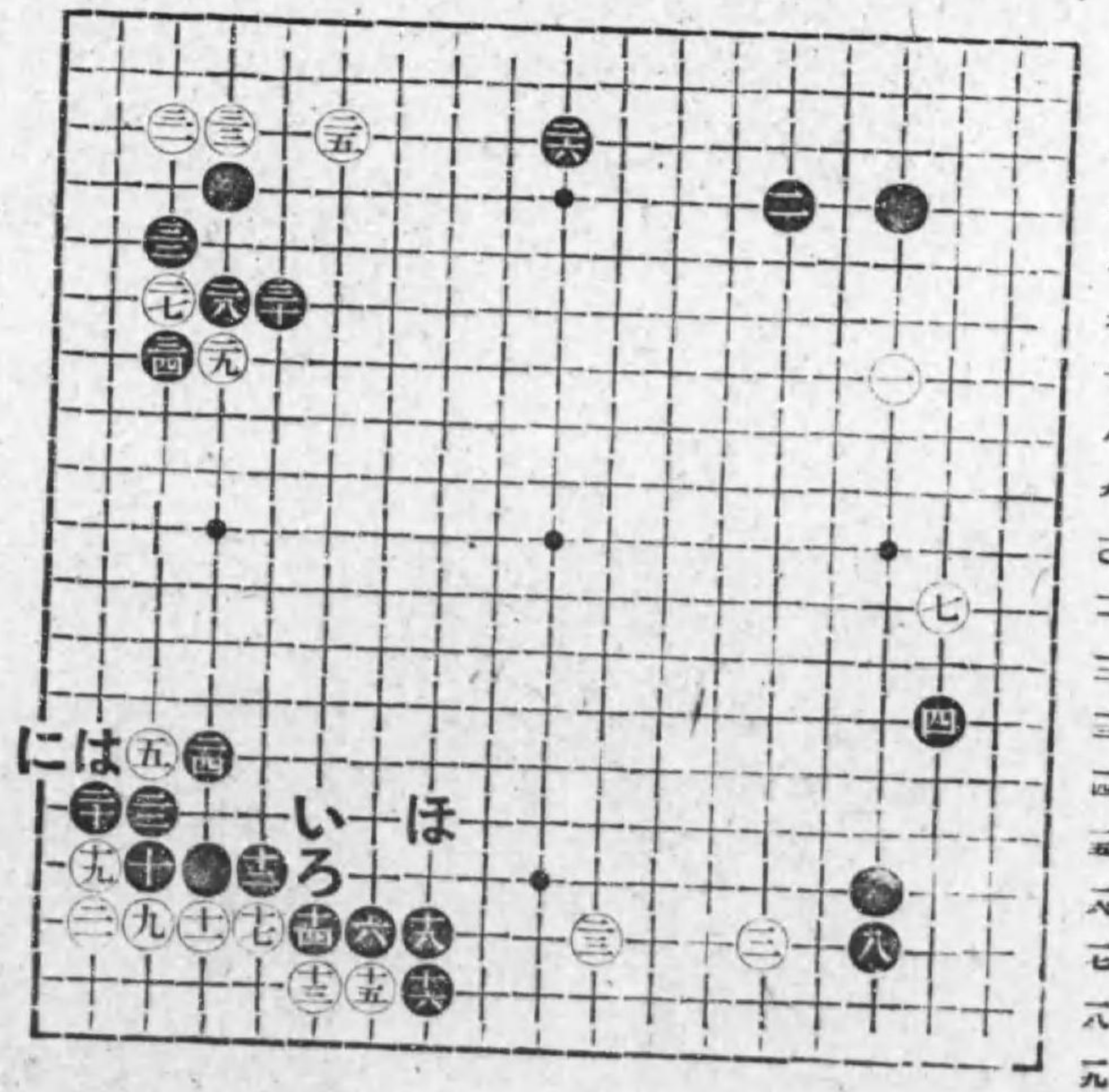
白九で十一なら、黒は(に)の打込みが良い。

黒十で十一、の時白(ほ)、黒(へ)、白(と)、黒轉じて(ち)となることも黒は良い。白に(と)迄出を止められることは、平常は黒が悪いが、斯様の形勢に於ては悪くはない。

ウソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ウソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒十で十一だと、白「レの三」、黒十、白「タの三」、黒十四となる。斯の定石は面白くないと、黒が思はゞ十六迄の定石も好い。黒十六は定石である。

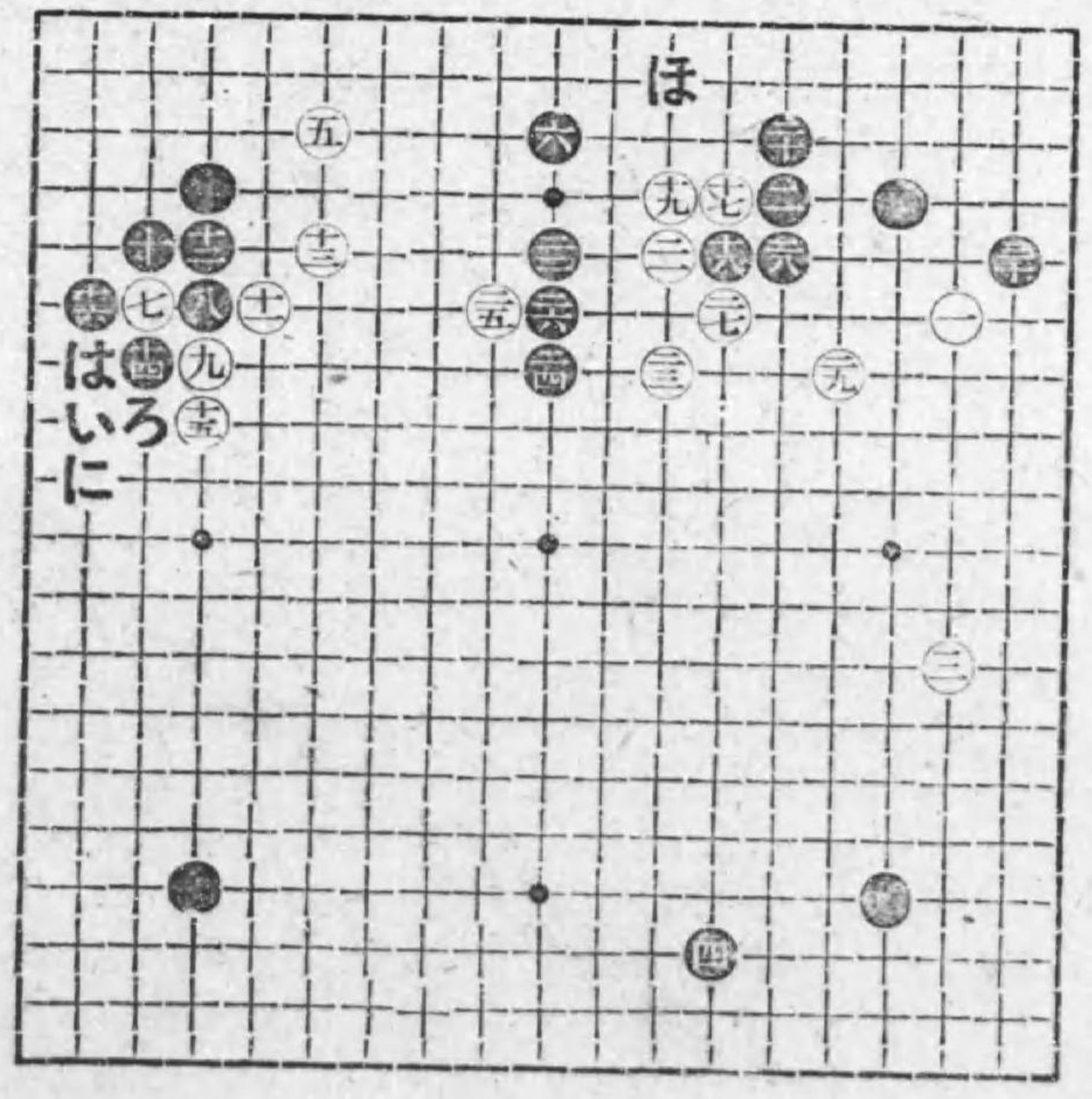
十六で二十二だと、白十六、黒「イ」、白「ろ」、黒「は」白「に」と其處を白に要領よく、止められる。

白「に」迄となれば、黒は「ソの五」の外ない。左様なることは、二十二に一手飛んだ、得位ひでは追付ない、布石上の不利。

黒十六と白七の一子を、打抜いてゐることは、白に十七と來られることを、十の時覺悟してゐる。

黒十八で「トの三」と下から受けは、消極的で甚だ不可置碁で多く負けるのは、其の爲 低位になり、地が細くなるに原因する。サア來い來いと十八と上から、應じて白十七を迎戦の外ない。黒三十で「ほ」の渡りなど、二十四以下がよほど危険でない、以上絶對不可。

ツソレダヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



重複だが前譜黒十六を一の飛びなら、七迄ともなる。白六は氣の利いた定石である。

六を「い」、黒「ろ」でない方がよい。

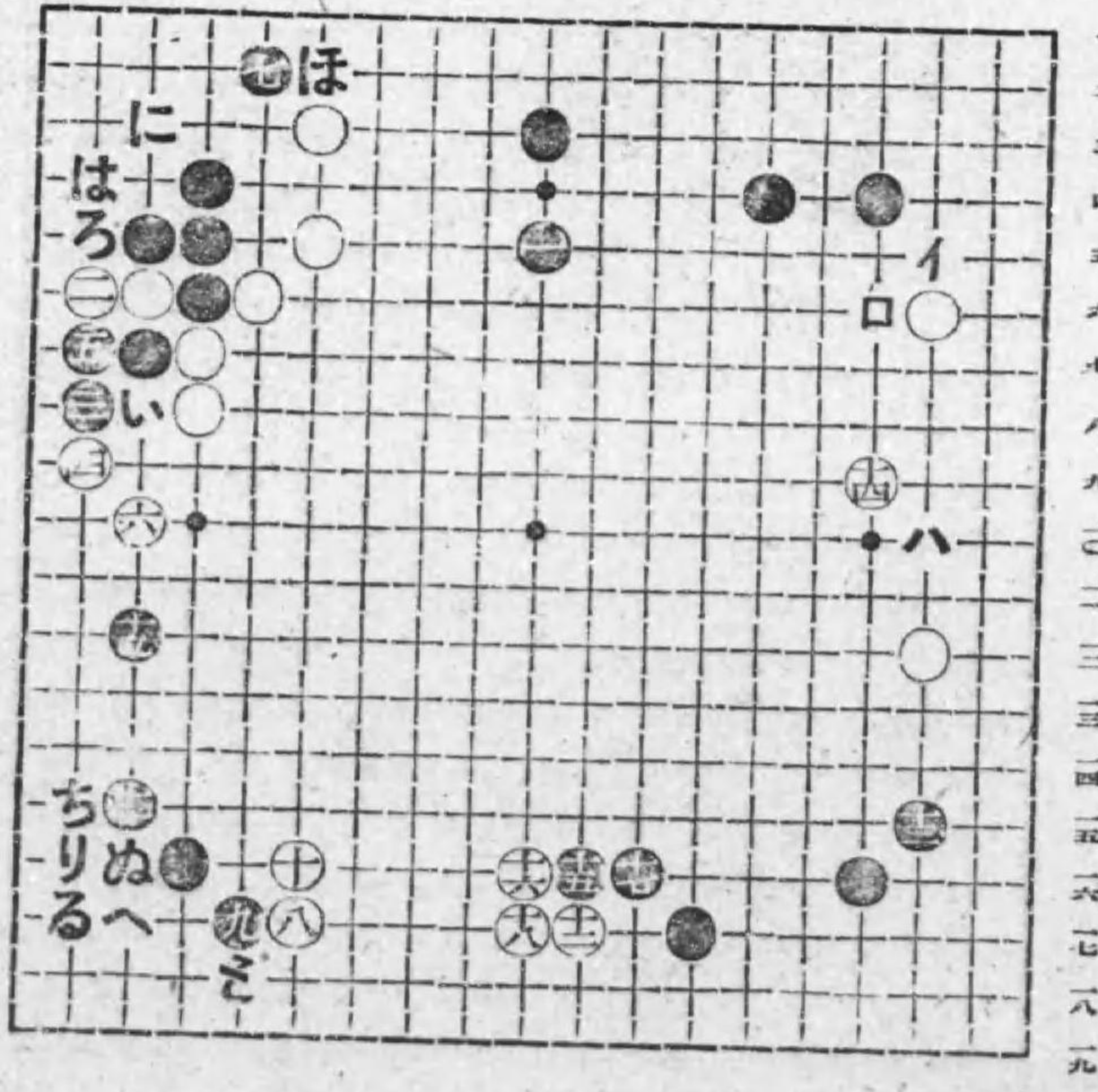
黒七を手抜きだと、白「は」、黒「ろ」、白「に」となつて黒は大危険。

白「は」で「ほ」だと、黒に手抜きされる。白六の方が強いから、白は「ハ」。即ち強い方へ黒を向はせる棋理。

黒九、十一は定石である。白十二で「へ」なら、黒「と」白「ち」、黒「り」、白「ぬ」、黒「る」で、白は何れにもならない。

黒十三で「イ」、白「ロ」、黒「ハ」と戦かつても良い。白十四と高く備へたのは定石である。十四を「ハの九」は位ひ低く、全局面より見て、見劣る。

ツソレダヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒四は、白五が(イ)なら(ろ)の布石を採る意味。
 黒十二は、白十三が三十三なら、(は)で良いから。
 尙ほ十二の意は、黒十二で十四、の時白に十二の所、又
 は「ニの八」と形を興えない爲めもある。

黒十八、二十の二段跳ねは定石である。二十で二十一
 だと、白二十、黒「レの七」、白「タの二」、黒「ヨの二」、
 白「レの二」となつて、白は隅に地が相當に出来、黒は尙
 ほ白より「カの二」と來られることが残る。

但し黒は他に好い所が有つて、先手を望むなら、其れ
 でも良い。白「タの二」、「レの二」の跳ねは、黒から「タ
 の二」と下がるに、自己に不利であるからである。

黒三十で「ヲの二」だと、白「ルの四」、黒「ルの二」、白
 三十三、黒二九に結び、の時白に(い)と付けられ、面白
 くない。八を捨て三十六迄の變化を、黒の採つたのは、
 二十六となつた方が堅固なる故。二十六迄の定石は、白
 二十七に對して、布石上三十六と有利になつた。

黒十は十二と飛ぶ前提である。十で十二をして白十三
 の時、黒十だと、白は二十一が定石である。

黒十白十一の交換は、布石上後で黒に都合が宜い。

黒十四、十六は十八と、白を兩断する爲。

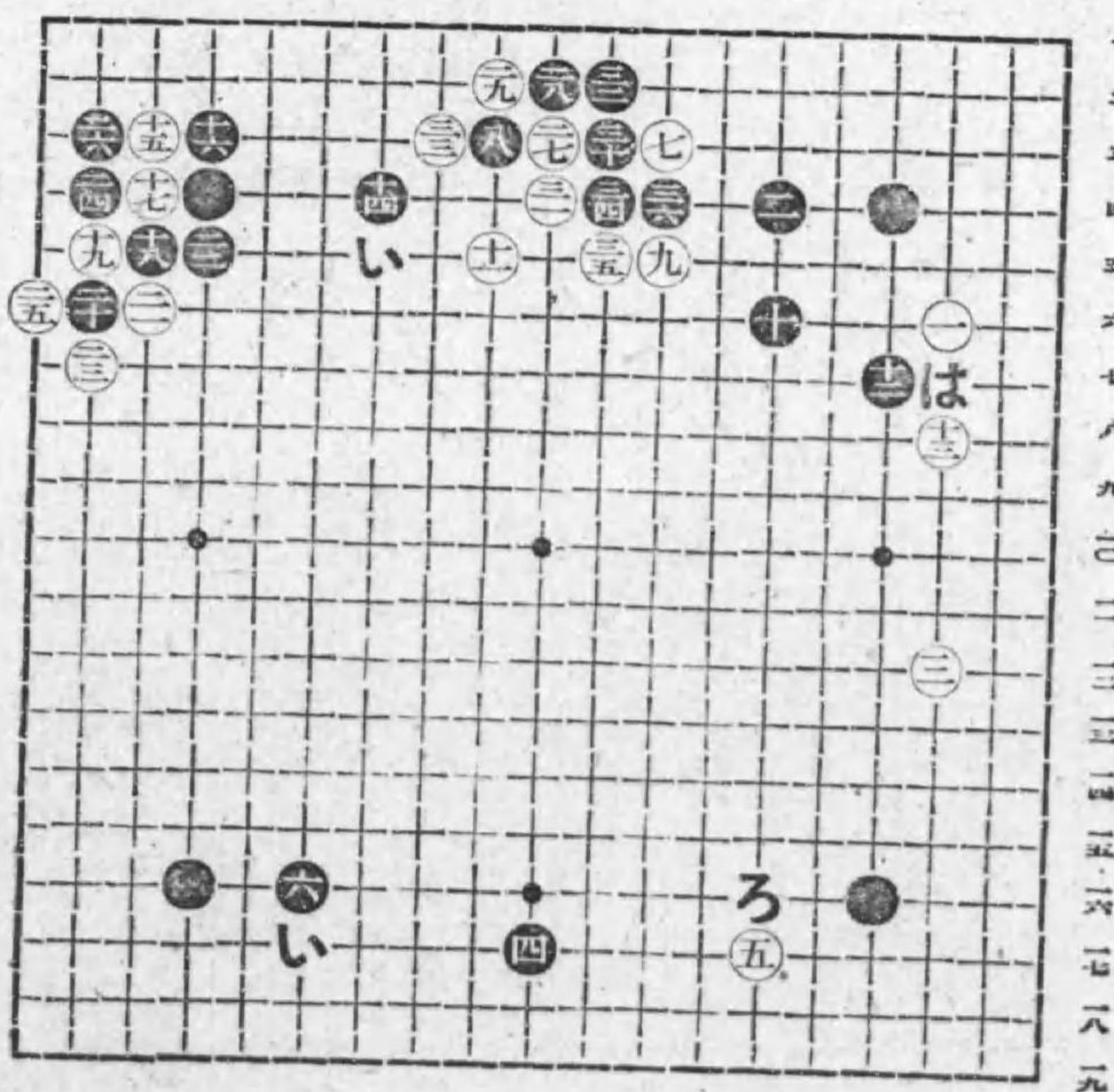
十八の兩断を望まないなら、十四で(イ)が良い。

白十九で二十一なら、黒十九、白「トの四」、黒「トの五」
 白「チの五」、黒二十四迄となる。そして白「への五」、黒
 「トの六」、白三十二は三十一に黒は切るのである。之れ
 は九以下の白の方を、白は極めて悪くする。

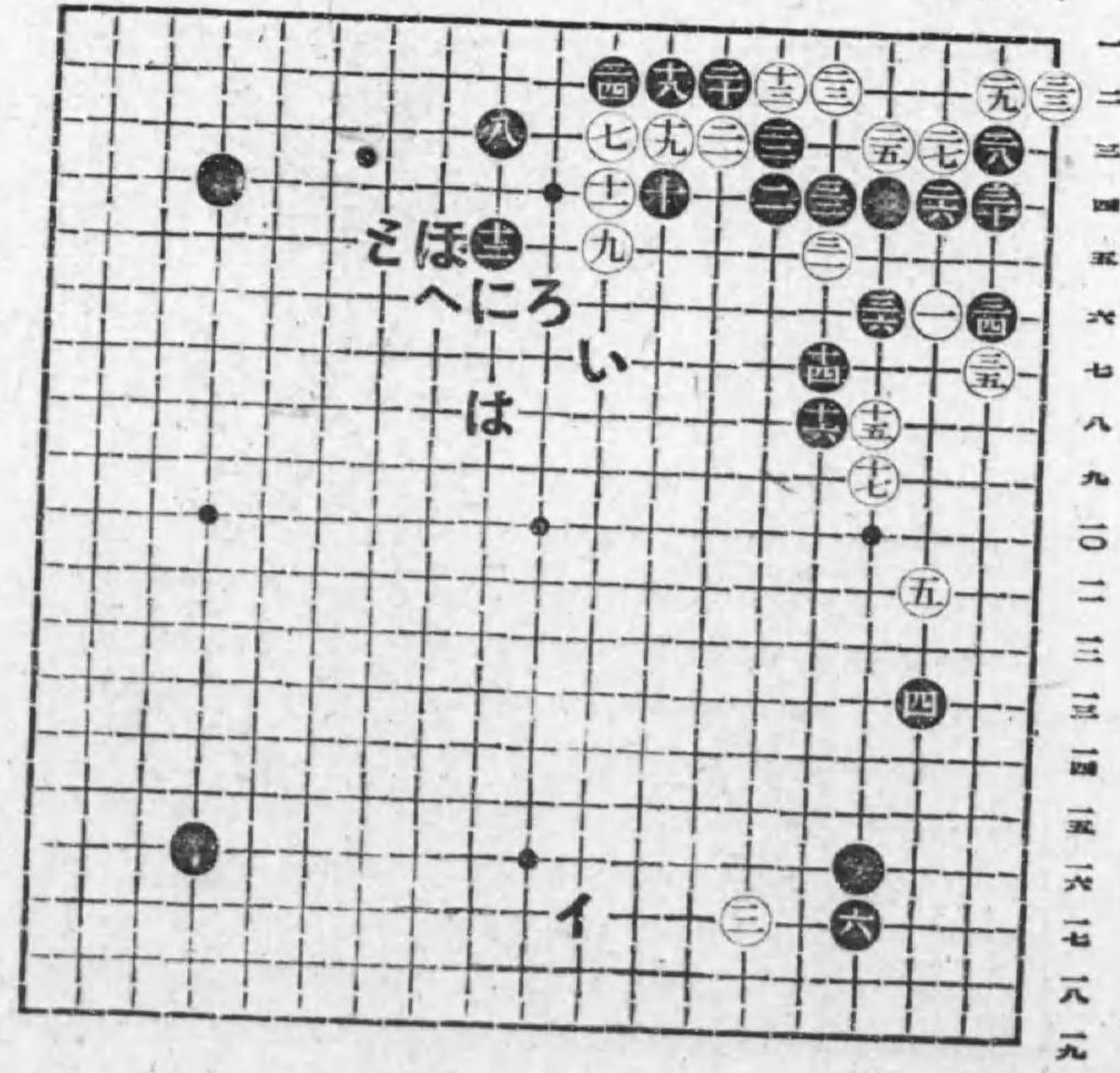
黒三十四、三十六の要領は定石である。三十四で三十
 六だと、白に三十四と下がられ、損得上が違ふ。

三十六となつては、白は「ハの七」の外ない。すると黒
 (イ)、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)
 となつて黒が良い。黒(い)の時白九以下を取らうと
 するのは、確に見極はめての上だ。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒十二は(イ)でも良い。黒(イ)は八が左右に利して、此上もない布石である。

が白十三と打込み来り、二十六迄となることを思はば十二は(イ)に優るとも劣りはしない。

黒十六で十七、白十九と白を渡らせることは、一局現在の形勢に於ては、黒が大いに悪い。

黒二十四は定石にして、また布石上の要點である。二十四を「ホの十三」だと、白(ろ)、黒(は)、白二十四となつて、白は外部に好勢。但し黒二十六となつて

二十四となつて、白(に)なら、黒「トの十六」、白「トの十七」、黒「チの十六」と、黒は十二を働かせ、三と七の白二子を攻めるのである。

白(に)を「カの三」なら、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)と其方の白を攻めても良い。

白一と切つたらどうかと、黒前譜二十四の時の疑問であつたらう。無理もないことだ、即ち白一と切られたら、二を三と出て行くことの、不安を。

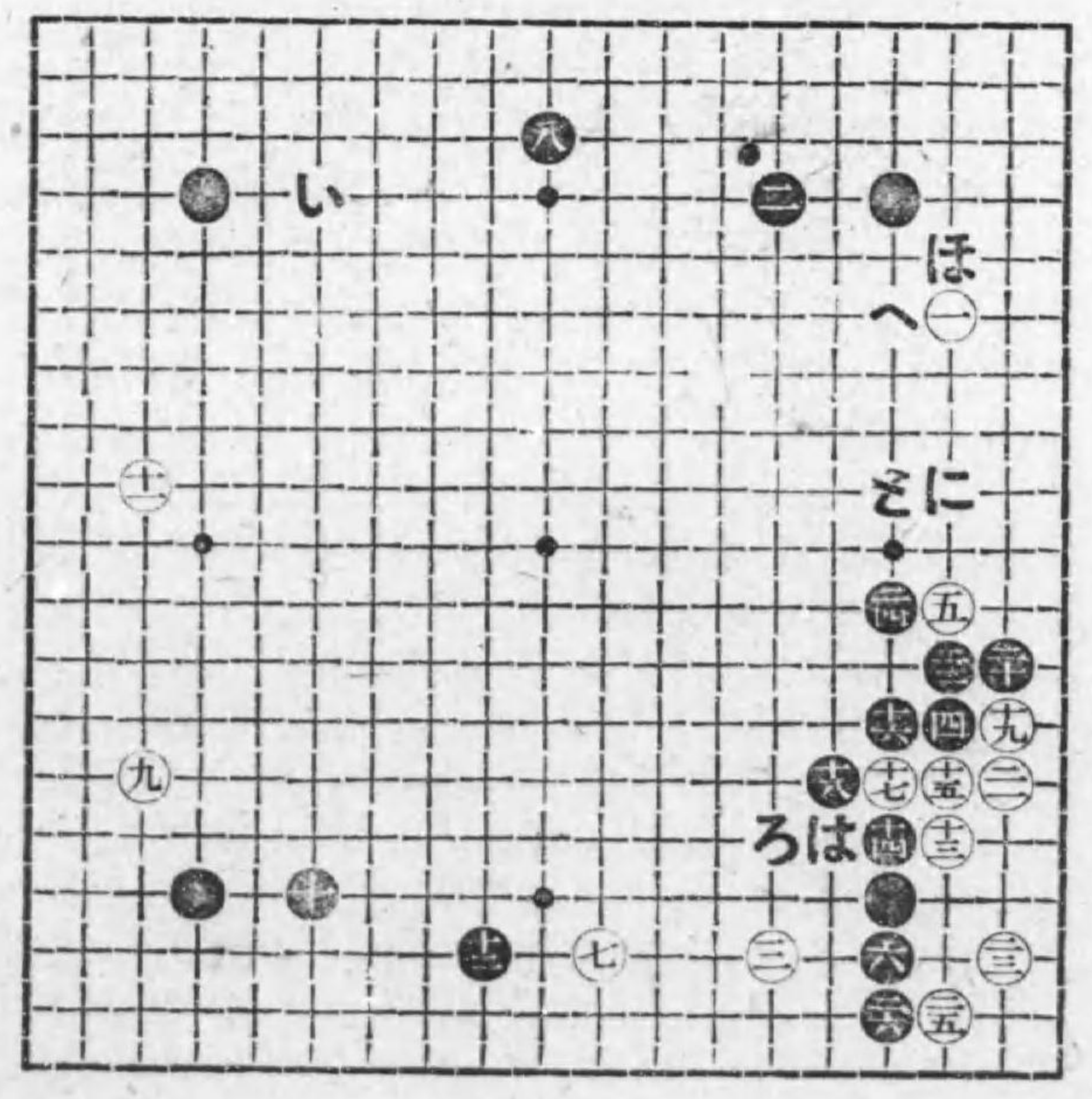
前譜黒二十四の腹中には、白一に對しては、二より二迄で、黒四子を捨て良いことであるからだ。

白十三で黒の四子を取つたが、七、八の交換、また九を打抜かした損、それに加えて、黒に先手を與へたことなどで、實は白の大損である。

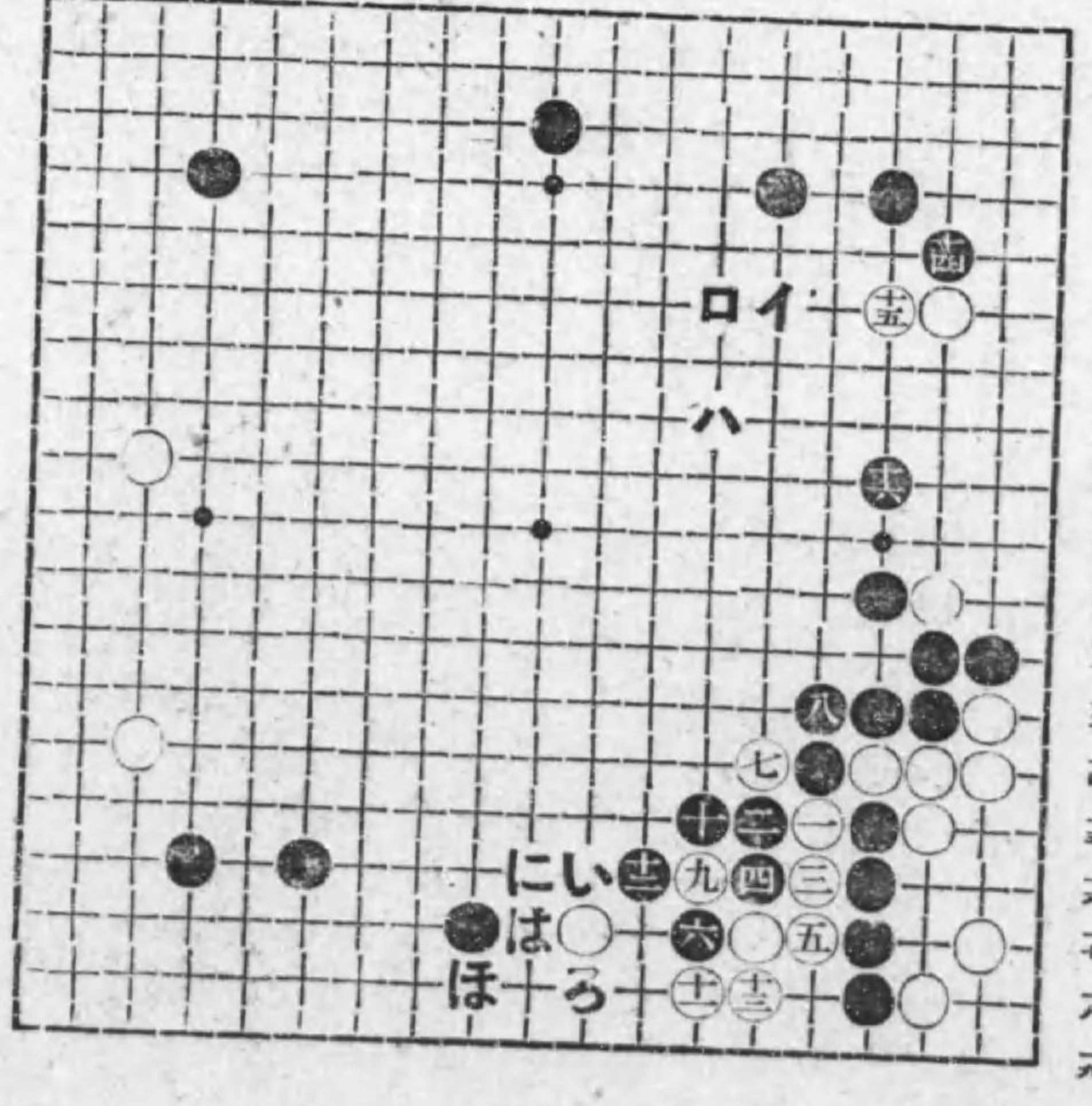
黒(い)には白は(ろ)と受けるより外ない。(ろ)を(は)黒(に)、白(ほ)は、黒「チの十八」、白「チの十七」、黒「メの十八」、白九に取り、黒(ろ)、白六に粘、黒ルの十六」で、白は一局放了の外ない。

黒十四、十六は次ぎに(イ)である。で、白(ロ)に飛べば、黒は(ハ)、(ハ)を「チの四」に受けなど、黒は拙劣である。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



白二十一の手順で二十九と活きは、完全な活きである
これは何故かは後譜に判る。

白三十一で「ホの十五」の切りは、前譜黒十二迄となつて白が悪い、ことは本譜でも同様。それでは三十一と切つてはと、三十三となつたが、白三十五で「イ」だと、黒三十八の飛びで、此方の黒は攻められない。又た三十四の黒も、差當り好い攻めが無い。

白三十五は悪手である、重くして。また地にもならない、即ち黒に「イの九」の走りあつて。之れ黒三十の定石が甚だ要點である譯。

黒に四十四、四十六と飛ばれては、白は七の方また四十三の方が、急を告げて治めるに困難。これは白が三十一と切り、次いで勢ひ三十五と出た爲めに因る。四十五の方へ黒が行く時は、「ハの五」が好い。其の次ぎは「ロの六」で白が大苦痛だから。

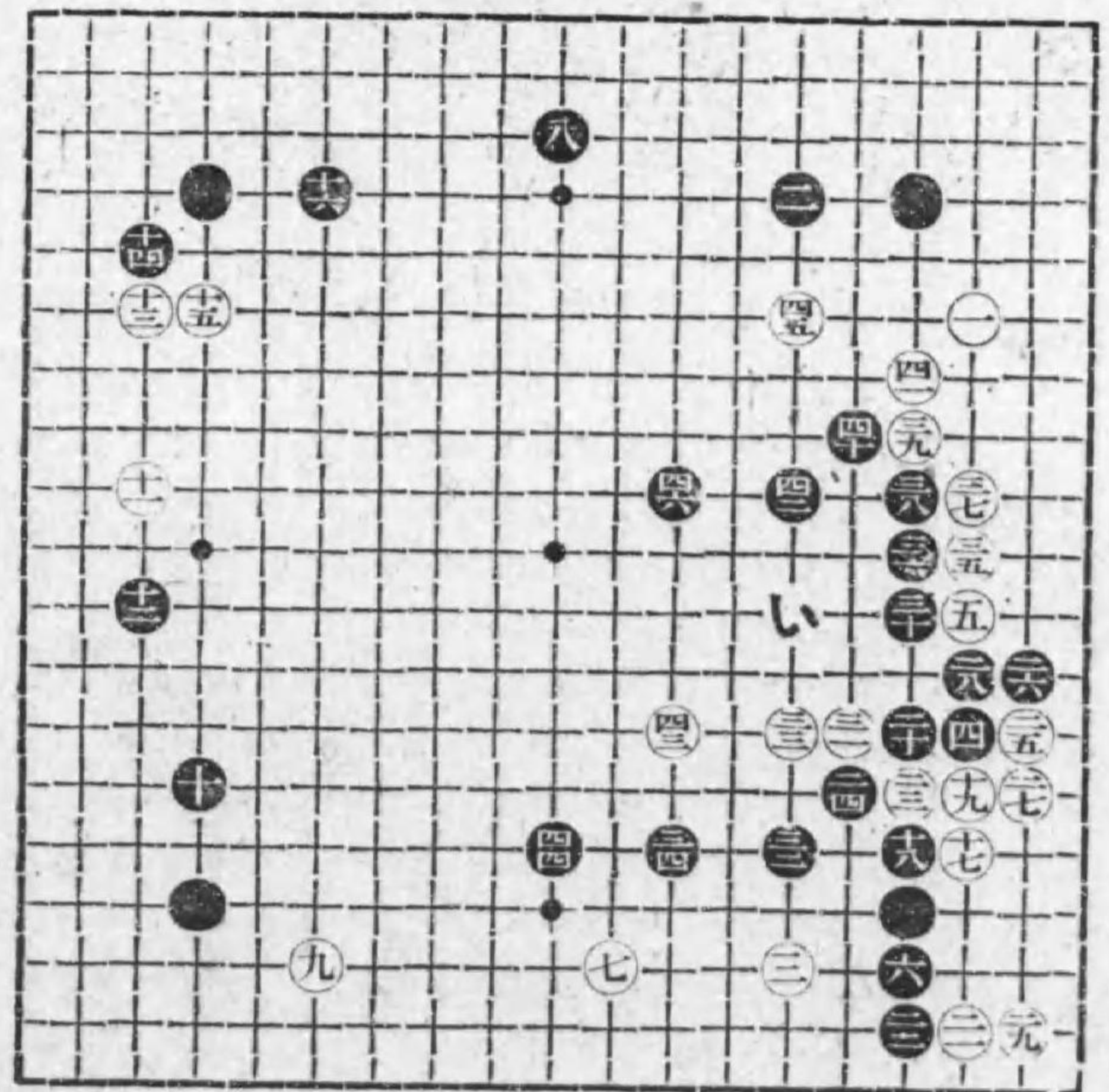
黒に一と備へられると、右下隅は、黒(S)、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)、白(ち)、黒(り)で劫になる。

白(ろ)で(は)、黒(へ)、白(と)で、白は活きだが、目二つの活きのみか、黒に適宜(ほ)と白一子を取られることがある。で、白は前譜二十一の手順を探る。前譜の如く本譜で、黒「ロの十七」の白が(へ)に在ればそして黒(い)なら、白は(は)で完全な活。

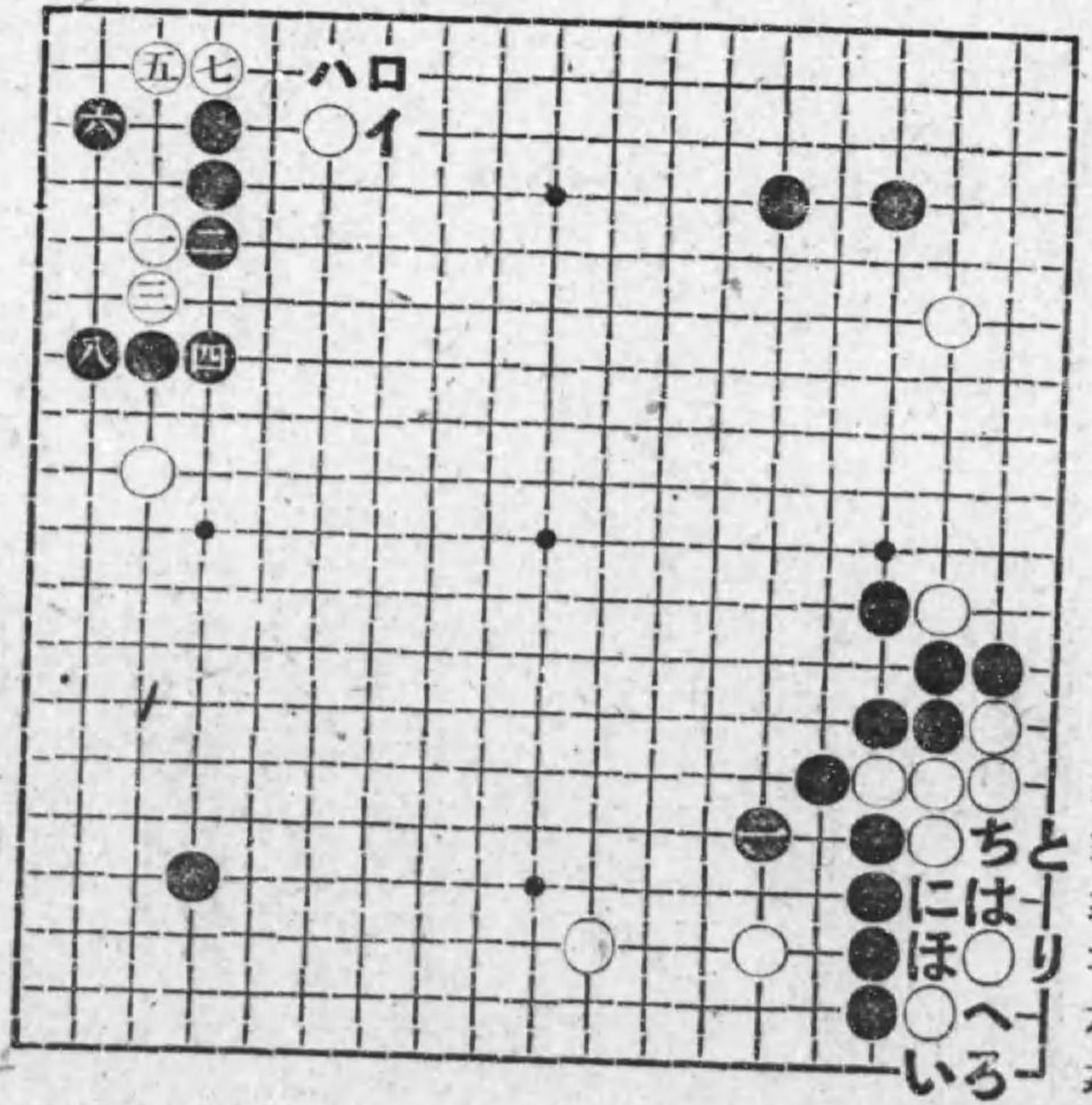
前譜白二十九迄の活きを、黒が望まないなら、黒は左上隅のやう、場所は違ふが應じるが良い。即ち白五に對して。

左上隅、黒六で「ソの二」だと、一と三の白二子が「レの九」に在る、白に味方して、黒は「レの九」の白を攻められない。斯う八は「レの九」の白が心細くなる。七の方「白」の三「なら、黒(イ)、白(ロ)、黒(ハ)が黒は定石。

ツソレタヨカワチルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワチルヌリチトヘホニハロイ



白「ハの八」「ハの十一」の在る時には、白一に對しては黒は二より六迄の二段跳ねが良い。十二となつて其隅の黒地は、大きい。黒が良い定石。

白十一と黒六の二子を取つても、「ハの八」が在つて、勢過重で面白くない。白が悪い定石。

白十一となつた堅固が出来たら、黒は十六を十九に立つことは面白くない。「ハの十三」の黒一子は捨て、先手を取るが良い。黒が良い定石。

黒二十二、二十四は其の白二子を攻める定石である。二十四となり、白は根據が無くなつた。次いで白(イ)なら、黒は(ろ)が良い。二十三の方は、黒(ろ)となると色々、眼形を無くする。

左邊白丸六子が在る場合も、右邊白十一となつた如きと、黒は見るが至當で、白(イ)、黒(ろ)、白(は)、黒(へ)は、(白は)、の時黒(と)は不可で、(へ)が良い。

黒十二は定石である。十二を十四だと、白十二で布石上、白は有利となる。斯様なことが、ツモリ、ツモツテ黒は置石の勢力を失ない、敗局となるのである。

白十七は黒が十二より十四迄と、棒粘ぎになつてゐる時、十六に對しての定石である。即ち將來白(イ)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)となつたとすれば、十が「ニの六」に有るより、斯う十七の方が、優ることは判らう。

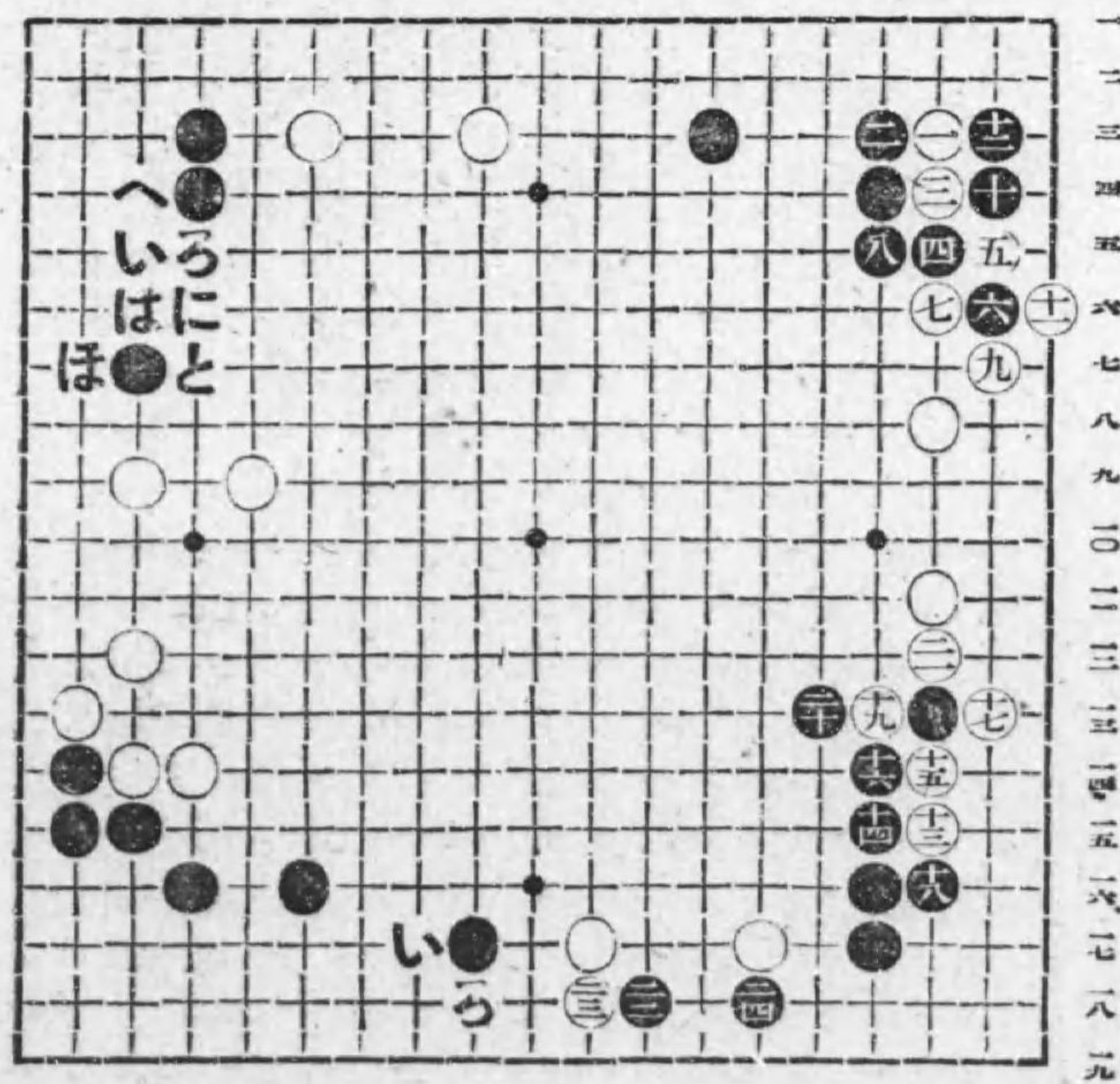
黒二十で「カの四」だと、黒十八が小さく堅きに過ぐ、といふ意味に於て、布石上黒二十は良い定石である。

二十六の方を急ぐ場合は、黒二十二、二十四が布石上良い定石である。

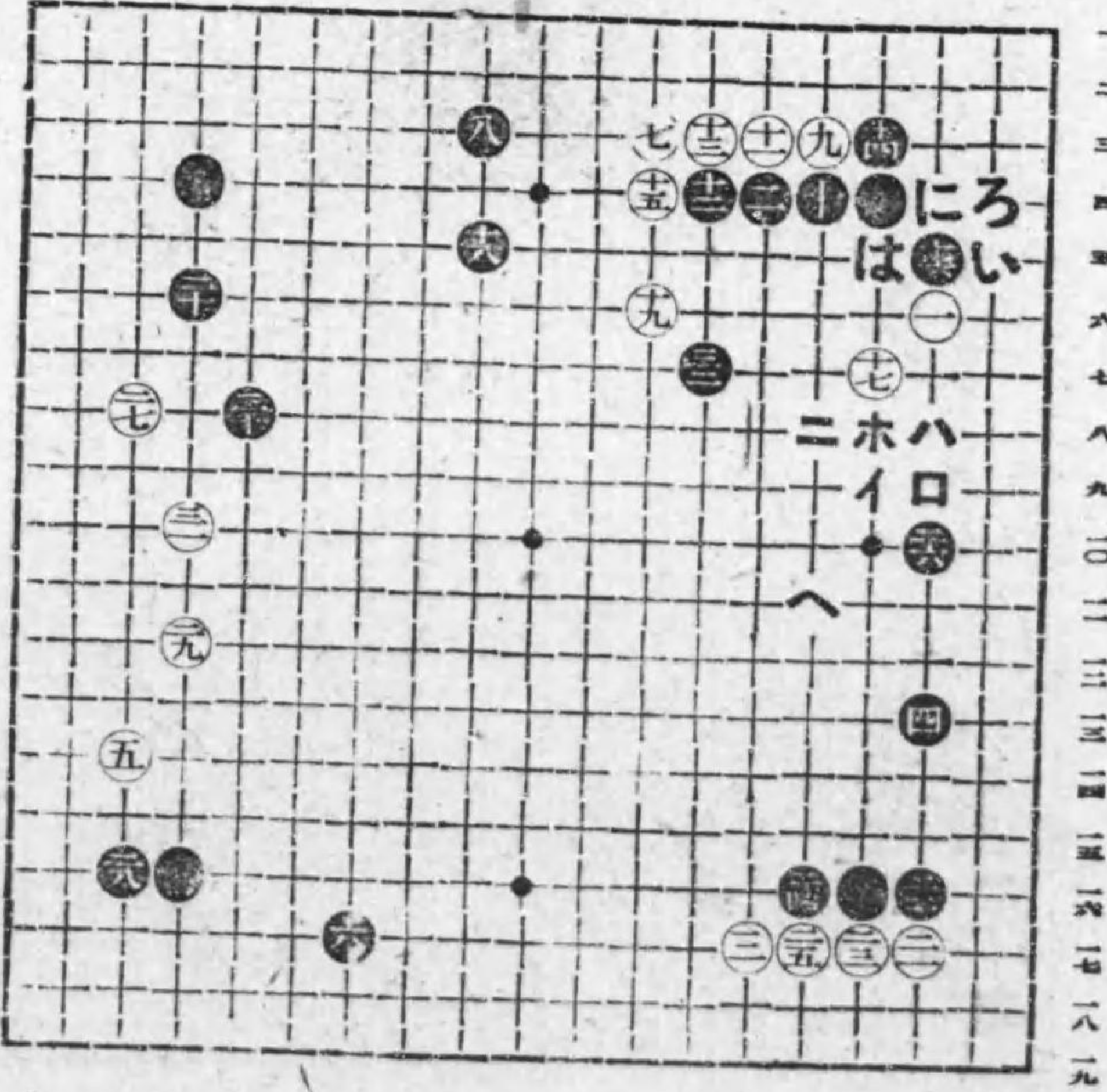
黒二十八で「レの十」の打込みは、白に三十と飛ばれ、二十と十八の間を薄くする。

三十二となつて、白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)は、其時黒(へ)が定石である。

ツソレタヨカヲラルヌリナトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲラルヌリナトヘホニハロイ



黒八で(い)、白(ろ)、黒(は)も黒は用ひて好い、定石である。其時白「ヌの十六」の守りなら、黒は(に)の打込み。白「ヌの十六」を(ほ)の飛びで、(に)の打込みを防げば、黒は九の點に攻入つて好い。

白十七の時には、黒は必ず十八と出るのが定石。十八で二十だと、白十八、黒(イ)となり、白十七で十八黒十七となるより、白は五子連続となつて強い。黒(イ)となつたことは、小さくなり、白(ロ)、黒(ハ)白二十二で黒は白に攻立てられる。

白二十一は定石である。二十一を「ソの十七」だと、黒「ソの十二」、白二十五に粘ぎ、黒「レの十一」となつて、白が悪ス。

白二十七の意は、黒二十八で「タの十二」、白「タの十一」、黒「ヨの十一」なら、白は「タの十」で、黒十二を悪くすることにある。

黒四十四となつては、白の敗勢歴然。

黒十を強く(い)と戦ふのも定石、また穩かに斯う十の受けも定石である。

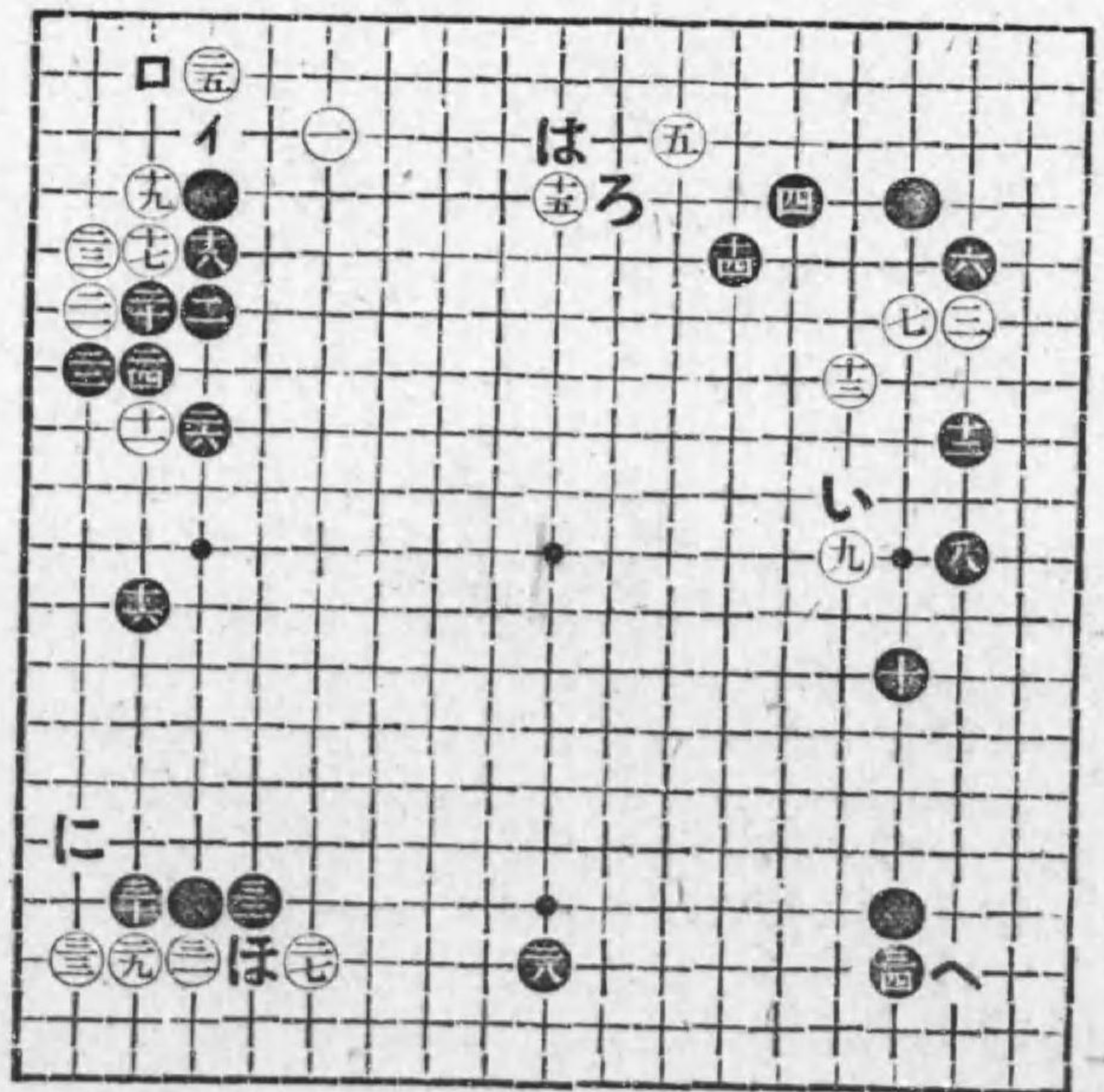
黒十四は十二、十三と交換したからで、其の意味が無くして、白が五と来た時直ちに、十四と打つ理はないと前にも言つた。本譜でも同様である。

白十五は黒(ろ)、白(は)となると位ひ低い布石となるからの備で、十五は定石である。白(は)と受けて後ち一手十五へ費すのは、斯う十五の時黒(ろ)とは来ないが、假りに(ろ)には、白(は)と受けは悪く、「リの三」が大いに良いとの理は、心得て欲しい。

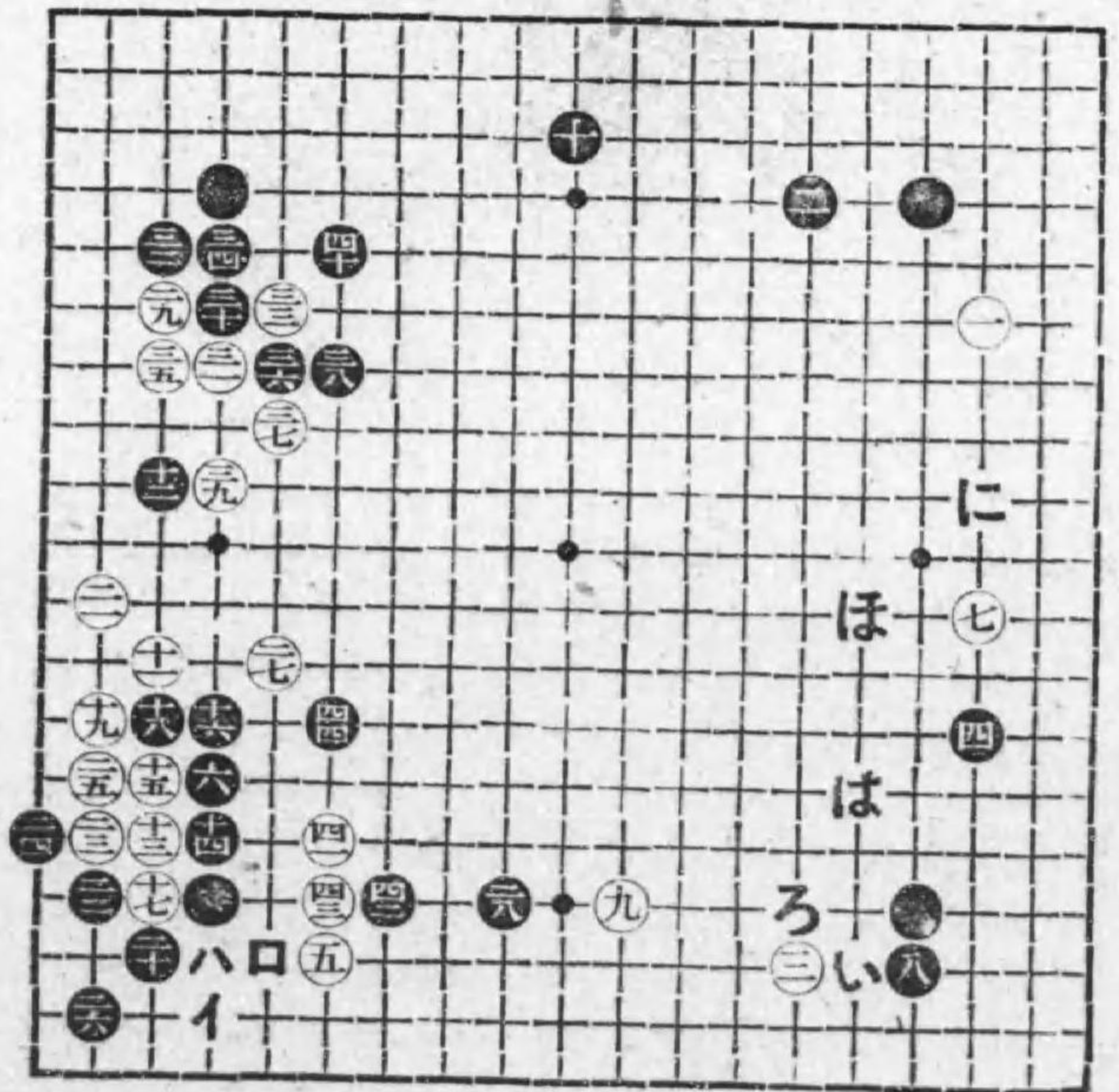
黒二十四となると、白二十五は一と一手連絡の定石である。即ち黒(イ)に白(ロ)で。

白三十三は後ち、(に)と飛込みの方で得の定石であるが、三十三を(ほ)でない故、二十七の方に缺點はある。黒三十四は、白に(へ)と入られる防ぎで、布石上甚だ良い定石である。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨレ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨレ



黒四は機を見て(い)に打込む、布石で、右下隅の備へとして定石である。

白十三に對して、黒十四と直様を受けてはいけない、白に形ち好く二十三迄調えられて。これは後譜で判る。

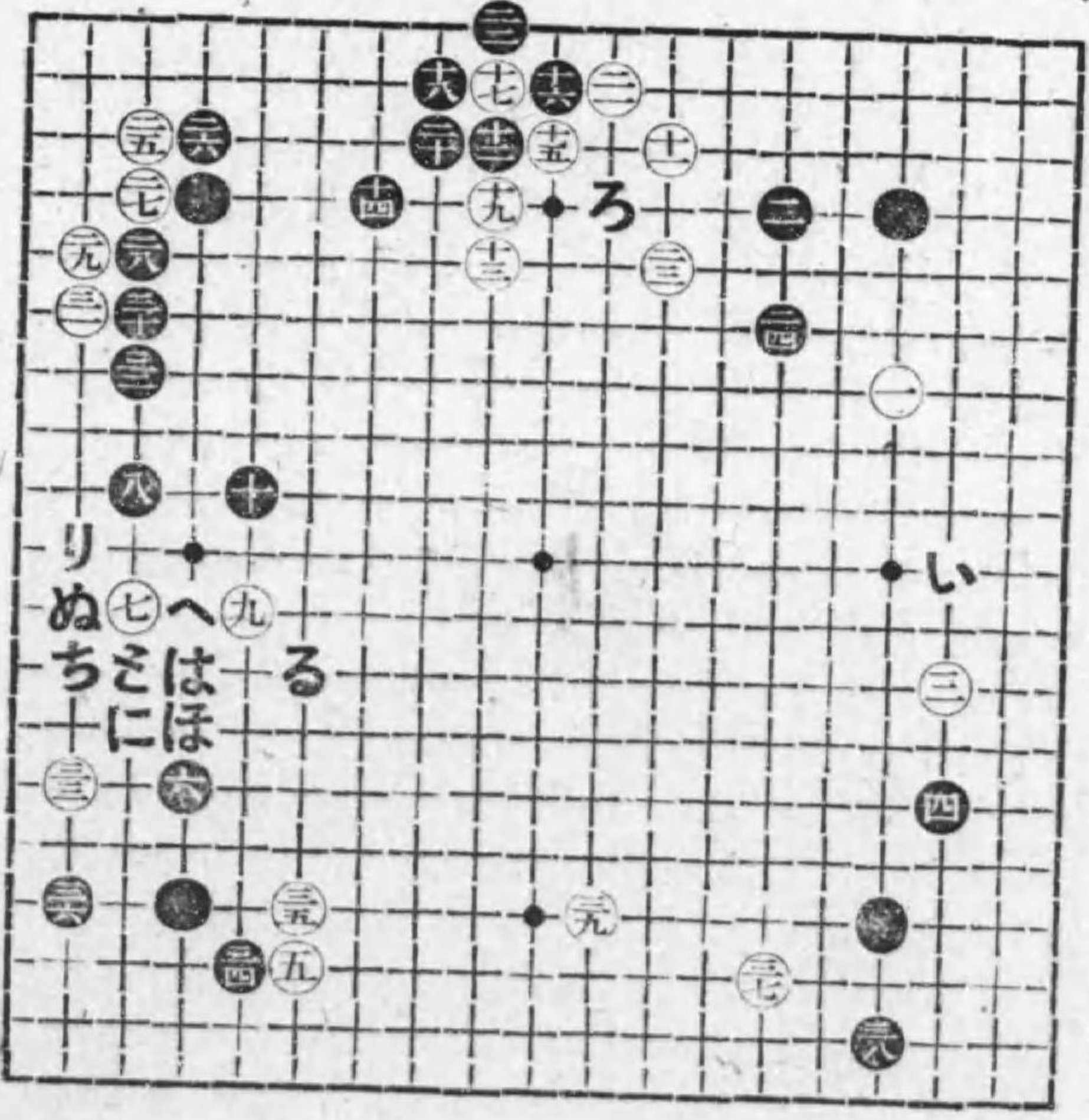
黒二十で二十二だと、白二十一、黒十七に粘ぎ、白(ろ)となつて、黒は「ヲの四」か「ヲの三」に一手を要する。

黒三十二迄となつては、黒は手数数を費した割りに地が無く、布石上悪いと見られよ。

黒三十四、三十六の受けは、左下隅を確かにして置く定石である。黒(は)、白(に)、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)白(ち)、黒(り)、白(ぬ)、黒(る)と白を攻めることが伴ふ。

黒三十八は定石である。白三十九となつた形勢に於ては、黒は(る)迄の攻か、(い)の打込みで、此上もない好機である。

フソレタヨカララルヌリチトヘホニハロイ



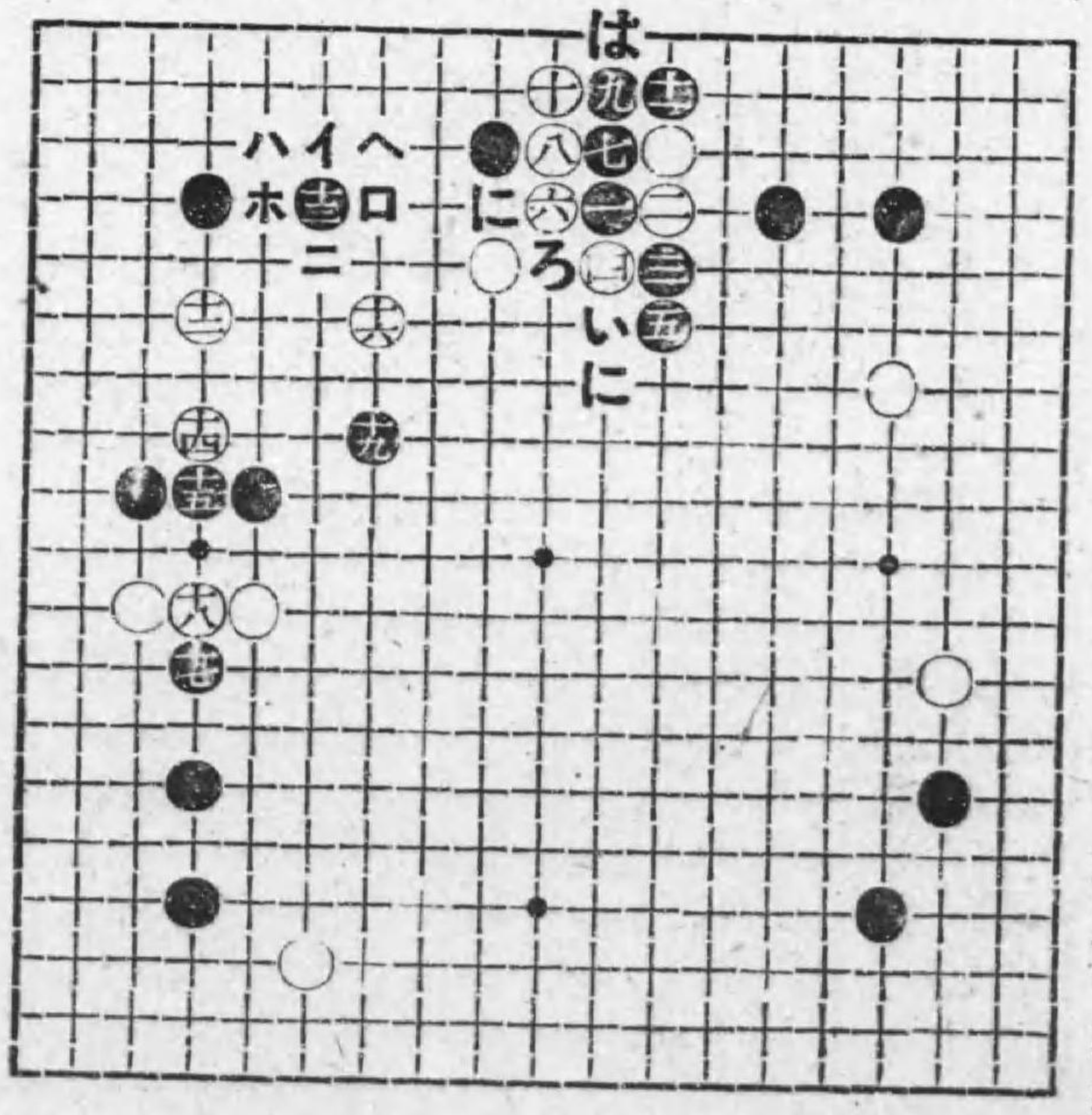
前譜黒十四の受けは前譜白十三で、二十三、黒二十四そして白十三の時である。前譜白十三に對しては、黒は本譜一が良手で、従つて白十三の、ゴマカシ、曝露する。

黒十一迄となつては、白は二子取られて大いに損。黒十一で(ス)、白(ろ)そして十一となれば、黒は此上もないが、さうは問屋で卸さない。白(ろ)で十一、黒(ろ)、白(は)、黒四に粘ぎ、白(に)となる。これは十一となるより黒が悪い。

尙ほ一言するが白二で六なら、黒八、白二、黒四、白三、黒(い)、白五、黒(に)で黒は大いに良し。

白十二で(イ)、黒十三、白(ロ)、黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)、白(ヘ)、黒十二迄は、黒が地大。白(ヘ)迄は地小で、白は甚だ不可。
黒十九の好手には、白は困る。

フソレタヨカララルヌリチトヘホニハロイ



前譜黒十九の好手は、次ぎに一より七迄の意味である
 黒七となつて、白一の粘きは、黒(イ)で、白は後とがど
 うにもならない。で、白は八と劫の外ない。

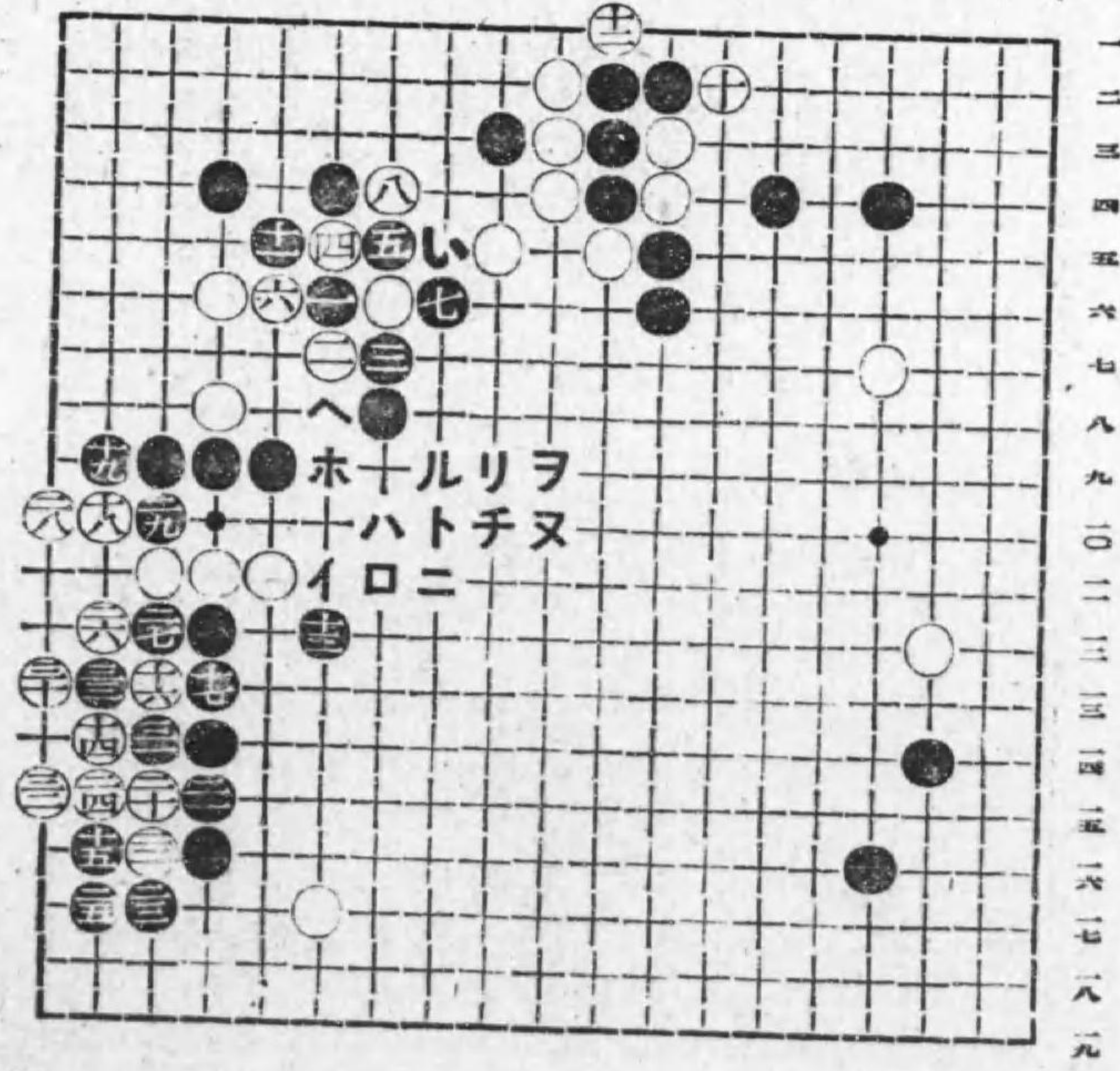
黒九、一の所に取り、白十の劫立てに應ぜず十一と取
 り、白十二となつたが、トテモ十二位ひの得では、左上
 隅黒地の大には及ばない。従がつて勝敗は、黒の大勝と
 決する。

黒十一と打抜いた堅固は、延いて十三の攻めとなつて
 白は逃げるに大困難だ。

白十四で(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)、黒
 (ヘ)、白(ト)、黒(チ)、白(リ)、黒(ヌ)、白(ル)黒(ヲ)
 となることは、白は死に優る苦痛だ。で、白十四より其
 方に活きを求めても。

黒三十三となつて、白は大苦しみ。白三十二を三十一
 だと、黒は三十。

イロハニホヘトチリヌセカヨレフ



白九は九を(い)だと、黒(ろ)、(い)を(は)だと、黒(れ
 又(ろ)、更に九を(ろ)だと、黒は(は)、其の(ろ)を(に)
 だと黒九で、白は都合が悪く、一ツ變つて打つてやらう
 の考へだ。

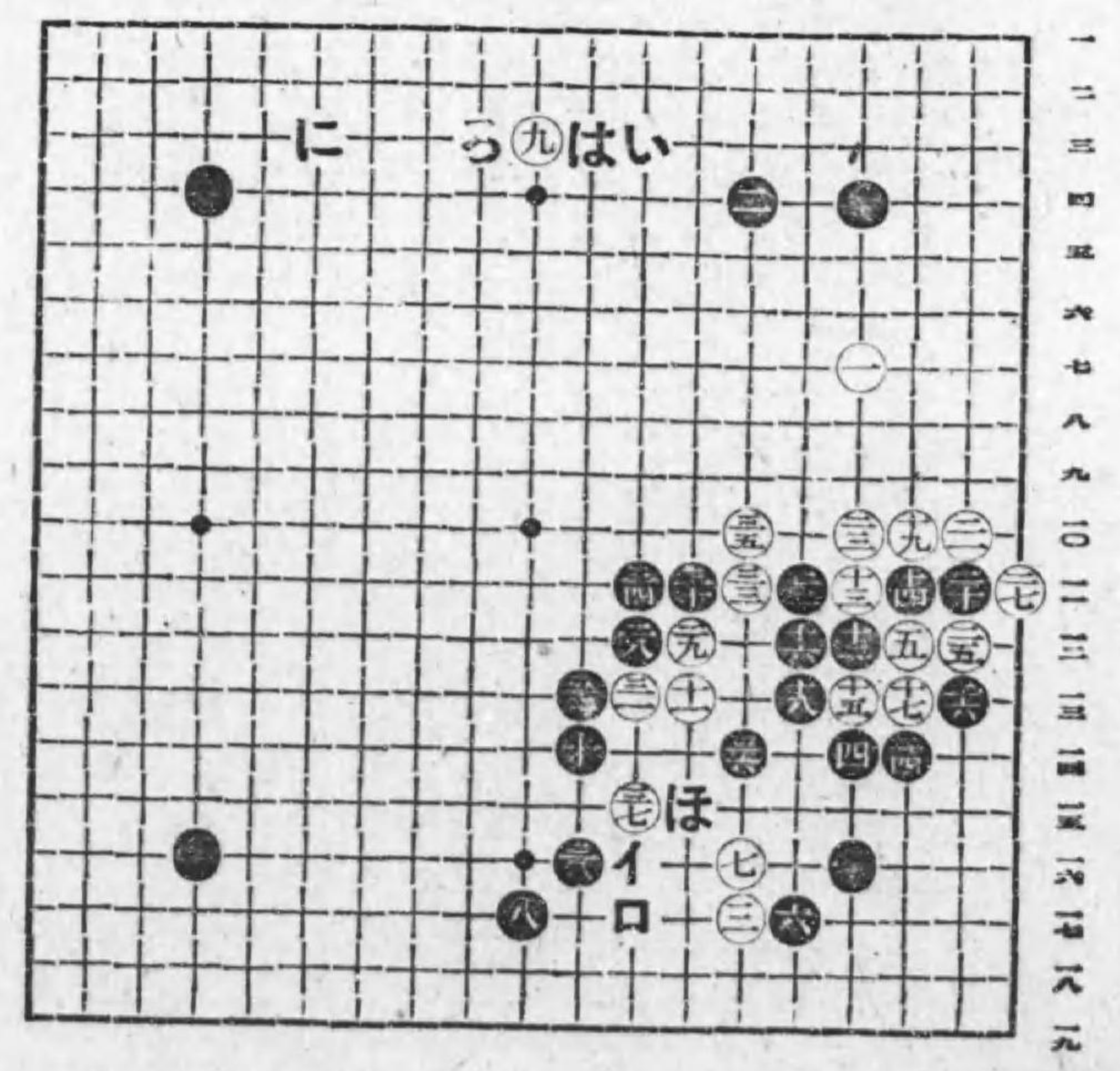
白九に對して黒(い)は二との間が狭く、黒は現在採る
 布石ではない。九に對して其方なら、黒は「ワ」の「三」が宜
 い。がすると白は先手で、黒に九と中央好位置を占めさ
 せぬことをしたから、布石上有利だ。

黒十は白三と七を攻めながら、中央に勢力を張らうと
 いふ目的だ。

黒十四は平常用ひてはいけない、白十一の方へ對して
 の目的があるからだ。其の爲めに十四は定石である。

黒三十六となつて、白(イ)だと、黒(ロ)で同じく(ほ)
 と断ることがある。三十六となつては、白の負け。斯の
 白の悪い原因は、九で其方に何とか備へないからだ。

イロハニホヘトチリヌセカヨレフ



黒に十と来られることを知られては、白九と黒八の頭上に冠して、黒に二十一と受けさせやうの考へは、無理である。

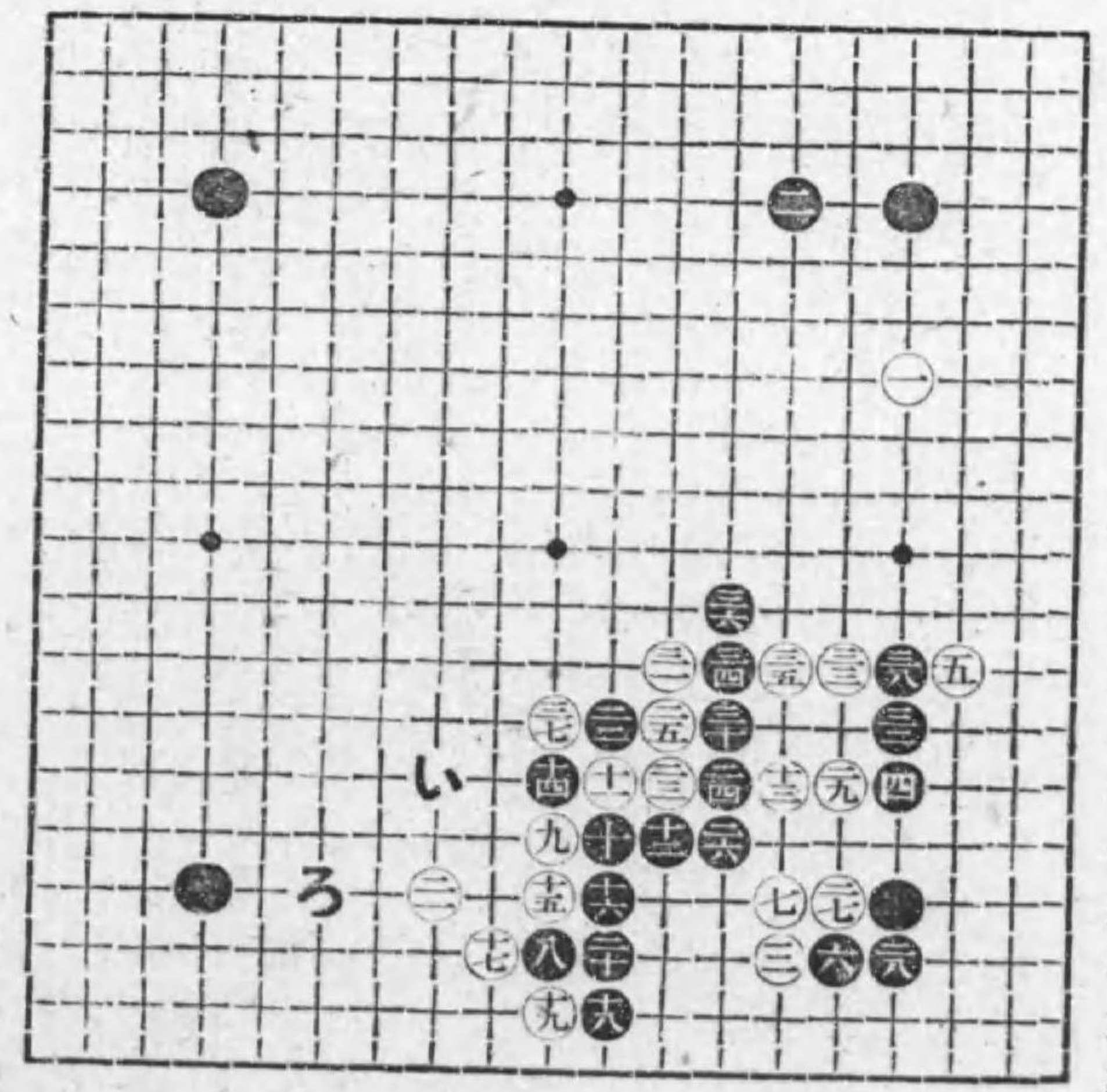
黒十二で十六などは引込み思案だ。黒十四で二十三だと、白に十四と粘られる。黒十四の切りは定石である。十四と切られては白は、二十一迄で九を取られない要がある。

白十五で「ホの十三」だと、黒に「ルの十五」と九を抱えられ、白は布石上大いに悪い。

黒二十二は定石である。二十二で二十三などは俗に愚筋といふ。

白二十三で「ホの十三」だと、黒に二十三と十一を打抜かれ、そして白(い)又は(ろ)だと、黒に三十二と出られ、白三十八なら、黒に三十三と切られて前途は悪い。白九は十が當然である。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨメソツ

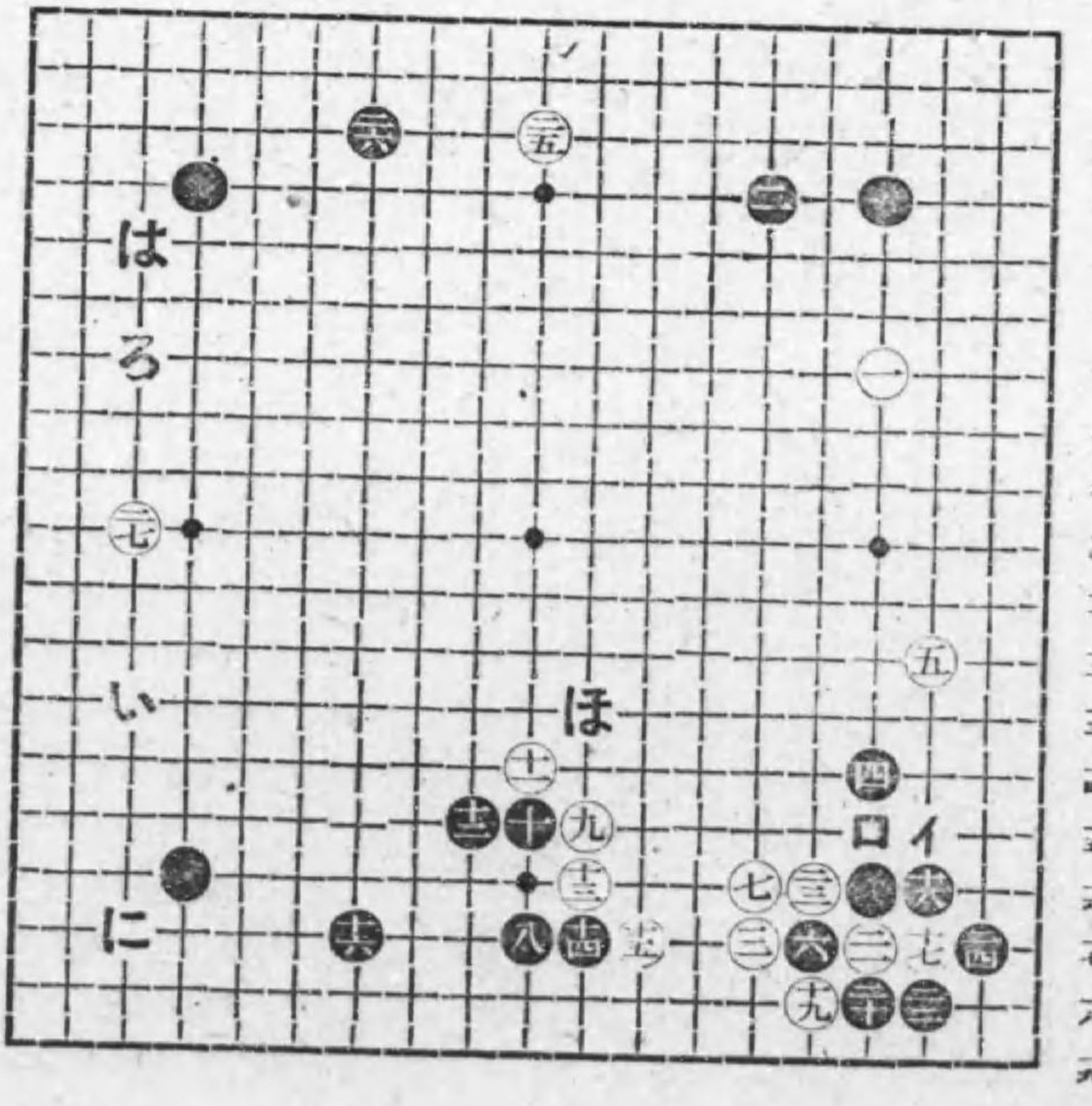


黒十は定石である。十を假りに(い)、白(ろ)、黒(は)だと、白「ルの十六」、黒「ヲの十七」となり、黒は不利の布石となる。其時白に(に)と入られて。

黒十四、十六は定石である。十四を「ルの十七」だと、白に(ほ)と好形を與え、白に「カ」の十六と来られる備へを其處に一手要する。斯う十六迄は左下隅に便じて、黒は「リ」の十四に切りがある。此處に先後の相違あり。

白十七で(は)だと、黒は二十五の點が良い。黒の應手を試みた白十七に、黒十八で十九だと、白(い)、黒(ろ)白「ロ」の十四となる。左様なつては黒「リ」の十四とは切りにくい。即ち白に「チ」の十四と其の線を押され、黒は右下隅の一團に脅威を受ける。で、黒は二十四迄の定石で受けた。が二十四迄は、白五が有ること、又は上述の意味でのこと等を考へに入れる要がある。即ち白五が無ければ、黒十八は十九。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨメソツ



前譜白二十七となつて、黒は勝勢を定める問題が本譜である。

○ 黒一は無論白が二と入つて、十五迄となることを知る即ち白二で十六なら、黒は三の固めで好いからである。白八で十、黒十一、白十二だと、黒八、白十四となつて白は後手を引き悪い。黒十五は十三のあるのに一寸馬鹿らしい感があるが、實は然らず白に十五と出られると、其の一手で黒の厚味は消える。十五は一の時に見越した定石で、斯の厚味で上邊白丸左邊白丸の、白二子へ脅威を與えたものである。

□ 白十六で十七なら、黒は「レ」の十二。白十八で「ソ」の十六なら、黒は十八。黒十九は定石である。白(い)なら黒は「レ」の十四。又白(ろ)なら、黒はこれ又「レ」の十四。

黒十九に白(ろ)なら、黒は轉じて(は)。
黒十五の堅固は、ザツト、新様な後々で、勝勢は成つたと云つてよ。

黒四を十五だと、白は三二だから、黒四は白の裏を行くもので、定石である。

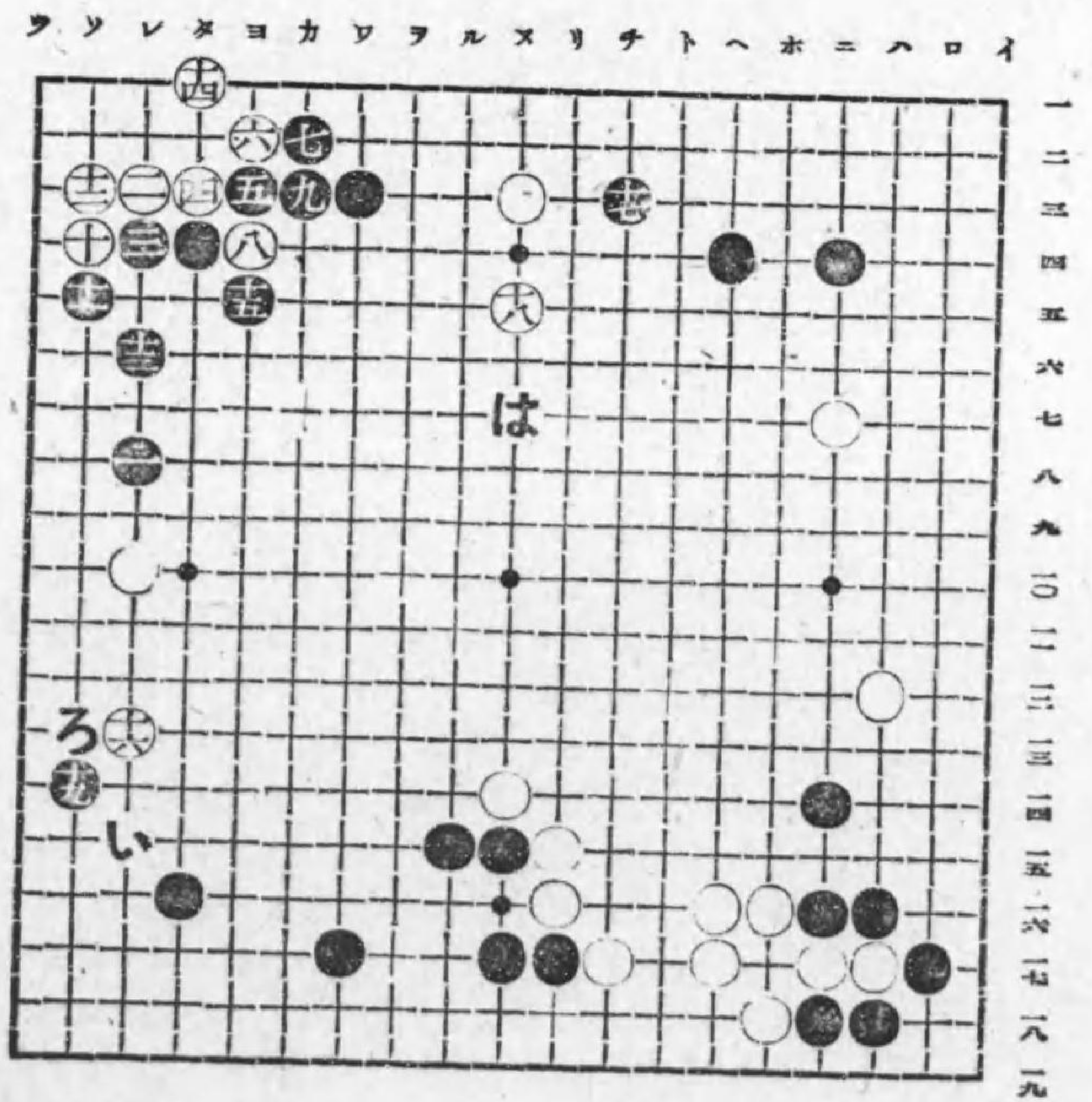
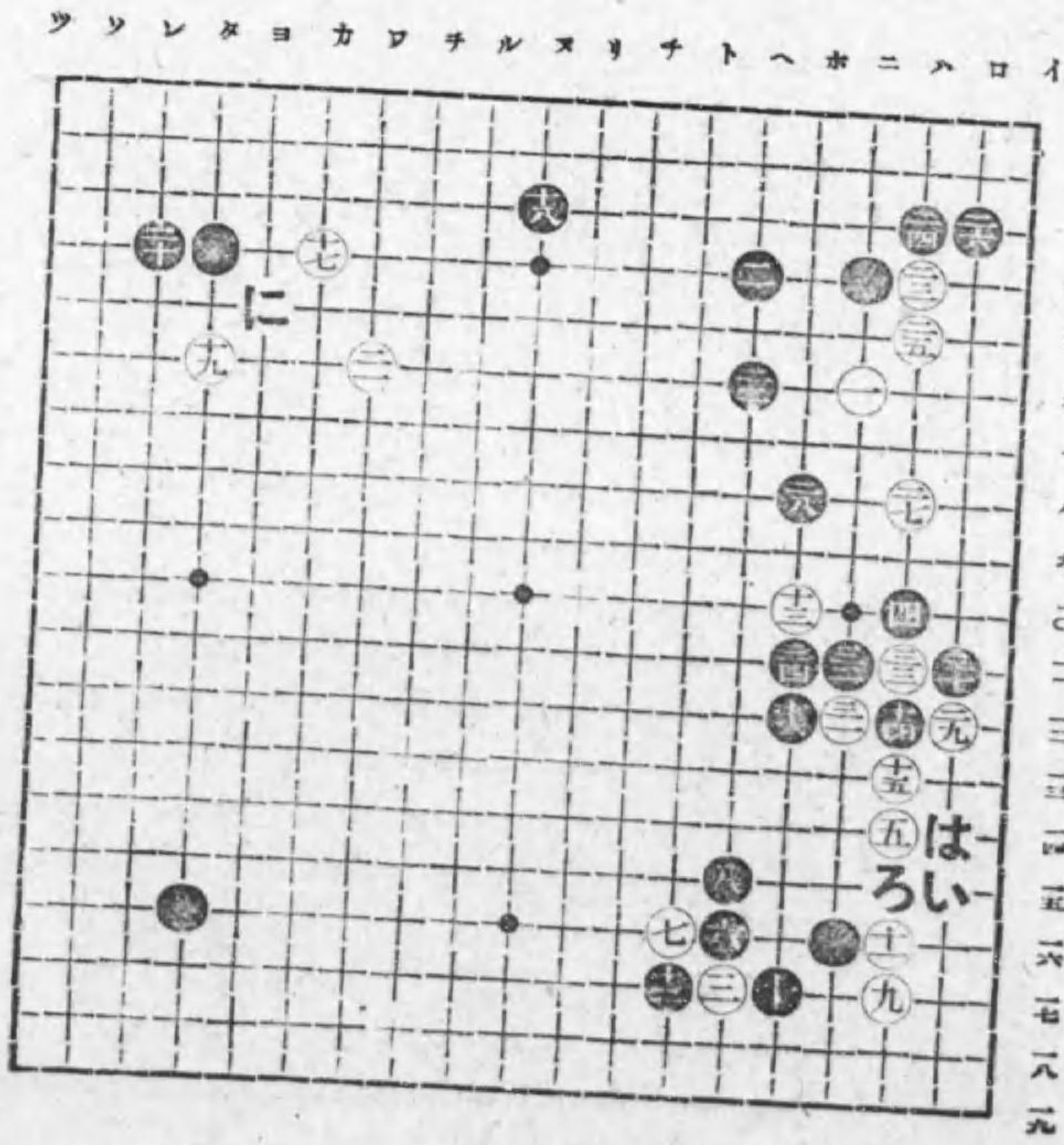
□ 白十五は黒(ス)、白(ろ)、黒(は)となつては悪いからの備へで、定石である。

黒十六は輕快であつて、定石である。十六を三十一は重い、步調である。

□ 白十七は、黒に十九と受けさせ「リ」の三を占める考である。

黒十八は其の白の裏を行く、定石である。

□ 黒二十を(に)だと、白は「レ」の三が定石であつて、布石上良し。白「レ」の三に、黒二十なら、白「タ」の三。黒二十を「タ」の三なら、白は二十。其の何れも白には、地が出るが、黒は地が無くして、攻められる立場となる二十は趣きあつて、良手である。
黒三十、三十二は定石である。



前譜黒二十を一だと、黒は「ヌの三」に控えがある關係上、三の方を探む。

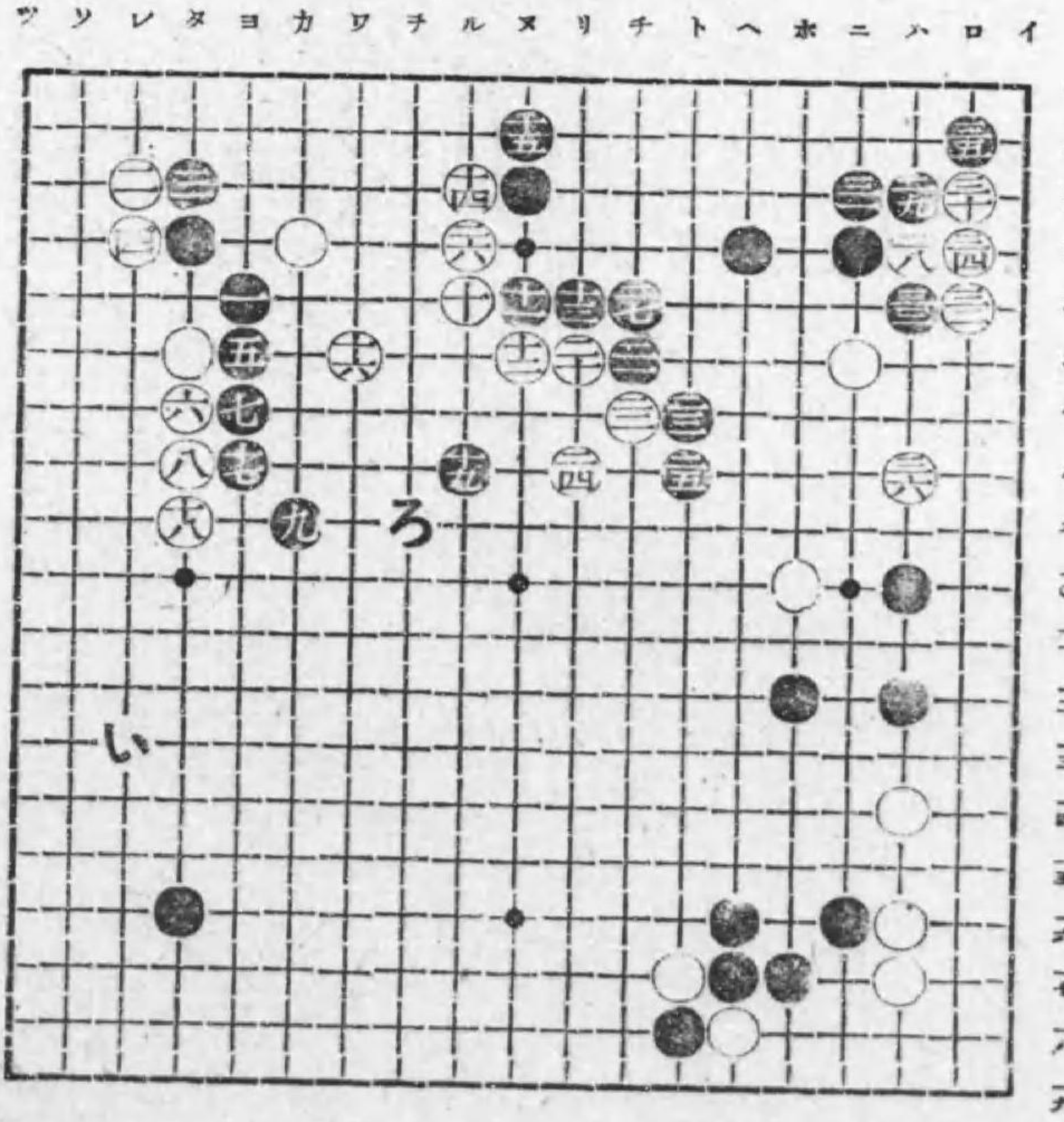
黒九は定石である。九を十一だと、其點を白に占められる。九の所は黒九の際にあつては、双方必争の好點である。即ち中央を目差して。

黒十九を假りに(い)だと、白に(ろ)と來られ、其方の白は好調となり、二から十八迄には、地を取られて十九と、白を急攻に出ても、二十六迄で白は眼形あつて攻められぬ。之れ白十六、十八の良手にある。

黒十七で「リの七」だと、白「ヲの七」で白に好調子を與えて黒は面白からぬ。

白二十八、三十は「ニの六」の一子は、捨てる考だ。即ち黒三十五で「ハの六」、白「ロの六」、黒「ハの七」は、白「ハの二」の活きで良いからである。

斯様な形勢を招いては、黒は面白くない。で、黒一は前譜の如く、本譜四か三が良い。



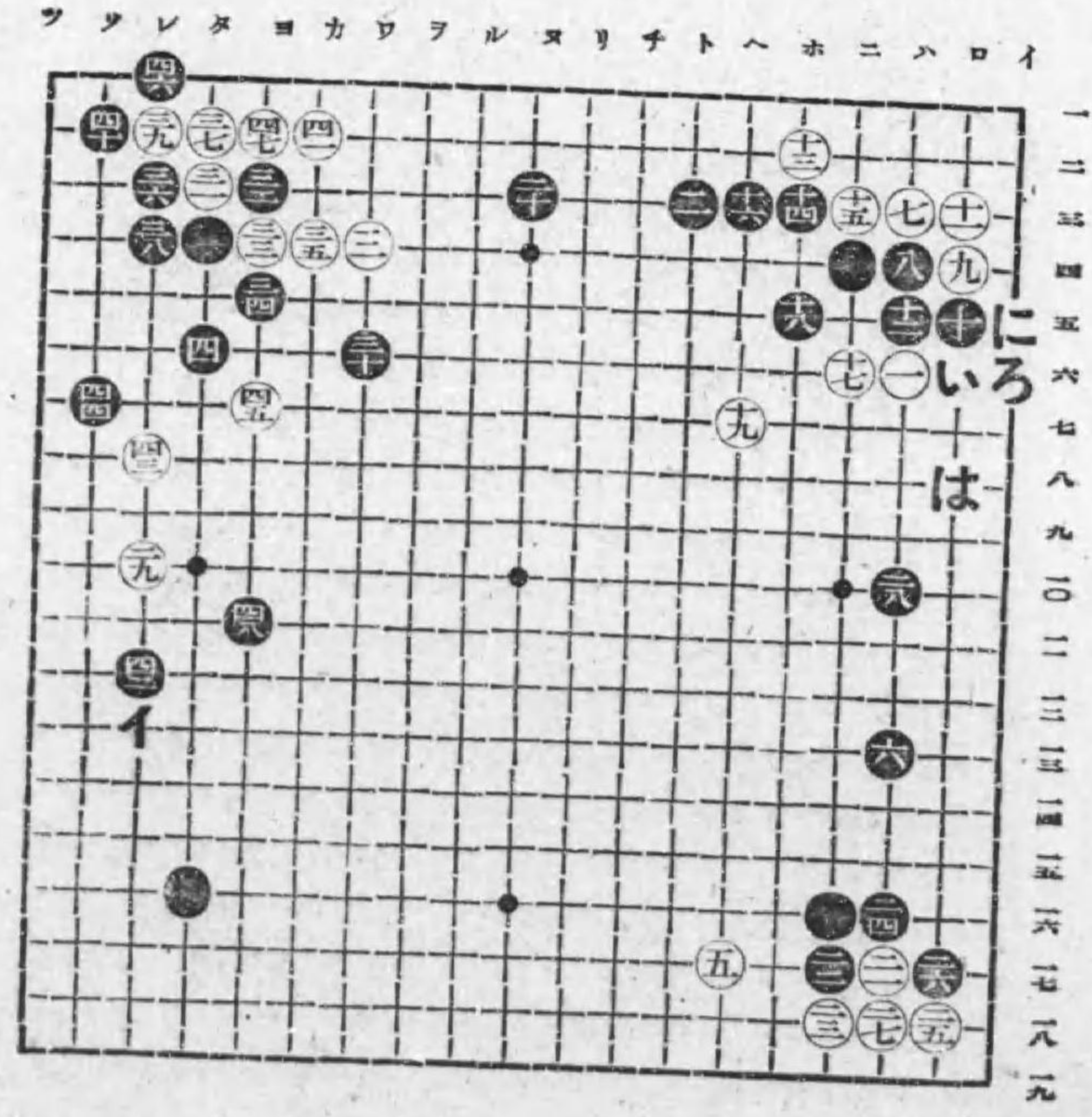
白七より黒十八迄は定石である。黒十八で二十だと、白十八、黒「ホの四」、白「トの五」となつて、其處黒の厚味は消される。

白十九で二十だと、黒に十九の好點を與えて、白(い)黒(ろ)、白(は)と白は後を引く。黒(ろ)は定石であつて(ろ)を(に)は、黒が悪く。

黒二十四は先手を取る爲の定石である。即ち右上隅の如きを欲しないで、二十八を行く爲に。

白三十一に對して、黒三十二より三十八迄は定石である。黒が先きに二十九の點にあれば、二三層好い定石である。白四十一で四十七だと、黒に「ワの二」と來られる四十一で「ソの一」だと、黒四十七で、白は大悪。

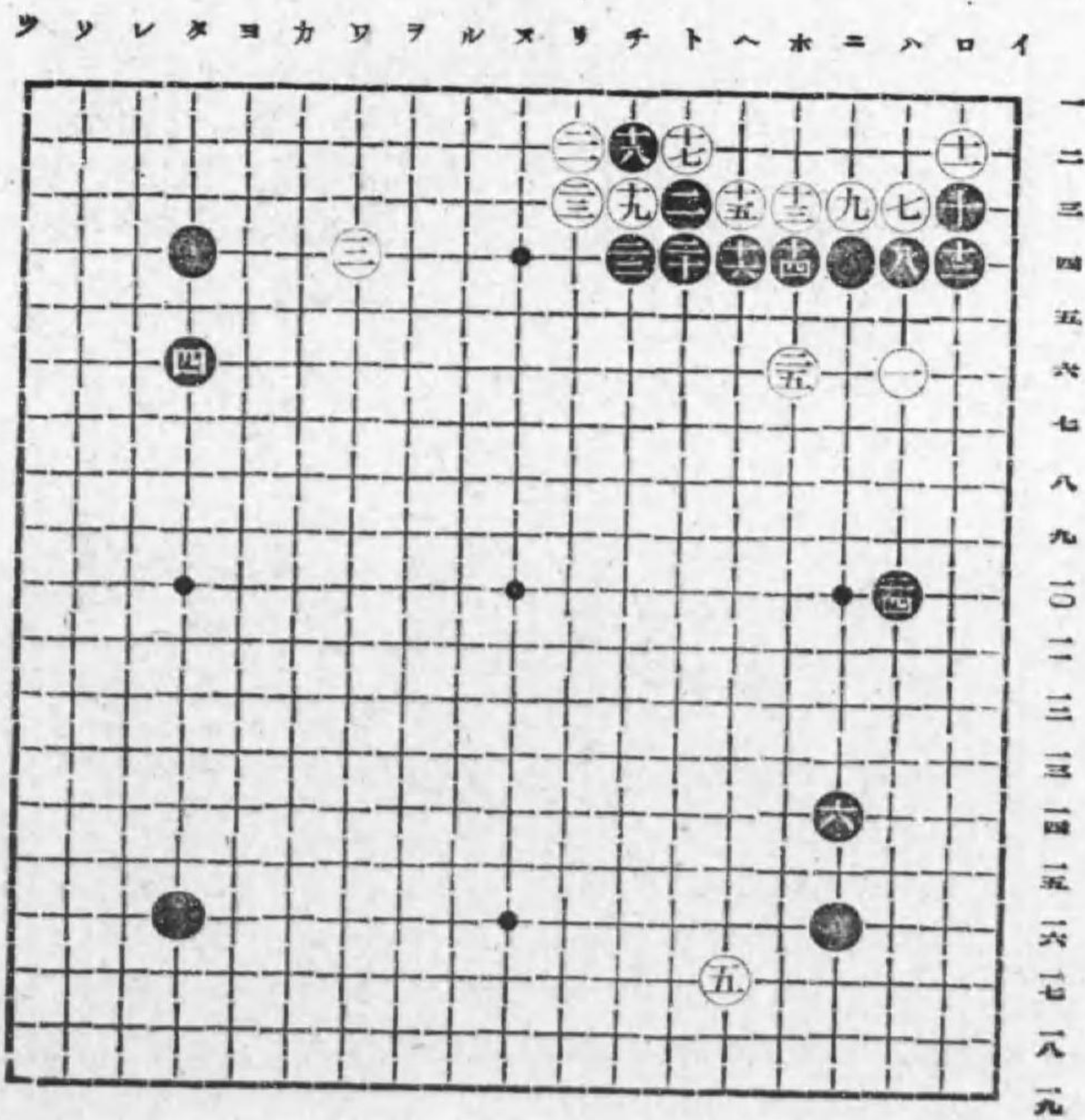
黒四十二を(イ)は平時に於ける定石、黒斯う四十二は白二十九を烈しく攻める爲である。即ち黒は三十二より三十八迄の定石の延長。



黒十で十三だと、白「ホの二」、黒十五、そして白は十二。又た其の黒十三を十四だと、白十三、黒十五、そして白は是れ又た定例、十二での活。左様なることは布石上、黒は善いことではあるが、向上の爲め時に變つて打ちたいと望むなら、十、十二も定石である。

黒二十二迄は二十四の好點を、占める爲めである。十八で十九、白十八、黒二十三、白「ハの九」となることは、黒は十の志しと違ふ。

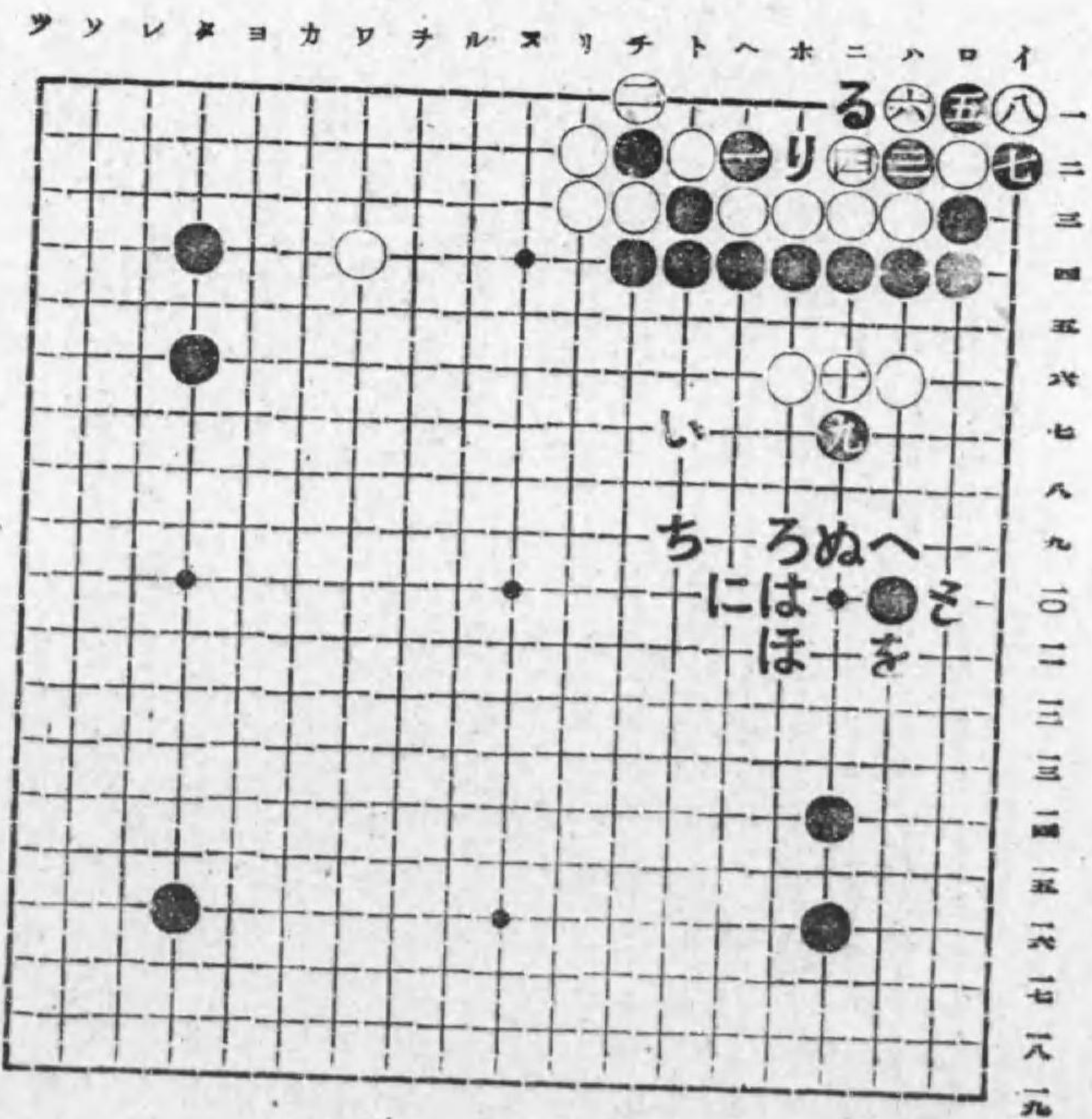
白先手を取らんと、十七で「イの二」、黒「への二」、白「ホの二」、黒十七、白「ホの一」だと、黒は「ハの八」で良し。其時白二十の切りなら、黒二十二、白「トの五」、黒「チの五」、白「トの六」、黒「ニの六」で黒が兩断せられても、別々の行動、黒は悪いこと前途に招來せぬ。白二十五となり、二十二の方の動きは次譜に就いて見られよ。



前譜白二十五となると、黒は大石の一團をどう逃げたものかと、先づ逃げる心理状態となる。ところで定石を知つてみると、そこに安心あつて少しもアワテ、はしない。が時機を誤ると、其の定石も間が抜け、飯が濟んで刺身を出されたやうなもの。

黒一で「ス」、白「ろ」、黒「は」、白「に」黒「ほ」白「へ」、黒「と」、白「ち」となつて、白を先づ安心させ、そして黒一より七迄の手段で、其方に劫に勝つても、黒は自己保身の爲めのみで、ツマラナイ。

黒十一と五の所に劫を取つて、白三に粘れば、黒「り」白八に劫取り、黒「い」で黒は白を追ひながら、劫立てに利用する。また黒十一の劫取りに、白「へ」なら、黒はそれに應じて「ぬ」が宜い。「ぬ」で三、白「と」、黒「る」と其方に得をしても、白「を」となつて、黒は當初の意氣込みはどこへやら。

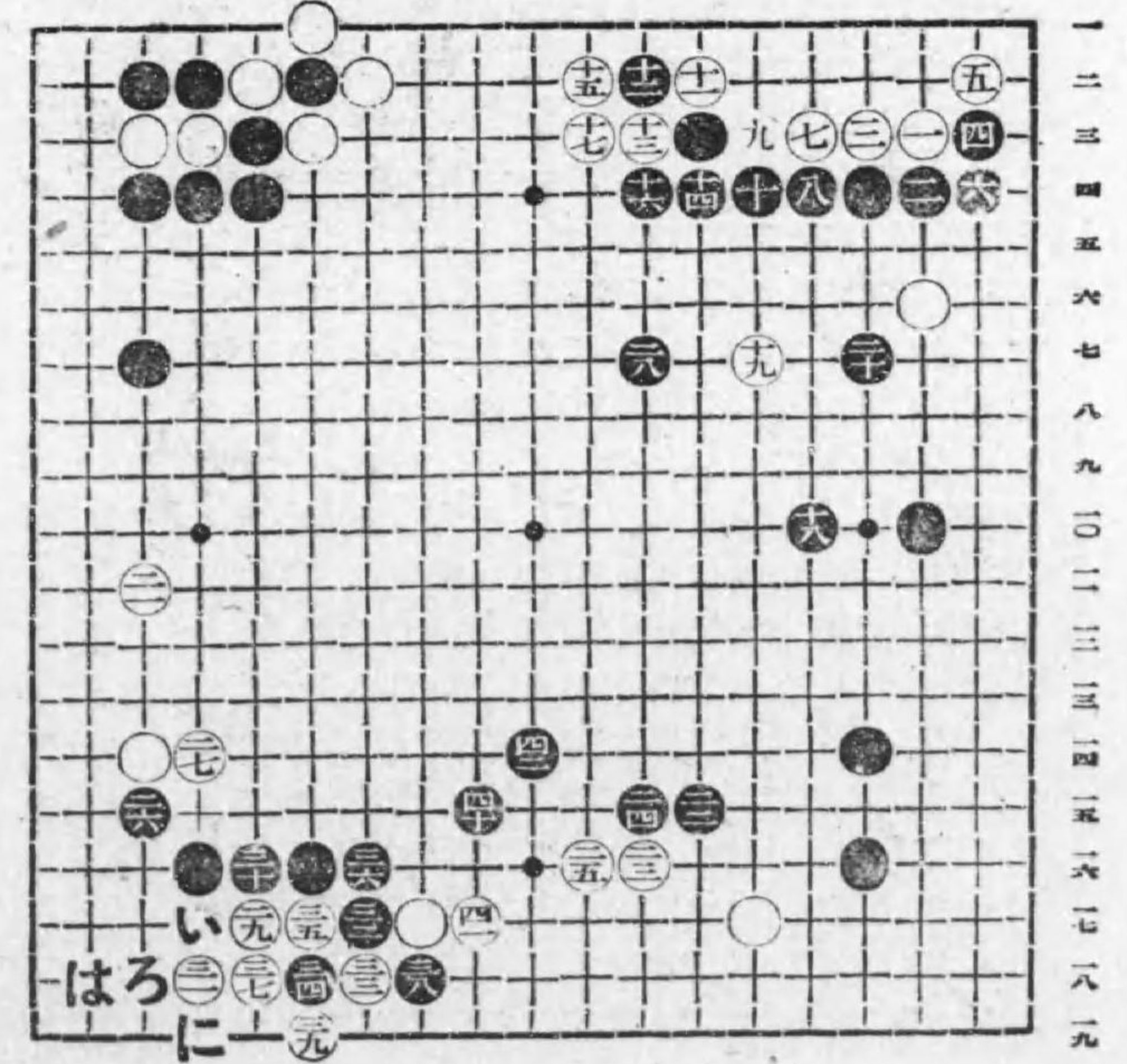


左上隅の如きことが先きにあつて、即ち白「カの一」と黒一子を取つた堅きものがあれば、黒は無論白三に對して、四より十六迄の運びで、十二の一子を捨てるが良い。白十七の堅きものと「ワの二」の堅きものが、合すること、川巾狭き兩岸へ相向いに、砲臺を築いた如きで、そんな處は敵が通らないから、の理は碁理も同然。

白十七迄が不利であるから、白三は六が良い。でなくば「ハの六」の白を調える爲め、白一で二、黒一、白三と切るか、黒「ハの十」にある時の、白は定法であつて、布石上白は將來順調の運びが出来る。

黒二十二、二十四は十八と伴つて、良い定石である。黒三十二で三十五、白三十四、黒（S）、白三十七、そして黒（ろ）だと、白に（は）と來られ、黒煩さければ三十二、三十四が良い。即ち白三十七で三十八なら、黒（ろ）、白三十七、黒（に）で黒は、白に（は）と來られる如き煩は無い。四十二迄で勝勢、黒に確固不拔。

フソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



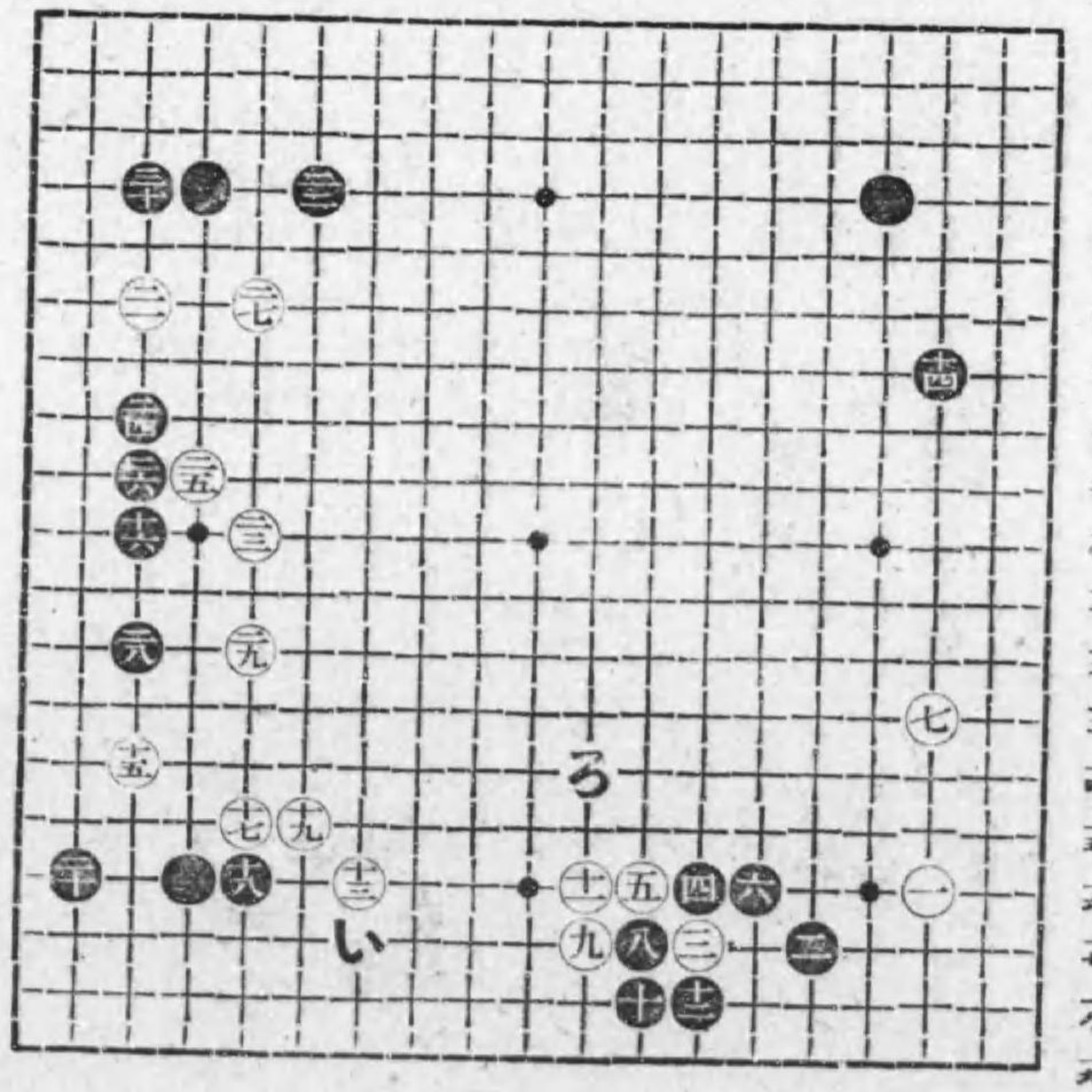
三子二子の置碁となると、相先の定石が出て、局面廣く、自づと趣きも異なり、人間で云へば社會に出た明るさがある。九子から四子迄を小學中學とすれば、三子二子は高等學校、相先の碁となると大學である。

白三に對し、黒四より十二迄は定石、白五から十一迄も同じく定石である。

白十三は黒に（い）と來られると、黒から何時（ろ）と攻められるか判らず、其れが困る故の備へで、其の半面には黒が十四で「タの十四」に受けてくれれば、の慾望がある。其の慾望とは――

黒十四を「タの十四」だと、白は「ハの六」。白「ハの六」は七との間が六路あつて、地にするには巾廣で豊富、また黒が其間、打込み戦争となつても、白七が適所に在つて有利に展開する、といふ七との定石に關係ある、布石の要點、從がつて黒十四は、當面緊急の大處である。

フソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



前譜続行。前譜黒三十は、左側黒二十八以下四子の助けと、左上隅に地を取つたもので、シヤレ、じやないが一石二調である。

白一で(S)、黒一となると、白の大模様は消されることにもなる。白一は黒二を(ろ)、白五、黒(は)と受けさせ、尙ほ其處を「ヌの四」と行くか、又は轉じて(に)邊に打ち、大圍を示して、左様大きくては黒が中央へ、打込み來るを迎えて、決戦の策である。

白五で六、黒(ほ)、白「ヲの七」、黒七、續いて白押し黒行びでは、黒上邊は厚層の地となり、白は斯う一より二路規模が狭く、勝敗は自づと黒に有利。其の白の考へは、黒も察して二十迄の現はれともなつて黒は優勢だ。

白十七は黒に其處へ來られては、黒は好形となり、白は愈々、模様は消されるから。黒十八は、白十九で(イ)なら(ロ)、斯う十九なら二十といふ、要領の定石である。

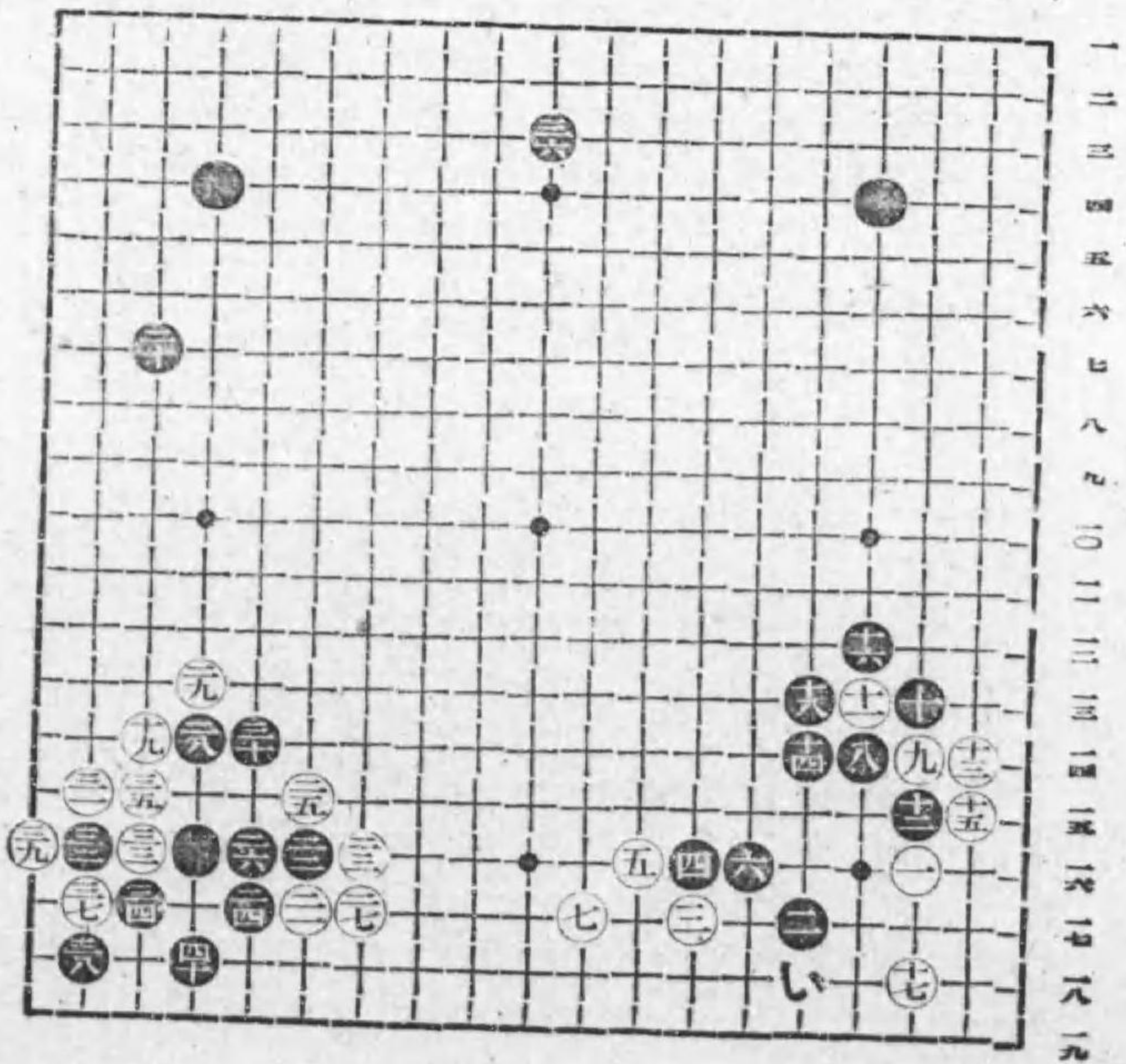
白七は定石である。黒八で二十七と先據も好いが、白に八と備へられ、斯う十八迄の厚装の好形とはならない、十八迄は白七に連続の定石である。

黒二十で二十七又は二十二と、白七の堅い備への有る方に向いたくはない。七の方は白に(い)の渡りあつて、見かけ以上の白は強さである。

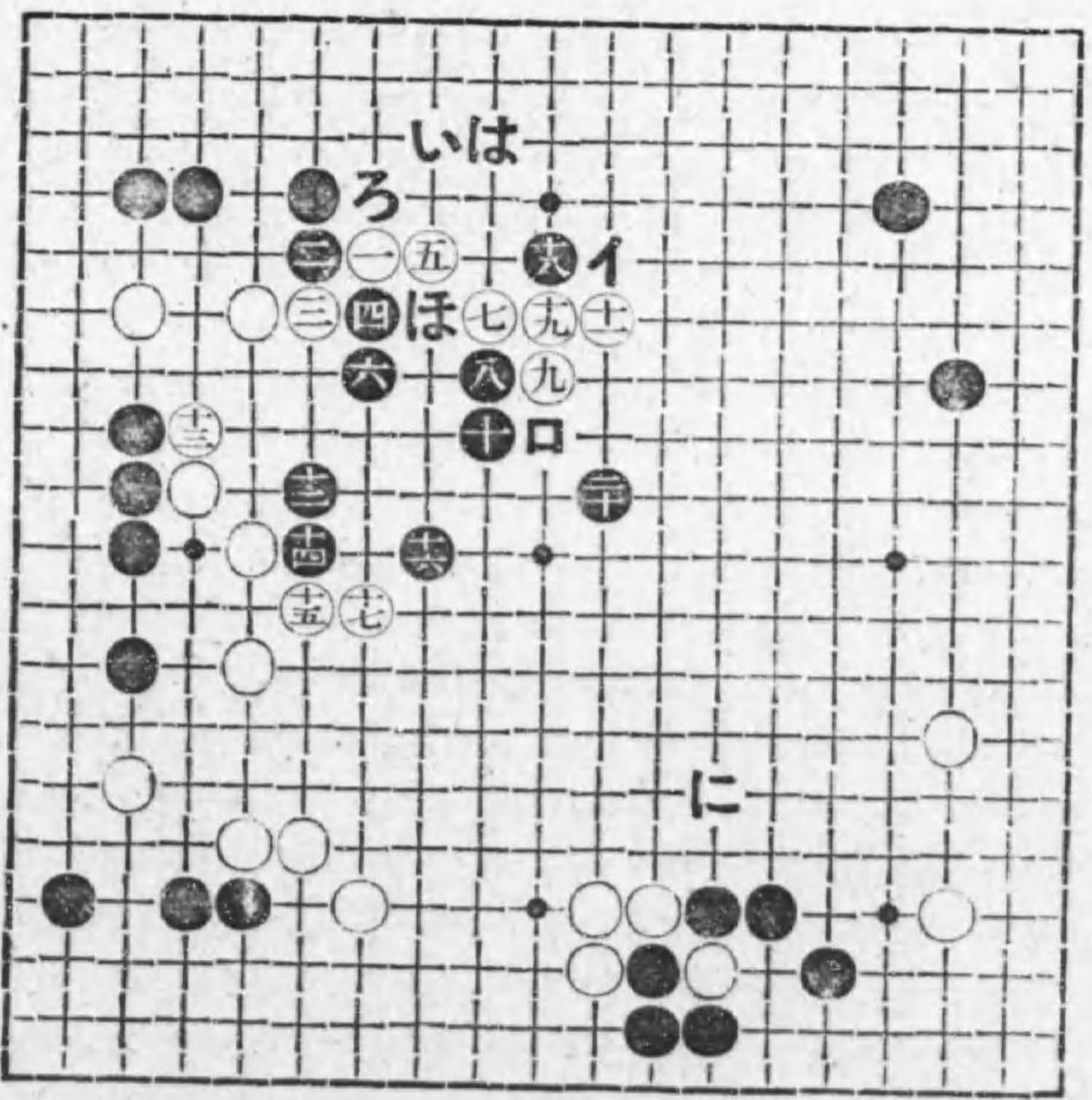
黒二十四で二十五、白二十四、黒「タの十七」の定石を探ると、白に三十二と走られ、黒は治まる迄の不利は少なくない。白七の威力の範圍は少なくとも「ヲの十七」迄位には見られやう。であれば二十七となつても、七と其間は、何程も増してはゐない。

黒三十六で三十七の粘りも定石で、白三十五以下の攻めになり、白の布石に關係がある。併し先手を取り三十六の大場に就き、四十と確たる活きで治まるも、黒は大局上に良い布石である。

イハロニホヘトチリヌルカヨタソツ



イハロニホヘトチリヌルカヨタソツ



黒四は定石である。黒四と出れば延いて白九迄となる。黒十で二十三だと、白(い)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(り)の十六」ともなり、四と二十三に有る黒二子は、重くして前途、多少の難歩は免がれない。即ち時機尙ほ早し。

黒十二より二十迄は、白三の方の活用を狭範囲にする爲めであつて、其の意味の定石。

黒二十二より二十六迄は、二十三となつた強化の白一團を、是れまた効用の範囲を狭める爲め。

黒二十八より三十二迄は、平常は好まない俗な左上隅の固めではあるが、白三十三で三十四なら、黒は「トの三」又は進んで「メの三」で、大勢が良いからであつて、其れに注視せられよ。

白四十一以下黒四十八迄は、白が四十一と入つたら、四十八となり白が面白くないを、示した迄。

白前譜七を本譜一だと、黒八となつて、白が面白くない。

白九で「への十七」なら、黒は九に切つて善し。

黒十は中央に勢力を占める意味もあり、甚だ好手で、此際の定石である。

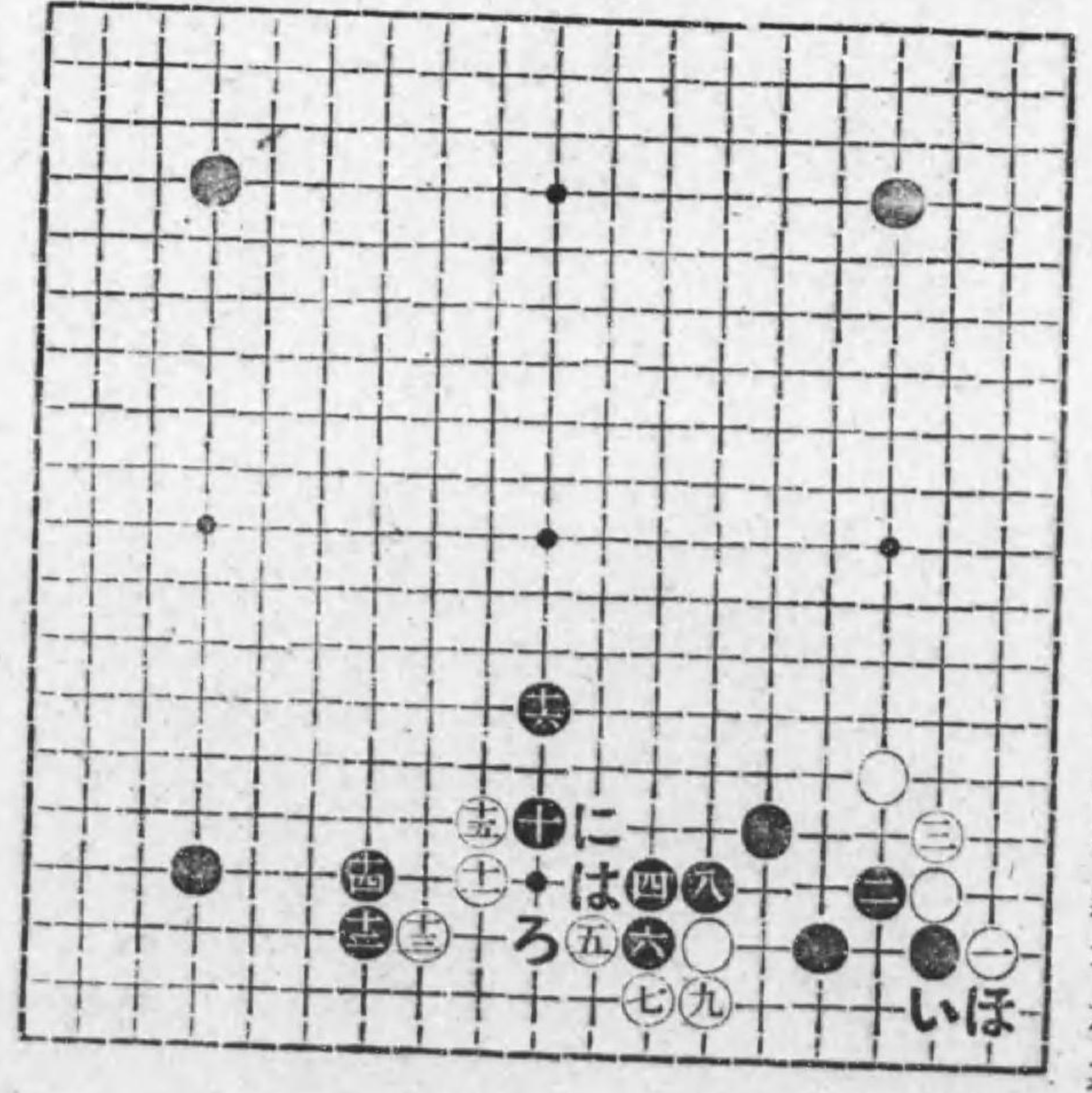
白十一で(い)なら、黒(ろ)で黒が大いに善し。

白十一で十三でも、黒(ろ)で、白は低位の姿となつて白が悪い。

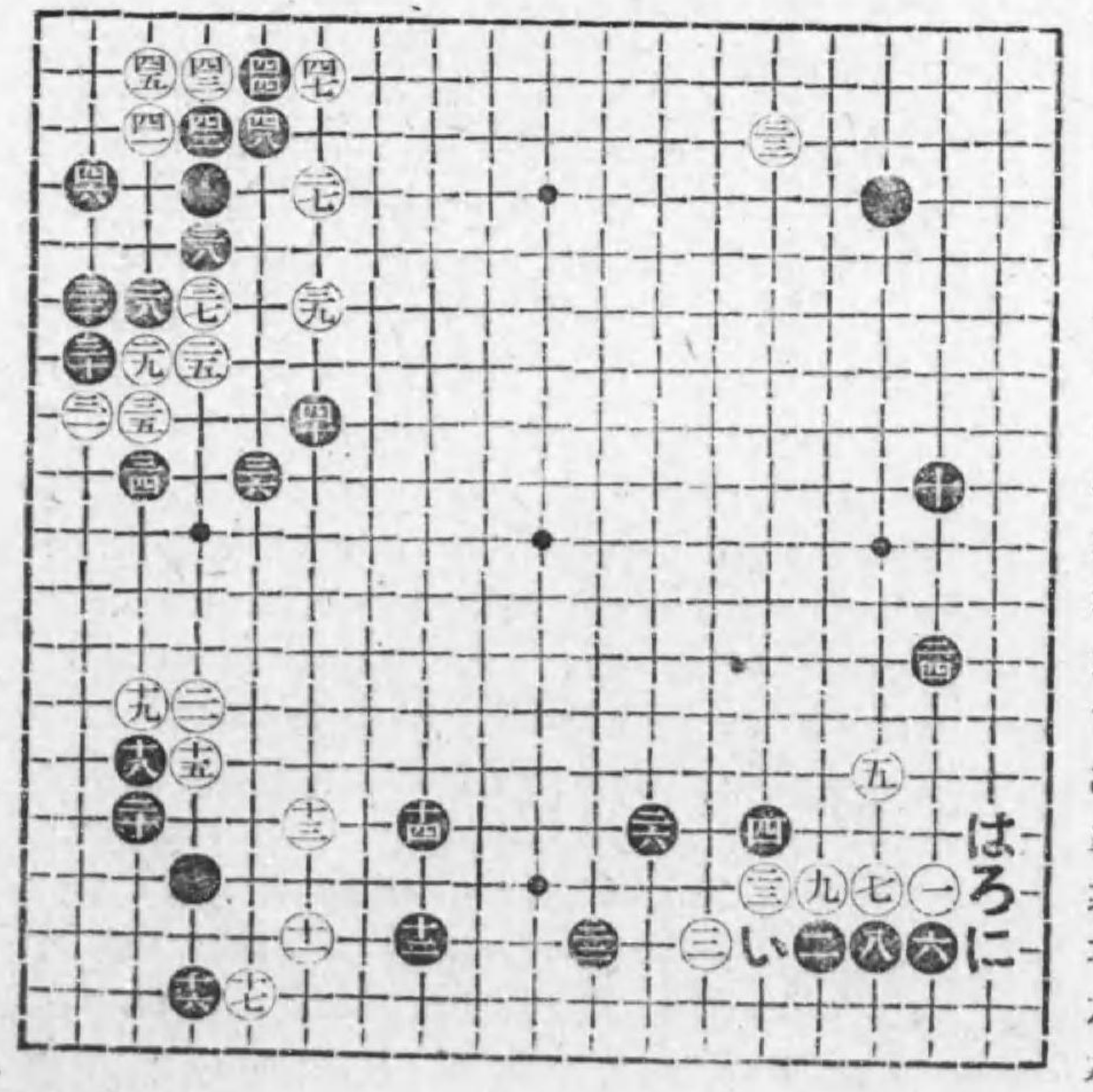
黒十六は軽快な飛びで定石である。十六を「ヌの十四」だと、白(は)、黒(に)となり、黒「ヌの十四」が愚化して形而上、黒が面白くない。

黒は時機を見て、(ほ)、白(い)、黒「ニの十八」と助手段あつて、黒は前途好順を辿る。即ち黒二、白三となることが、白一と原因して白が布石上悪いのである。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨレ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨレ



黒四より十迄は白三に對する定石。だが十を他に轉じて、白十に來たら、黒(い)、白(ろ)、黒(は)となることも、是れ又定石である。が三子の碁としては後の布石に益して、今の十は大勢に後れる如きはなく、立派の一手である。

白九も當初には斯う九が決定的に必要なだが、時には九を他に行き、黒九、白(に)となることとあると知られよ。特に場合を注視して。

白十三で「ハの八」なら、黒(イ)、白(ロ)、黒「ヌの三」が良いのである。斯う十三と黒の其れに備へたら、黒は十四。此の意氣は何時の場合にあつても、魄として不斷に放念してはいけない。

黒二十八で「ソの十」は、重くして布石に一步後れる。白二十五は黒に二十七と、走られるからの備へである。白(ほ)、黒(へ)、白(と)と、白が二十六の一子取りは、黒は又た手抜きで宜いのである。

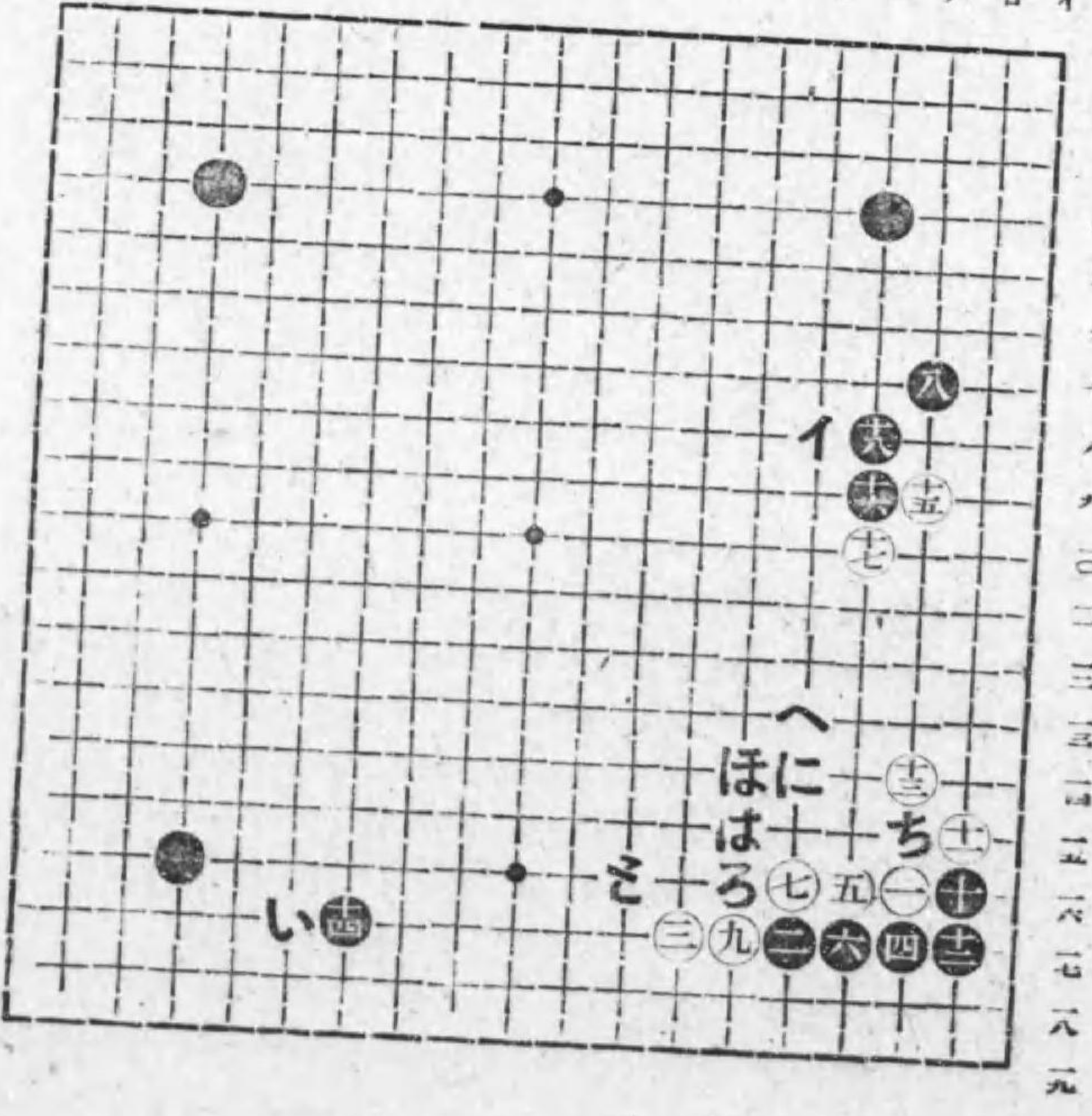
黒四に對して白五を十二でなく、斯う五、七と黒を隅に活かして、外形を強くすることは、相先の碁には悪くはないが、三子の碁としては、黒に八と來られ、其の方面の勢力範圍を縮小せられて、白は面白くない。

白九で(い)だと、黒十、白十一、黒十二となつて、白十三なら、黒(ろ)、白(九)、黒(は)、白(に)、黒(は)、白(へ)、黒(と)となつて、白の外部の模様は成らない。其の白十三で九なら、黒十三、白(ち)、黒(七)で是れ又た其の側の白模様は、黒に消される。

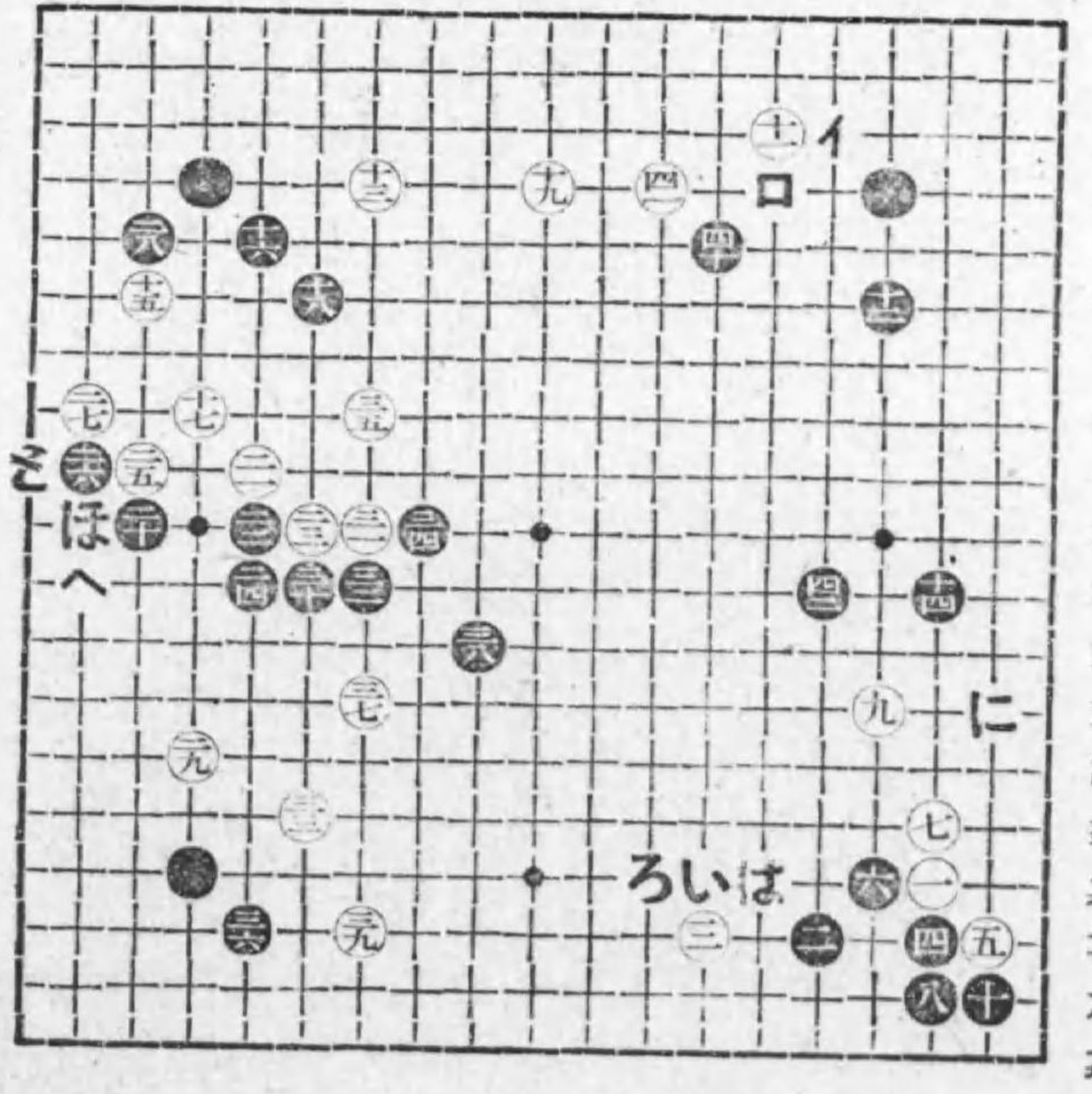
黒に十四と來られて、なるほど五と七の趣向は、三子又は二子碁に不適と判らう。

白十五で「ルの十七」の方なら、黒十七で黒は布石上良いのである。
黒十六、十八は白に(イ)と張らせぬ爲で、定石である。即ち白の勢力範圍を狭めて。

ツソレタヨカワナルヌリチトへホニハロイ



ツソレタヨカワナルヌリチトへホニハロイ



白三に對して黒四は定石である。其の意は白五で、三の目的である「ホの十六」なら次譜の如く、六から十二迄となつて、黒が善いからである。即ち次譜十二となつて、白の占めんと欲する、四に黒が先占で。

白五で二十七なら、黒(い)、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(は)となり黒二は早く治まる。では白は面白くないといふことにて、白五、黒六の布石となる。

白七で「レの十四」、黒「ワの十七」、白「ルの十七」、黒「レの十六」では、白「ルの十七」が三との間狭く、白の好まない布石である。で、白は三との間を廣く七。

白十五で二十一だと、黒は十七。それが白不可で十五、十七の定石に白は出た。が二十一となつても白は九が狭く、黒に二十二と治まれ面白くない。

黒二十二で二十三だと、白(い)と來られて大きい。黒二十八、三十は白(い)と取られても形勢が良い故。

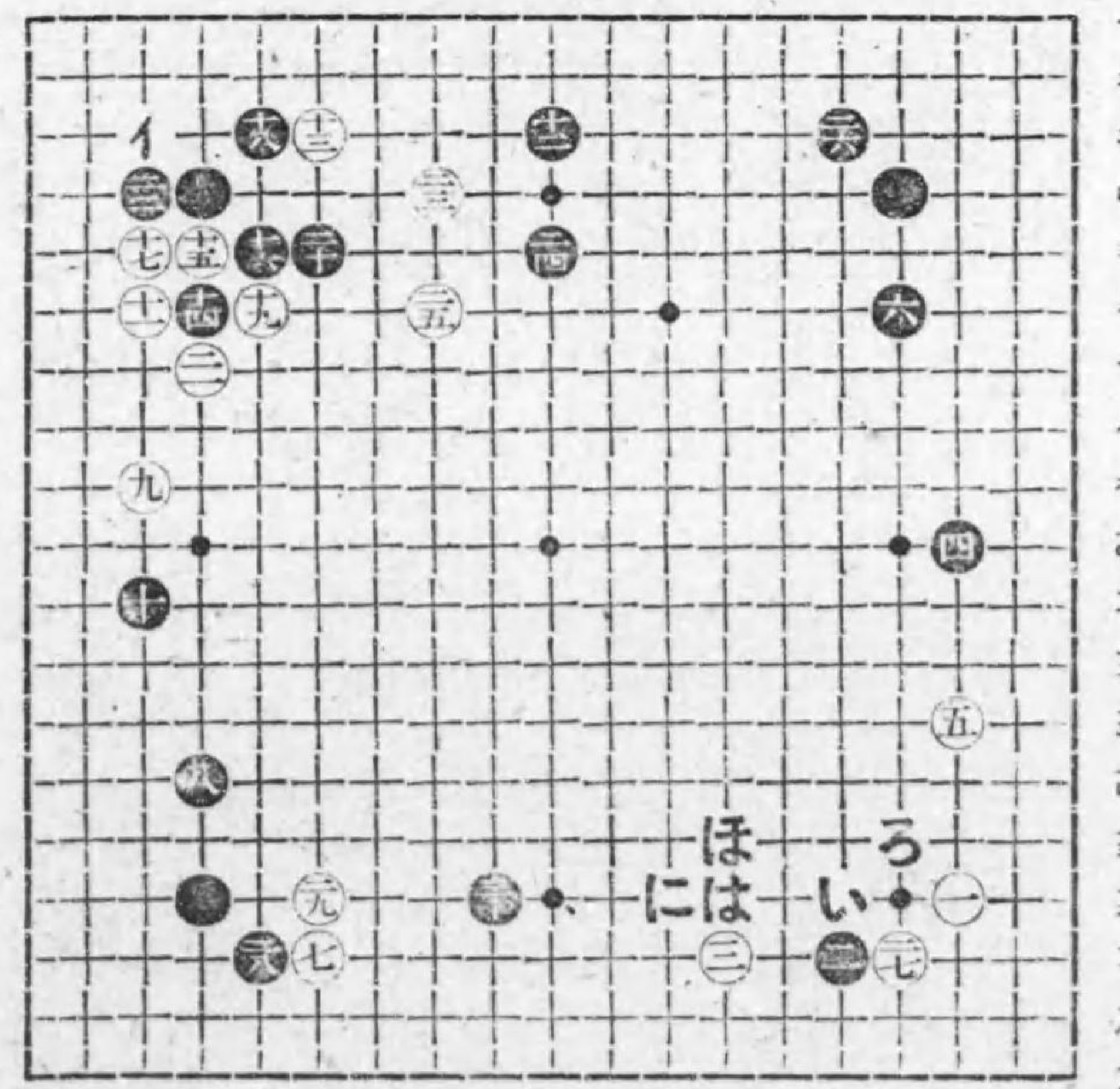
前譜黒二十八、三十は白三と七との間を無地にすれば、早く勝ち成る。其の布石を辿つたのは前譜五にあると白は推して、本譜五と變化。だが本譜三十二となつて、黒は依然優勢である。

黒十二で二十七、白「ハの十五」そして(い)又は(ろ)と轉じて、自然白十二、黒(は)、白「イの十六」、黒(に)と白に先手で運ばれ、左様なつた白の厚装は、黒は他に轉じた、得く位ひでは及ばない。

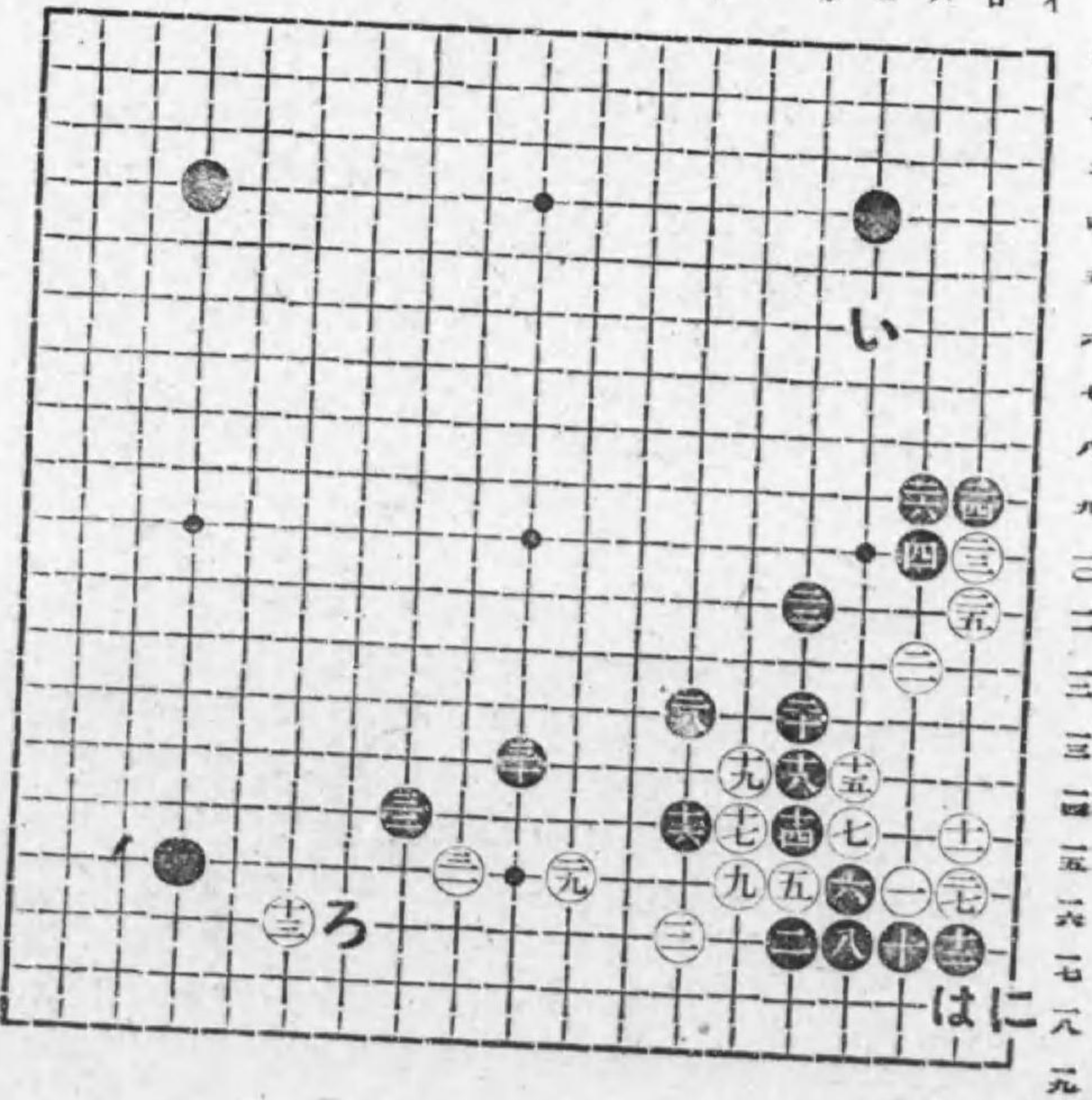
黒十二は後手の定石ではあるが、後の布石に良い。白十三で十九だと、黒は(ろ)で可。すると黒四が一方に在つて、其の十九迄の白築きも、効用廣からず。無論黒に十二迄と地を與えた、こと迄をも入れて。

黒十四、十六は定石である。十四の切りで延いて三十二迄となる。黒三十二は次ぎに(ろ)。白十七は其處へ黒に、粘がれては耐らない故。

ツソレメヨカヲラルメリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲラルメリチトヘホニハロイ



白五は定石である。相先の碁であれば、白十九を三十四の粘ぎで可だが、三子では白十九を三十四だと、黒に四十五と備へられる。

そして白(い)は、黒(ろ)で好いから、白(い)を(は)又は(に)だと、黒に其の何れも(ほ)と應じゐられ、白は尙ほ地にする爲め一手を要す。
即ち黒に「リの十八」と打込まれる筋あつて。

白十九には、黒を二十三と受けさせ「ホの十」へ冠して、四の黒を右邊で活かし、三十四への粘ぎを省き、先手で(は)と行き、中央より下邊に大地をみるむ、意は見取れやう。で、黒は二十、二十二。黒二十二は斯様即ち白十七より七迄、の如き場合に適す。

黒三十六は良手で白の大いに困るところ。三十六で四十、白四十一、黒三十七、白「リの十四」は次いで黒(へ)、白(と)、黒(ち)、白(り)となる外なく、白は兩方調子づき、走行よくなる。

白三に對して黒四より十四迄は定石である。白十三迄も定石である。

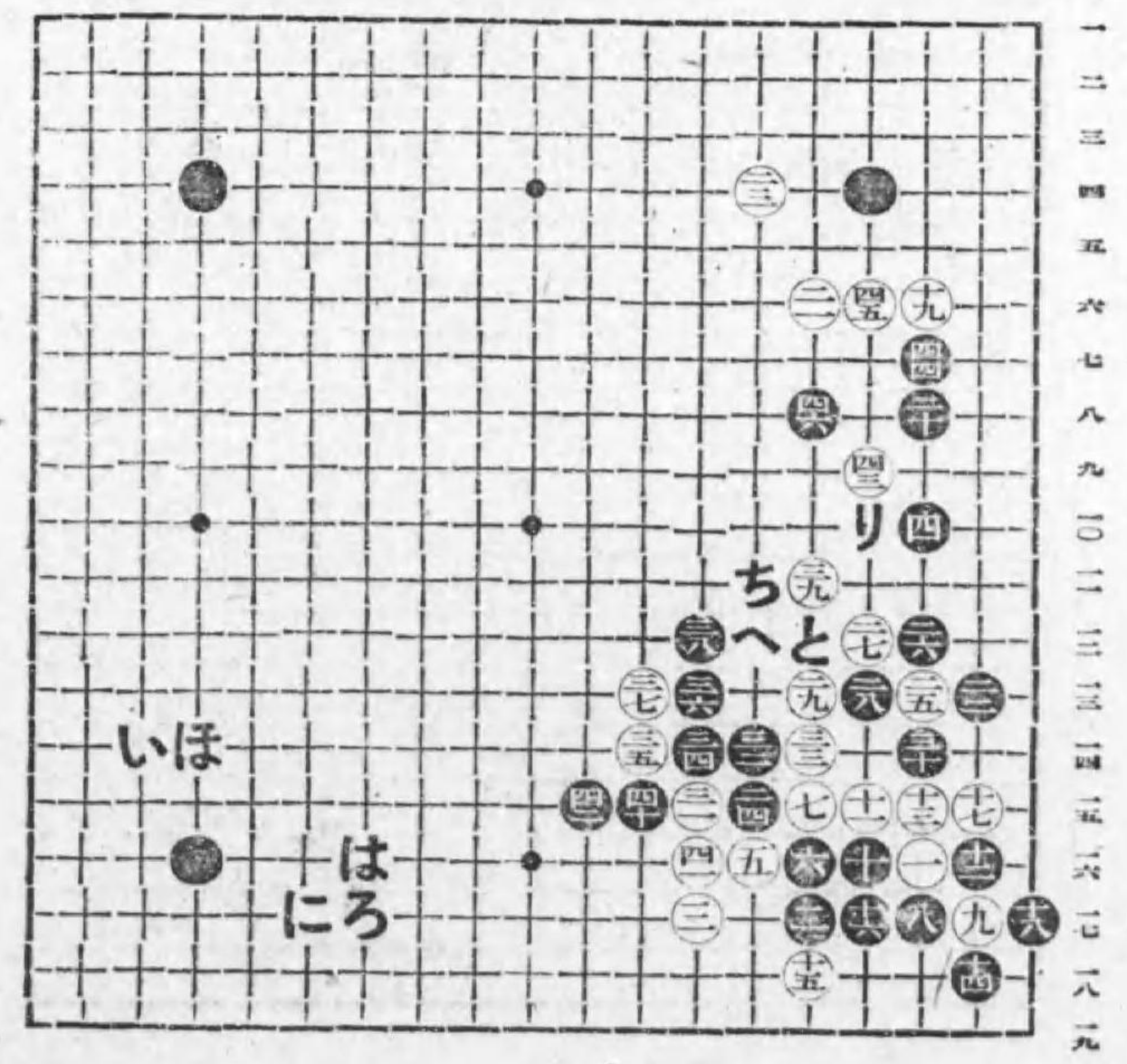
扱て十四となると、白は急に行きたい要點が二ヶ所ある、即ち黒十六を「タの十四」を受けさせ、「ハの八」へ行くことである。

白十五で「ハの八」だと、「ニの四」の置石と八との間を旨く割つて、黒に大模様を興えぬ。だが十五で「ハの八」は黒に二十四と來られ、七と築いた方の發展は出不ない。で、白は十五。では黒も十六といふ布石になる。

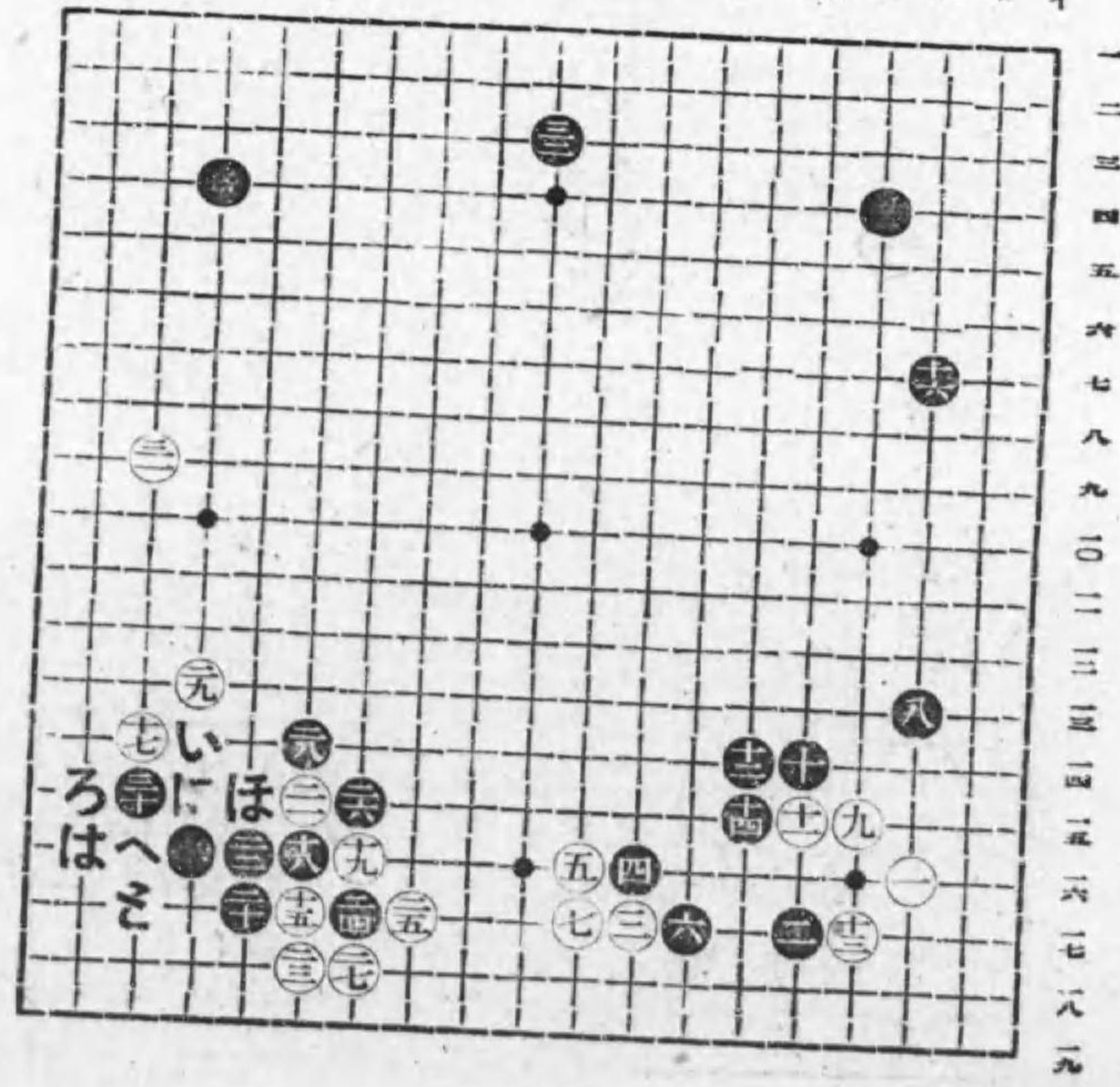
白二十三を二十四なら、黒は(し)。
黒二十四を二十六だと、六ツカシクなる。黒二十四と切つて白に二十七と、固くさせたことは、白七の方が固いから悪くはない。

黒三十となつて、白(ろ)、黒(は)、白(に)は、黒(ほ)白(へ)、黒(と)で黒は良いのである。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



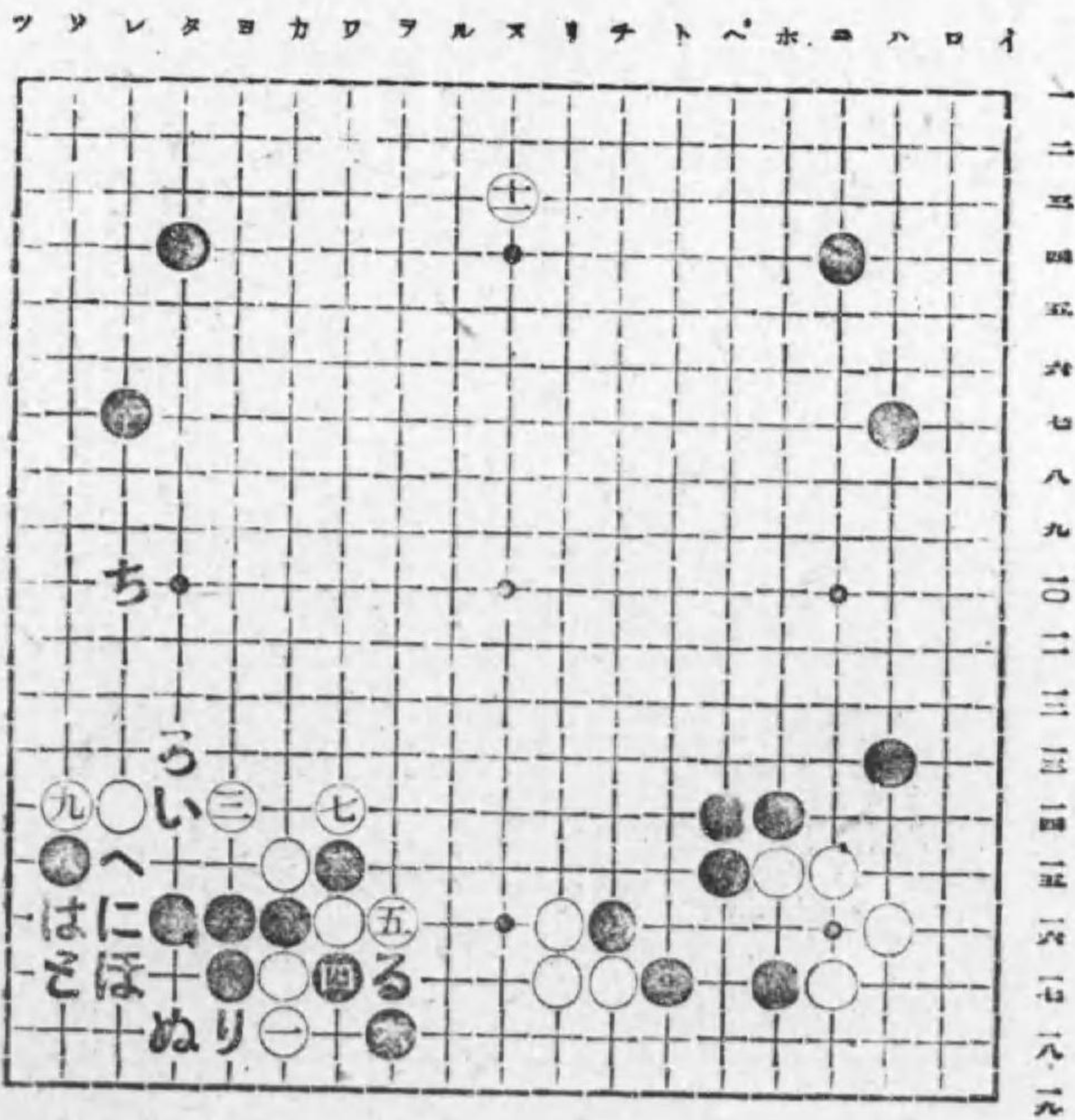
前譜白二十三の下りは定石である。白二十三に黒二十四を(シ)、白(ろ)、黒三、白八、黒(は)、白(に)、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)、白(ち)迄となつて黒手抜きは、白(り)、黒(ぬ)、白七となり、黒は未だ治まらなくして悪し、白(ち)で左様もよし。

で、黒、白(ち)の時手を抜かず二に切り、白(ち)、黒七と治まることは、自己の治まりのみで、白は左右が好い布石となり、のみか先手は白に有つて、斯様なことが黒の敗因となる。

白三となれば黒は四、六の外ない。六で「ワの十八」だと、白六で黒が悪い。

白七となつては、白は申分ない、味、厚装、其他を含んだ、盛大である。

七となつて、黒「ワの十五」の出は、白「ワの十八」、黒(ろ)、白「ルの十六」で黒が悪い。白九となつて、黒十、白十一の布石とならう。が黒の負けといふのではな。



黒四より十四迄白五より十五迄、白黒共に定石である。黒十四を(い)だと、勢ひ白(ろ)、黒(は)、白(に)となつて、黒八は能動を失ひ尙ほ白より、十四と劫に來られることが残る。

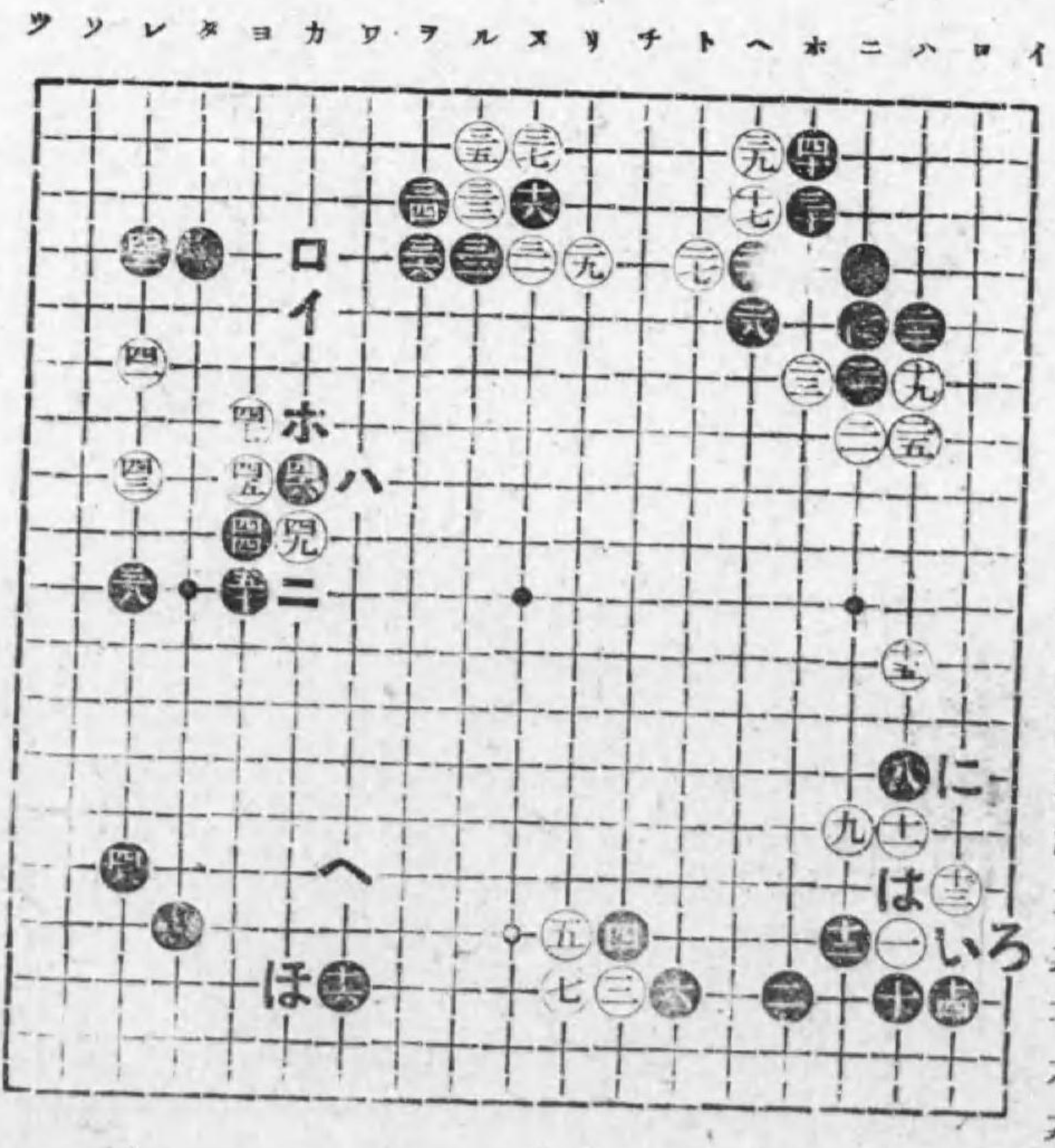
白十五を(ほ)だと、黒(に)と下がられ、一より十三迄の白は、不斷に不利を受ける。

白十七で「トの十八」なら、黒は「トの十六」。又た、白「トの十六」なら、黒は「トの十八」で四の一子は捨て宜し。

白二十九で四十は、黒に「ニの二」と受けられる。二十九は黒十八の動きを見て「ニの二」へ走らうといふ、手段である。で黒は三十と其れに備へた。

黒三十二を三十三は、白に三十六と飛ばれて重い。三十二は三十八と大場に就く爲めである。

黒四十二は三十六の方が在るから好い。黒五十となつた布石は甚だ良い。五十となつて、白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)は、黒(ヘ)で形勢充分。



黒四に對して白五から九迄は定石である。其れは黒十を十二なら、十四と黒四の一子が征に取れ、からである。黒十に對しては、白は十一、十三の外はない。十一で十四だと、黒十一、白(イ)、黒(ろ)となつて、白が悪い。黒十は十四と行く爲めである。

白十五で(は)、黒(に)、そして黒十五か又は(ほ)だと斯う十五より規模も好く見榮えもする。が左様はならぬ、白(は)には黒は十五又は(へ)。
 黒(へ)に白(と)なら、黒(ろ)で黒は活きに困難ではない。即ち黒は(ち)の筋あつて。

黒十六は機會を見て「ニの十一」と、白十五の肩を衝き十五迄と費した白に、適當の地を興える運動に出る方向に在る。十六を「ハの七」だと「ニの十一」と行つた結果は其の黒に害を及ぼすことにもなる。
 二十四の布石となつては、黒は優勢である。

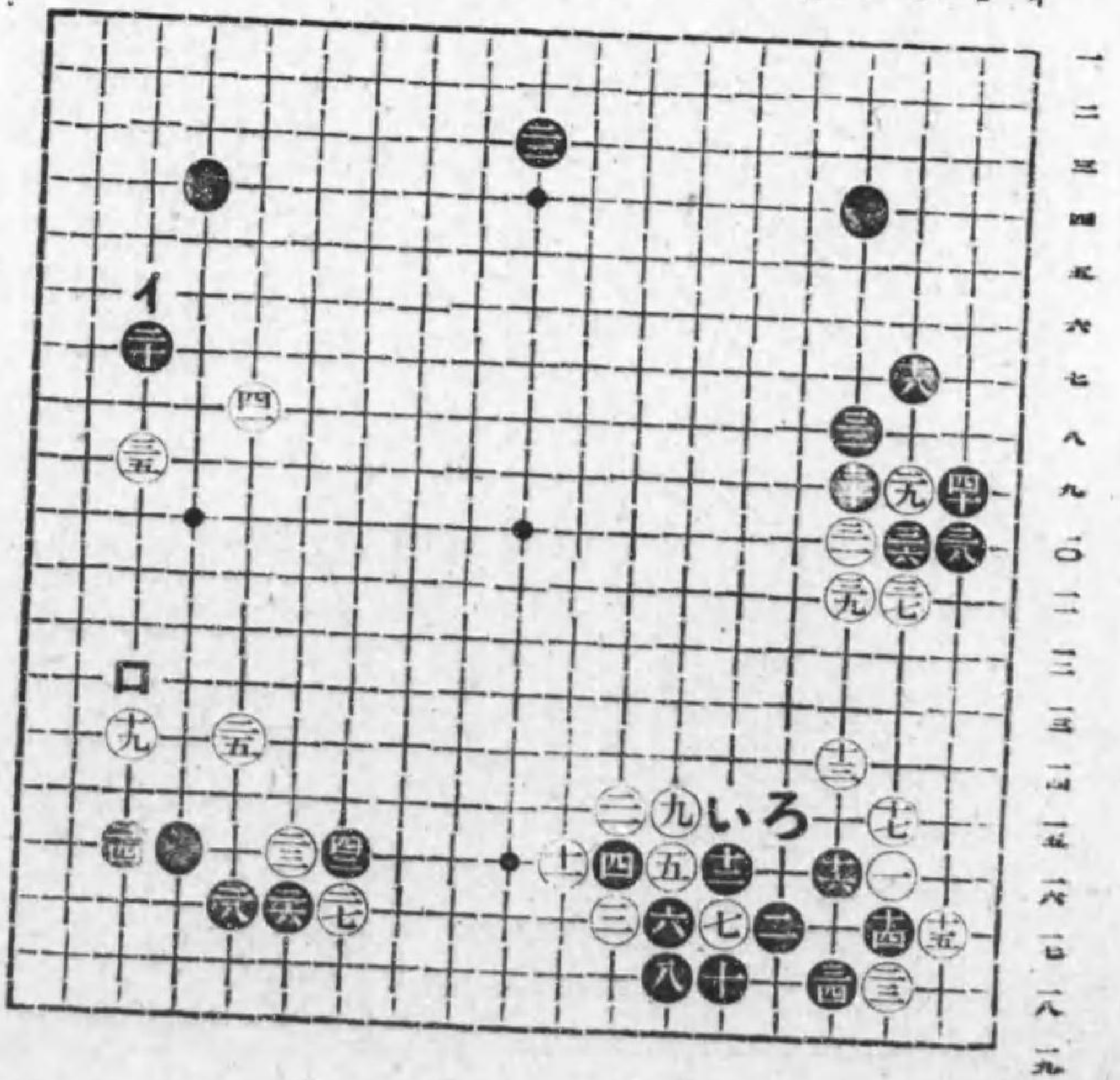
黒十を斯うであれば、白十一と征に取るのが定石。黒十二は良手である。白十三を(イ)は、黒は(ろ)で可。白(イ)は悪手である。

白十三を三十四なら、黒は十六が良手である。白十三に對しては、黒十六迄が定石である。黒十四を他方面だと、白に三十四と來られて、黒が悪い。

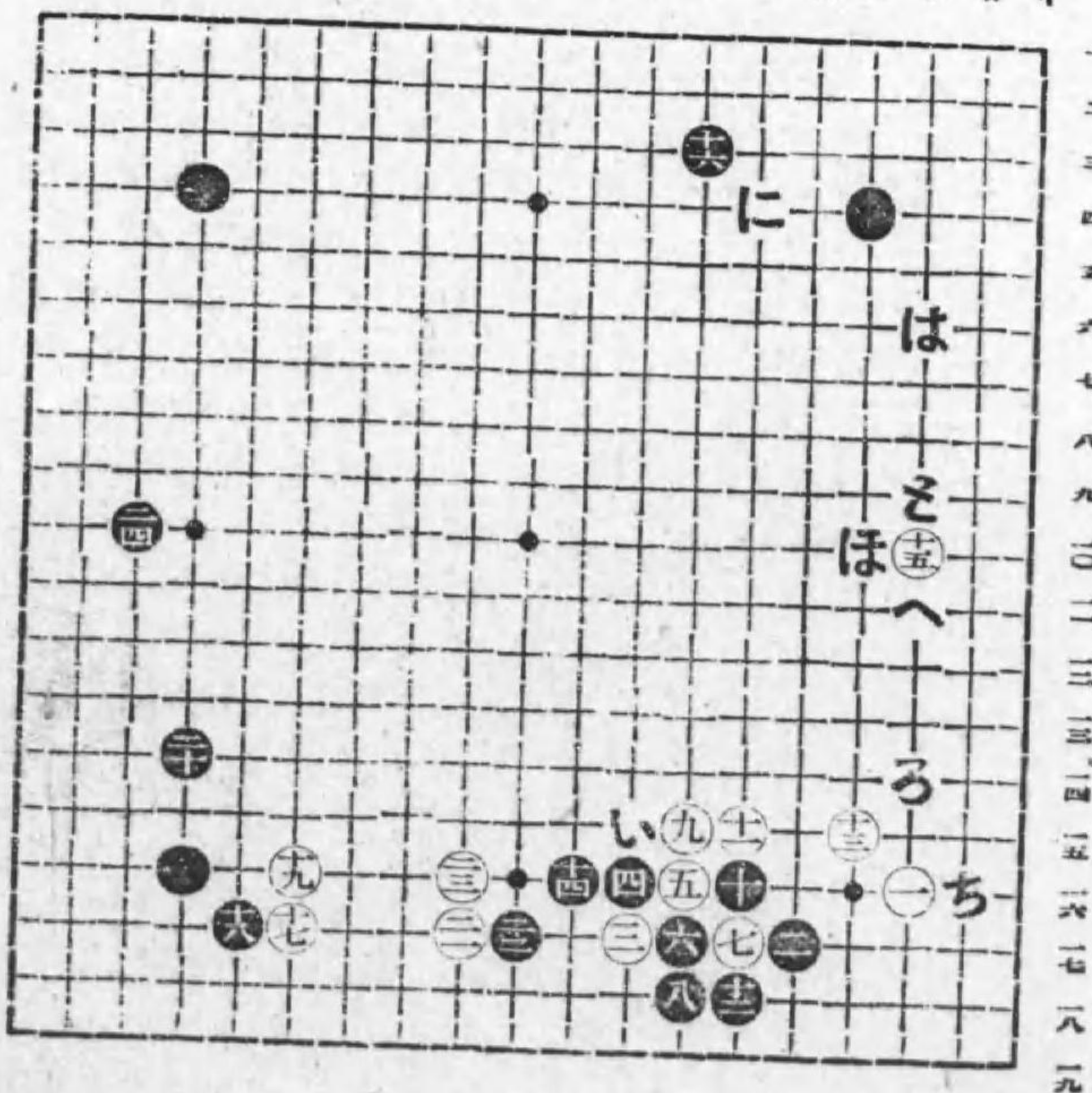
黒二十で「タの六」と征の當りを利かし、白二十一の時黒「レの十」も良い布石である。が黒二十は二十二の大場を占める爲めであつて、前者に優るとも劣りはしない。白十九を(イ)なら、黒は(ロ)で好い。

黒二十四は平常好まない手だが、二十四で「タの十四」と出るとは、白二十三の意中を行き、しかも白十一、二十一となつた堅固の方へ向ひ、前途好い拓地もないと思ふ。本形勢にあつては、斯う二十四、二十八と治まることも、落付ある態度である。
 黒四十二は「レの十二」の打込みを見てゐる。

ツソレタヨカワチルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワチルヌリチトヘホニハロイ



黒四より八迄の定石は、白三に對して實戦に多く出たことは、此の定石が一番である。従がつて黒が八迄となることは、白の期待にあつて、白は此の定石を利用して布石に益する研究は極致に達してゐる。

黒八迄の定石について少しく述べやう。白三が(い)に在れば、黒十で十七が良い。即ち白(い)が黒二の堅きに接してゐるからである。又白(ろ)が(ろ)に在れば八となつて手抜きで良い、即ち白(い)なら、黒は十七、白十七なら、黒(い)で良いからである。併るに白斯う三に、黒十七では、白三が(い)より一路遠ざかつての有利といふ結論に到つてゐる。此の高遠な議論も對局者がほどの達人同士でない限りは、實際の効額とはならない。といふ見地から、八迄の定石も黒は別に悪くはない。

白十七、十九に對しては、黒は十八、二十が定石である。白十七を十八なら、黒(は)、白(に)、黒十七が是れ又黒の爲めの定石である。

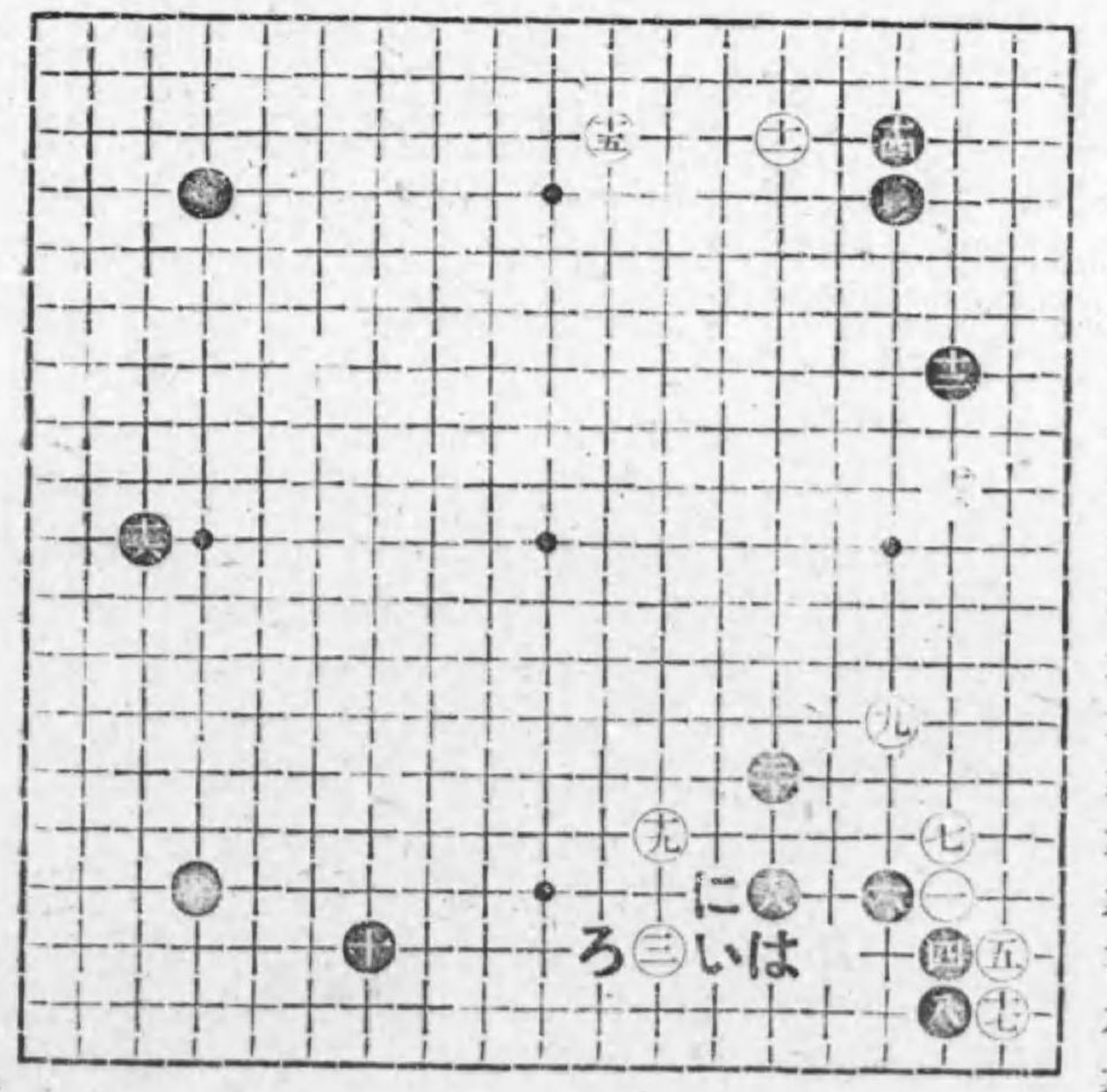
白三に對して、黒四、六で白に七と受けさせる定石を用ひて、八と白三を攻めるのも、七迄の定石を利用して良い布石である。

白十三、十五は罪、十四に對する定石である。白十三で二十三、黒は十三、十五で二十二は、黒に十五。其の何れも白は活氣が無く面白くないのである。白十三、十五となれば延いて、黒二十四迄の定石となる。黒二十四で「への十」、白三十だと、黒は二十四に戻る一手を要して、大悪無双。

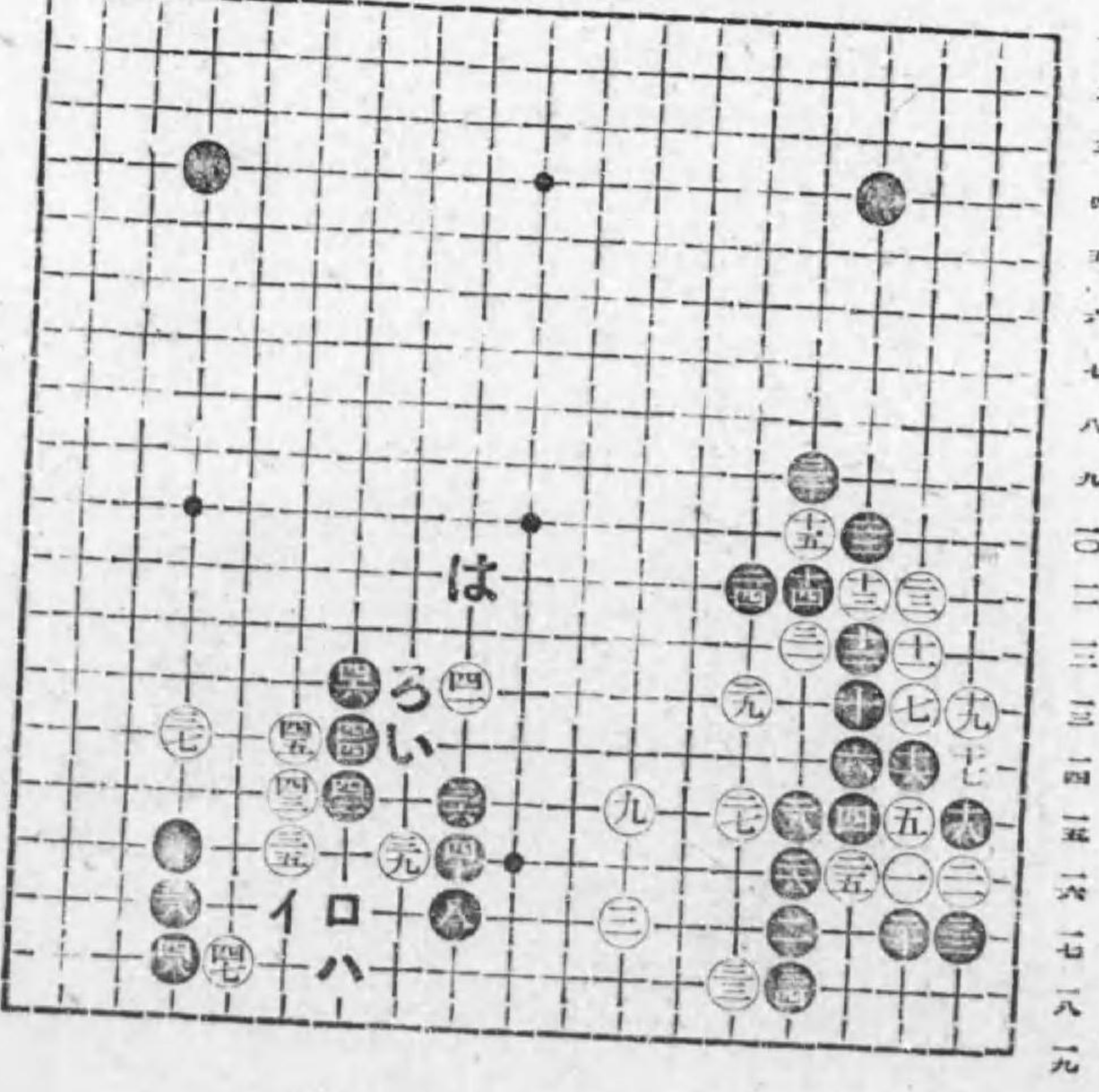
白二十五で「への十」なら、黒は「トの十」と強く應じるのが定石である。白二十九で三十なら、黒は「ヌの十四」位ひに煽つて良いのである。

白四十一に、黒マゴ(い)、白四十五、黒(ろ)白(は)などの應手は、黒は氣力が無い。四十八となり、黒(い)、白(ろ)、黒(は)で黒は連絡の妙手あり。

ツソレタヨカワフルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワサルヌリチトヘホニハロイ



前譜白二十一を本譜一だと、白三となる変化の外ない
 黒二を三だと、白二で黒は前譜二十一、二十四の如き好
 調は得られない。

黒四は七でも好い、が四には将来黒(い)、白(ろ)、黒
 (は)の得が残つてゐる。

黒六で七だと、白は六。其の黒七は三の白が強く「チ
 の十五」の頭邊に加勢して、「チの十五」の攻めとはなら
 ない。黒六は白に七と來られる用意あり。

白七の斯様な場合にあつては、黒は「ルの十七」の一子
 を助けるのみが善いことではない。

即ち黒十となつて、白(い)なら、黒(ろ)で良く。白(い)
 を(ろ)なら、黒は(い)で良く。で、十の時には白は(は)
 であらう。そんなら黒は(に)となつて「ルの十七」の一
 子は尙ほ、活力素が残つてゐる。

白一、三の定石は相先には局面が廣いから良いが、三
 子二子の碁では不適であらう。

黒四から六、白五から七共に定石である。

黒六で七だと、白(い)、黒(ろ)、となつて、局面は急を
 告げ、黒の爲め採らない。

白七で(は)だと、黒七の出か又は黒(に)、白七、黒
 (は)、白(へ)、黒(と)となつて、白は斯う七となるより
 悪い布石である。

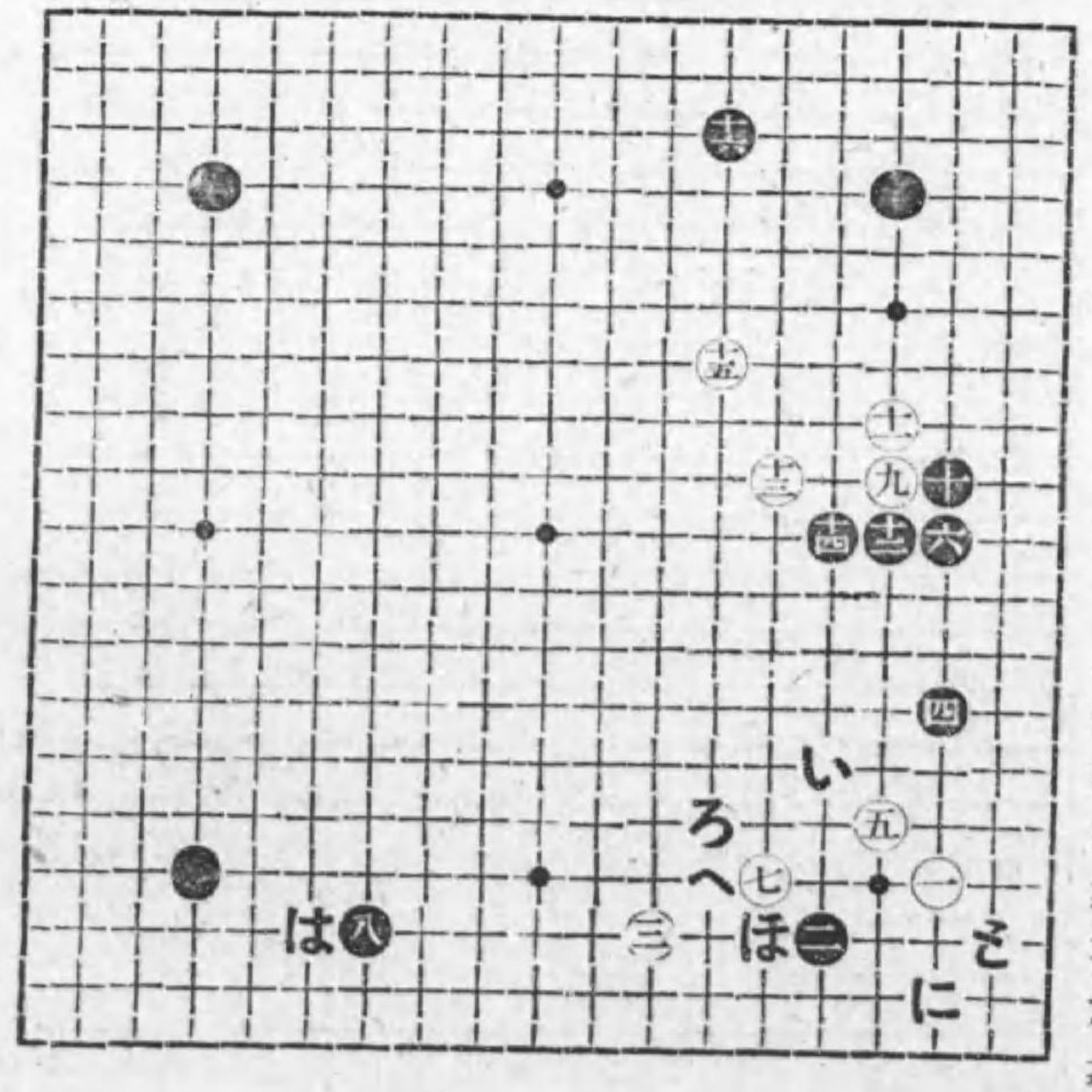
黒八は白に(は)と來させない、即ち三の方を擴大させ
 ず、局限する爲めである。

白九は定石である。黒十二を「ホの十一」なら白は「ト
 の九」が定石である。

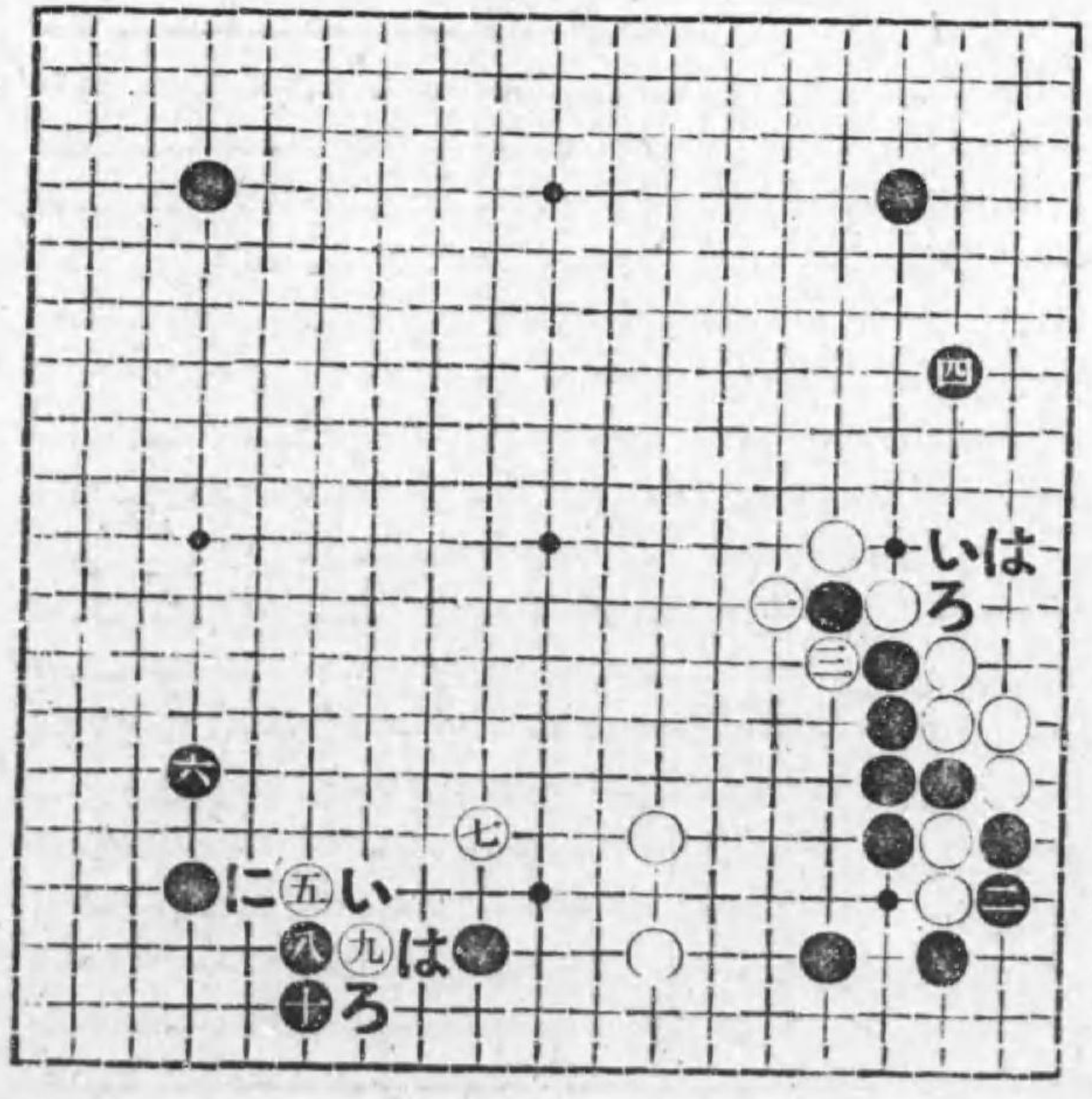
黒十四で十六だと、黒十四で黒は強調となる。白十五は
 定石である。十五を「への七」だと強いが強いが斯う十五
 より働らきはない。

白九は黒に「ニの六」と構えさせない定石である。が十
 五迄の形勢は、白に地が少なく黒の優勢である。

ツソレタヨカソチルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカソラルヌリチトヘホニハロイ



黒八は白九でいい、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ) 黒(へ)、白(と)なら黒は(ち)と受け、白には三(と)の間に地を與へて、自己は左側に形勢を占める爲めである。

八を必ずしも「ツの十七」に限らないことを、云ふまでである。即ち前譜の如く。

白九は黒が二十六と活きることを、目越して二十五の効用で、四と六の黒を攻める爲めである。

黒十四から二十六迄の活きは定石である。黒は活きた關係で、白二十五となり白の外形は強化。

黒二十八で三十二だと、白二十八で黒十二以下四は活きに忙殺され、延いて白に中央へ好模様を張られる。

二十六と活きた關係は、白に二十九で三十二又は(イ)と來られる損位ひは忍はねばならない。また三十三と右上隅を包圍されることも。此の調和の黒の考へは、白を持つた立場にも、必要である。即ち無理を避ける爲。

黒四は定石である。其目的は、早く黒二を安定させることにあつた。

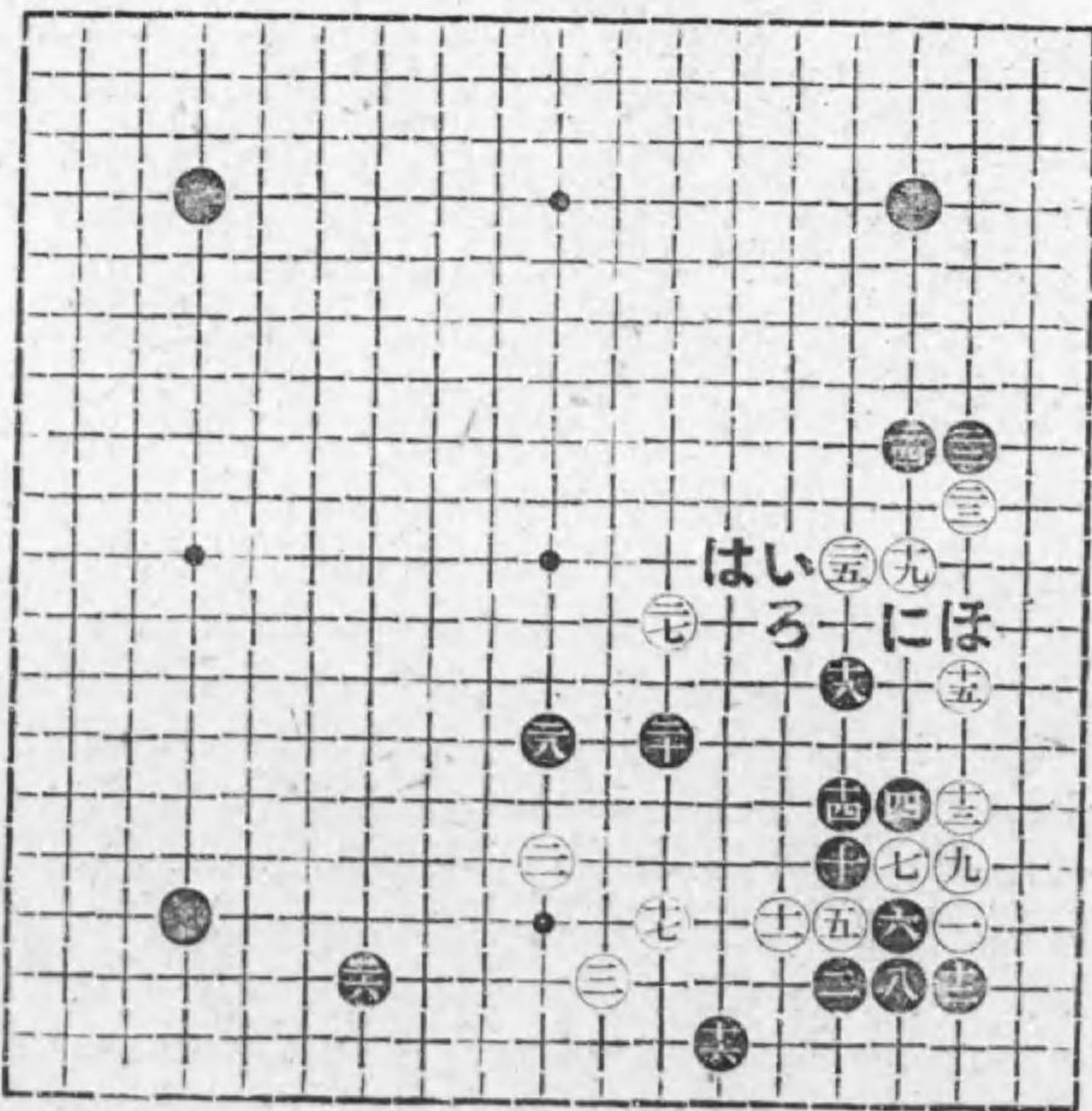
黒四の手段は白の立場にあつても、白は好んで用ひる定石である。其の意は四は俗に大斜百變又は二百變とも言つて、四の爲め或いは三百變それ以上にも變化あつて、其の變化を注視して、布石を有利に導く目的にある。

尙ほ一言するが、白が用ひて好いことは、黒が用ひても好いことは、言ふまでもない。

黒二十二、二十四は四に因る産物である。即ち右上隅に利す。

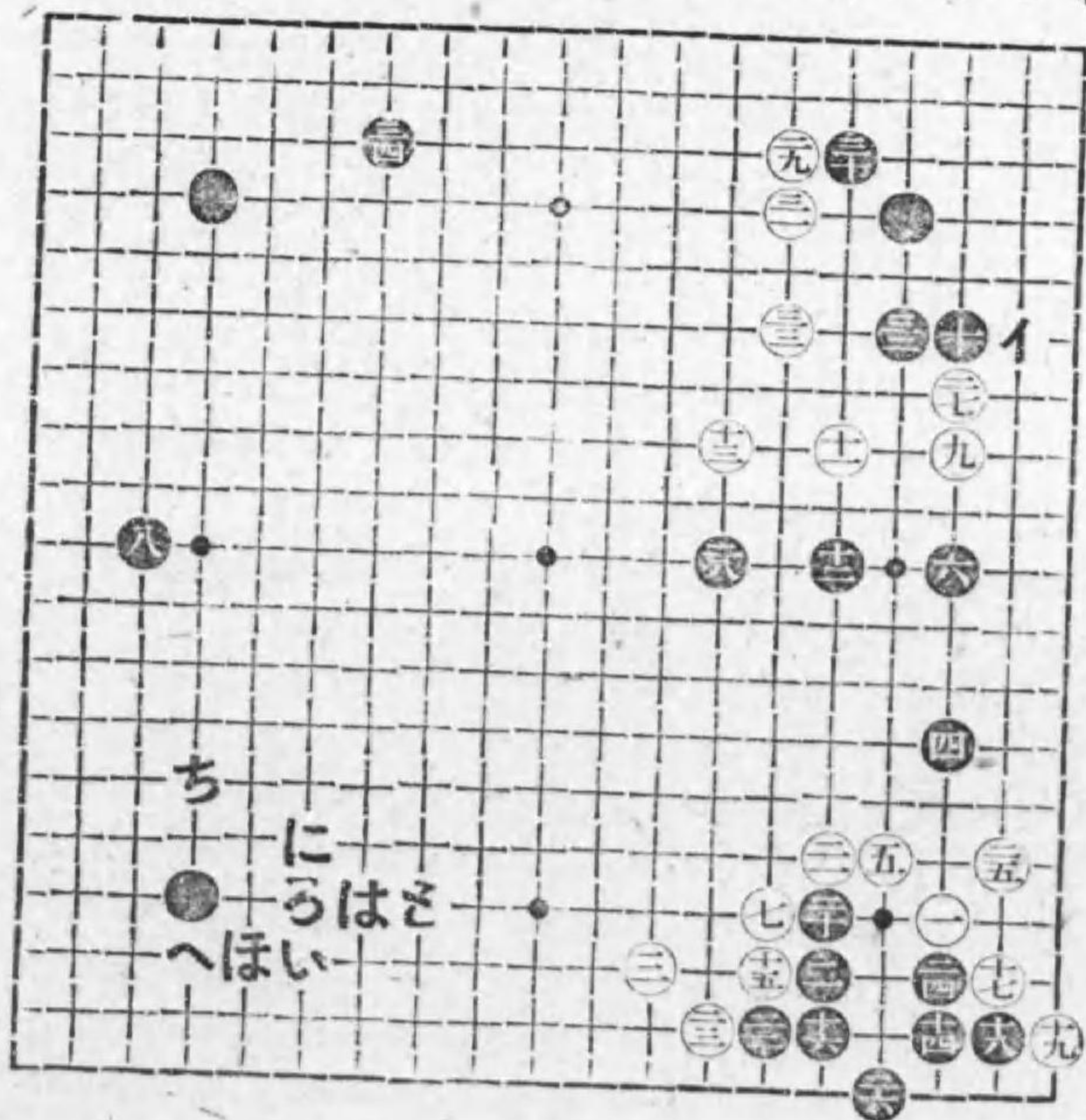
白二十五は定石である。二十五を(い)だと、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)の時黒に二十五と來られるなどあつて、白二十五を(い)は、二十五の點に薄味があつて、不氣味である。黒二十六で二十の方へ備へるなら、「トの十一」が良し。

ウソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

ウソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

白七は定石である。七を(い)だと、黒(ろ)、白三十六、黒三十九、白四十一、黒「チの十八」となつて、白三十三は、黒「リの十八」、白三十三を「リの十八」なら、黒三十三、白三十、黒(は)で、白は(に)の粘りとなり白は地を失ひ、黒に地を與える結果となつて悪い。
 其の白(に)は黒に三十一と切られて、將來が悪いからである。

白七となつた關係は、黒八が白(い)と來させぬ、ヤバリ、重要な點。併し八を十二でも良い。
 黒十二は「レの七」でも良い。十二は白十三なら、十四の構へで良いといふ、黒の意積である。

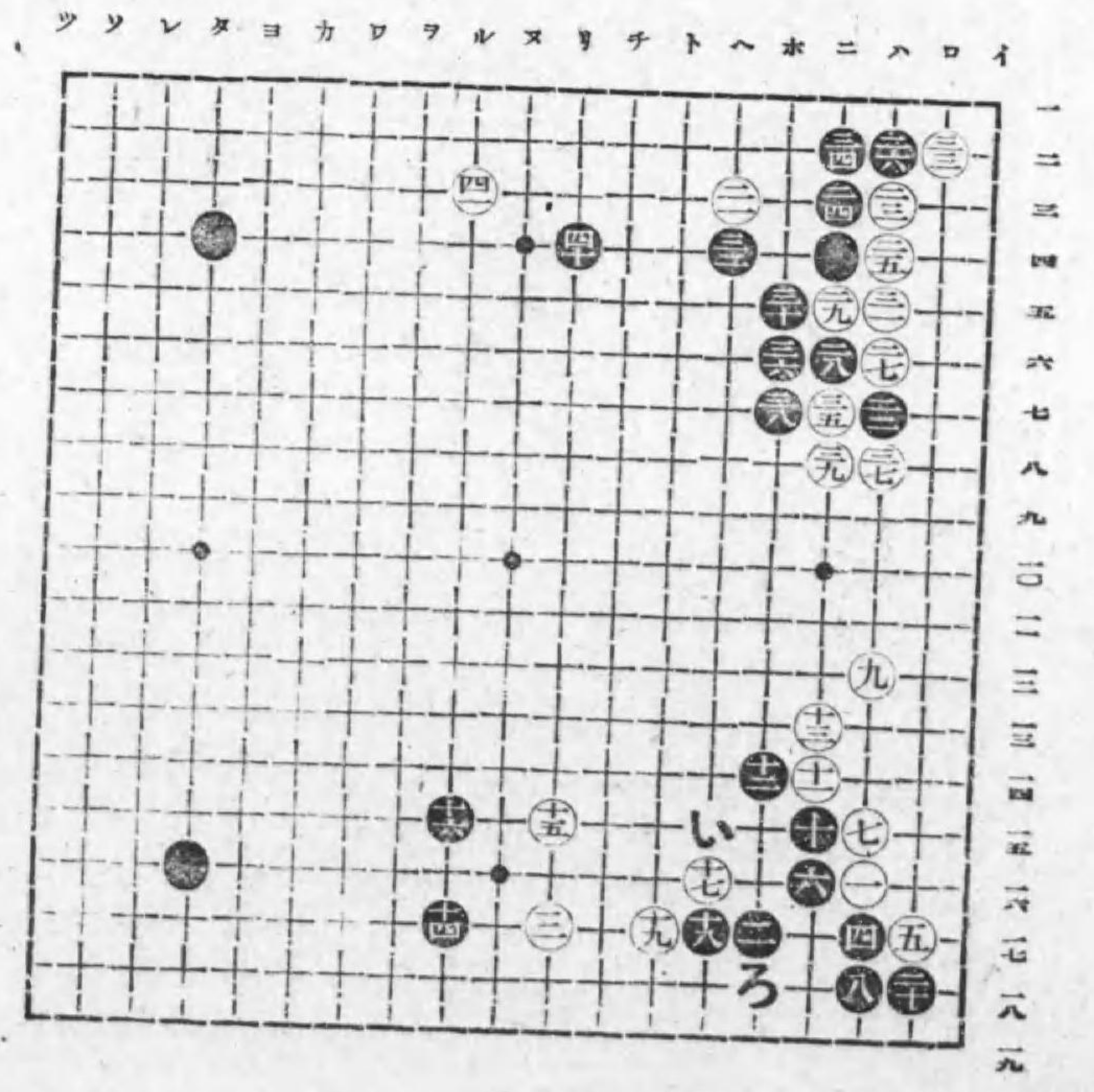
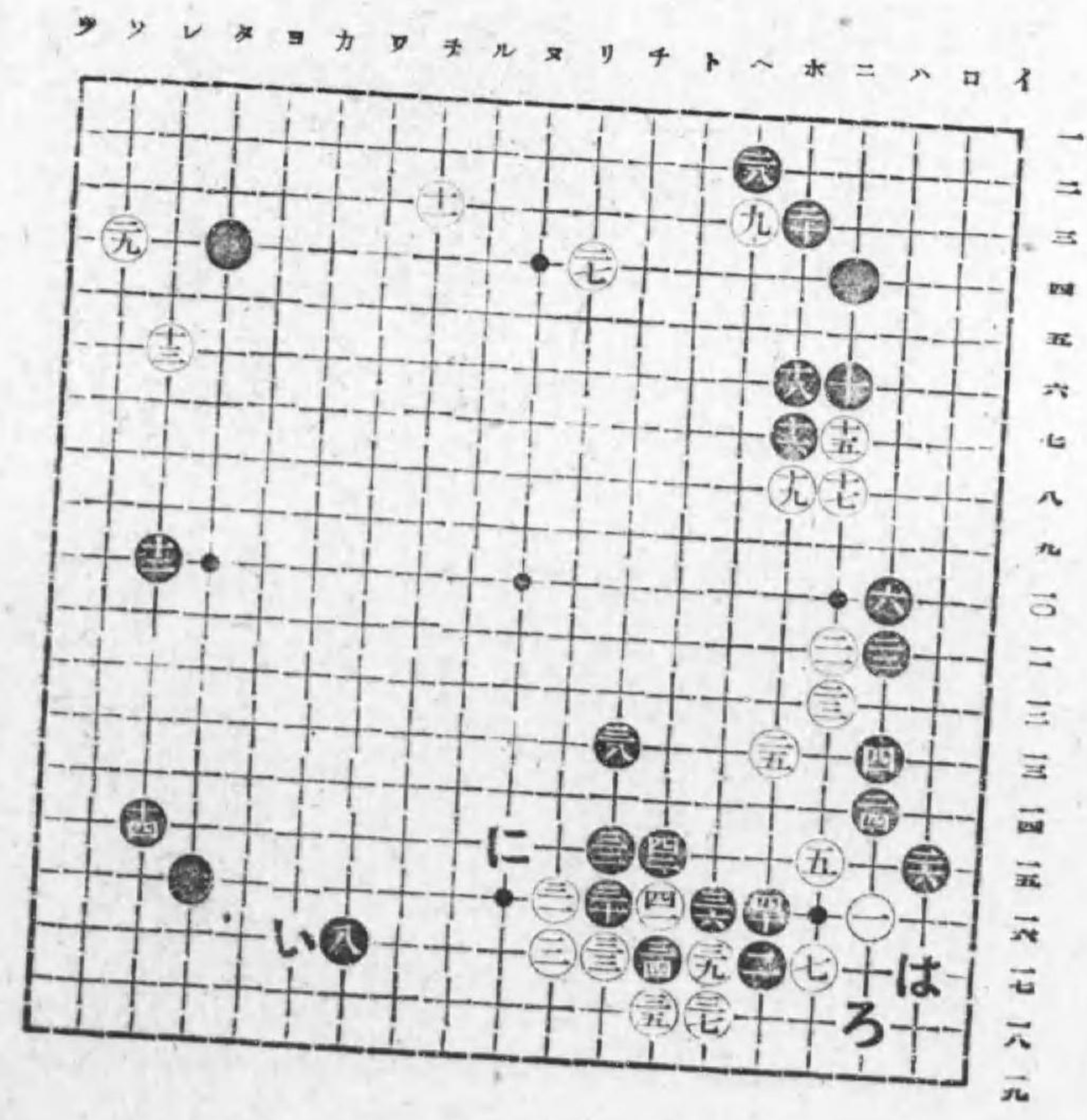
白十五は其方黒地を破る常用の手。だが、黒に十六、十八と強硬に受けられ、其處の目的を達しても、黒一方は二十、一方は二十六となつて、白は好果ではない。
 白三十五で四十一は、黒は「への十五」。黒三十六は定石である。白三十七は黒に其處へ來られるから。

黒四より八迄は、白三に對して好いからの定石である。即ち將來白二十なら、黒は十九、白二十を十九なら、黒二十ではそれが爲め黒は、悪い布石を辿らない。

白九は三の時黒八となつた定石である。九を十三の意は、三を其處で助ける爲めである。白九を十三だと従がつて、黒十四は二路退き「ワの十七」か又は轉じて二十二の點。

黒十、十二は白に十二と來させない定石である。
 黒十八で(い)だと、白十八の時黒(ろ)、白二十、黒(ろ)を二十、白(ろ)などとなり、黒は形が壞れて悪い。
 白十七に對しては、黒十八、二十と應じることが定石である。

白十三の方が堅固だから、黒は白二十五に對して二十六より三十八迄で、二十二の一子を捨てるのである。
 白四十一となつて、黒はどういふ形勢を招くか。



前譜白四十一に、黒本譜一より三迄は其地が、右下隅の黒地を合せると、右側一帯の白地に約十目位ひしか劣りはしない。すると二十五迄となつた現勢は、明らかに黒の勝ちと見取れやう。

白四で(い)だと、黒(ろ)、白(は)、黒四で白二の方は困難な立場になる。

黒十一で十二だと、白(に)、黒(は)、白(ほ)となる。すると黒は(へ)と行き、六以下の白四子を取りたくなる取損じる。敗けるといふことにもなる。黒(へ)迄で別に悪くはないが、二と六があつて白は相當に固いから、十一と受け白十二に手抜きでも良い。

黒十七で十八、白十七、黒(イ)も定石であつて、其の結果は、左下隅が白に侵入を受けるが、八の方に黒は大いに得。だが現勢に於ては其の必要がない。

白五で「ホの十六」だと、黒に、「ニの十六」と来られ黒四の目的に投じると、白が思へば五より十三迄の定石となる。

白十三迄は右側に地が出来た、其れを取返す爲め黒は十四、十六である。

が白も十五、十七で黒十二となつた厚味を、三分の一は消してゐる。

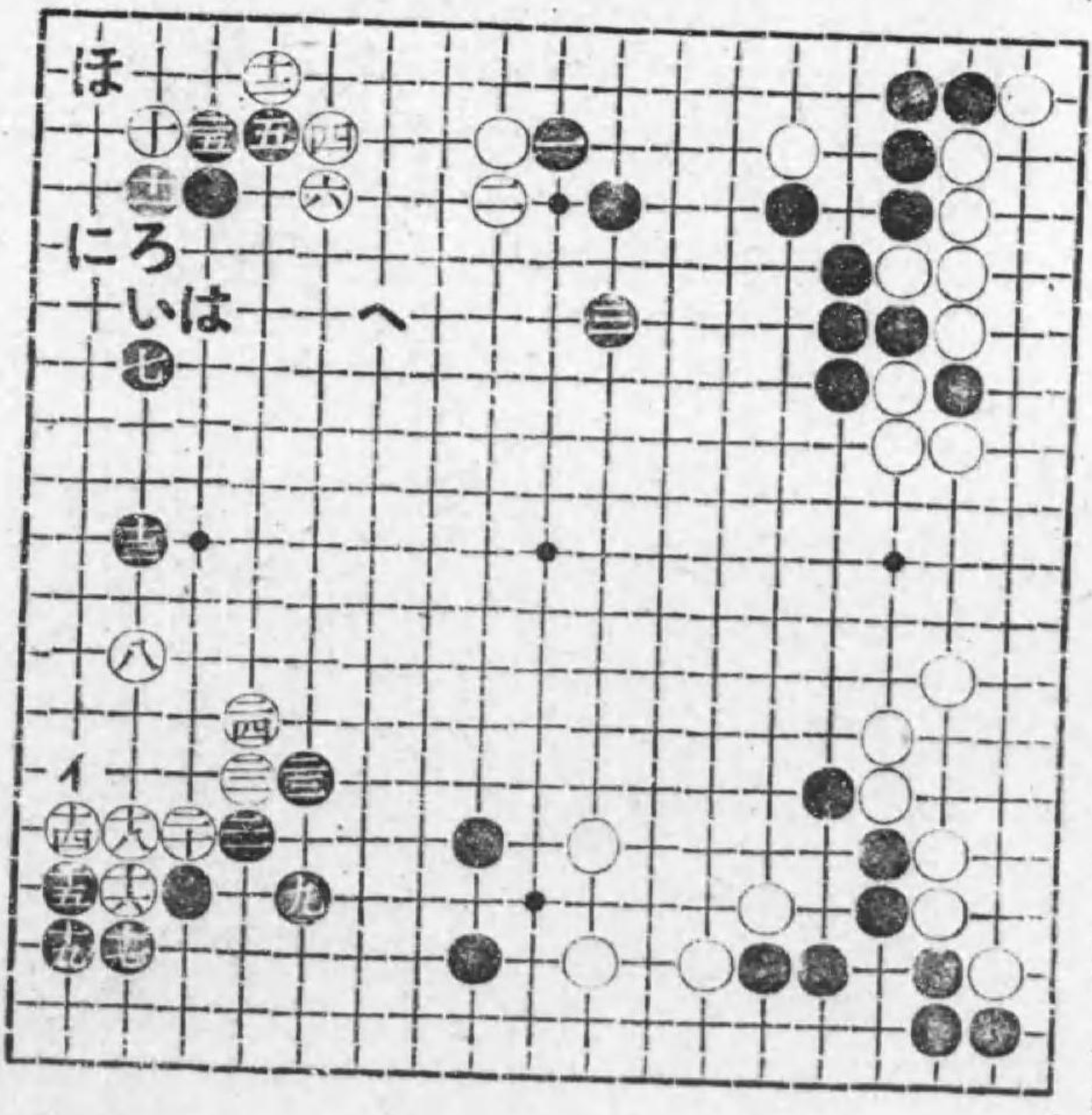
斯の損得はと聞かれては、何目何目と明らかな目数は言はれない。先づ白十七迄は双方定石で、定石の定義である五格サと答へる外ない。

黒十八は(い)の守りに換えた布石である。即ち十六となつた關係は、十八を(い)は堅きに過ぐ。

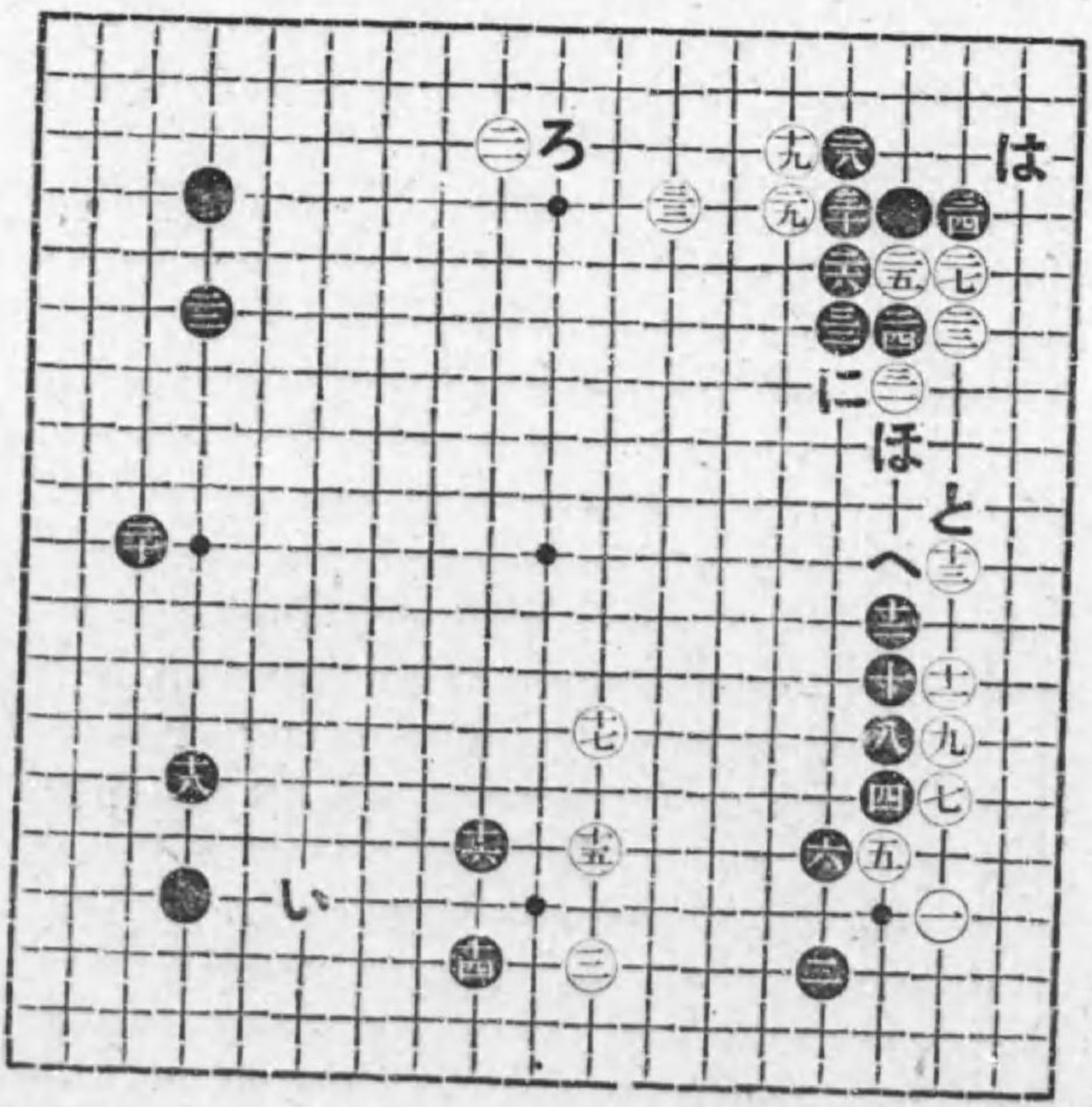
黒二十は(ろ)でも良い。

白二十三で(は)なら、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)、白(と)をして黒は三十三に打込みが決勝である。黒三十三の打込みには、白は大困難を極めやう。

フソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



フソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



白七迄の定石となつて、黒八で「ホの十二」、白十五も白黒共に定石ではあるが、白に十五と備へさすことは、黒四、六と「ホの十二」が一寸見好いといふ迄で、實は薄くして缺點がある。

白十一は九の方の助けと、十三の方の得で定石であるが黒に十四、十六と押され勢ひ三十迄となり、白は面白くない。

白十九と来たから、黒は始めて二十と出て二十二と切るのである。十四の時二十と出るとは俗手にして悪いのである。黒二十二は何んの爲めか。

黒二十二は黒(シ)、白(ろ)、黒(は)、白(に)と白に受けさせる爲。白(ろ)で(イ)だと、黒(は)、白(ろ)、黒(ロ)そして白(ハ)は、黒は「ロの十七」と切つて、「ホの十八」「ホの十九」迄を利かせるのである。其の關係は白九の方に悪影響。といふことより推して、白十一は(ほ)が本格。

白一の高目に對しては、三子で黒が二と入ることは定石である。黒四、六、白三より七迄は、白黒共に定石である。

黒八で十三の點は定石ではあるが、三子では白に直に(シ)と調節されて面白くない。白七が(ろ)に在れば八で十三は、次に二十一と打込む目的あつて宜い。

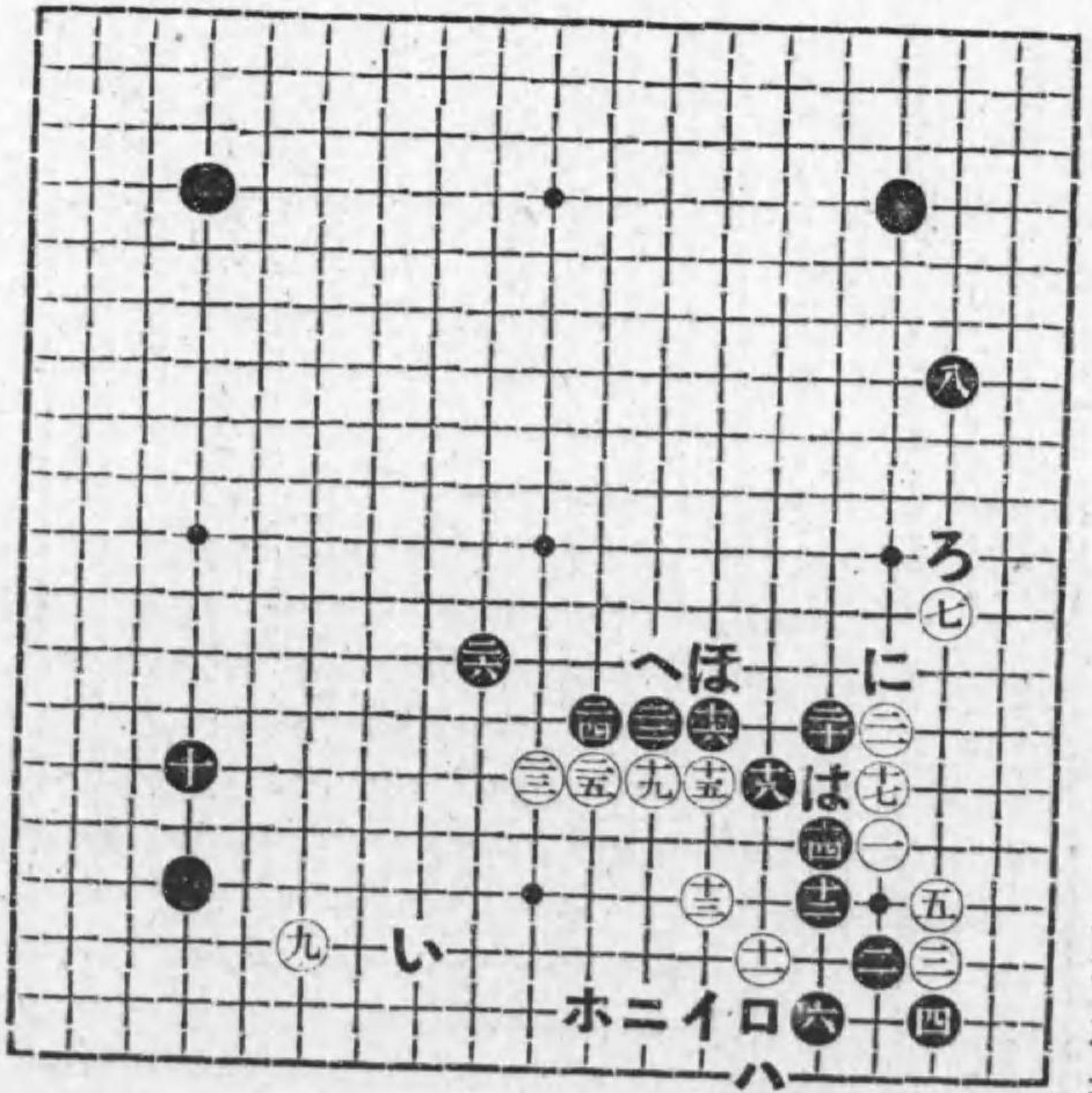
黒十六は奇抜のやうであるが、實は研究を極められた定石である。

十六を二十だと、白十七、黒(は)、白(に)、黒十六、白二十二、黒(ほ)、白(へ)となつて、白は尙ほ中央の良路を歩むに反して、黒は自己保身のために、白七、黒八の既に在る將來益しない、悪路を歩む。

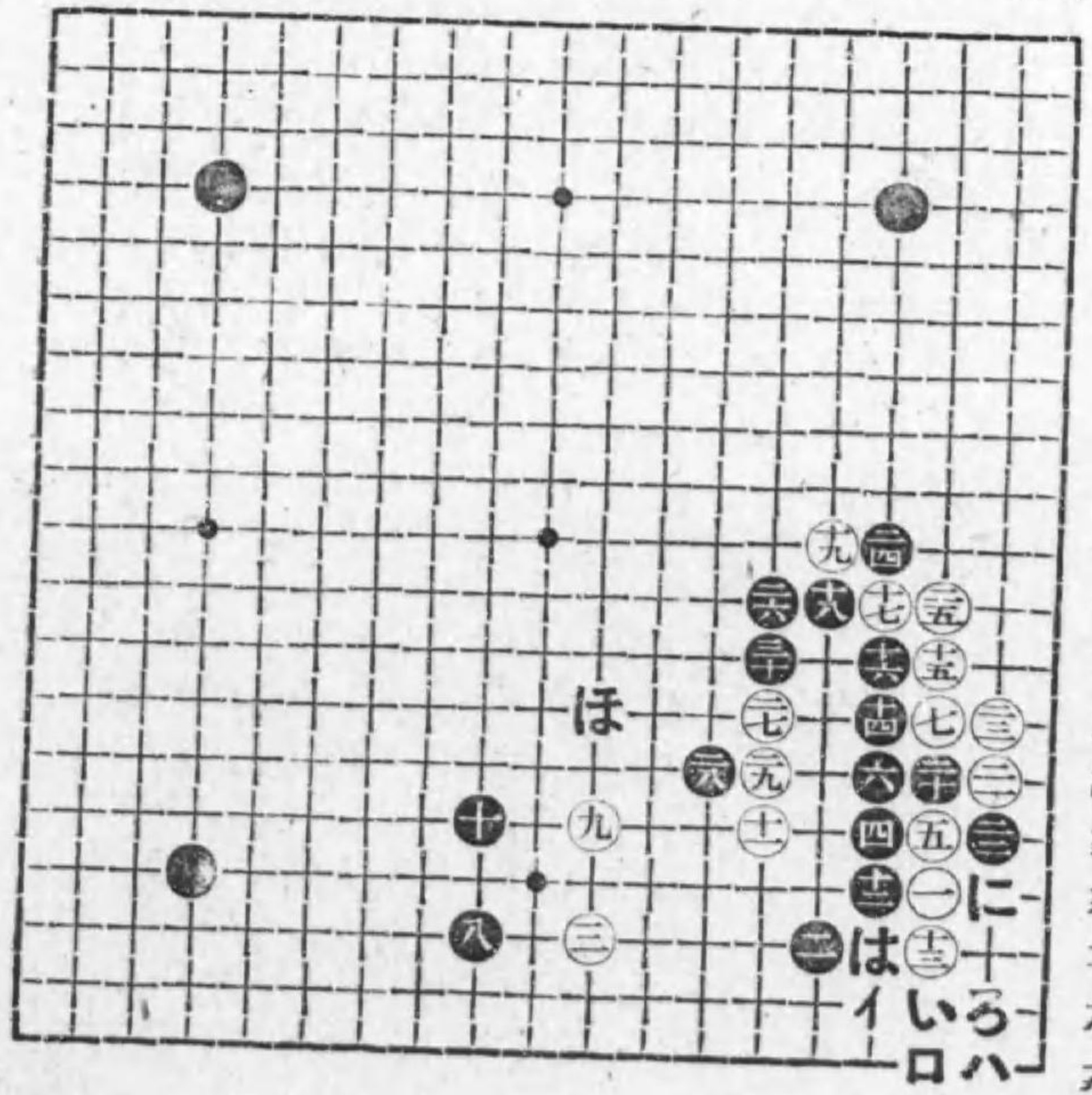
白十七で十八だと、黒(は)で白が大悪。

白二十五となると大きな地に見ゆるが、黒(イ)、白(ロ)、黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)が黒に有る。

ウツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ウツレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒四は前譜白七迄の定石を變化して見やうである。
 黒四を(い)だと、白七は(ろ)、黒八迄となる。黒八の方は、斯う白七より少しく樂だが、(い)に在る黒は、(ろ)と堅固に備へられた、白の方へ寄り過ぎ面白くない、黒八を(は)だと、白は八。

黒十二を十六と、アツテテ、逃げる要はない。白十三を(に)なら、黒は(ほ)の渡りで良い。
 白十五を(へ)なら、黒は直に(と)で(ほ)の渡りが出来る。

黒二十二は佳形である。白十九を「リ」の十二なら、黒は「ニ」の十二で十八の方が治まる。

黒三十は十二の一子は捨て宜い考へ。即ち黒十二の爲め、黒は十八續いて二十二迄と、以上一の五子を治まつたからである。三十となつて白(ち)なら、黒(イ)、白(ロ)、黒(ハ)、白(ニ)と黒は進ぶのである。

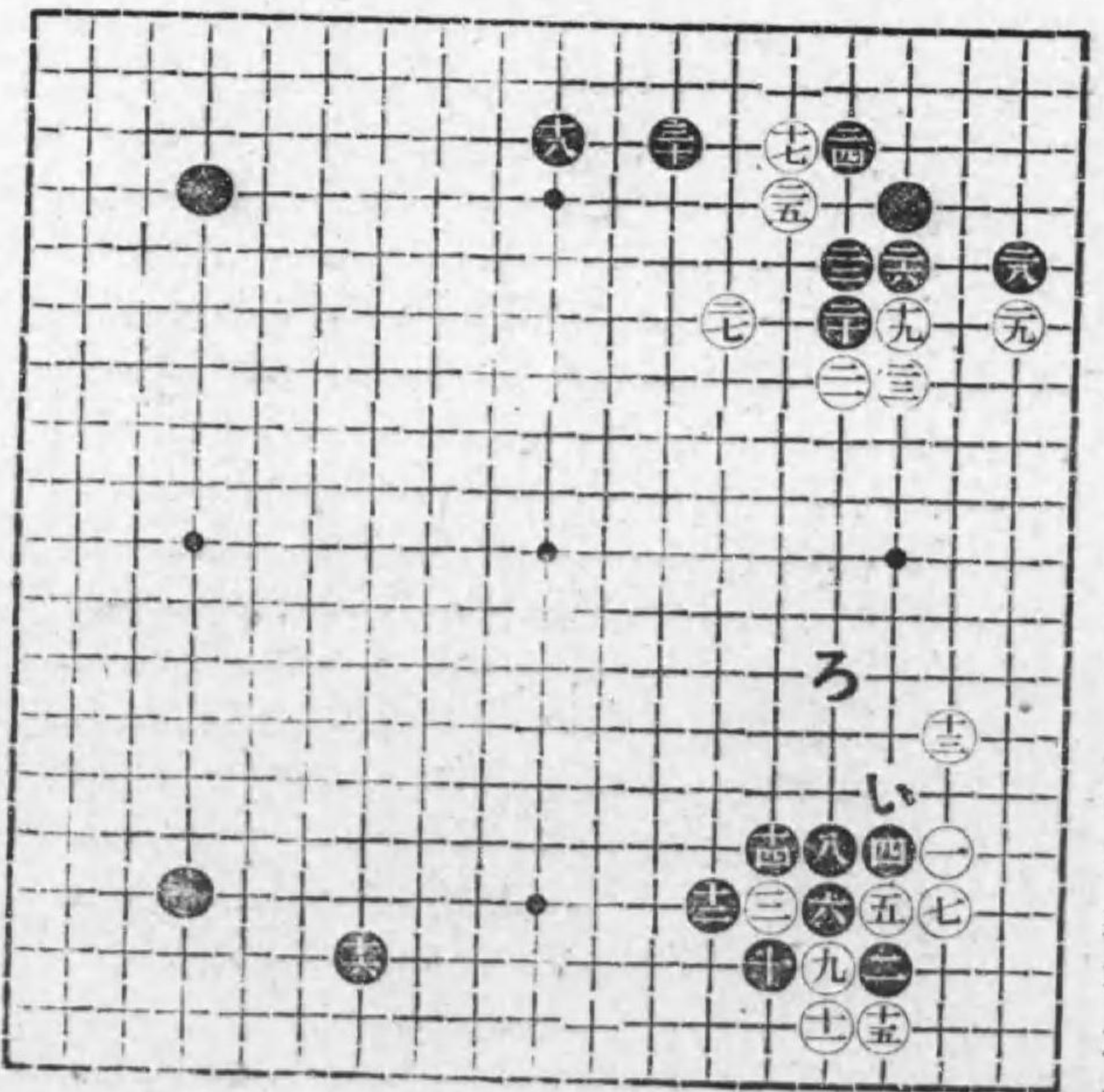
白一に對して黒直に二と入るが定石である。

黒八で九だと、黒は八。の時黒(い)と出ること、又は十四と切り四を捨てること、其の何れも定石ではあるが斯う八と上に粘ぎ、十四迄となることは、黒が判り易くして良い。但し十二と白三が征に取れる時に限る。

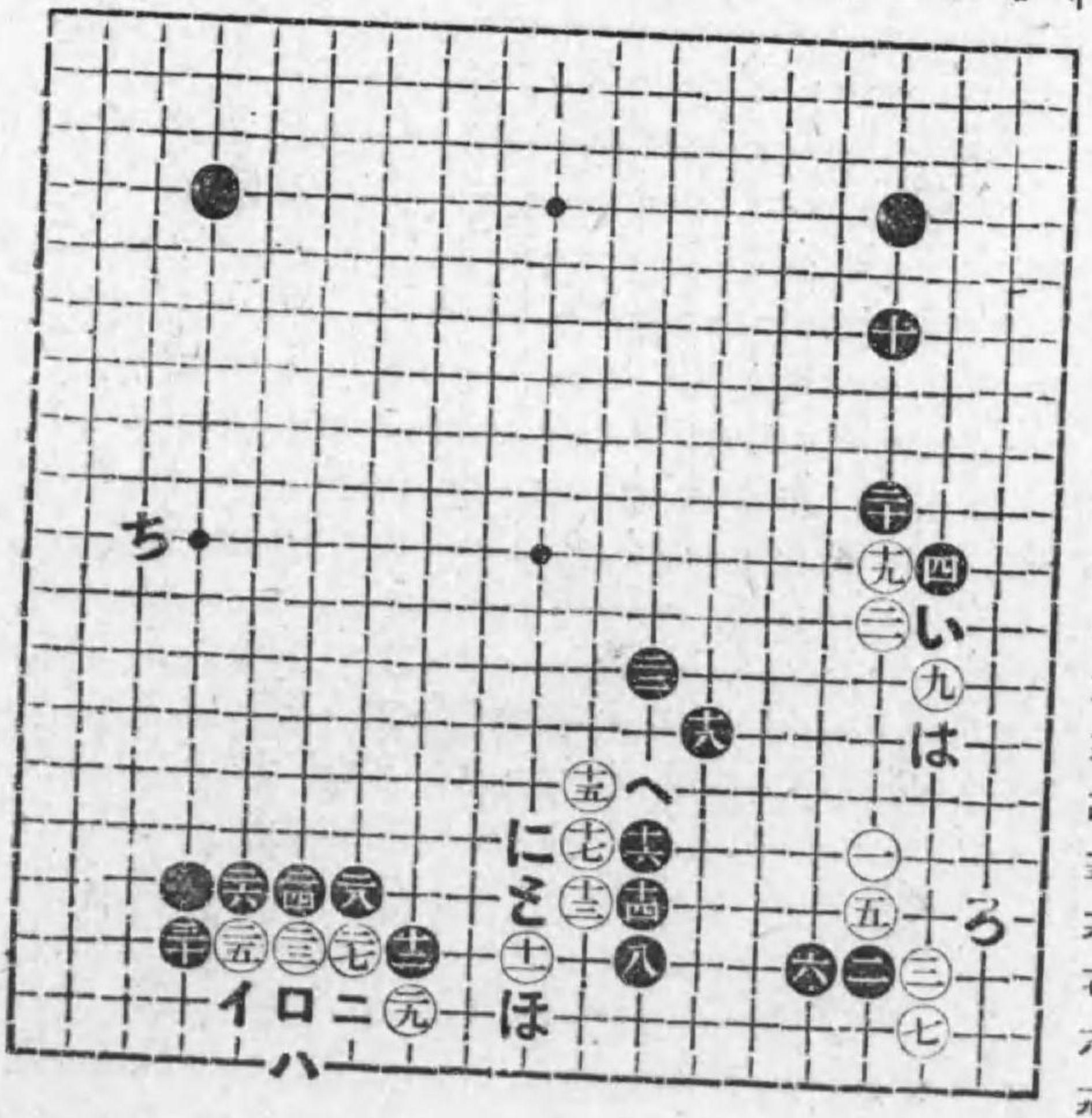
黒十四と取ること、白十五と取ること、共に定石である。白十五となると黒十四迄の比較が、黒の劣りに見ゆるが其れは十六を入れないといけない。十六を入れてなら、十五迄の白と見劣りはすまい。
 即ち白一より十五迄は八手。黒二より十六迄は八手を見逃がしてはいけない。

黒十八で十九又は「ハの七」は、白十三が在つて、更に十三の方へ拓地を求めると面白くないと悟られよ。
 黒三十は右上隅の助けを兼ね、二十五と二十七の間に不氣味を與えてゐる良手である。黒三十を其方でなくば、現勢に於て(ろ)が最も好所。

イロニハチトヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



イロニハチトヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒二より六迄は定石である。黒は六を(リ)の十七)でも同じく定石。

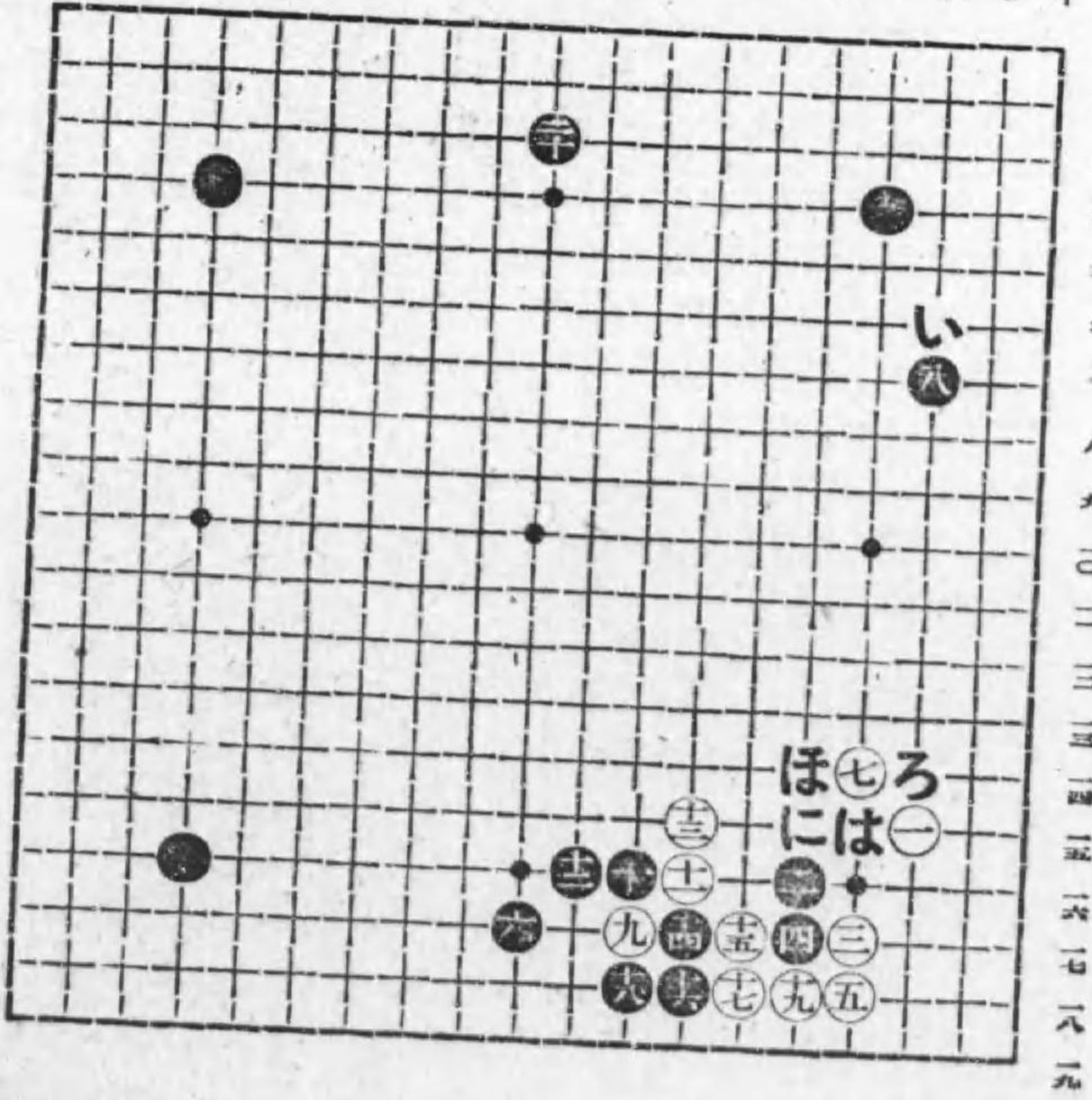
黒六の意は、白七を(い)なら、黒は七で白(ろ)と受けさせるか、白(ろ)を(は)、黒(に)、白(ほ)、と白に切らせて黒は戦ふことにある。

白(い)に黒七の時、白(ろ)、黒(に)の十三)は六が「リの十七)より廣く、黒は中央に向つて、盛大な構想である。又た白(ほ)の切りには、黒は(ろ)と強く行き、悪い結果は招かない。

白七の考へは、黒に十とでも、守らせ、そして(い)。黒八は其の白の裏を行く。

黒十で(ほ)と二、四を助けることは、前途止度のない争いを起す。白十九迄で二と四を捨て、二十と形勝の地を占め宜いなら、是れに越したことはない。實際二十となつて黒は良い布石である。

イロハニホヘトチリヌセカフヲレツ



白三より十一迄黒四より十二迄共に定石である。

黒四の意は十二迄になることにあるが、白五で六、黒五白七なら、黒は十と白三の一子を征に取ることも含む。征に取れな、時には黒は四と行けない。

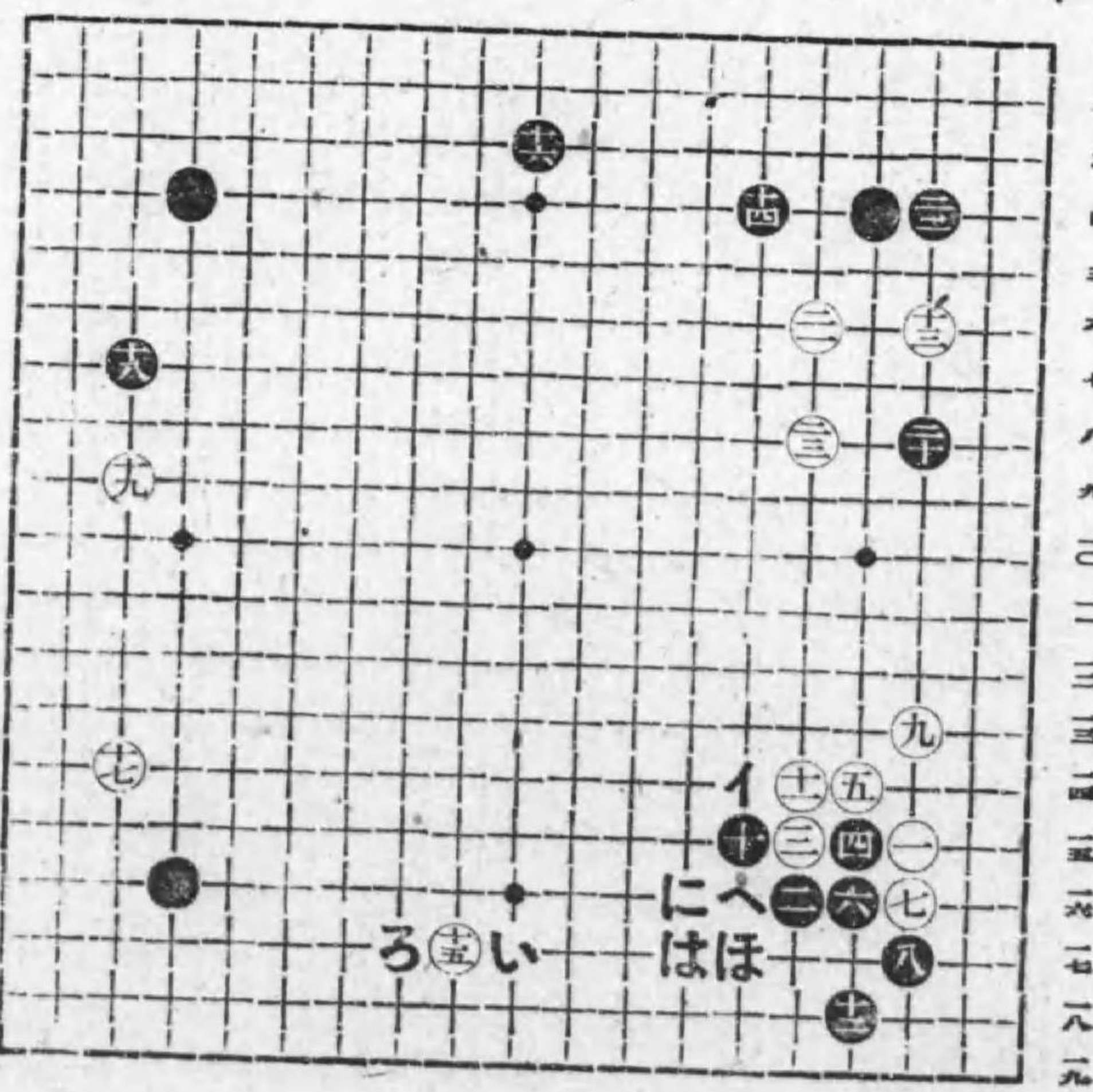
白十三は九との間が六路の廣さあつて、十一と堅城を築いた利用の進出である。

其の興味で黒十四も(い)が望む所である。が十四と受けには二十と打込む機会を以てゐる、深意が含まれる。白十五で二十一なら、黒は無論(い)。

白十五で(い)だと、黒(ろ)、白(は)、黒(に)白(ほ)、黒(へ)となり、黒十が強化で白は右邊に薄味を覚える。即ち黒十六で「リの十七)なら、白は後ち(い)と押す右邊擴大に開拓の好手あり。

黒二十、二十二は敵地侵略の武器で、一局の内斯の意味の機會多く、見逃がせない要點である。

イロハニホヘトチリヌセカフヲレツ



本譜黒「ハの八」白「ホの八」のない如きは、四子の碁に多く現はれるところであつて、黒が「ハの八」へ打込む機会も多いが、前途に即ち白に「ホの八」に來られ危惧して終に白二と用心され其の機会を失ふ。

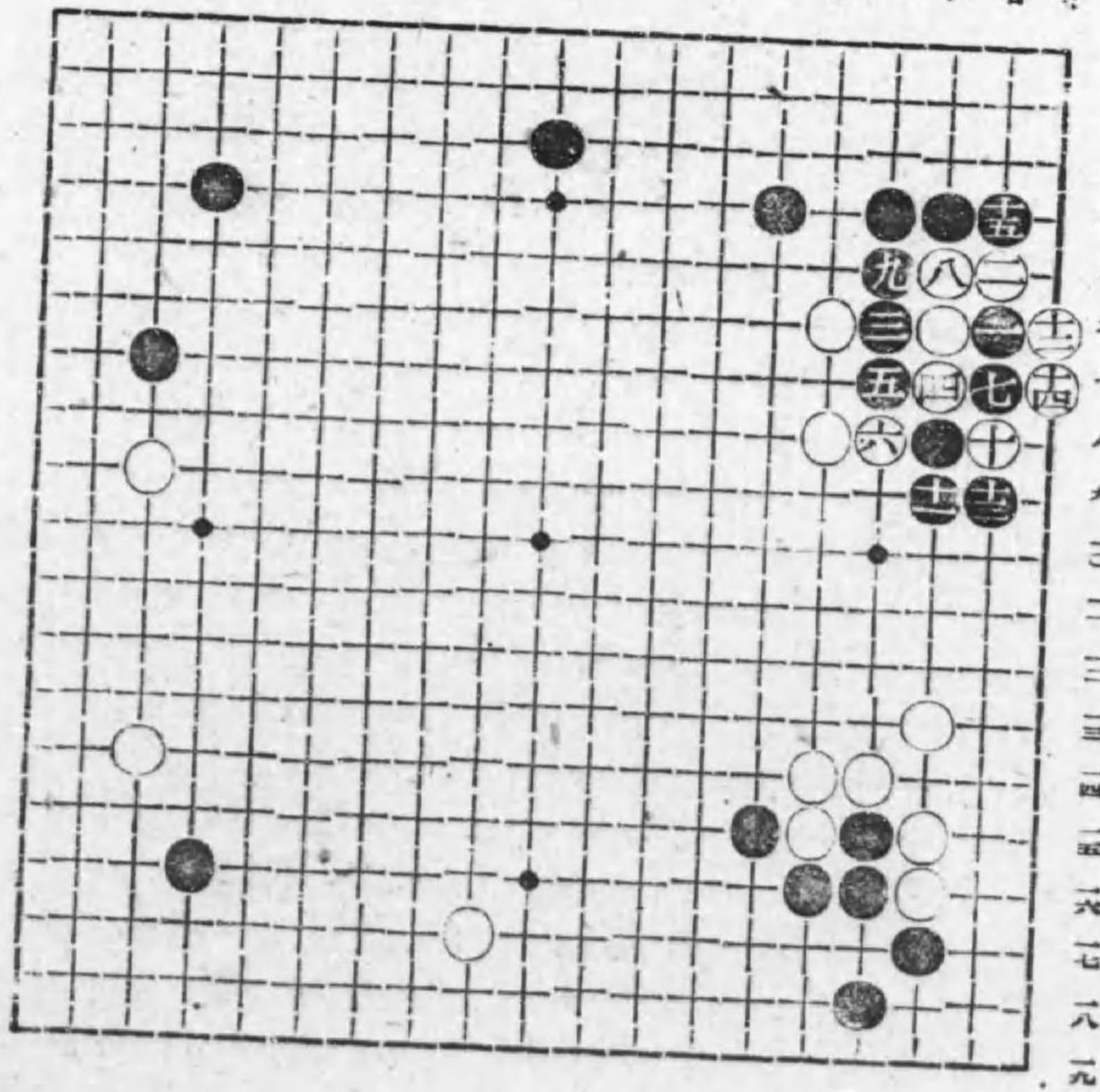
白二を七だと、黒四、白二、黒三、白八、黒九となつて、黒は突破の目的を達す。

黒三を八が尤も俗悪の筋で、是れが敗因となる。黒三と七が本題の生命である。七を八だと、黒は三を八と同じ。

黒七と九の要領、即ち調子は本題のみに限らない本筋である。

黒十五となつて、假りに白が「二の十」に一手あるとして、攻合に白「ハの十」の時黒七に打込み、白一に取り黒は「イの九」に下りて、劫争になる。が元來白の内部で事端を起したのだから、の考へは持つてゐて欲しい。

ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



定石通り相手が來ません、と先生に泣事をいふ人があつる通り、實際好んで無理を打つ人あり、本譜白十三はそれだ。

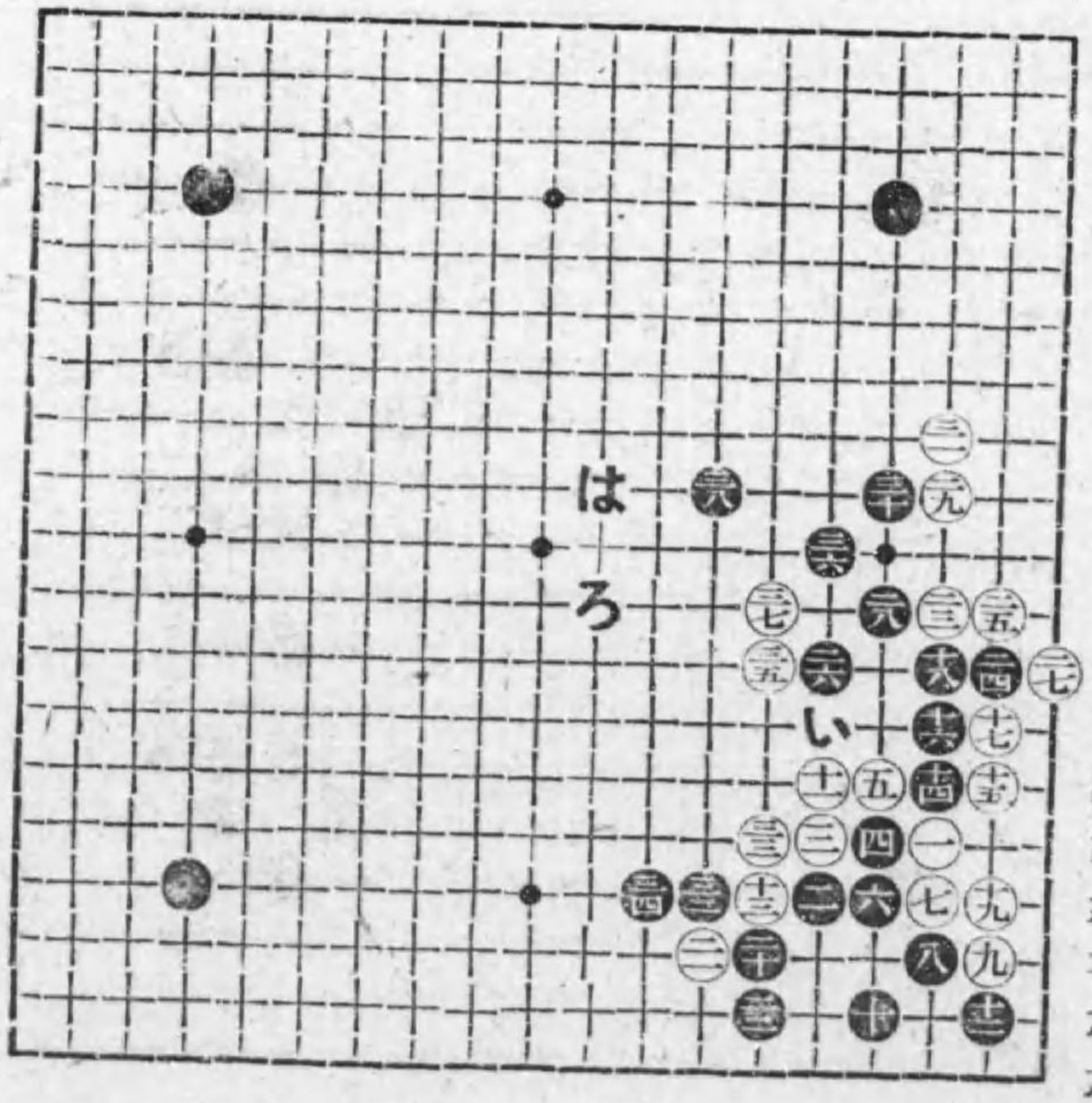
白十五で十六と一以下三子を、白は何んで捨てものか其れは黒が一步誤ればの期待もあり、實際まな誤まる例のある所もある。即ち！

黒二十で二十四だと、白に「ホの十八」と來られる。黒二十二で二十四だと、白に二十二と來られる。共に黒は危路である。

黒二十六で、自己が取られることを放棄して、ひたすら白を取るのみに、目が暗み「イの十五」に行き大敗を招く例も多く見るところ。

黒三十二を三十三だと、白は「イ」。三十八となつては、白（ろ）、黒（は）となり黒は正路。白は黒三十四があつて、面白くない路を歩む。

ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



白五を六の方からでは面白くない、と見れば勢ひ十二迄となる。

是れも定石ではあるが、三子の碁としては、黒十二となつて、黒は前途賭易く早く大勢は黒に有利と定まる。即ち白は十三と其方選定の外あるまい。

白十三を(い)又は(ろ)でも、黒は十三の方。

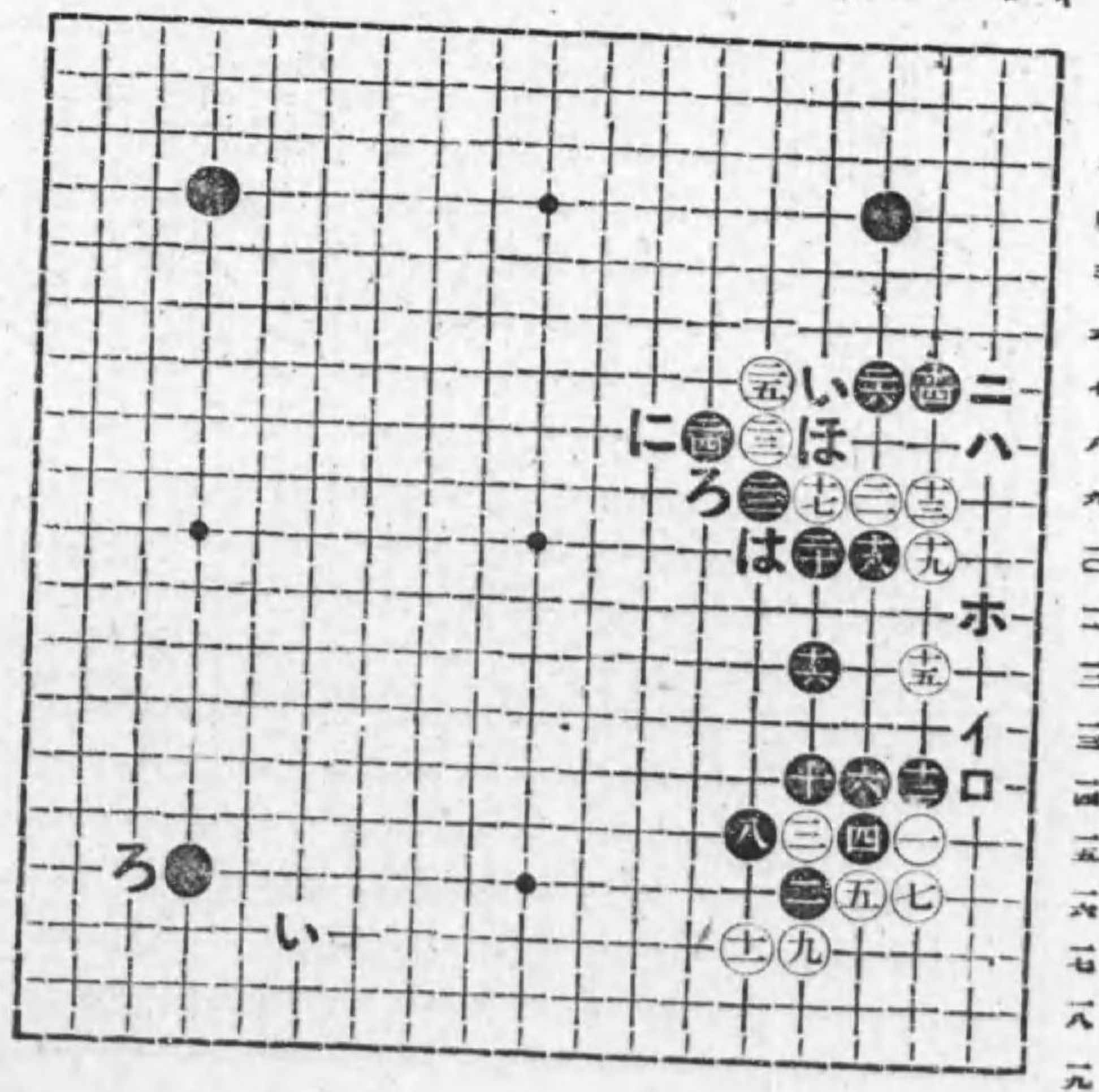
黒十四を「ハの十一」は十二との間が狭い。ことに十と白を取つた、強さもあるから。

白十九で二十一なら、黒は「ロの十一」。

黒二十六は定石である。白(い)と粘ぐことを好まず、白(ろ)、黒(は)、白(に)なら、黒(ほ)、白(い)、黒(ロ)白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)となる外なく。すると黒に「ロの十七」と入られる事を残す。

戻つて黒十六は良手で、白に其處へ飛ばれると、黒は其の一手で形勢を悪くする。

ウソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



相先の碁で黒が白一の處に在る時、白二に来て黒に三と受けさせることが、定石だから、黒は二で白に三と受けさせ四と、直に構えるのは悪からう筈がない。

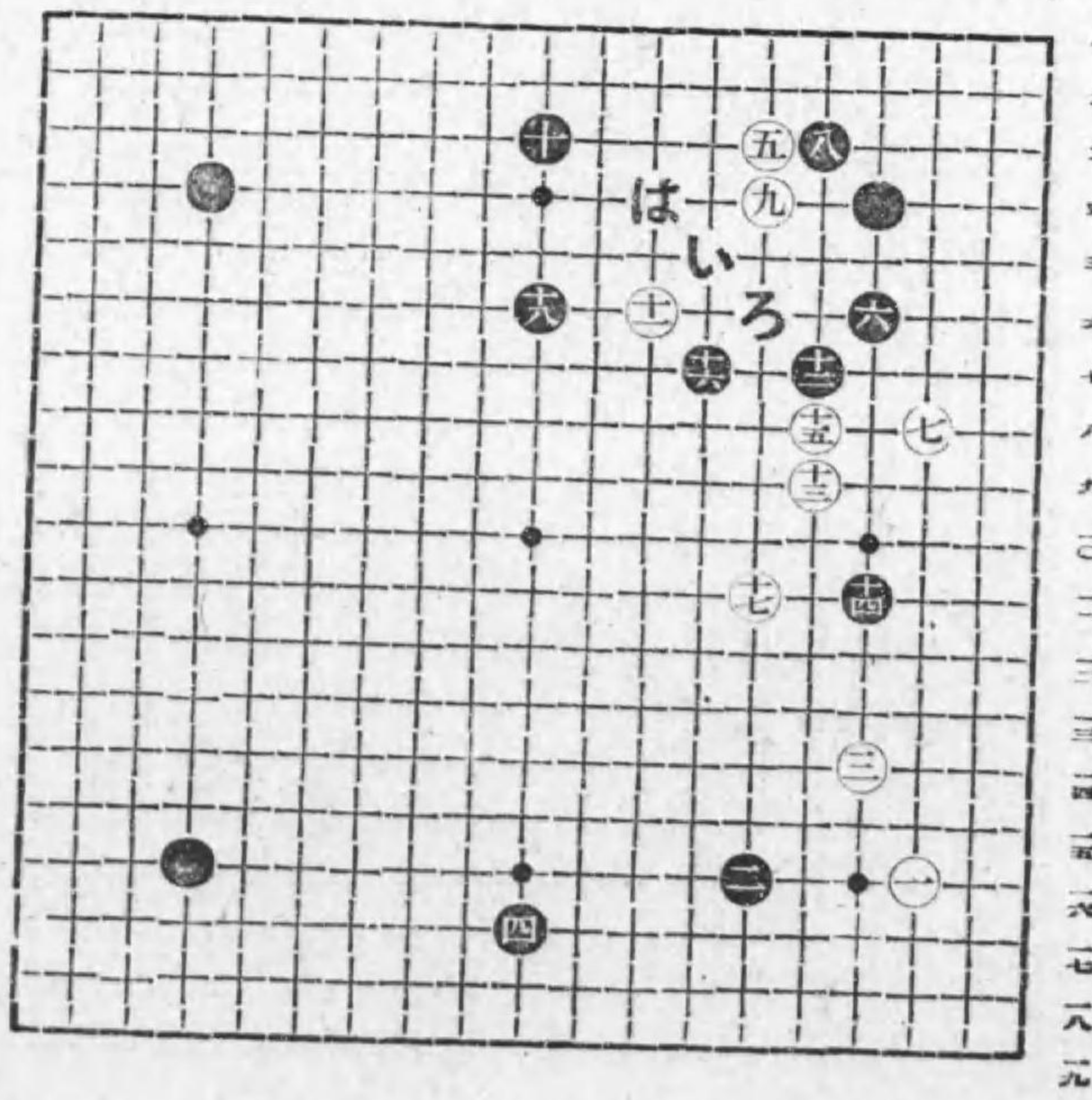
黒四は二の備へと左下隅の均合も好く、是れ最も重要な點だ。が四と限つたことはない、四に次いで「ハの九」が「ハの十二」へ行く餘地もあり、第一には白三の發展の方を狭めて良い所。

白七で十の方なら、黒は「ハの九」。白七は黒が六と來ることを豫期して、五に伴ふ既定據點。

白十一は定石である。黒十二で(い)なら、白は(ろ)又は(は)。(は)として黒(い)を動くことは結果が悪い。

黒十四は白十五黒十六と交換する捨石である。が白十七となつても、出にさのみ困難ではない。が十八と白十一以下三子を攻めが緊急である。即ち白十一以下の治まり様で、十四の動きが樂となるからである。

ウソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



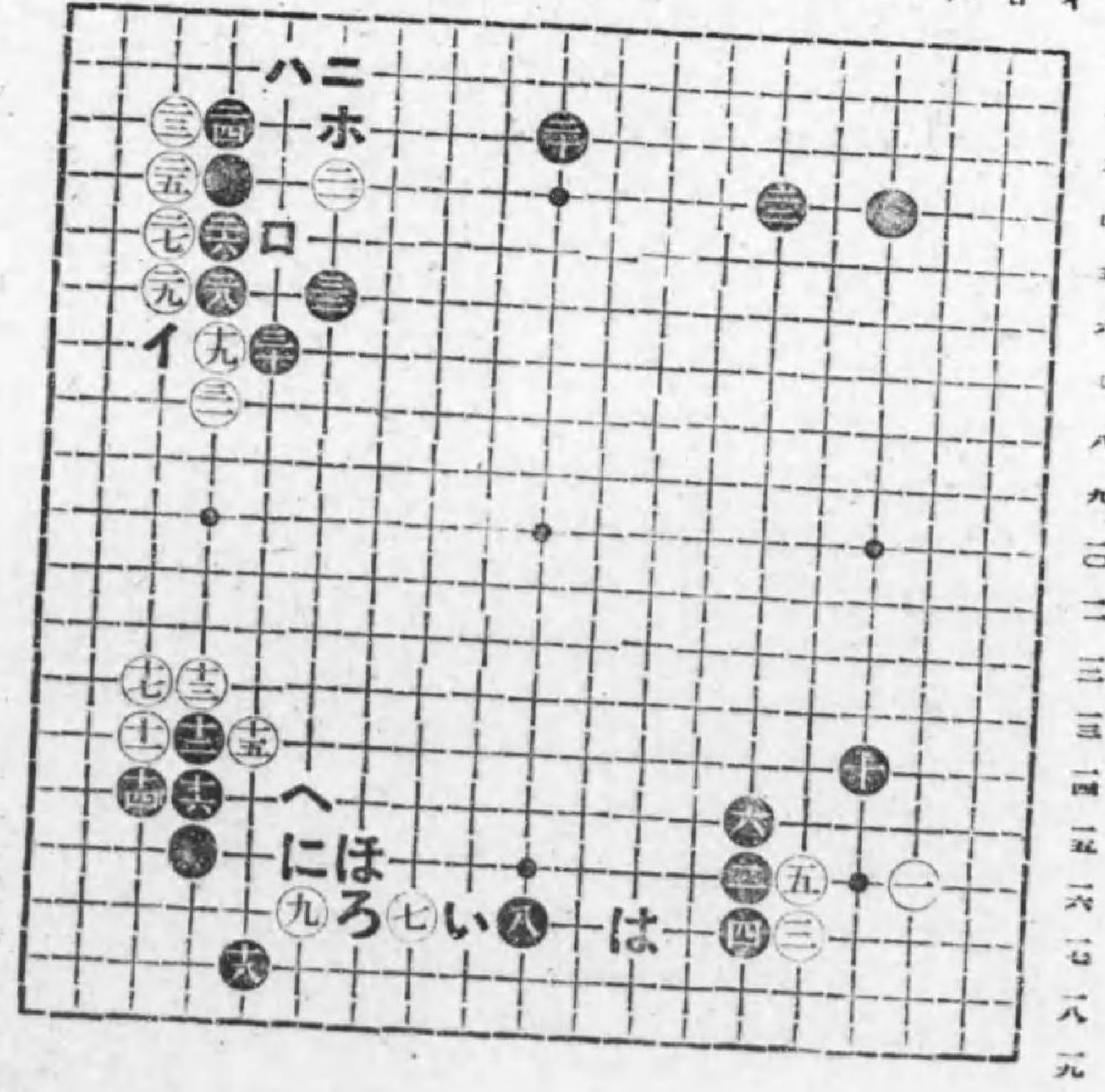
白三を十の受けは、黒に八の點を直に占められ面白くないといふ、白の考へが、白三より黒六迄の定石の現はれである。

黒六となつた關係は、白七は當然の擇びである。七を他方面だと、黒は其れに構はず、(い)の點。白七を(い)だと、黒は(ろ)。次いで白(は)は、黒直立の六へ接近して白は面白くない。

黒十八は白七と九の有る際に於ける定石である。十八で(に)、白(ほ)、黒(へ)の定石を、所構はず擇ぶと、白に「タの十八」と來られ、是れが敗因ともなる。十八は機會を見て(へ)に飛出し七と九の白を攻める。

白三十一で「ヨの六」の切りだと、黒は先づ三十一、白(イ)、黒三十二、白(ロ)、そして黒(ハ)で連続の黒四子は取られない。其時白(ニ)なら、黒は(ホ)。黒(ハ)の筋は定石である。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



黒四は前譜六迄となることを好まい定石である。

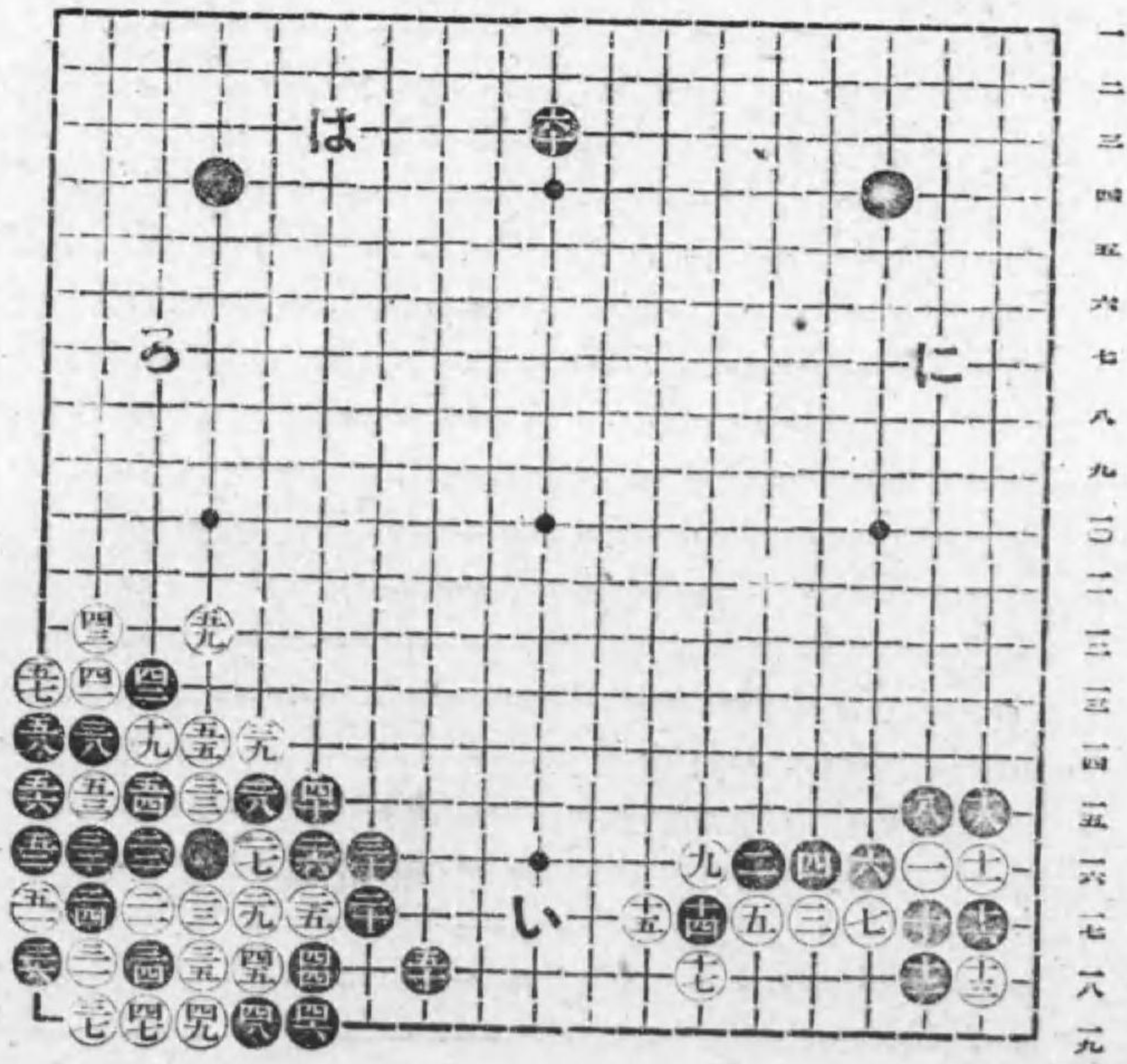
白五を七なら、黒五、白「ニの十五」、黒(い)となる定石が現はれる。白の立場として五を七に引込めない。で勢ひ十八迄の定石となつた。

黒十八迄となると黒は、右側に優先を示してゐる。白十七迄となると白は、下邊より左下隅へ優先を示してゐる。扱て此の運用だ。

黒二十で(ろ)は斯の形勢にあつて、好適の所。それを態と、白十七となつた金城湯池の方へ向つたが、黒には考へがある。

白二十二で假りに(は)だと、黒は直に二十二の締りで白十七の威勢を半限する。で、白が二十一と直に入る、白二十三を三十二なら、黒一十三、白三十一、黒三十四白二十四に粘ぎそして黒は(に)。で、白は二十三と押すとなれば以下白五十九迄の定石が、合理上現はれる。と、黒は六十の大場。是れ位ひは寸前の考へだ。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



黒二に對して白三より七迄は、黒八となつて黒の目的通りの定石となる。で白三は「トの十七」と黒二の裏を行くことにもなる。併し黒八となつても、別に白が悪いといふのではない。

黒に(イ)と來られない内、白十一と黒八の肩を働いたのは、一局調節の高等手段である。黒に(い)と來られると其の一帶は先づ黒地と見る外ないからである。

黒十二、十四、に對し、白十三、十五の受けは定石である。黒十二を十四なら、白「チの十六」、黒「リの十五」白「ルの十三」、となるのが定石である。

黒二十で(い)に飛びは、白十五とある此際に於ける穩な態度であるが、二十、二十二と切つて出ること強くして、前途に好展開を見る。白二十三で二十四なら、黒(ろ)、白(は)、黒(に)となつて黒が善い。白二十五は黒に二十六と、止められて悪。

前譜白二十五は悪いと言つた。併し其後はどうなるかを示すのも、益する人が多からう。

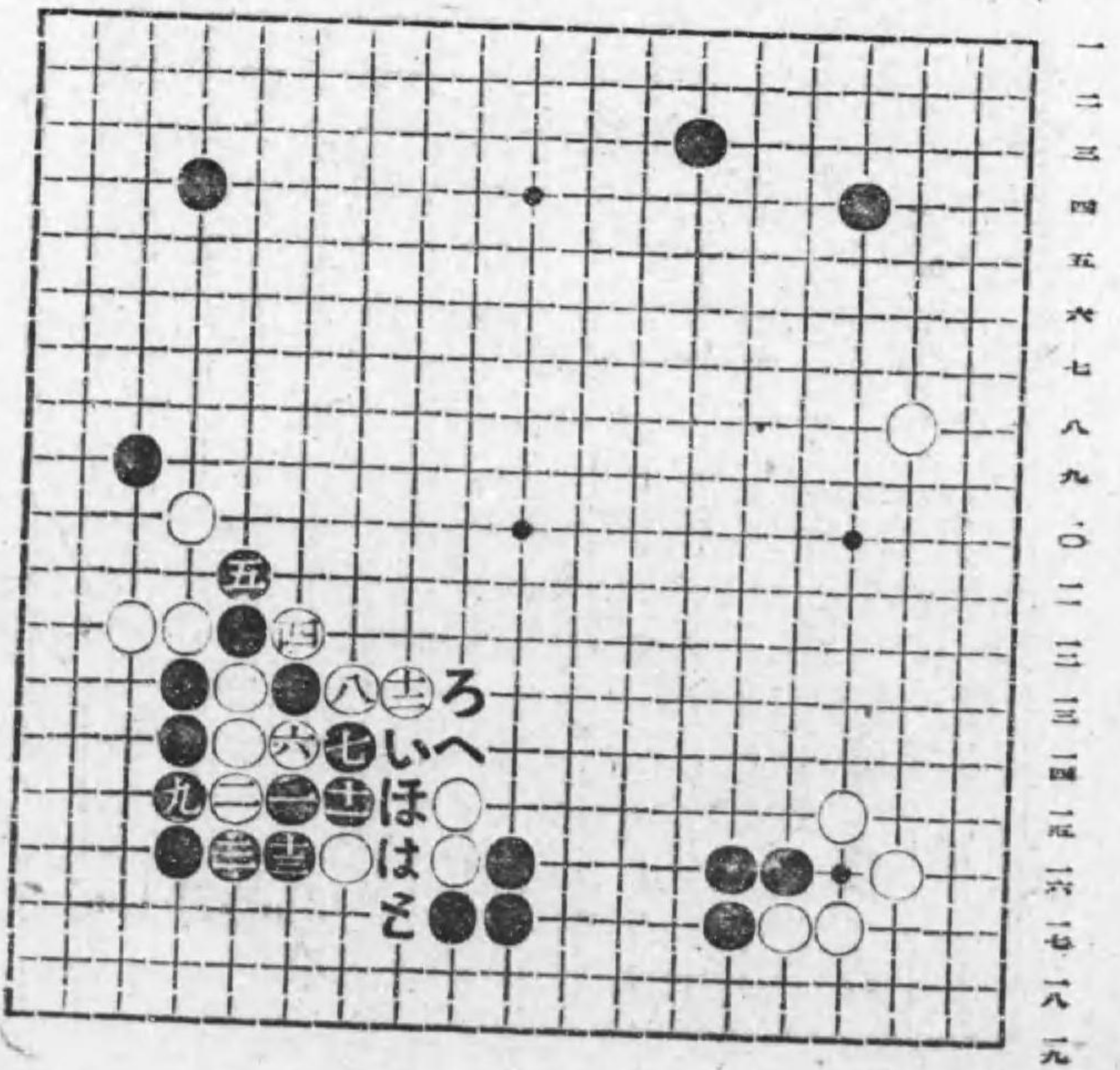
前譜黒二十六が本譜黒一。

黒五と出るとは、黒「ヨの十二」が要石であるからである。「ヨの十二」を捨てるにしても一と先づ五と出て二子にして捨てるも、白十を「カの十三」と粘がしたところにより黒は損ではない。即ち黒五で六、白九、の時黒九には、白は「ヨの十二」とは粘がない。

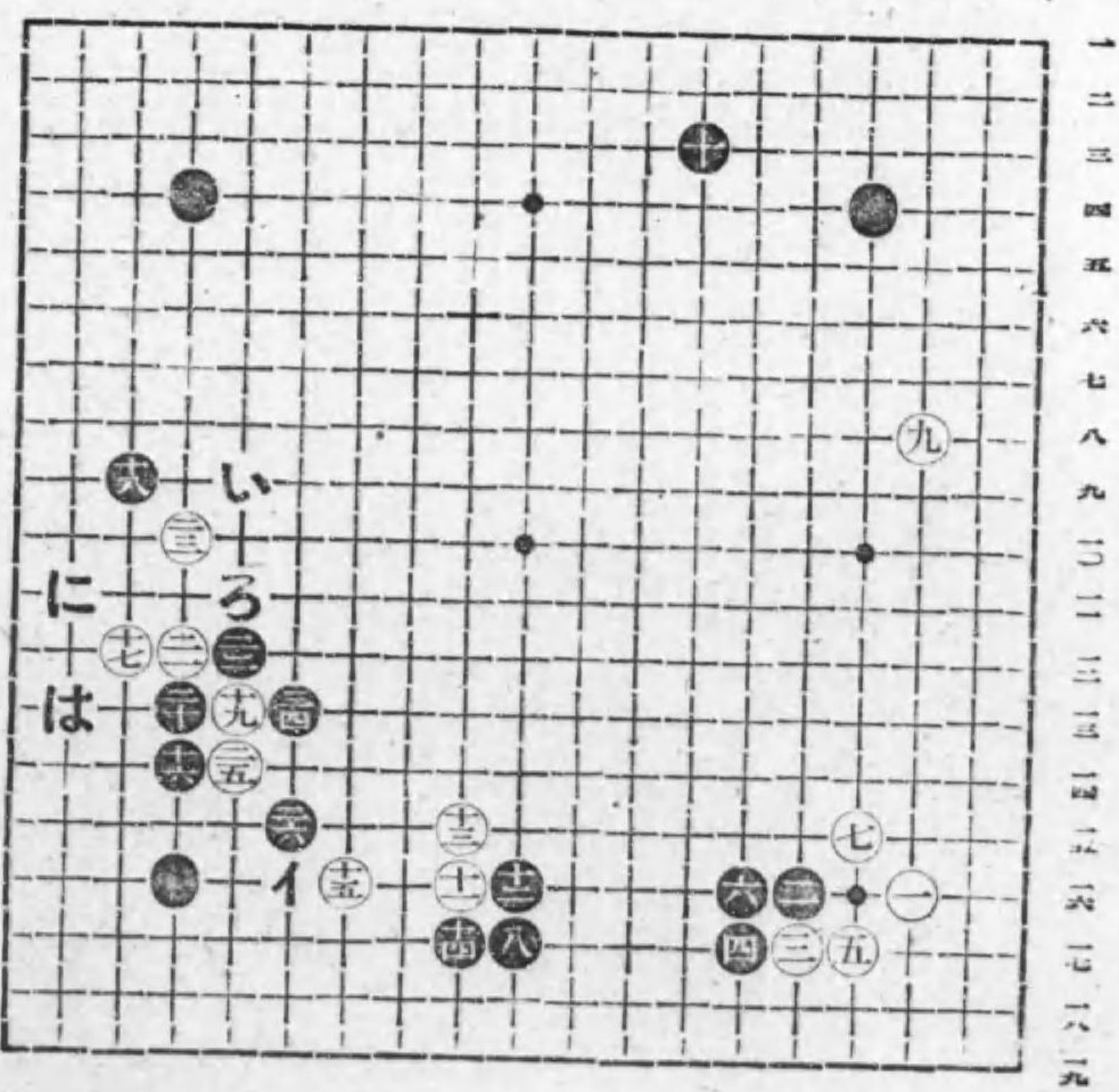
黒十一となつて白十二で十三だと、黒はどうするか、と先づ圖を見ただけで心配の人も、多からう。が何んでもない手順で、黒は突破、其後の白が甚だ困る。

白十二で十三だと、黒は(い)。そして、白(ろ)は黒は(は)。に白(ほ)は、黒は(へ)。白(ほ)を(と)でも、黒は(へ)。後はヤツテ見たまへ。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨネツ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨネツ



二子碁は二タ隅に相先の定石、布石が出て、置碁で一番六ツカシイ。一子で必勝の法を知れば五段以上の實力だ。

初段に九子位ひの連中にしても、二子に打込まれた時の氣分、またオイ今度勝つたら互先ダゼ、と二子置いて肩をイカラセル氣分などは、傍で見ても人ごとでない氣分が漲る。

白三と行くことが定石だから、黒も同じく四と白の定石に倣ふが、宜し。

白七、九は黒(い)、白(ろ)、黒九と、黒に六の目的を來られることを不致取防いだもの。

白十一から黒二十迄は、五の目的通りの定石である。白二十一は十一の延長である。二十一で(い)黒二十一となることは、十一の意に反する。黒二十二を(ろ)だと、六が遠いから白に(は)と打込まれる。黒二十六は(い)に打込みの爲。白二十五は其の動き。

黒四を捨て十二と行くことも、十となつた定石の關係上、九以下三の白三子を攻めと、十八で左邊に地を拓す爲めとに悪くない運びである。

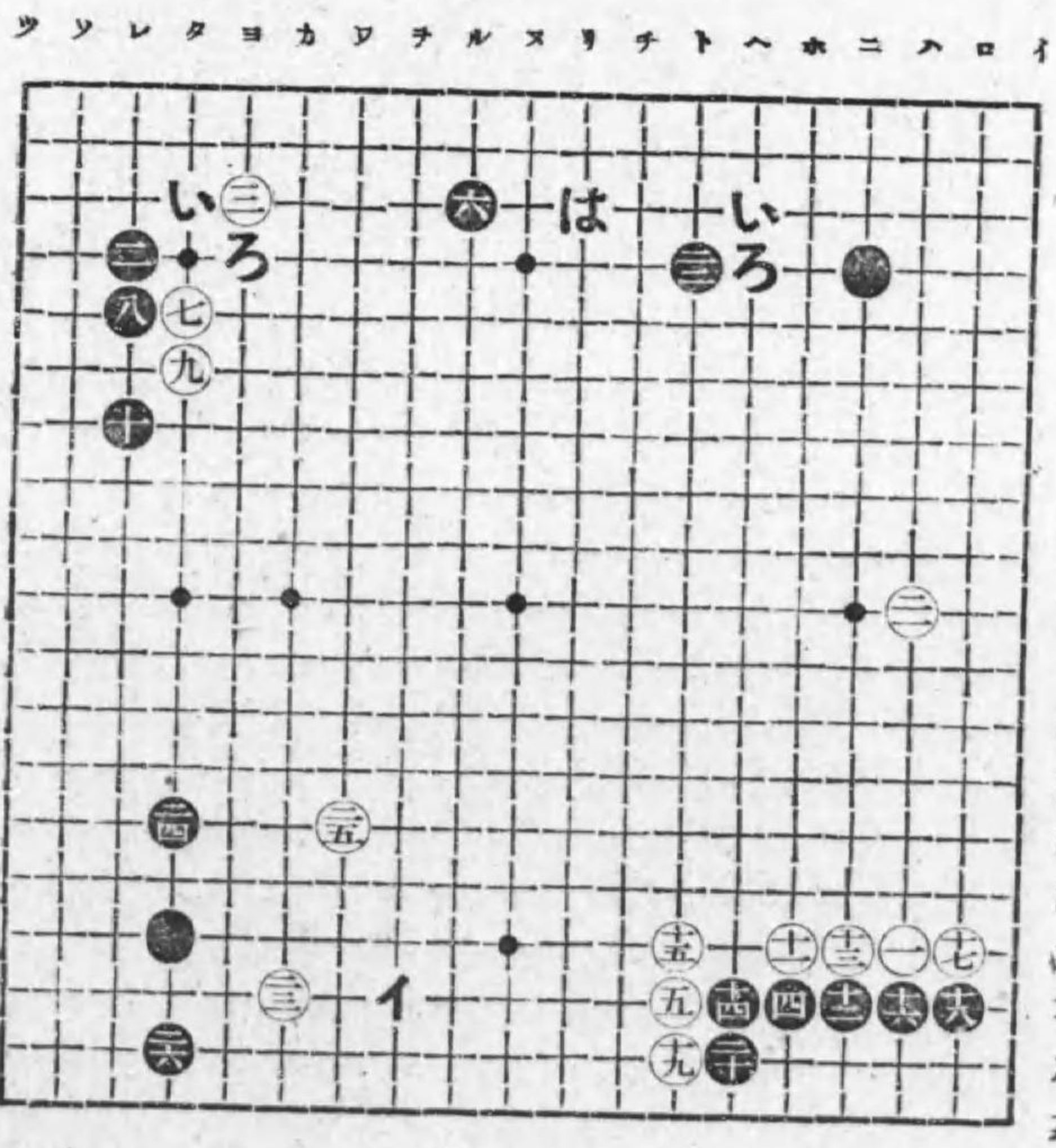
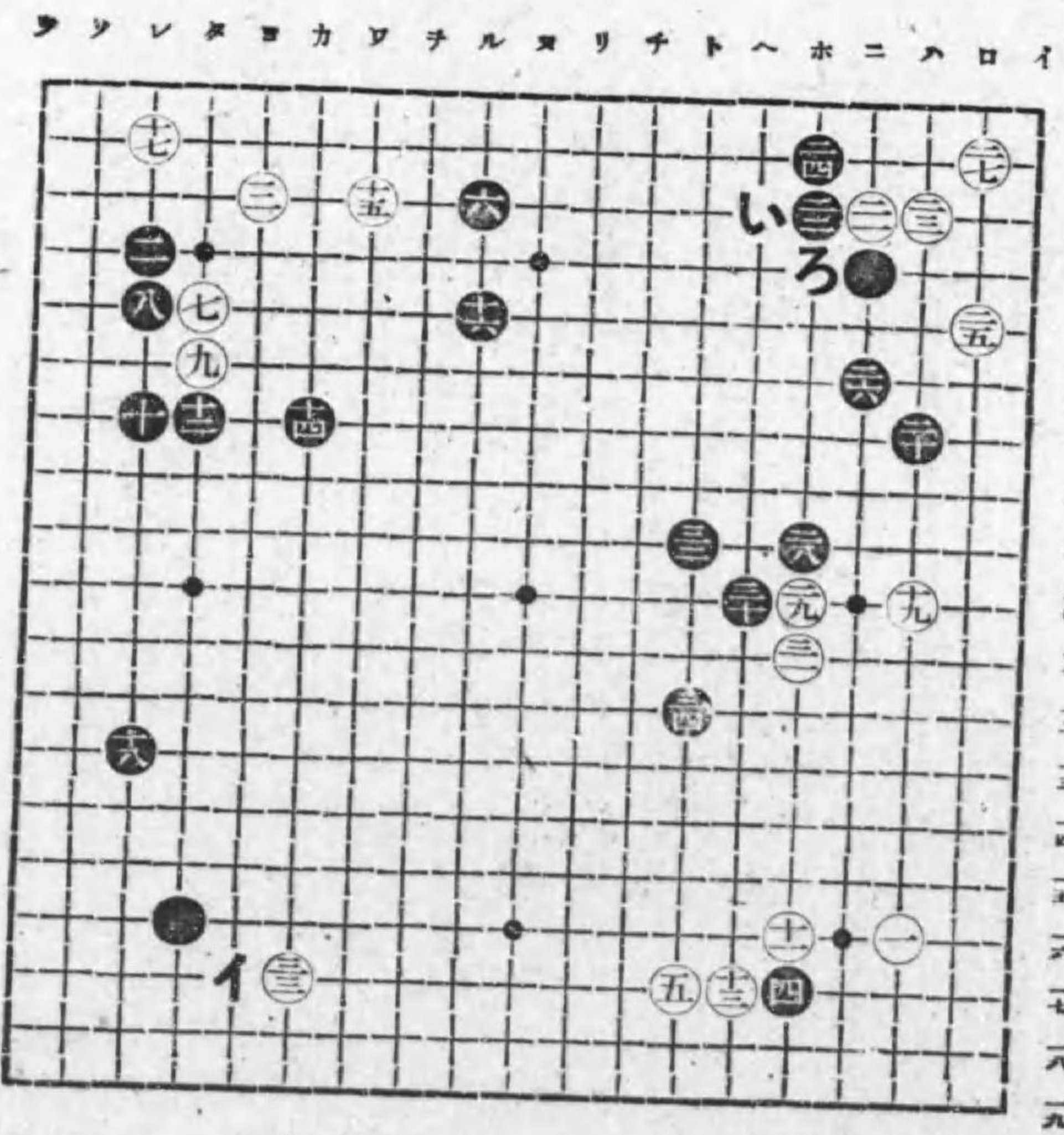
白十九を(い)なら、黒は十九で宜い。

白二十一で二十九なら、黒は二十二と其方へ勢力を張る。二十の布石となつては白二十七迄の活きは大きい。黒二十四、白二十七共に定石である。

黒二十八の時が勝勢を造る爲め、最も大切。

二十八で「ニの十一」と白十九の肩を衝くのが定石だと此際それは、白に「ニの十」と押出され、(ろ)の切りなども生じて、第一其方を薄くする。「ニの十一」の定石は此際黒の禁物。

白二十九は黒に「ニの十一」と掛られる防ぎではあるが黒に三十二と築かれ面白くない。白三十三を三十四だと黒は(イ)。三十四となつて勝勢は黒に有る。



黒八は白九で十、黒九、白十二の時、黒は十一で白七が征に取れるからである。此の點最も意を要する前前譜を見られよ、本譜黒十四、白十五となつて黒十六と行つた所に先後一手の相違があるがら。

□ 黒二十二は定石である。二十二を「子の三」、白「レの六」、は黒二が活きることになつても、白の外部が厚くなり黒は大いに悪い。

□ 黒三十は定石である。白三十一も黒三十に次いで定石で、黒に三十一と來られては、三と二十一の白二子は援ふに困難。

□ 黒二十六迄は三十に伴ふ。白三十五迄は三十一に伴ふ當然の運びで白三十五は黒にいと來られるから。黒三十六は白に其處へ來られるから。

□ 三十六で黒は順調の布石である。黒は時機を見て(ろ)と、白の眼を取り攻めることがある。

□ 黒六は前譜六より穩かの定石である。其の目的は黒三十白三十、三と受けさせ、七の點に據り、左邊へ大模様を張ること。

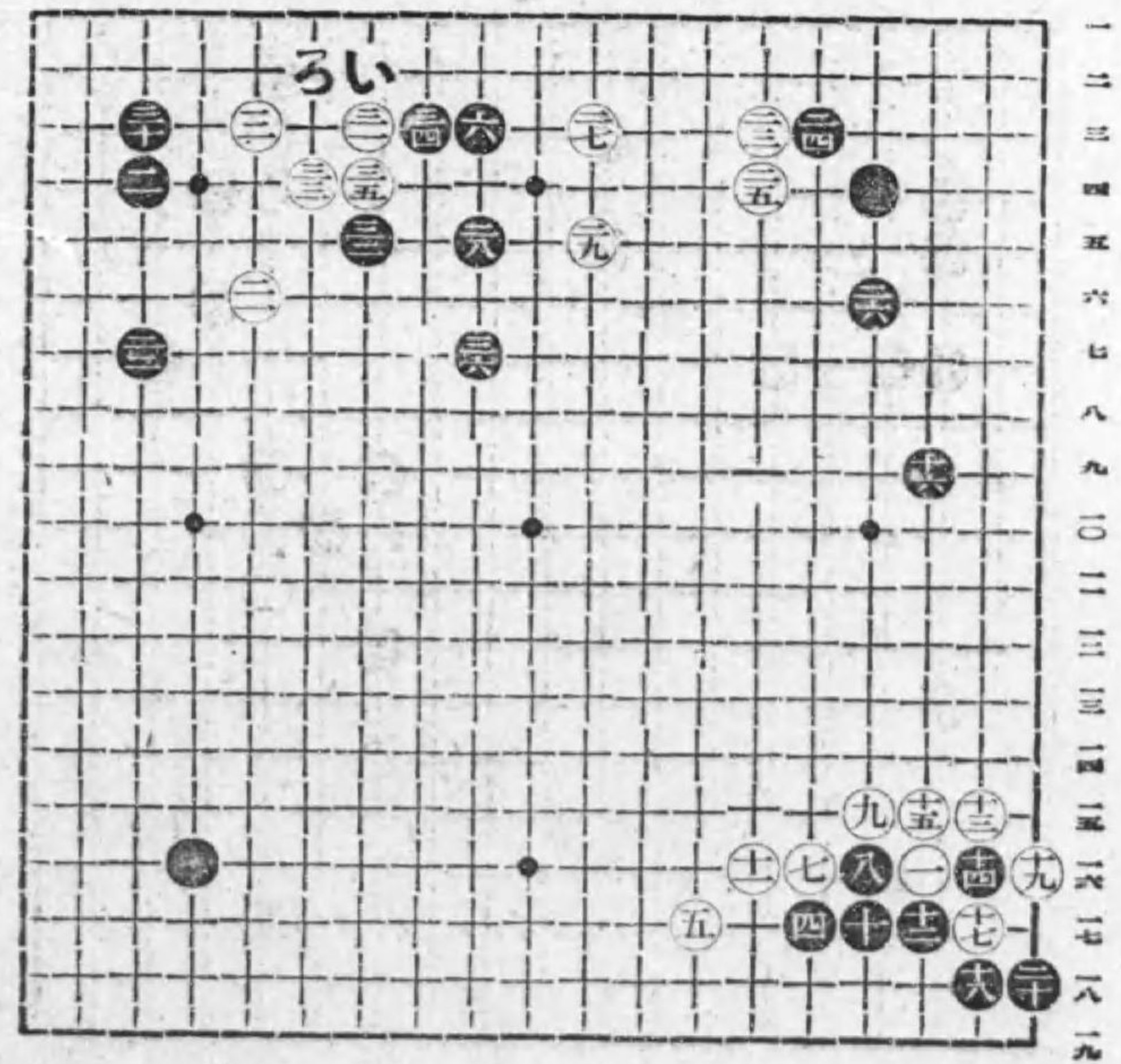
□ 白は七。併し白七は之に限つたことではない。七で十でも宜し。又た其他の趣向もある。

□ 白九で十だと、前譜十四迄となつて、黒に先手は取られるし、第一前譜十四を十七に下らるゐて、白はツマラナイ。といふ白の考へが本譜九、十一である。

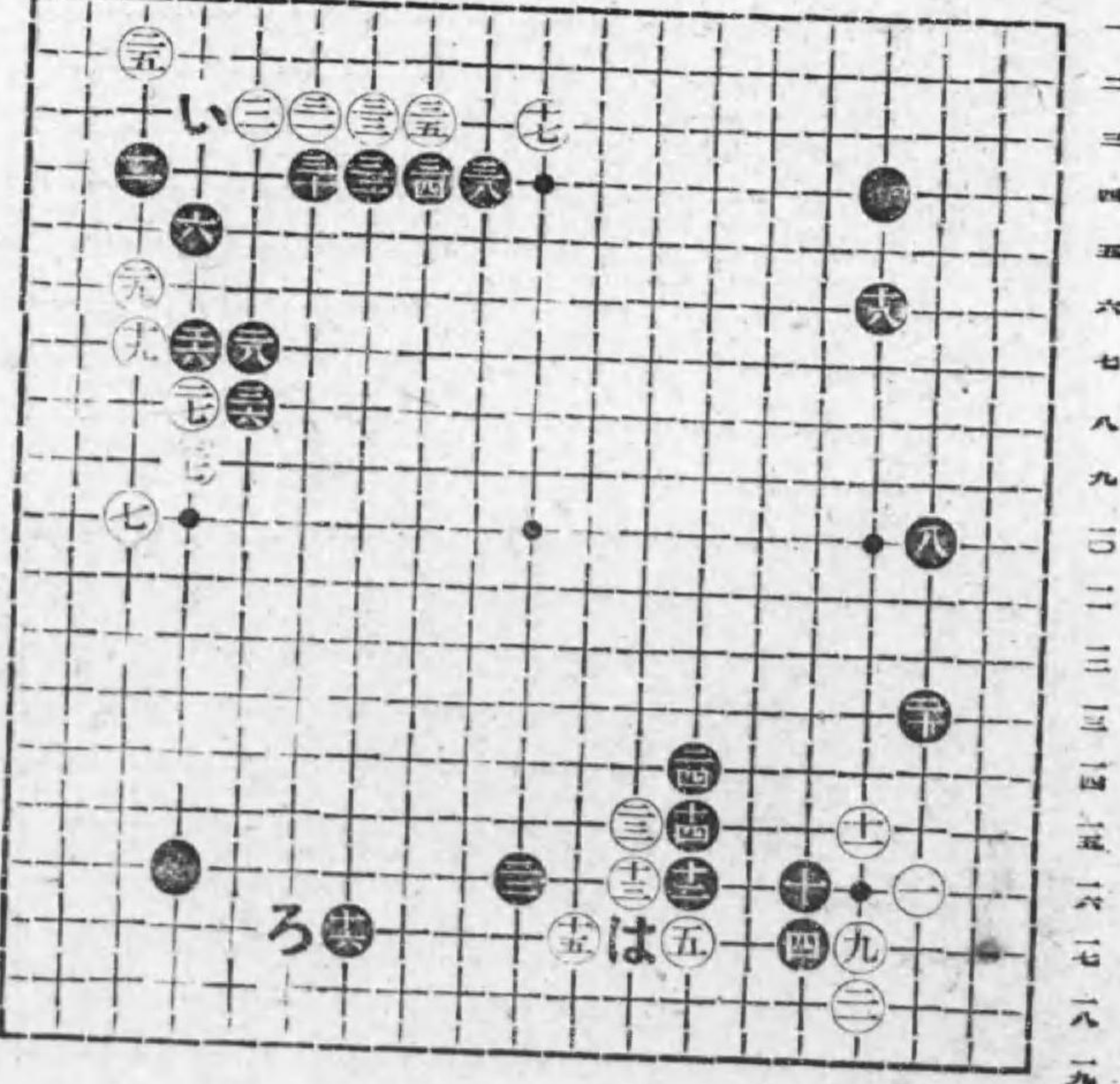
□ 黒十で三十五と轉じ、白三十、黒(い)の布石も黒は良い。併し十より十四迄も、四を治める上に於て悪くはない。白十五で(ろ)なら、黒は(は)の切り。

□ 黒二十二は白に二十三と押させ、二十四で右邊を収くする誘ひの一手。白二十五に對しては黒二と、六の周圍の關係上、二十六より三十八迄が大局上にも良い。黒三十八は白に其處へ來られると、三十四以下が悪化。

ツソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



黒六より白九迄は共に定石である。白九を手拔だと、黒(い)、白(ろ)、黒九となつて、黒に(は)の掛け、(に)の切りが出来る。白九で(は)と備へることも、局面を廣くする意味の定石である。

白が五で善いから、黒も十で善い。

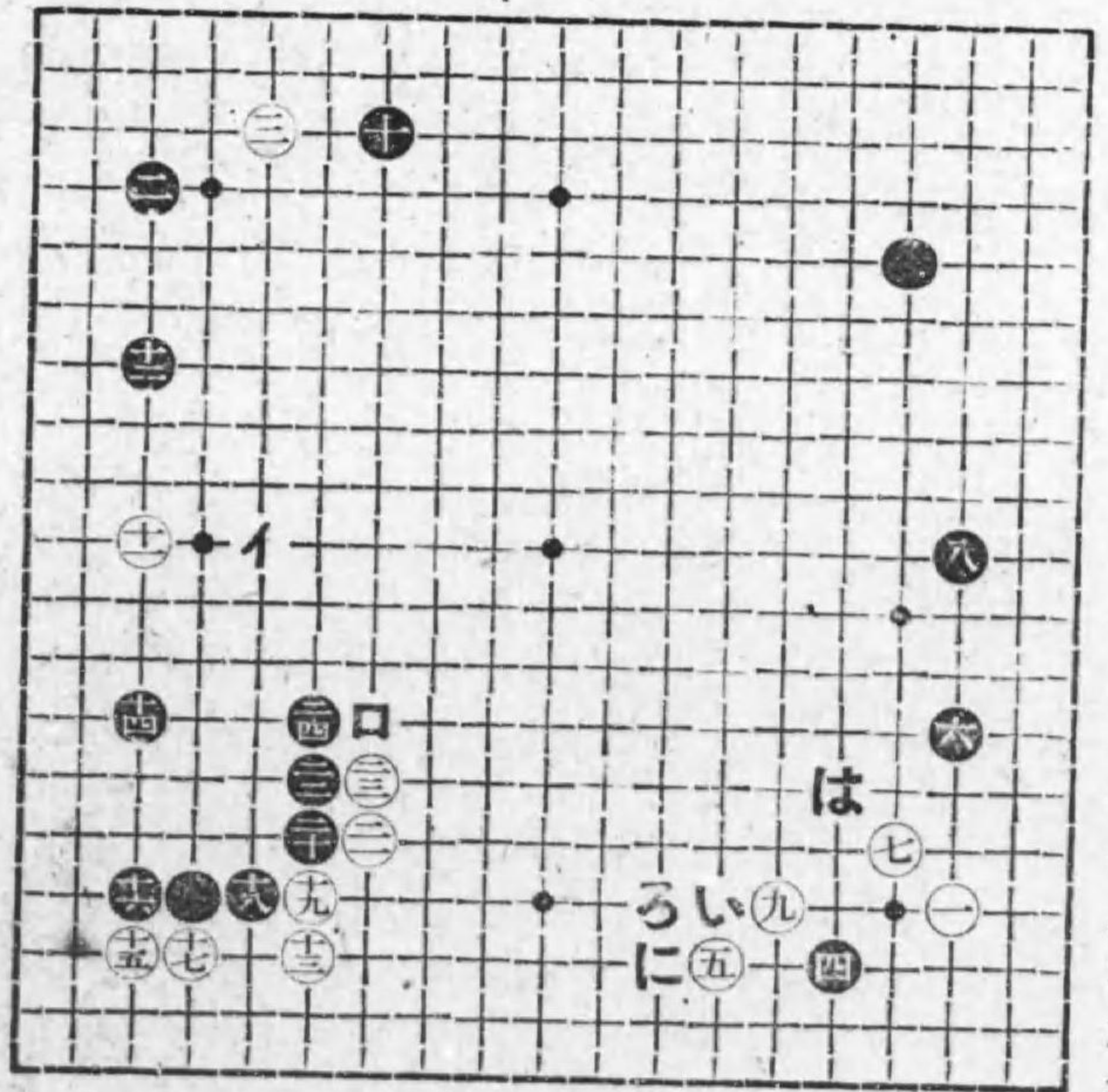
白十一は左邊を黒に大きく地を與えない、即ち黒に分割して地を與える爲の一手。

白十一の着意は高等手段である。が特に注視すれば初心者として判らぬ筈はない。

白十三を十四だと、黒「ワ」の十七の布石となつて、白は平凡な考へ十三は五との間に大きな地を拓して、其上十一を旨く逃出し、地域・優勢を示めさうといふ、白の手段である。これも九となつた定石に關係して。

黒十六より二十四迄は、白十一を深く抱込まふといふ手段。二十四となつて白(イ)なら黒(ロ)。

ツソレタヨカヲテルヌリチトヘホニハロイ



白七は七を「ニの十五」だと、黒「ハの十」の布石となることを、避ける爲めの定石である。

黒八は白七に對する良法で、味好く十二迄で治まる。が替はりに六は大いに損じる。で、定石は成る。

白十五は黒に「レの七」と受けさせ、十六と黒十四を攻める考へ。

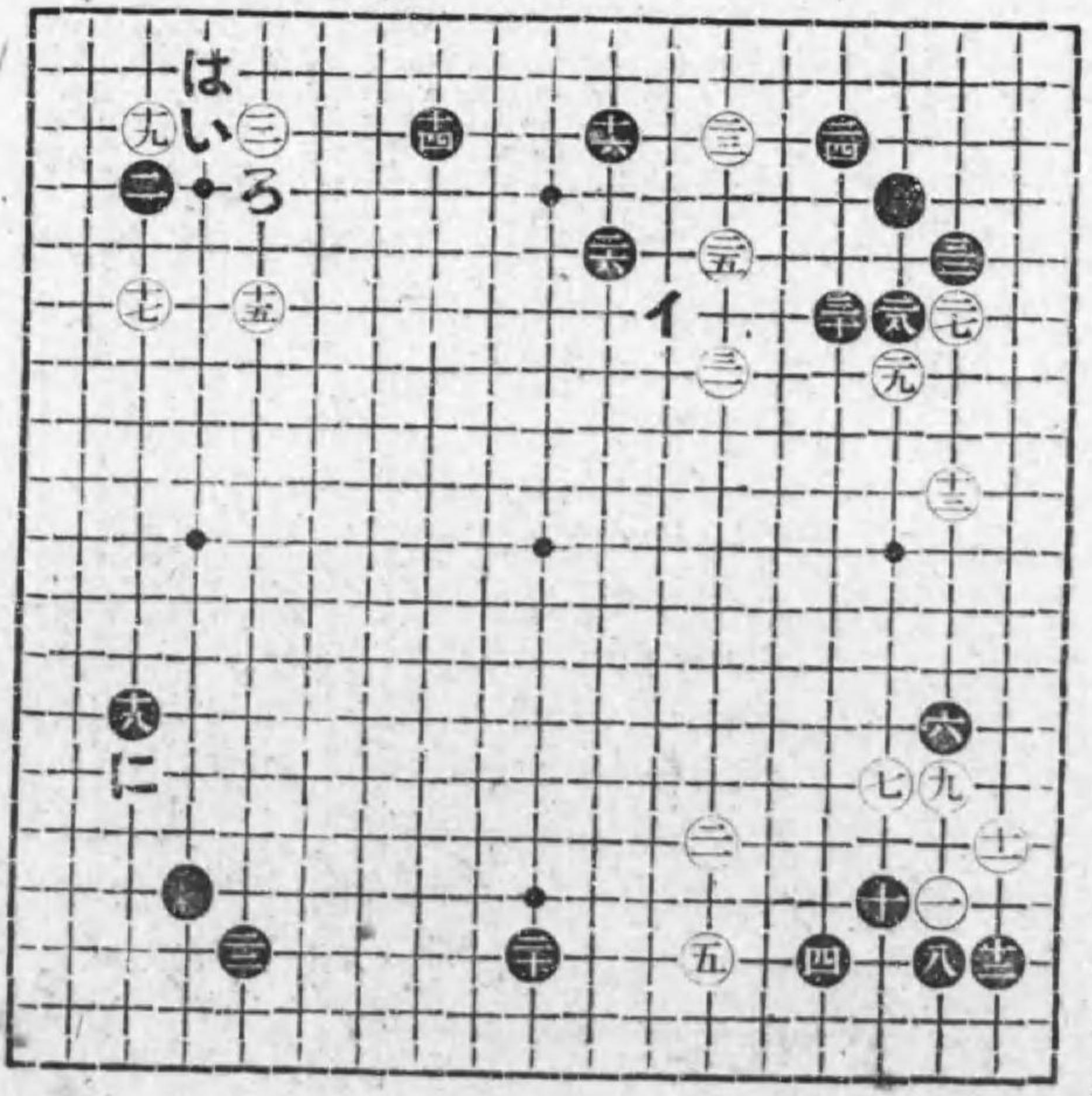
黒十六で白に十七と打たせたのは、平常悪い交換ではあるが、白十三があつて白に十六と來られることは、右上隅の孤立をも思つてのことである。

黒十八で(い)、白(ろ)、黒(は)の活だと、白に(に)と來られ、十七の間が廣く。

白に十九と二を取られても、黒は二十、二十二で損はない。

白三十一で三十二だと、黒は(イ)。三十二に來られることは白の苦痛である。扱て十七と白に來させることは、黒は悪いが、後の打廻しで、現形勢は黒に可。

ツソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



白九を十二でないから、黒に十六迄と良く運ばれる。十六となつては黒八は狭いが、中央へも望み黒は甚だ厚装の布石である。

□ 十九を(い)、黒(ろ)、白(は)は十三の方へ悪影響。十五は其れを推しての定石である。(ろ)の渡りを含み

□ 黒十八は平常白に十九と入れられ、白には地が出来、黒には(い)が無く、悪い應手ではあるが。二十三と白を十三の固い方へ追いやる意味に於て、黒十八は此際有効。

□ 白二十五で(イ)は、黒二十二が有つて黒に(ロ)と掛けられ、位ひ低く活きる結果は、黒に中央へ大模様が生じる。

白二十五は黒に二十七と受けさせ、二十六の考へ。

黒二十六は三十八迄を見越してのことで、三十八となつて、無論大勢は黒に可。

黒八に白九と受ければ、黒十六迄となるのが定石である。黒十六で十七だと、白(イ)、黒(ろ)、白(は)、黒(た)、白(ほ)、黒(へ)で黒は備かに活だが、白に十六と来られ、黒は面白からぬ布石を迫る。黒十六は後ち(い)、白十七、黒(へ)と劫争に出たる爲。それは白の怖れる所と、白は十七。

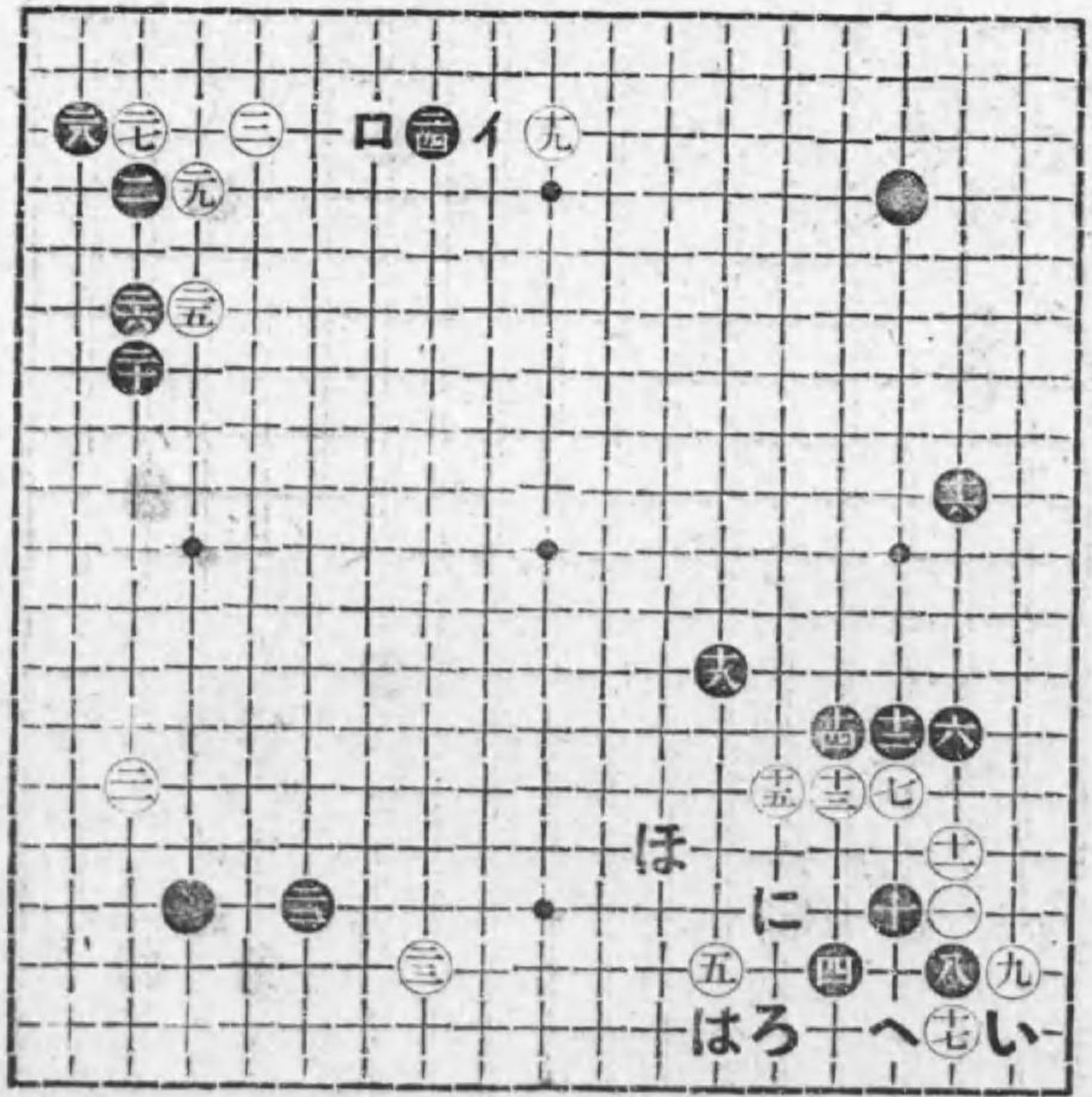
□ 黒十八は十七となつた關係上、白から其處へ行つても最高の好所である。

□ 即ち十八は黒(へ)で白に(い)と閉口させ、其上(は)でも「チの十七」でも、大いに利用が出来る。

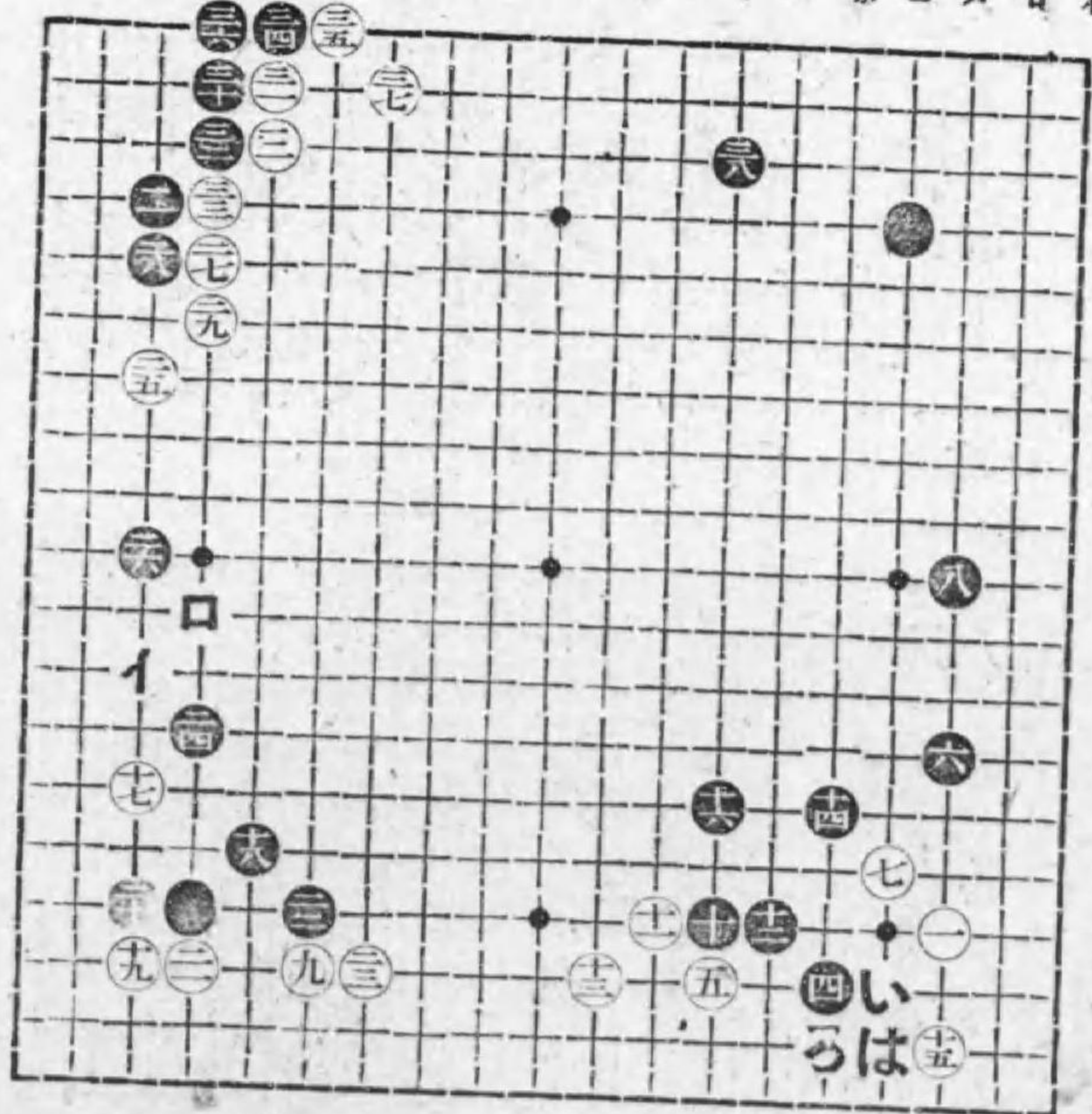
□ 白十九は黒に(イ)二十四(ロ)の何れかで、三を攻められない備へで、白は其の方面が急所目下のである。

□ 黒二十は二の備へと二十四の打込みを兼ねる。扱て白二十九となつて——黒は一寸考へるチ。

イ ロ ニ ホ ト リ ス ナ カ ヲ ヌ レ ツ



イ ロ ニ ホ ト リ ス ナ カ ヲ ヌ レ ツ



前譜白二十九の時黒大いに考へると言つたのは、本譜黒一を二に粘ぎ、白一と下がらせる定石に出やうか、どうかにある。

黒一で二だと、白一、黒(い)、白十一などの布石となつて、先づ無事である。そして黒「リ」の二は白九で白に活形あり。其れでも黒は好いが。何んだけか機会を逸するやうな氣もする。で黒は白四となつて、五を「レ」の三に粘ぎ、九迄の變化に出た。

九迄となつて見れば、黒は十一と行く順になり、一と決行に考へ過ぎたを苦笑もある。

碁には果斷は最も必要な事で、果斷の勇に缺ける人は機到來にも其れを逸し、又勝勢充分な碁でも、迷ひに迷ひ、負けての後、ア、したら勝つて居た、コウしたら勝つて居た。それを聞いて相手も癪にサワリ、何んとか言ひ出し喧嘩にもなる。

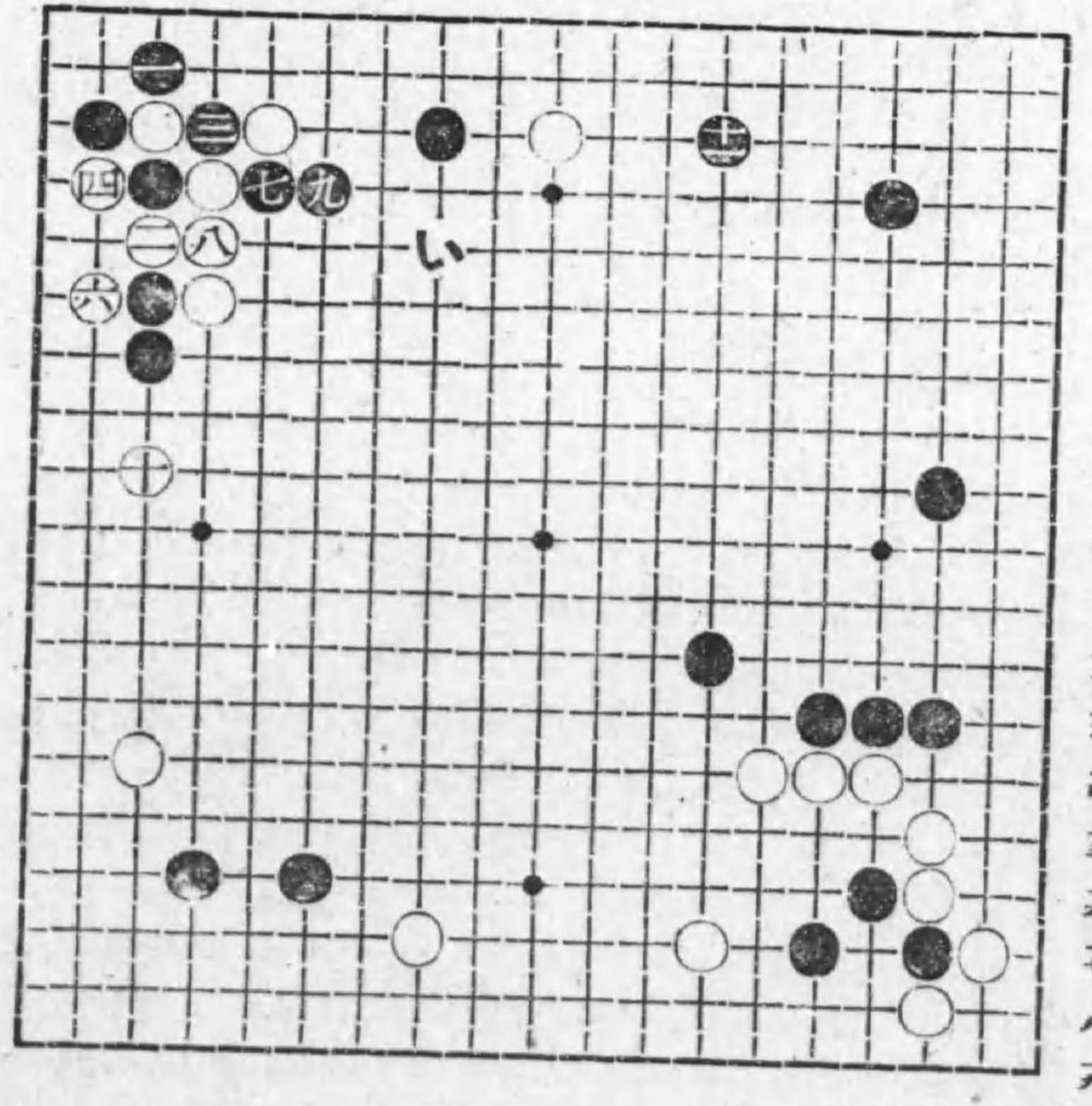
白七は無理手段である。が相手が力量は無い、定石は知らないと見れば、白は其の黒の弱身につけ入り、黒六に對して七の高壓手段に出る。

黒八で二十九、白九黒十一、白二十八となれば、白は七の目的は達す。
 が黒に八と其の白の意中の裏を行かれ、黒十となつては白は勢ひ十一、十三の外なく二十一迄となる。
 白十三で十四だと、黒二十八、白二十九、黒二十五で白が大いに悪い。

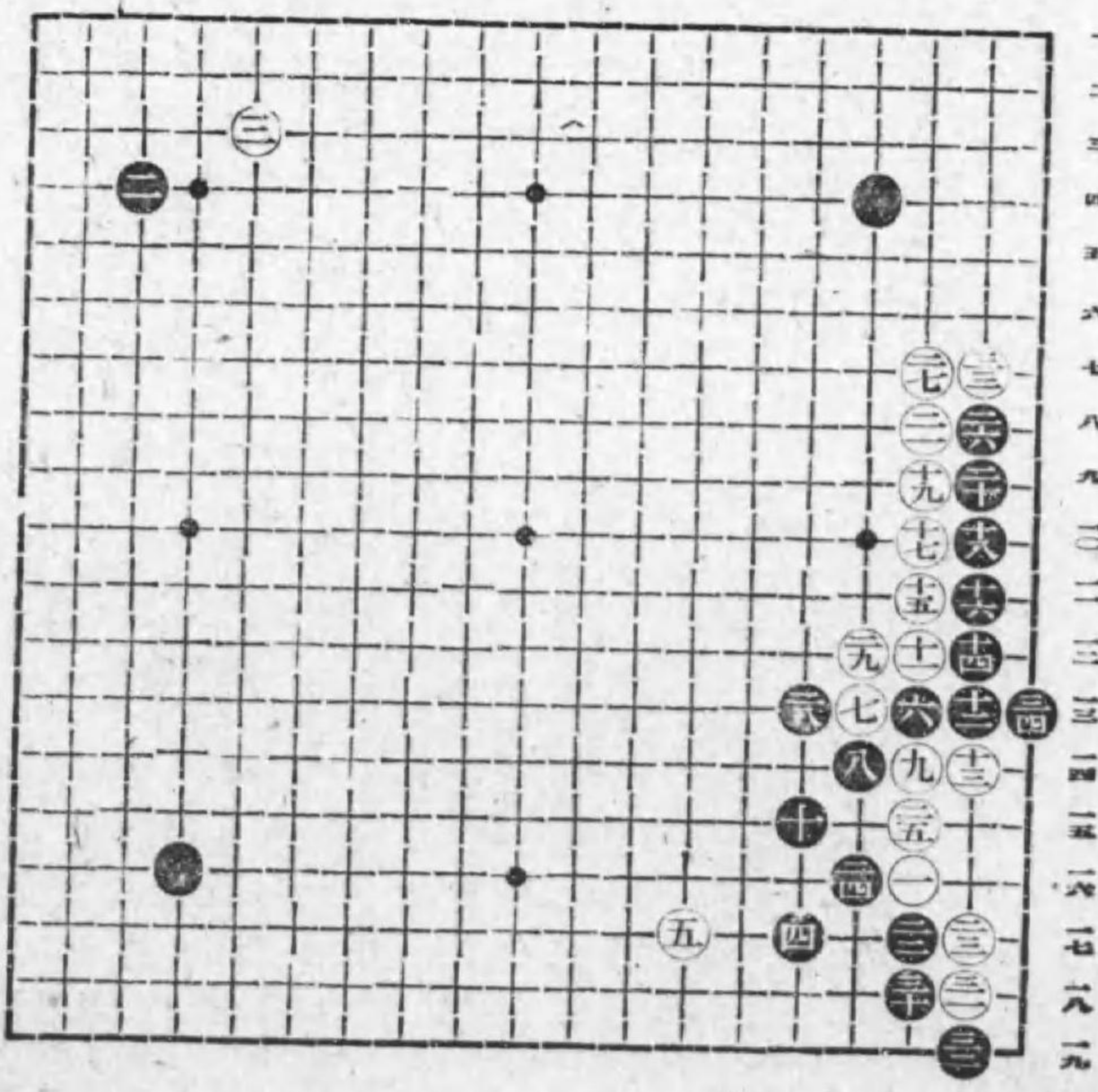
黒二十二は、白二十三で二十六なら、黒「ロ」の十六で攻合、勝ちであるからである。
 で、白二十五迄となる。

黒二十六で三十だと、今度は白二十六で攻合は白の勝ち。
 白二十七で三十だと、黒二十八、白二十九、黒二十七で黒は良い。三十四で白の無理は露れた。

アソレタヨカヲアルヌキチトヘホニハロイ



アソレタヨカヲアルヌキチトヘホニハロイ



黒八より二十四迄は定石である。是れは白七に對して黒四を内で活かされ、白に外部を厚く築かれるがの嫌と黒が思つた時、用ひる定石である。

□ 白十七で十九なら、黒は十七が定石である。

黒二十四で「ロ」の十三と走つてゐることも定石である。二十四は先手を取る爲めである。

白二十五で「い」なげ、黒は二十五に切つて、不利な結果とはならない。

□ 白二十五となつて、黒二十四の方に比し優勢であるのは、白は一より五を入れ二十五迄で十二手。黒は四より二十四迄が十手の、白二手多い爲めであるの言ふ迄もない。

□ 黒二十六で「ワ」の十七でも好いが、三十八迄で黒は白に優る形勢である。三十八となつて白(ろ)なら、黒は尙ほ(は)が良い。

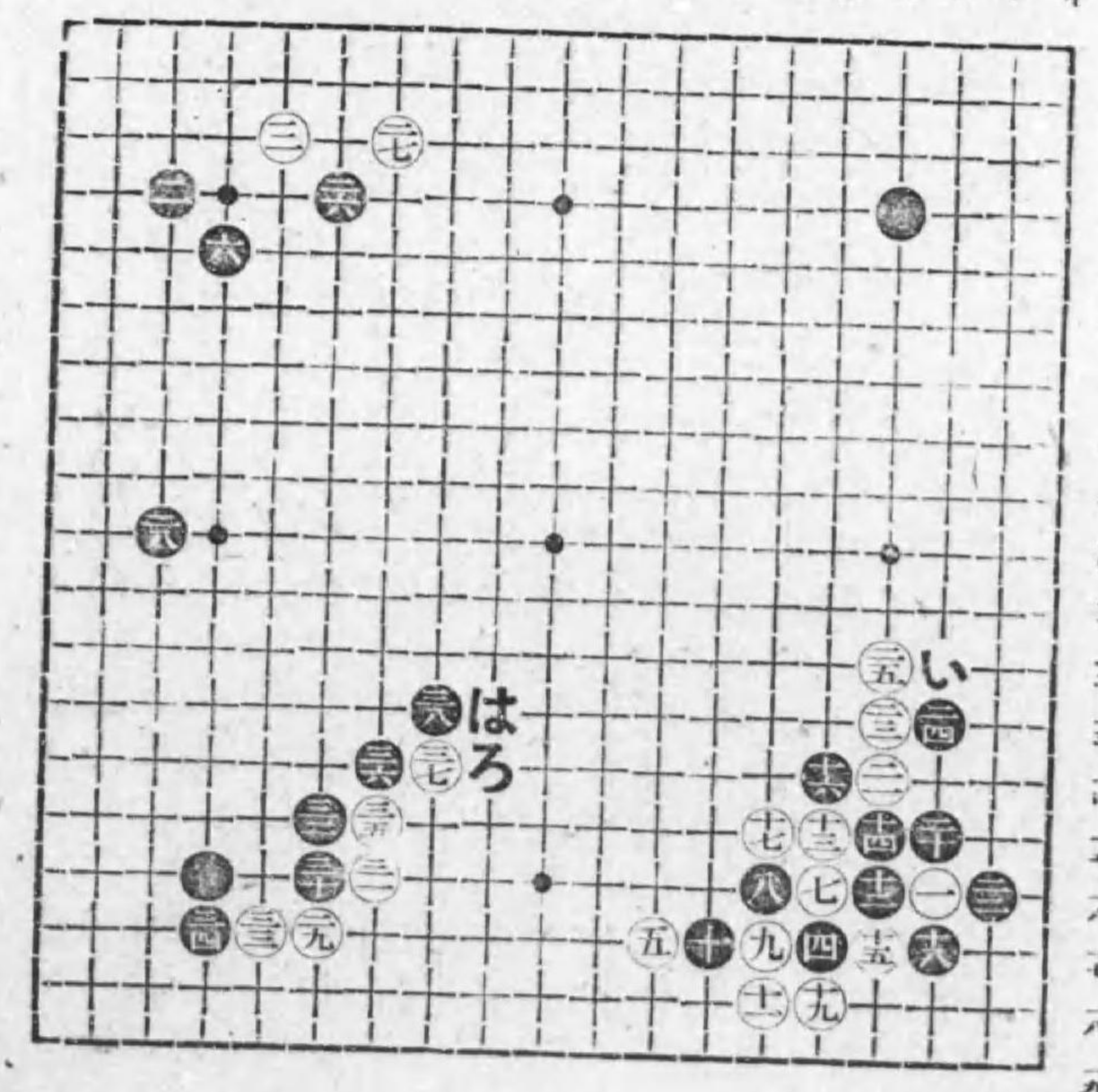
黒十迄の布石は初段より名人、又た段以下井目連の碁にも、無数に出た局面である。段以上では研究が極められたと言つてよい。

□ 白十一は十一を(ス)より局勢を廣くする爲め。だが黒(ろ)、白(は)、黒(に)で黒は四の逸出が出来る。黒(に)に白(ほ)なら、黒は(へ)が眼形ある應手である。(へ)を(ス)は黒(に)が愚形となる。

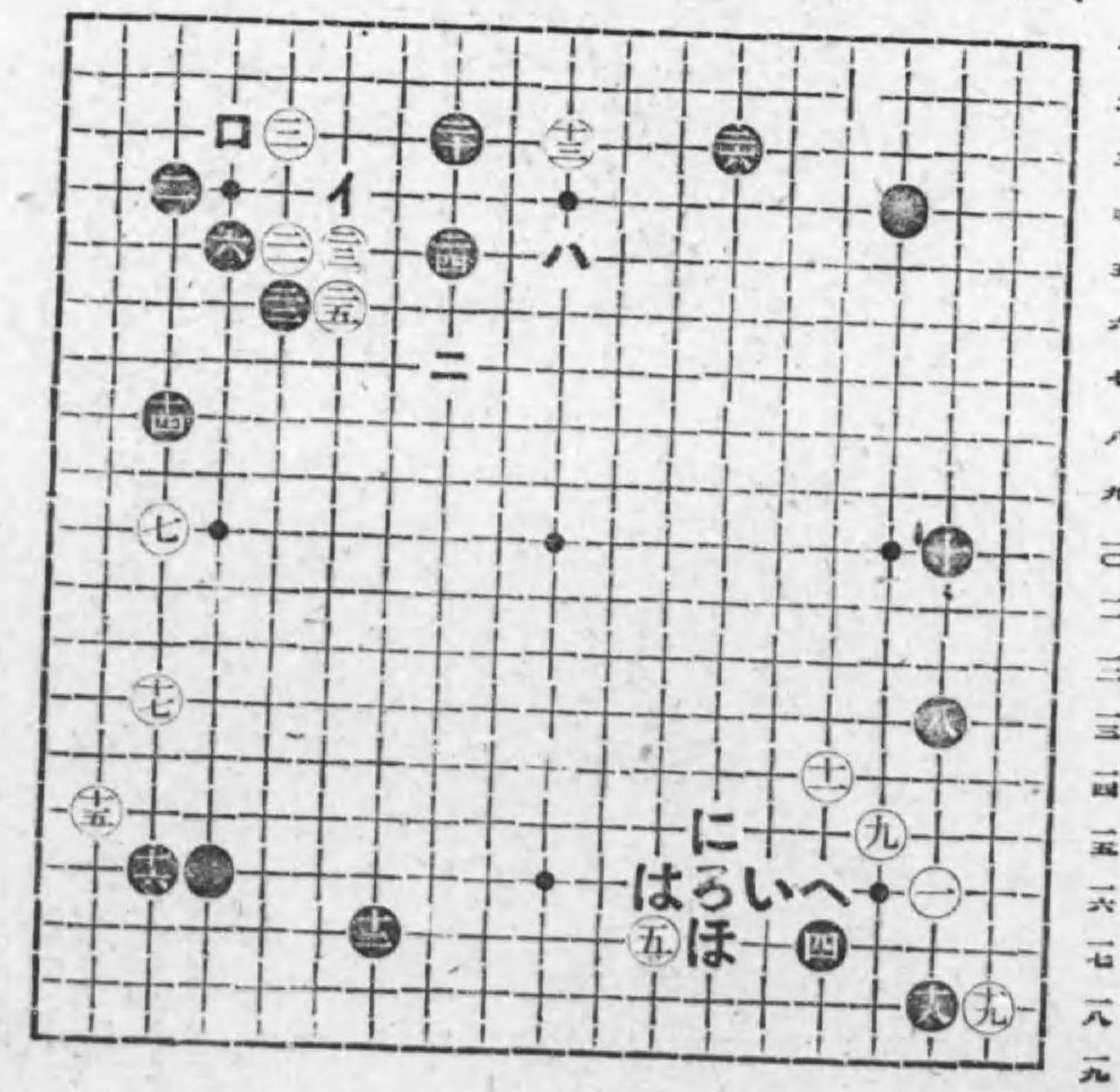
□ 黒十二は將に四を動かんとする、良い布石である。十二で二十白(イ)、黒(ロ)だと、白に「カ」の十七と來られ、白は五、十一と共に其間忽ち廣くなつて、黒は前途局運を案じ難い。

□ 黒十四は二十と打込む準備で、白(イ)なら黒は「レ」の十二と白七に迫まることを含む。黒二十六となつて白(ハ)は、黒(ニ)で良い。二十六で白の局勢は急忙となつた。

ソラレタヨカワナルヌサチトヘホニハロイ



ソラレタヨカワナルヌサチトヘホニハロイ



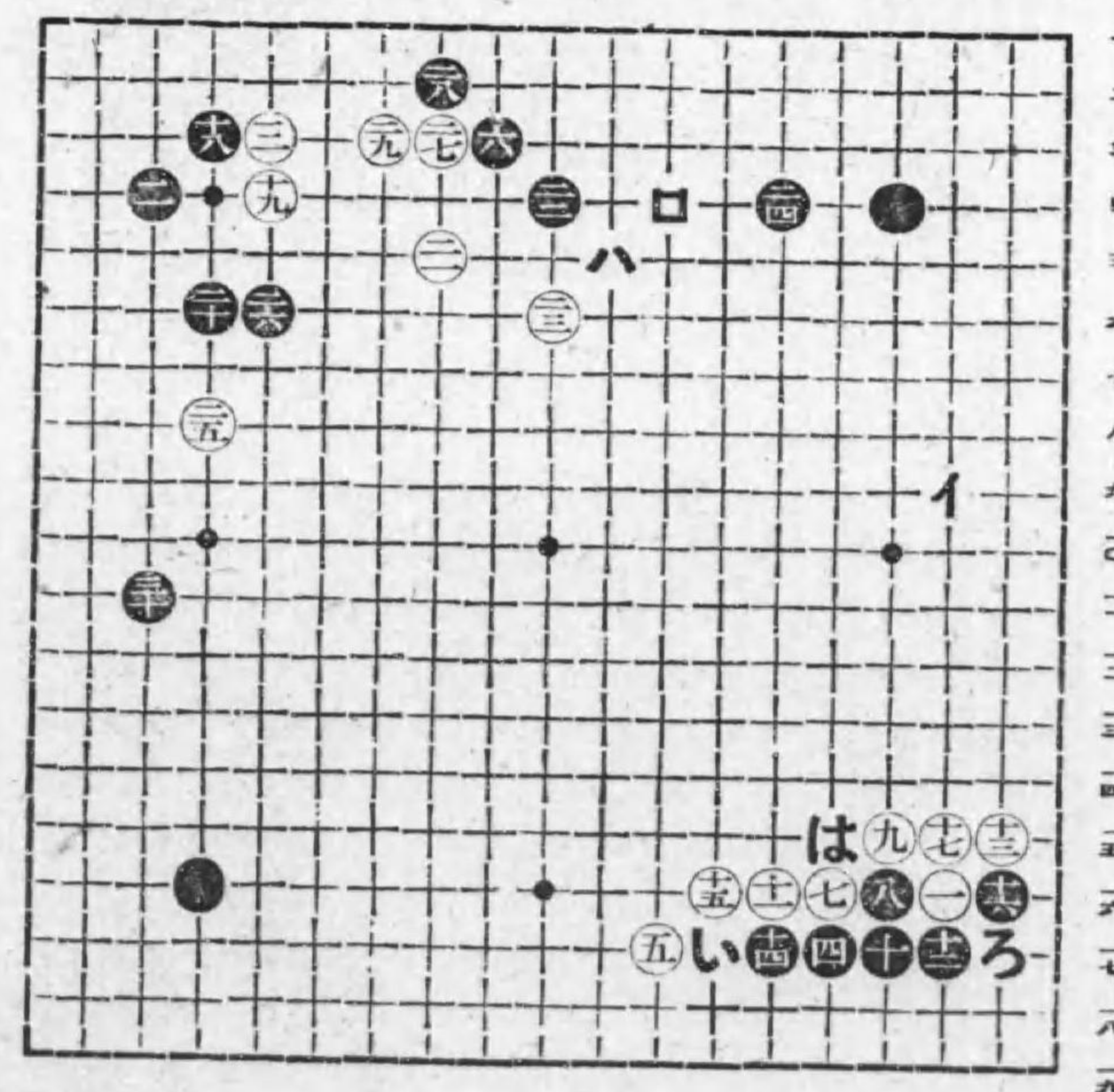
人間が一人前になるには、多様の智識が必要だ。
 本篇も將に三分の二に進んでゐる、これだけで碁の一人前になるには充分とも言へやう。一人前以上になる爲め氣力を勵し後を読む可し。

黒八は、白九を十、黒九、白十二の時黒は十一で白七が征に取れるからである。度々言つたが——
 白十五を(い)なら黒十六は後手ではあるが(ろ)が定石である。それ(は)はと切りがあるからである。
 斯の要領は後の布石に大關係がある。

白十七迄の定石となれば、黒(イ)と行くことは第一に見逃がせない大場だが、黒十八、二十も六の目的にある定石である。白二十三迄を。

黒二十四は、白(ロ)なら、黒は(ハ)。
 白二十五は黒に其處へ備へさせない爲め。黒二十六は堅固な定石である。

ワ ソ レ タ ヨ カ マ ナ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



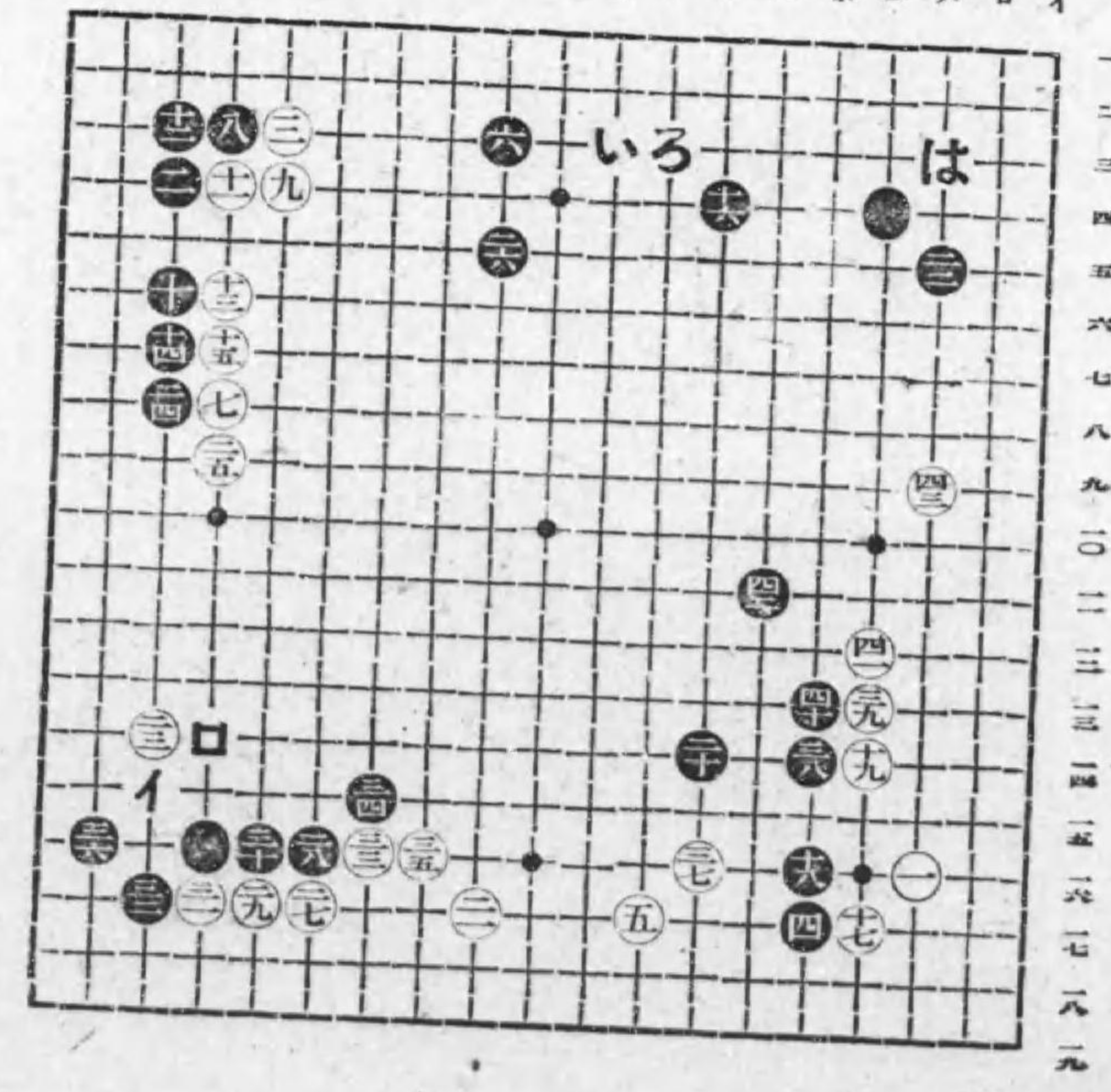
白七は黒八、白九、黒十三と構へさせない定石である。のと十五迄で黒十四の方を壓して、次ぎは(い)で黒六を攻めやうの意。
 で、黒は十六。十六を(ろ)は位ひが低い。

白十七を十八とは限らない。十七も定石である。
 黒二十を二十一だと、白二十、黒三十八、白三十九と黒は三十八に行き度はないが、止むを得ず行く外なくの、不利となつて、二十一に行つた得では追付かない。

黒二十二は白に(は)と入られることが大きいからである。

黒二十四で(イ)、白(ロ)、黒二十九だと、白に二十四と來られることが大きい。白を二十五と更に勢力を加えさしたから、黒は二十六で二十五の方を、何がし消す。白三十三で「レの十六」、黒(イ)、白三十六、黒「ソの十五」白「ソの十七」、の得は、黒(ロ)で取返される。

ワ ソ レ タ ヨ カ マ ナ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



黒十で(イ)だと、白(イ)、黒十、白(ろ)、黒(は)、白と白に三を充分に活られる。で、黒は十、白十一の交換(に)十一となつて白は(い)とは(ろ)に弱點あつて行き兼ねる。以上は布石に大關係がある。

白十五は黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)と黒に來られることが五の苦しみであるからである。

黒十六より二十六迄、白十七より二十五迄は共に定石である。黒二十で二十一だと、白に二十八と付越され、黒(ホ)白二十、黒(ヘ)の時、白に(ト)と切られ結果が悪し。白十五は其の筋を見てゐる。

黒二十六は白に其處へ來られることが、第一其の黒の一團に悪く、第二には「ハの十二」と行くことが良い。白二十五となることを好まないなら、二十一で二十二と粘ぎ、黒に二十一と下らせ、「ヌの十五」と形を調べてゐるが、定石にして後の運にも宜い。

黒八で十二だと、白は十に備へるのが定石である。でも黒は差支へないが、斯う八、十と先きに運び十二も、先手を取る定石である。

即ち白十三で他なら、黒十三白(イ)、黒(ろ)で白七は大いに困難であるからである。

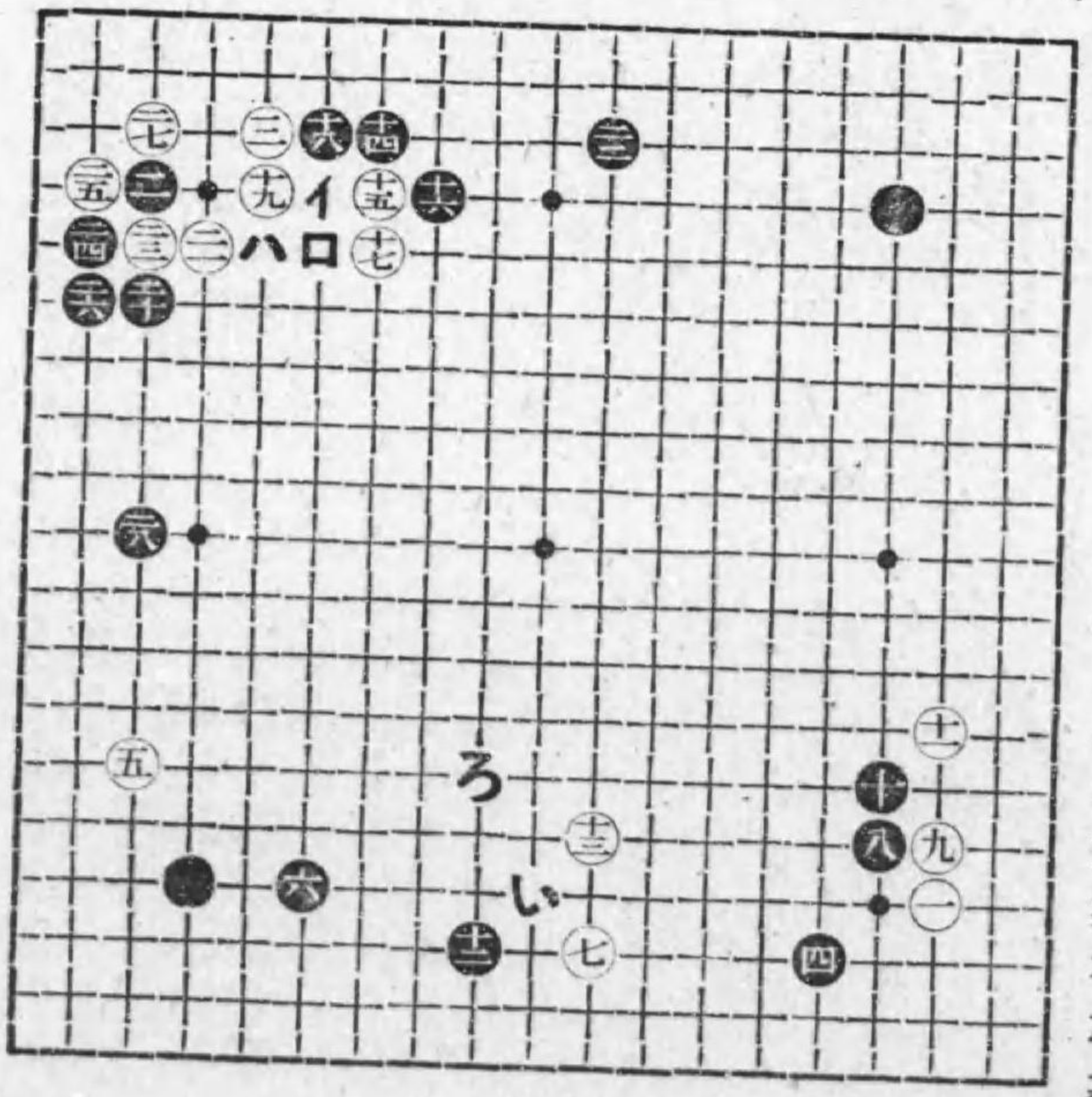
黒二十は二十二と轉じる爲めの定石である。

白二十一は黒(イ)、白(ロ)、黒(ハ)と黒に切られる防ぎである。で、黒は二十二の穩かな布石が運ばれる。

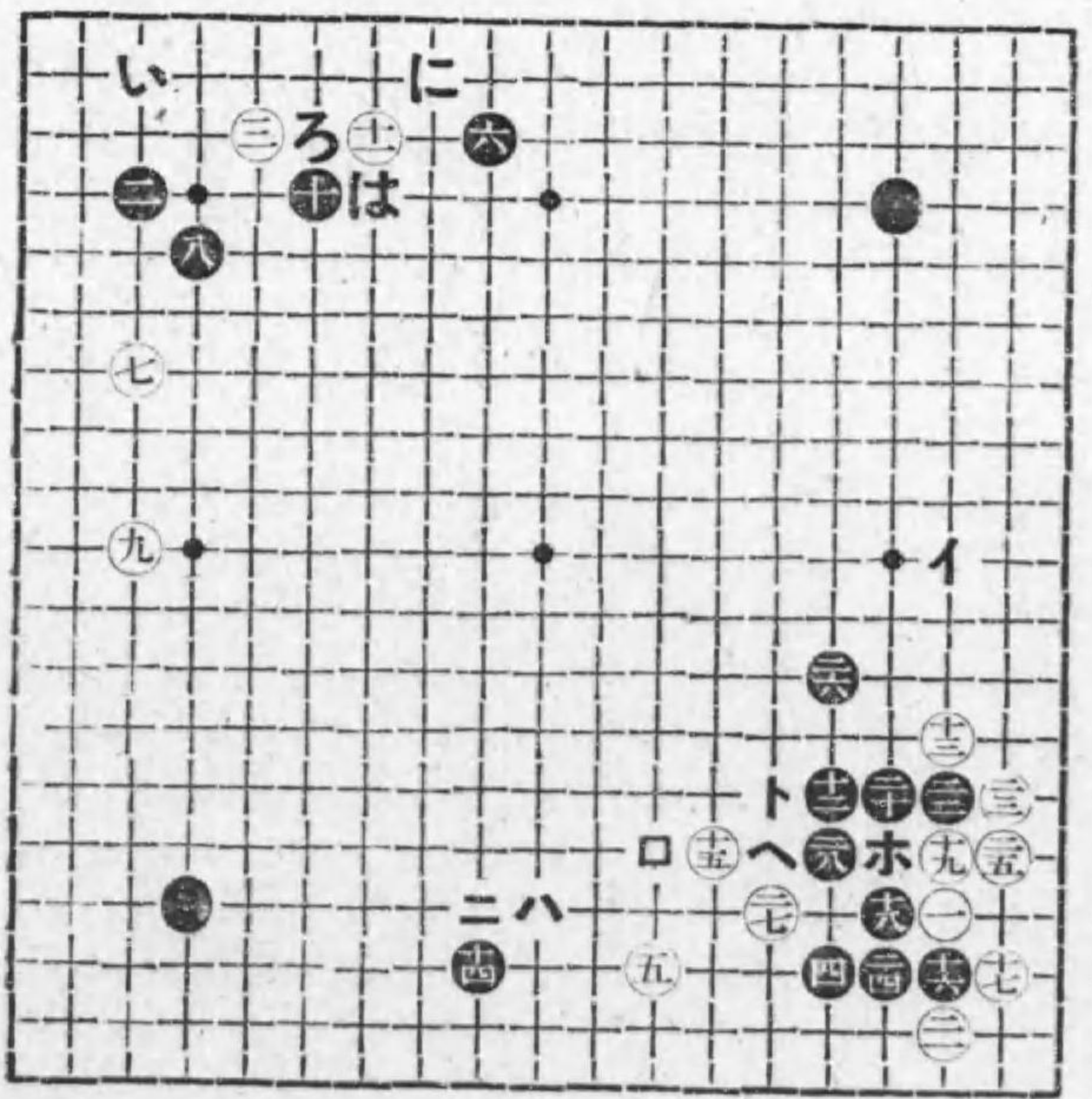
黒二十六で「ソの三」を取るのが、白二十五と切つた時の定石であるが、すると白二十六、黒「ソの四」に白二十五を取り、白「レの七」と黒二十を征に取りで、白は五との間が如何にも廣く、白は無上の布石となる。

と黒は思つて二十六、二十八、これで白は十五、十七の定石が、黒に裏を行かれた。斯様なことに一寸長考をするのである。

イロハニホヘトチリヌセハマヨカワヲルメ



イロハニホヘトチリヌセハマヨカワヲルメ



黒四と六は白七を九と粘ぐ定石なら、十六と行く先手取りである。四、六は定石である。

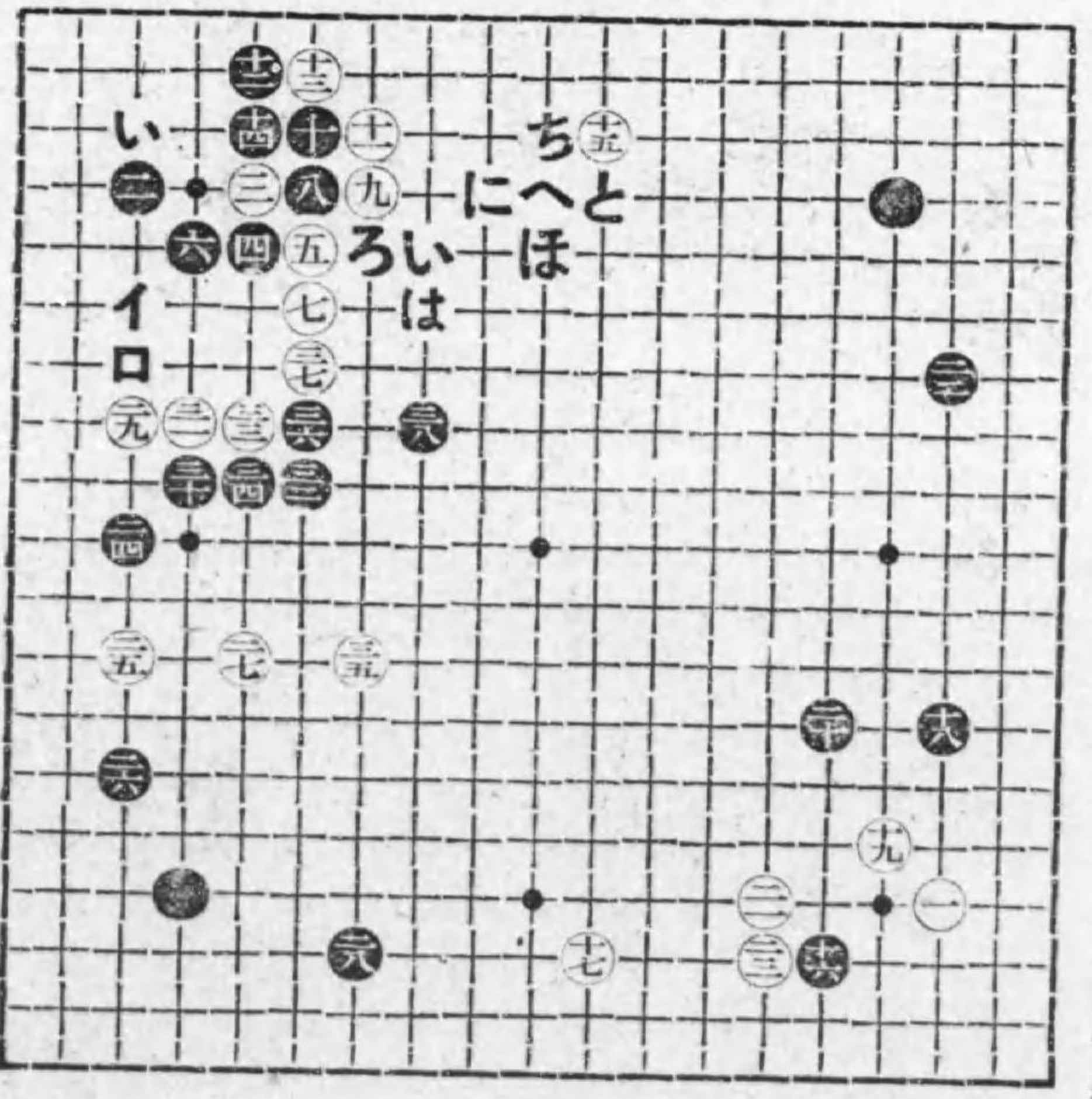
黒八で十六は、白に(い)と来られて悪い。八と切つて十四迄は、後手ではあるが地量は多く含まれてゐる。八より十四迄は、白七に對する定石である。

白十五で二十三と其方の締りなら、黒は十五が緊急の大場である。黒十五に行つた次ぎには、黒(い)、白(ろ)黒(は)で其の白の模様を消すのである。

黒(は)に白(に)なら、黒は(ほ)又た白(へ)なら、黒(と)白(ほ)黒(ち)で白は大いに困る。さうなれば黒(い)(は)は捨石にしても宜いのである。

黒二十は十六を捨て、二十二と行き十八と二十二の間を地にする爲めである。

三十八となつては黒(イ)、白(ロ)となる、黒に得もあつて、黒の形勢は大いに可。



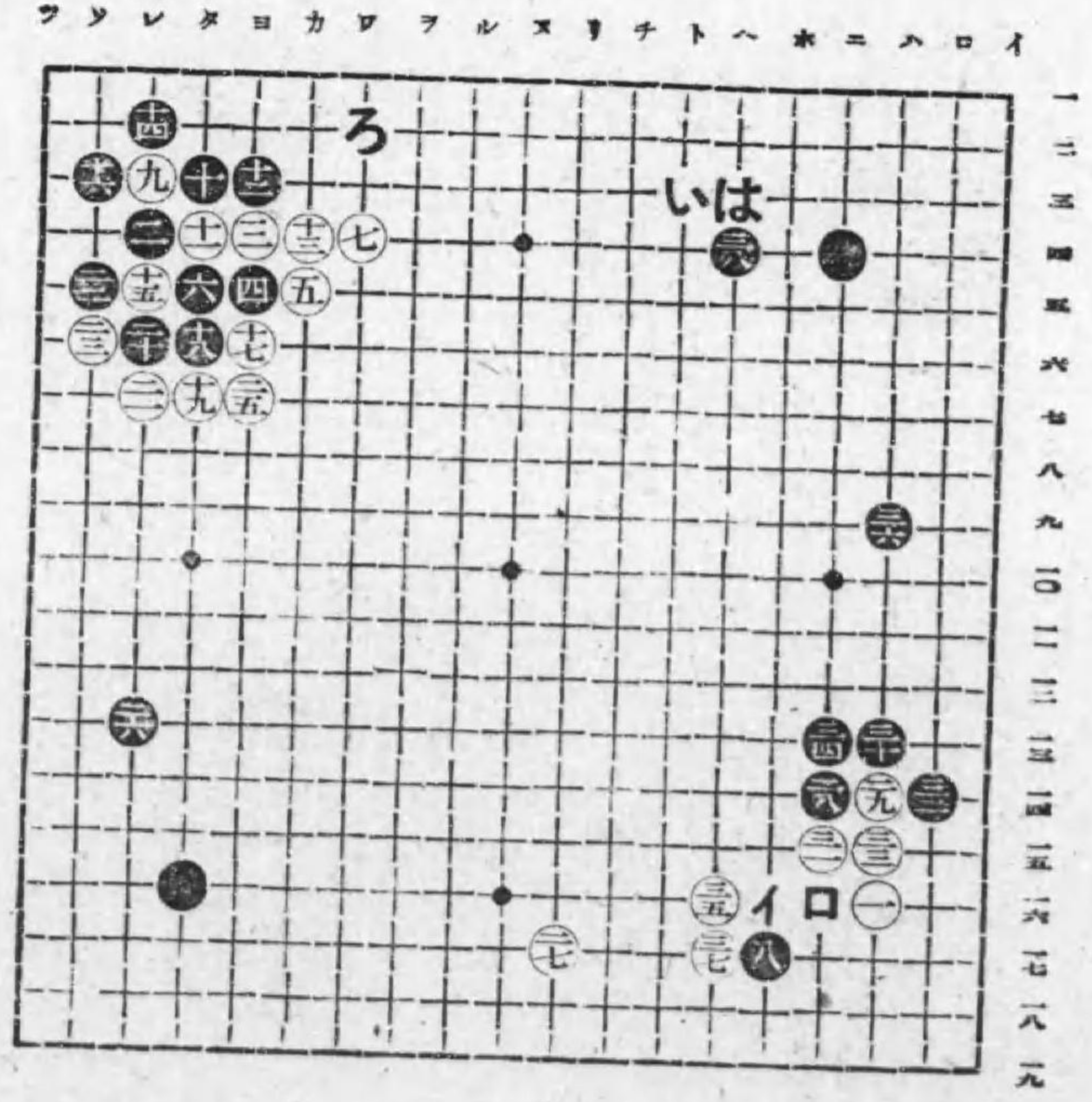
黒十で十六だと、白十、黒ソの二、白レの八となつて、黒が悪い。其の黒ソの二は大きい所であつて、其處を占めると占めないで、は布石の進縮に關係がある。白九、黒十となれば、黒二十四は十五に粘ぎ白二十五迄の定石となる。

黒十四で十六は白十四、黒ソの二、白十五、黒ソの四、白カの三となつて、黒が悪い。

白十五を十六は、黒に十五と粘がれて白が悪い。

二十五となつた關係は、黒は二十六の方が良い。二十六を(い)の方は(ろ)に、走りの有る所として其處に優劣がある。白が二十七で(は)と行かない事も(ろ)の關係に依る。

白二十九を(イ)だと、黒(ロ)と行く黒の意に投ずる、白二十九は黒二十八の裏。で、白三十七迄黒三十六迄の定石が現はれる。黒二十八は左側を厚層にする爲。



黒四より八迄は定石である。白九迄も同じく定石である。黒八迄と應じてゐる気分には些の尖鋭も無い。白九を二十五と其方だと、黒は九へ直下して良。

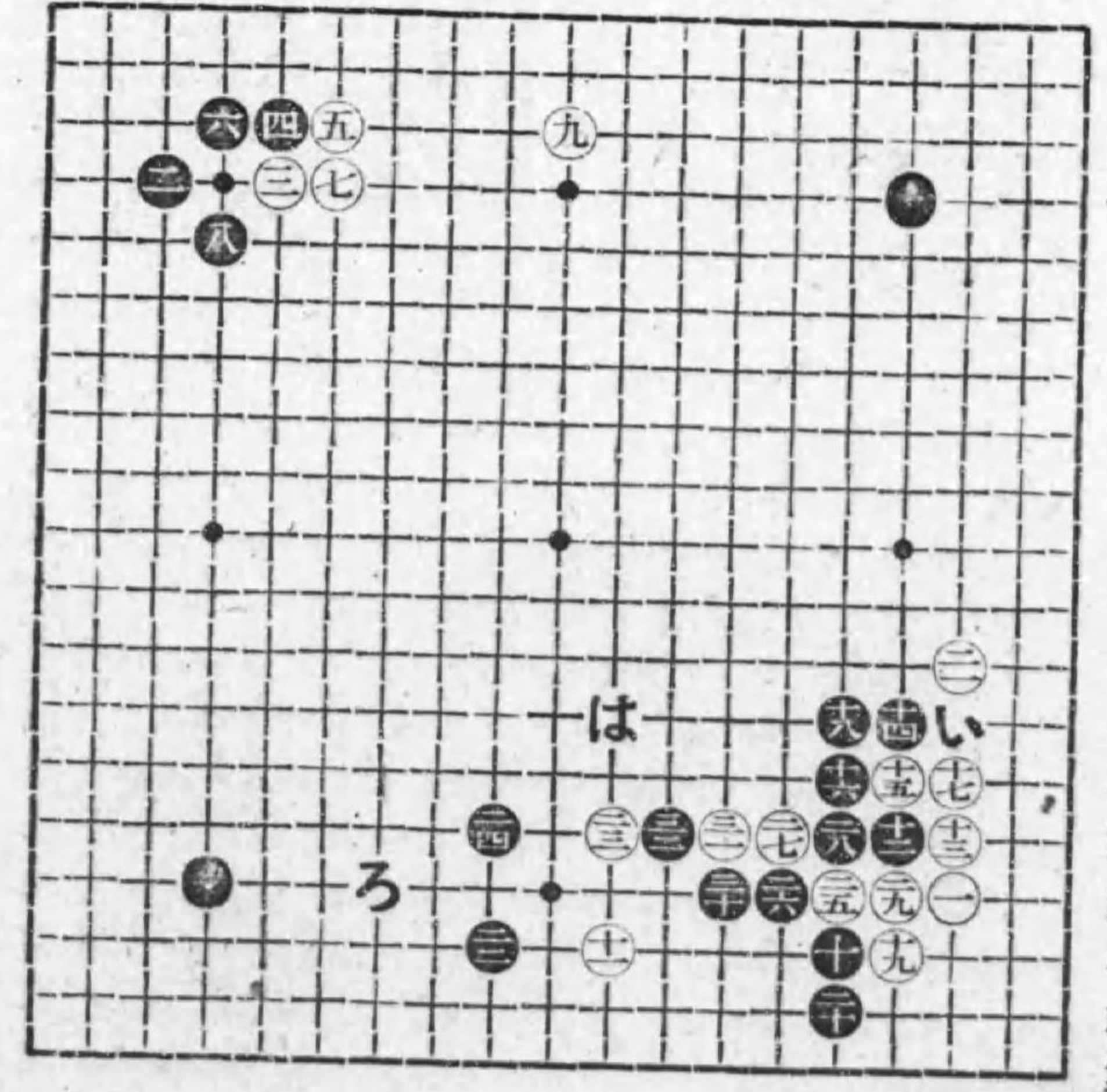
黒十四で十五だと、白は(い)。黒十四に白十五を十七黒十五、白二十一は、黒前者より十四と一手多く進行ゆえ、此方が白十一の方に強く響く。黒十四の意はこれを望む。

白十五、十七は十五を十七黒十五より黒に二十八に缺點を與えて良いとの意。二十一迄は共に定石。

白十九の意は、黒二十を二十六なら、白は(ろ)。二十なら二十一といふ事にある。其れは十九を先づ二十一と受け、後ち十九で黒は二十より二十六が味が好いと二十には受けない。

斯の兩者の呼吸は布石に大妙味がある。即ち後の進退に。白二十五より三十一迄は、黒三十二となつて不可といふ事を示した迄。二十五では(は)。

ワソレタヨカヲヲルヌリチトヘホニハロイ



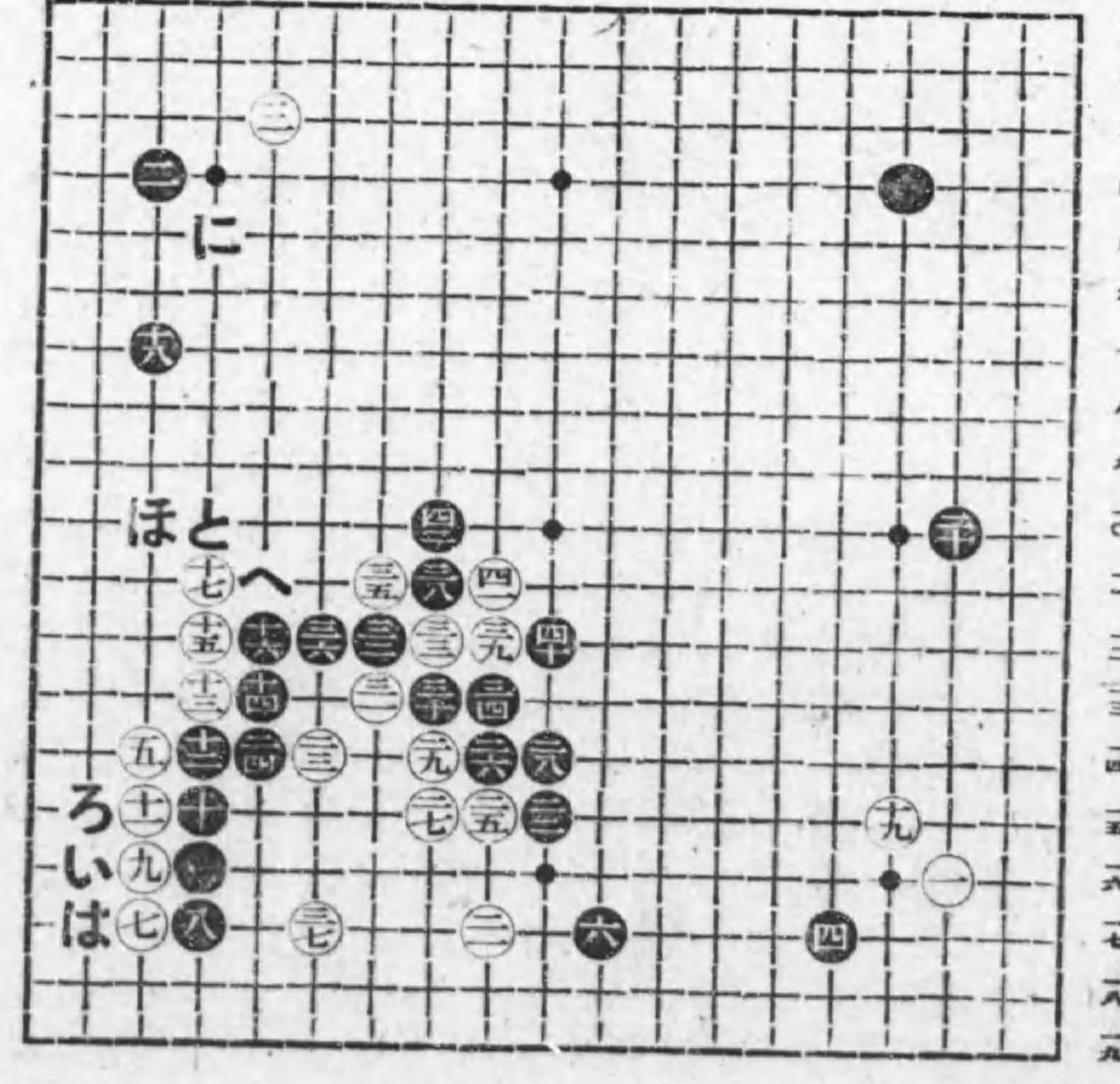
白五は黒に(カ)の十六)と受けさせ、そして六。黒六の布石は白が七と入ることを知る。黒八で九だと白八、黒(ヨ)の十六)、白(イ)、黒(ろ)、白(は)、黒十一白三十七、黒十二迄の定石となる。

すると黒六は單に四の備へのみの意となり、白は又た十八、黒(に)、白(ほ)と構へて、十二となつた黒をこれ又單に、丈夫だに留める。

黒八より十六迄は、次ぎの十八と行く事をも定めた、六よりの延長である。

白十九は二十一と打込む爲めと。黒二十を(リ)の十五)なら、白は二十で良いの意も含む。黒二十は白二十一と來ることを豫期してゐる。それは黒(へ)、白(と)となる好都合も見て。黒二十二と白二十一を攻撃して、三十七と活かしたが四十二となつた白四十一以下の荷厄介と、後ち三十七以下を攻める關係は、白七の方へ及ぼす得とで充分。

ワソレタヨカヲヲルヌリチトヘホニハロイ

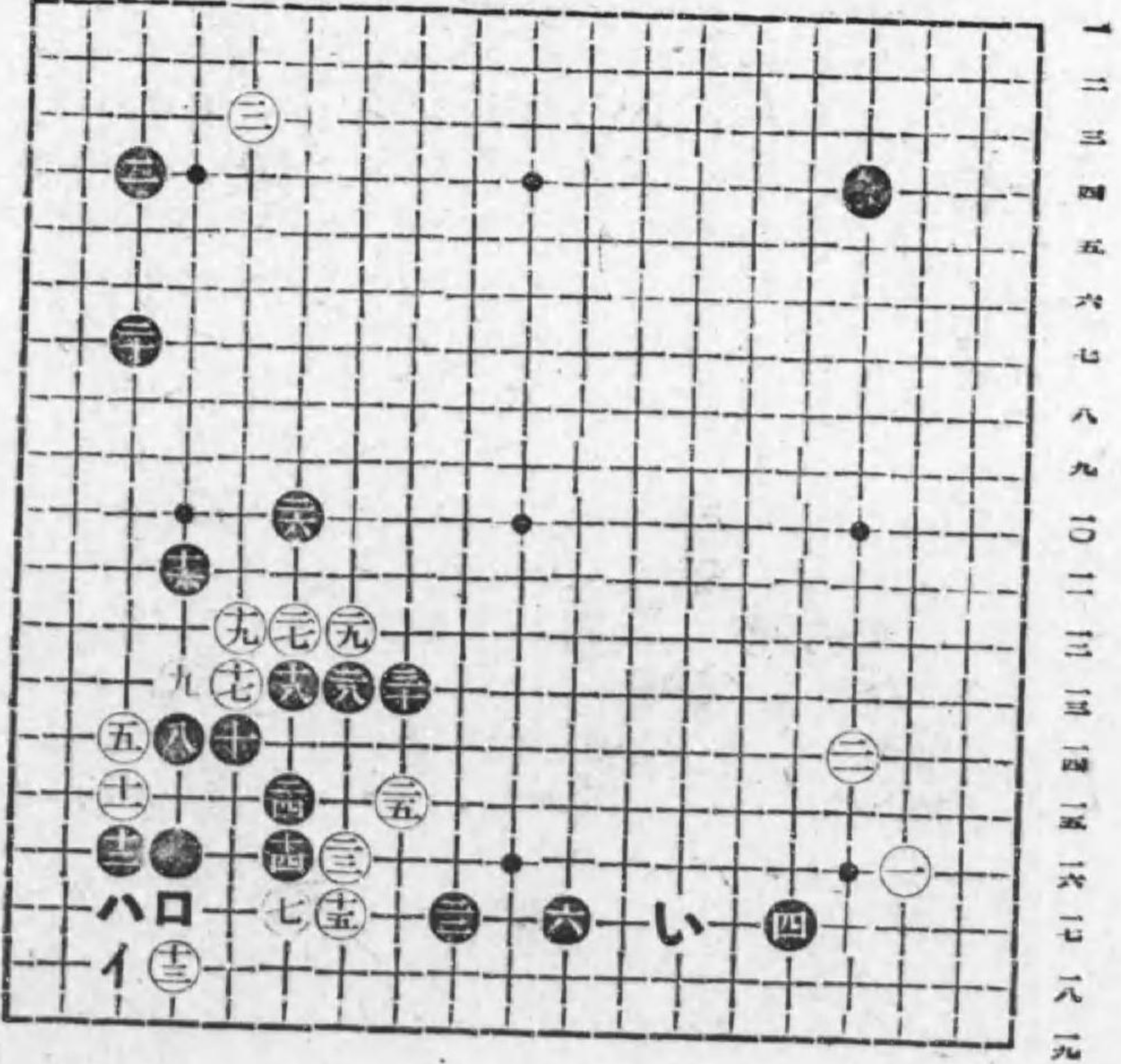


白七は前譜七では面白くないとりての變化である。
 白十三を二十三、黒「ヨの十七」、白「ヨの十八」、黒十四、白「カの十八」、黒十三、白「ワの十四」の定石に出ても黒六があつて、此際斯の定石白不適も甚だしい。

黒十四で(イ)、白(ロ)、黒(ハ)のは受けは、白二十二となつて、黒甚だ不可。十四は十六、十八と白を十九と愚形に攻める、準備である。
 白十三を「レ」の十二なら、黒「タの十七」。白斯う十三なら黒十六との事は、黒十の考へにある。

黒二十は十六に援兵して、白の態度を見たのである。
 先へ先へと進んでも、糸の切れた麻 なるてはいけなし。即ち二十で二十六など。
 白二十一(ハ)の打込みを含む定石。で、黒は其の用心を兼ね、二十二と十五以下三子の白を攻める。白は二十三に出を止められてはと二十九迄。黒二十六は二十七、二十九と白を誘つて三十迄で其黒を安心。

イロハニホヘトチリヌセヲカヨレ

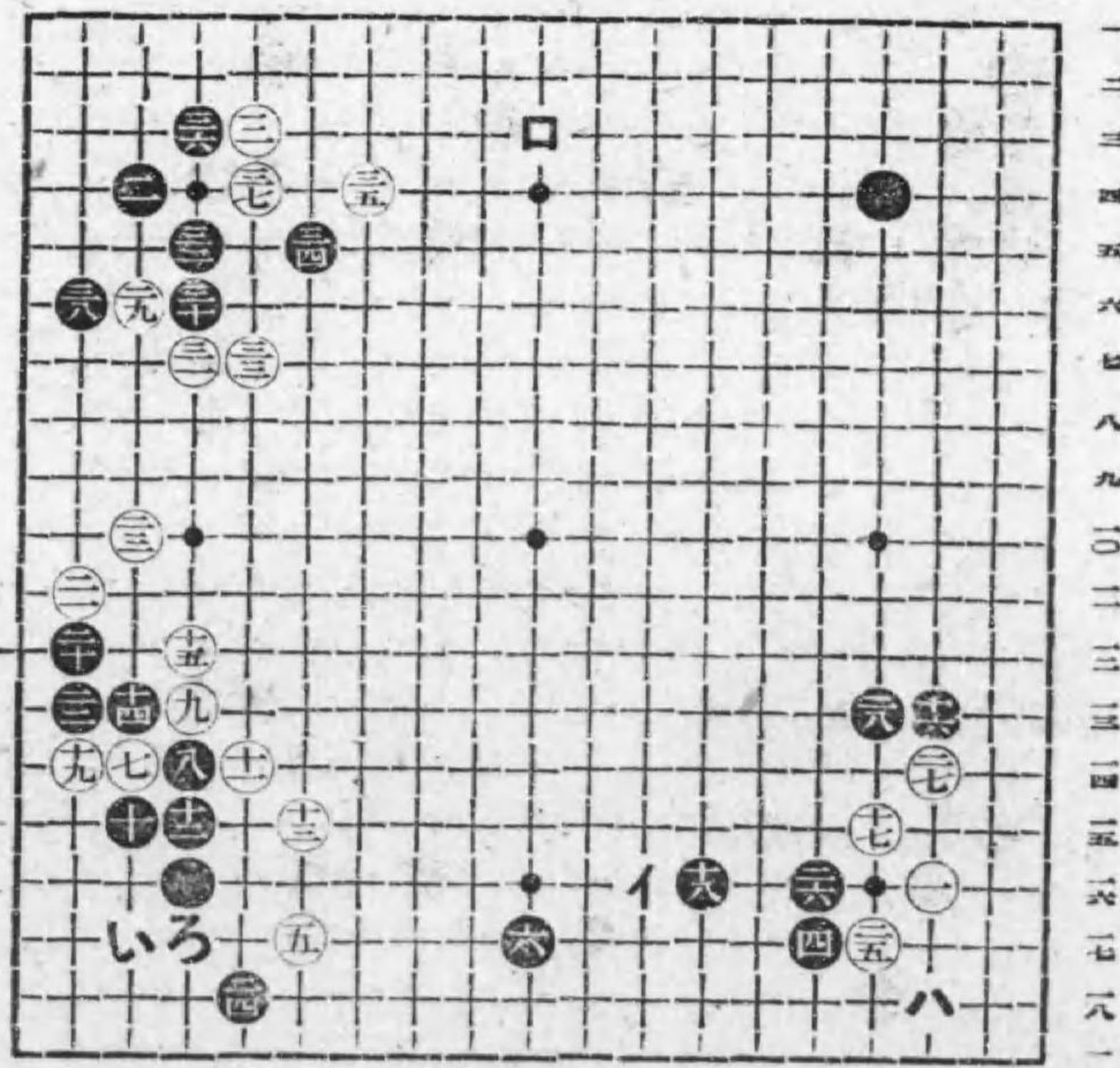


白五は黒に八と受けさせ「リ」の十七又は「チ」の十七の考へ。黒六は其の白の裏を行く。是れ布石の要領である。
 黒十を十一だと、白(イ)黒十、白(ろ)となる。
 其れは白は五を治まらうといふのである。
 黒十は其の白の裏を行く。

黒十六で十九の打拔が、定石ではあるが、すると白に三十二、黒「レの五」、白三十、黒「レの七」と運ばれ、十九となつた方へ進み、其れと照合せて位ひが低い。
 又た白十五の一面には、黒十六で十九なら、(イ)と打込んで見やうの腹もある。で、黒は十六。

黒十六は白十七に十八と守る調子の爲め。白は黒十八に續いて其方へ構つてゐては、黒に好都合のみ與えてハタシがない。それで十九より、二十四迄となつたが、二十五を(ロ)の好點に就いてと將に着手の際、省みると白(ロ)だと、黒に(ハ)と走られて、白は面白くない。で、二十七迄で先手を取つたが、二十八の方の黒は厚い。

イロハニホヘトチリヌセヲカヨレ



前譜續行。前譜黒二十八となつて其方の黒は厚いと言つたのは、白(い)なら、黒は(ろ)。白(は)なら、黒は(に)で、先づ白には出はないと見る所。だからである。

白一は黒二を二十一又は二十なら「トの六」とでも大規模に中央へ向つて、大地を拓きうといふことにある。

黒二には白三より十一迄の應答の外ない。黒二で九に双關も良手である。

黒十四、十六の着意は、此の當面に適するからであつて、是れを力量といふ。其の^二は局面の推移を洞察して適宜の處置を誤まらないからである。

黒二十六は二と十二の方の備へと、右上隅の授けでもあり、且つまた二十五以下白の攻めでもある。

二十六となつては黒各所に地があり、白は中央に地を拓す外ない、が思ふやうには出来まい。

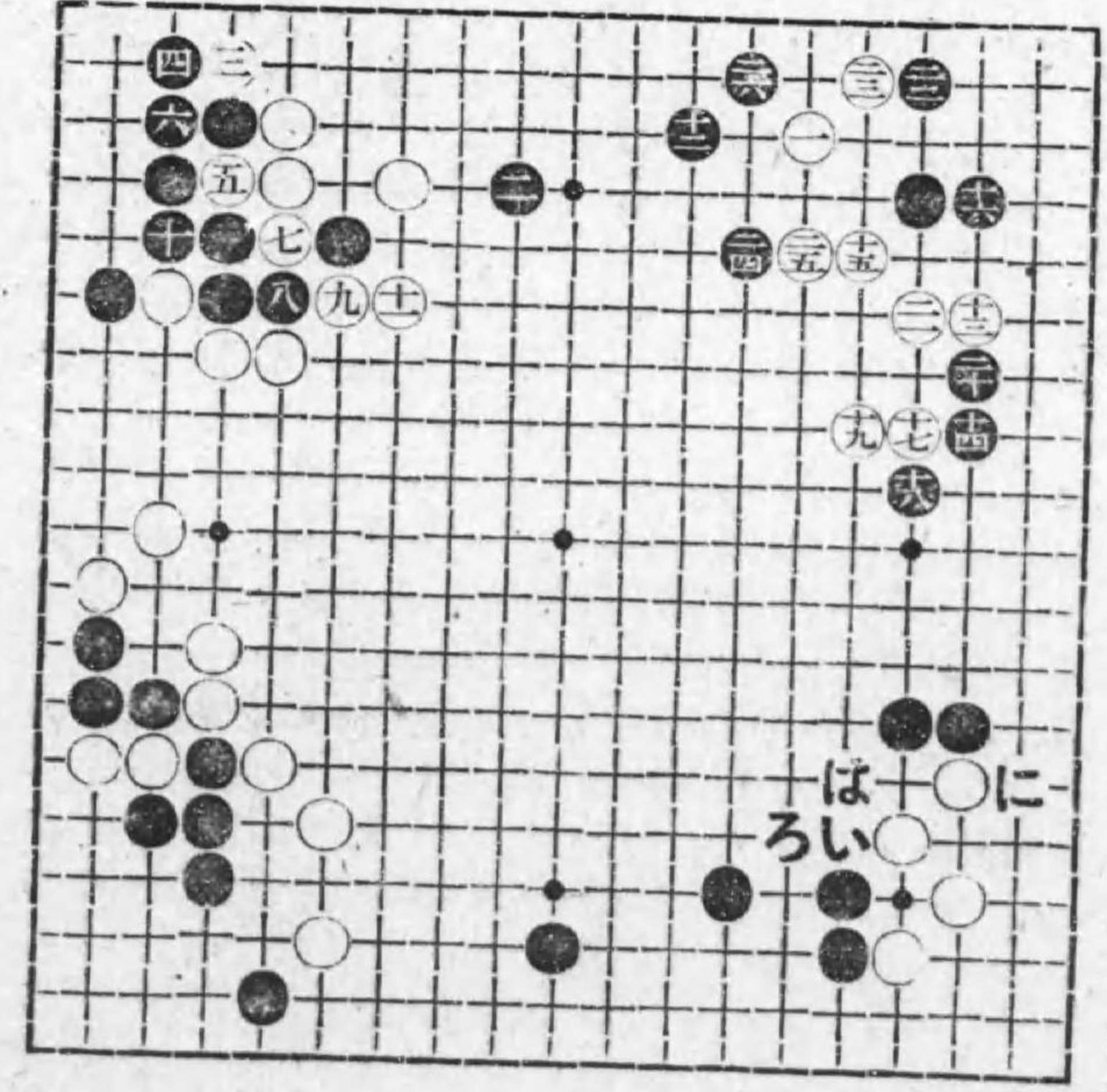
黒八は地があつて良い定石である。白に九と締らせても、九、八の比較は同格に見える。

白一、九となつた關係は、黒十と行くことが「ヌの十七」の方よりも優。即ち黒更に「ハの十三」と行けば、其れには續いて黒「ロの十五」、白「ハの十六」となる事が件ふから。

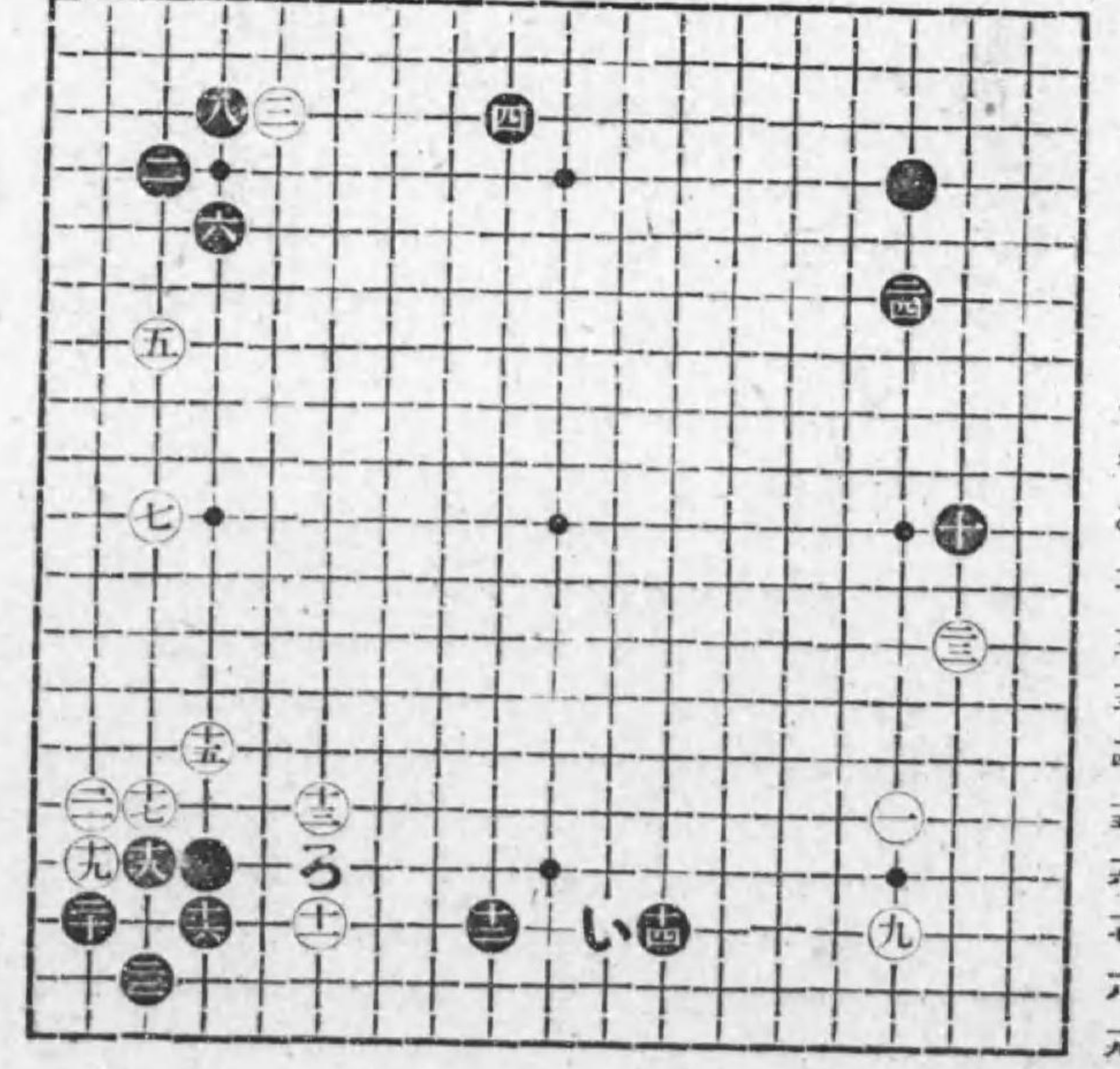
白十一は黒に十五と受けさせ、そして「ヌの十七」と構へたい事にある。其れは十一で「ヌの十七」だと、黒「ワの十七」となつて、黒に十四と打込まれる事が「ヌの十七」の白が、根據無く黒に攻められる立場となるからである。左様はさせないといふのが、黒十二と十四の布石の要領である。

白十三で(い)なら、黒は(ろ)。
黒二十一と僅かに活きた事は、辛いが其れは十二、十四と好適な所を占めた爲めであつて、悔む方が無理である。斯の理は常に念とせられたい。

ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



黒六で(い)だと、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒「ニ」の五、白十七、黒(ほ)、白(へ)、黒(と)、白「ハの六」となつて黒は損である。多く黒が敗を招くのは、斯様な損にある。黒四、白九となつてゐる時には、黒六と應じることが定石で、將來の布石に良い。

黒十を「レの七」でなく、十、白十一を経て十二と飛ぶことは、白に十一と強味は與えるが、黒も左側に一步進み出て地も多い。其の意は白の十三と來ることを知つて十四、十六と飛び白十一の強味を、半ば消すことにある其れに味到せられよ。

白十七で十八だと、黒(と)、白(い)、黒(ロ)となつて白は黒に「トの二」、白「への二」、黒「リの二」と手段せられる。といつて黒(ロ)に白「への二」とドつても居られな

黒十八より白二十五迄は共に定石である。
黒三十二、三十四の要領も定石である。

白が一と高目だから、黒も俱す二と高目でも可い道理同じが可い道理とて、白三で二十、黒三では黒の歡迎となつて、白は二子置せた黒の効力を殺ぐことは難。で白三と入ることは定石である。

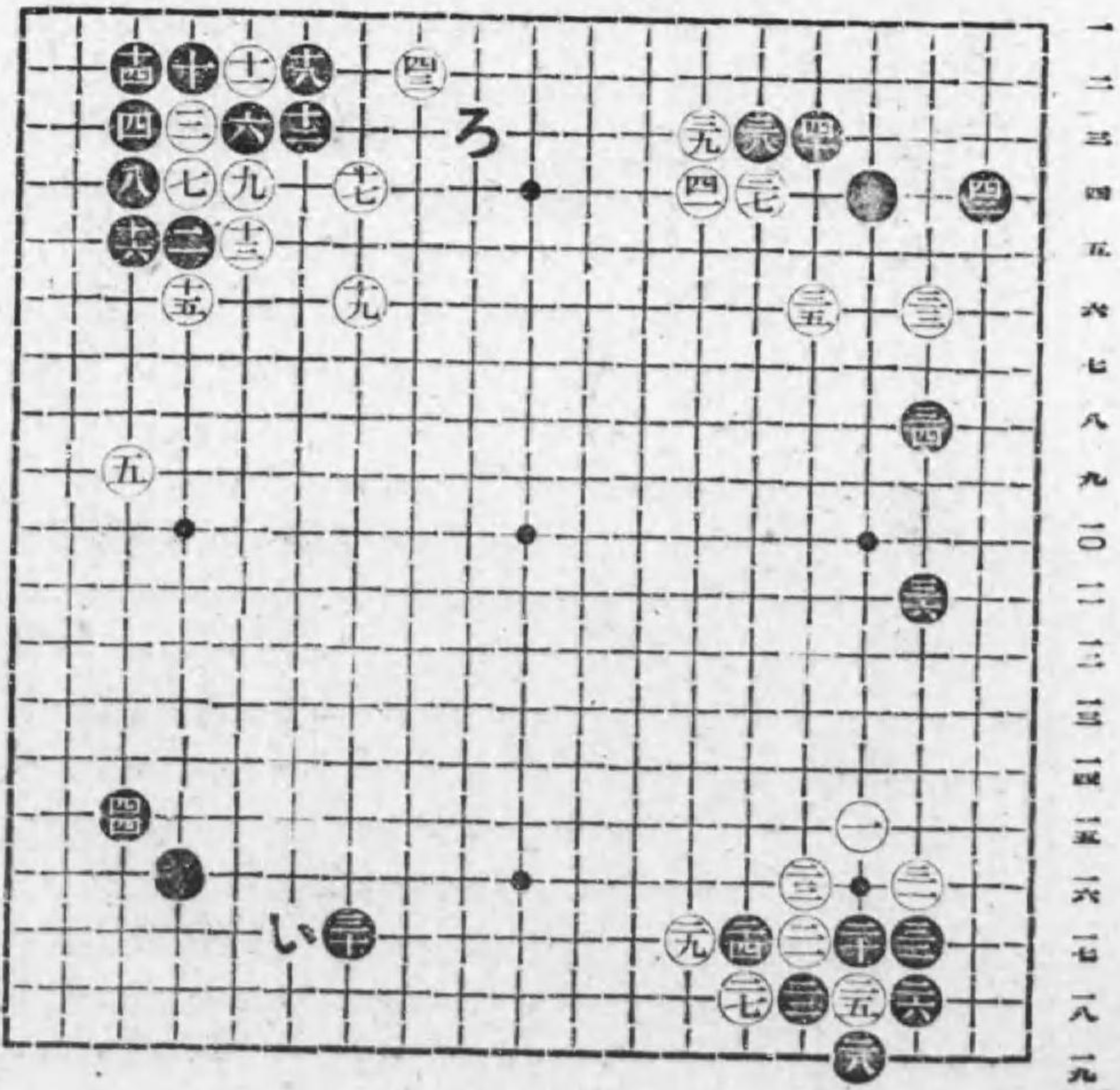
白五は黒六で七、白六、黒「ソの四」、白「ヲの二」と構へたい事にある。それは御免と黒は六より十八迄の定石で先づ隅に二十目近い地を占める。

白十九迄は定石である。が白は模様だけで黒の確かに地を得た、ことに實はビクツイテゐる。其の白の意は黒は常に地多くして、優勢を示してゐる、のに先手で二十目も得られては、前途心細い。

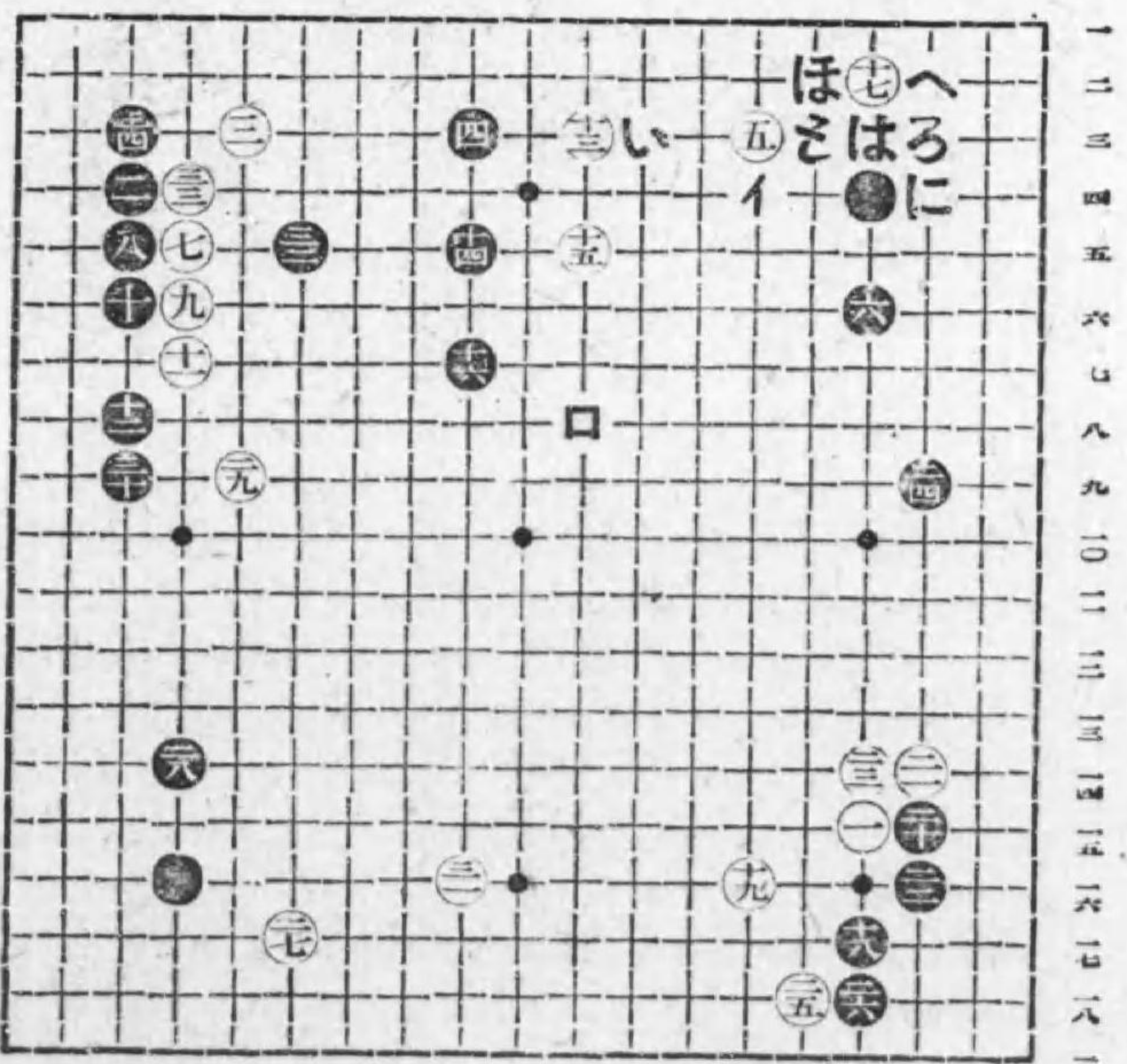
黒二十より二十八迄白二十一より二十九迄共に定石である。此の關係は黒三十と擇ぶが當然。白に(い)と來られては、二十九との間が廣い。

黒三十四で三十七は面白くない。即ち一方に(ろ)と行くことあつて。四十四となつて黒の優勢は明瞭。

イロニホヘトチリヌルカヨタソ



イロニホヘトチリヌルカヨタソ



黒二と四の布石も四は、左下隅「タの十六」の置石に有効にして悪くはなし。

黒八を(い)だと、白に(ろ)と入れられる結果は、黒四が少しく呆ける。で、黒八だが、其意は白九は必然の手、と、黒は十。黒十は白九となつた當面に、於て第一の好點である。

白十一を(は)なら、黒十一、白(に)、黒十四、白十五、黒十六、白十七、黒二十一で黒は四との間が、二十一に下つた爲めに、一層好くなる。などで白は十一。

黒轉じて二十と其方へ盛容を張つたのは、二十で二十一だと、白(イ)と白に直に來られる結果は、黒は活きる爲め、白の周圍は堅くなる延いて、白に(ロ)と打込まれるなどを推つての事。十八、十九となつては、黒は(イ)と行きたい。二十で行つても可。
三十四となつて黒は優勢。

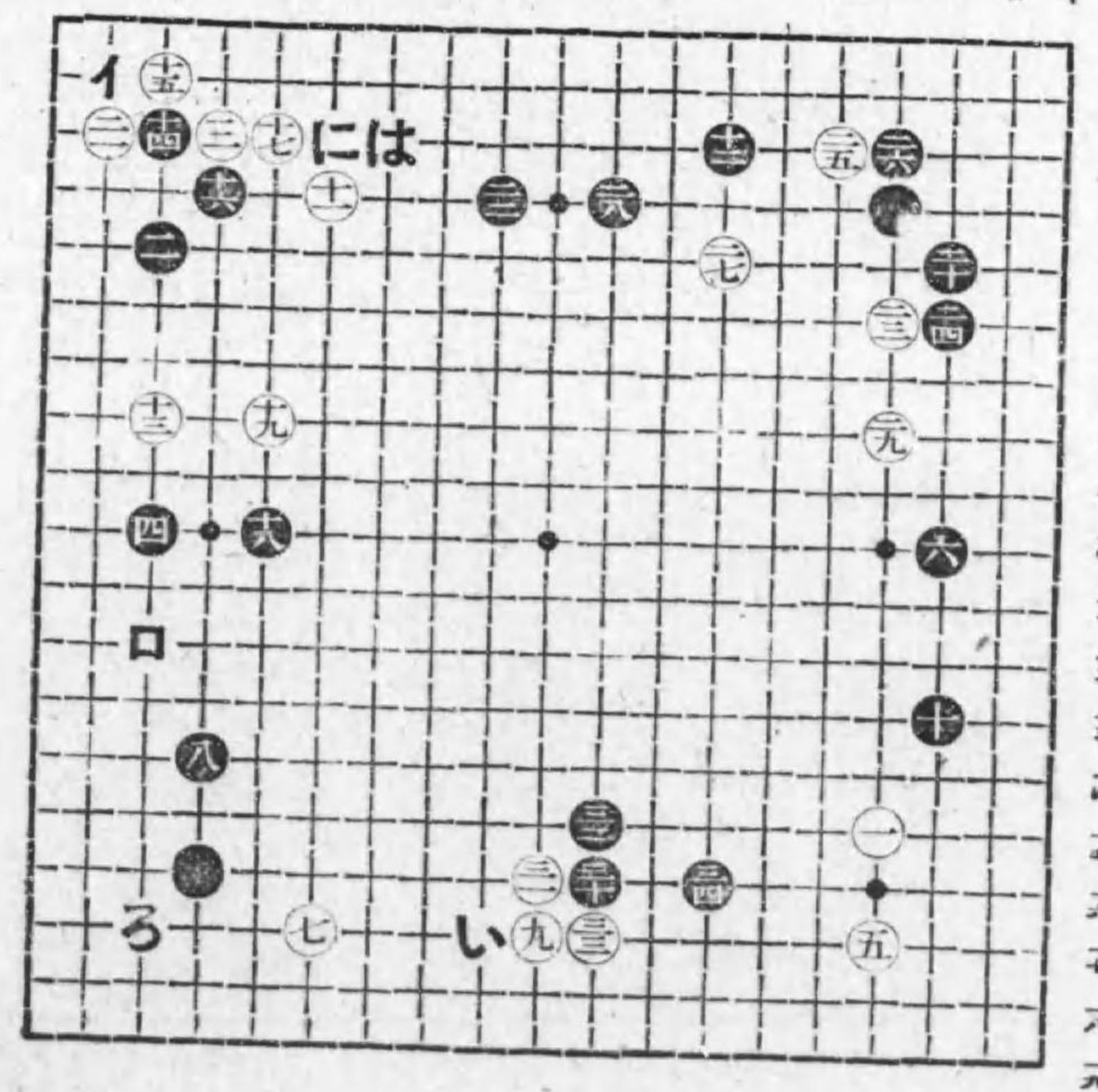
黒二に白三と入ることも定石である。結果は十一迄となる。黒十と白十一との方の比較は、白少しく好く見ゆる。其の筈である、白は三の當時先手が十一で後手となつてゐる。

黒十二より十八迄白十三より十七迄共に定石である。斯の定石は相先でよく現はれる。
黒十八は右上隅の置石に連絡して良い定石である。

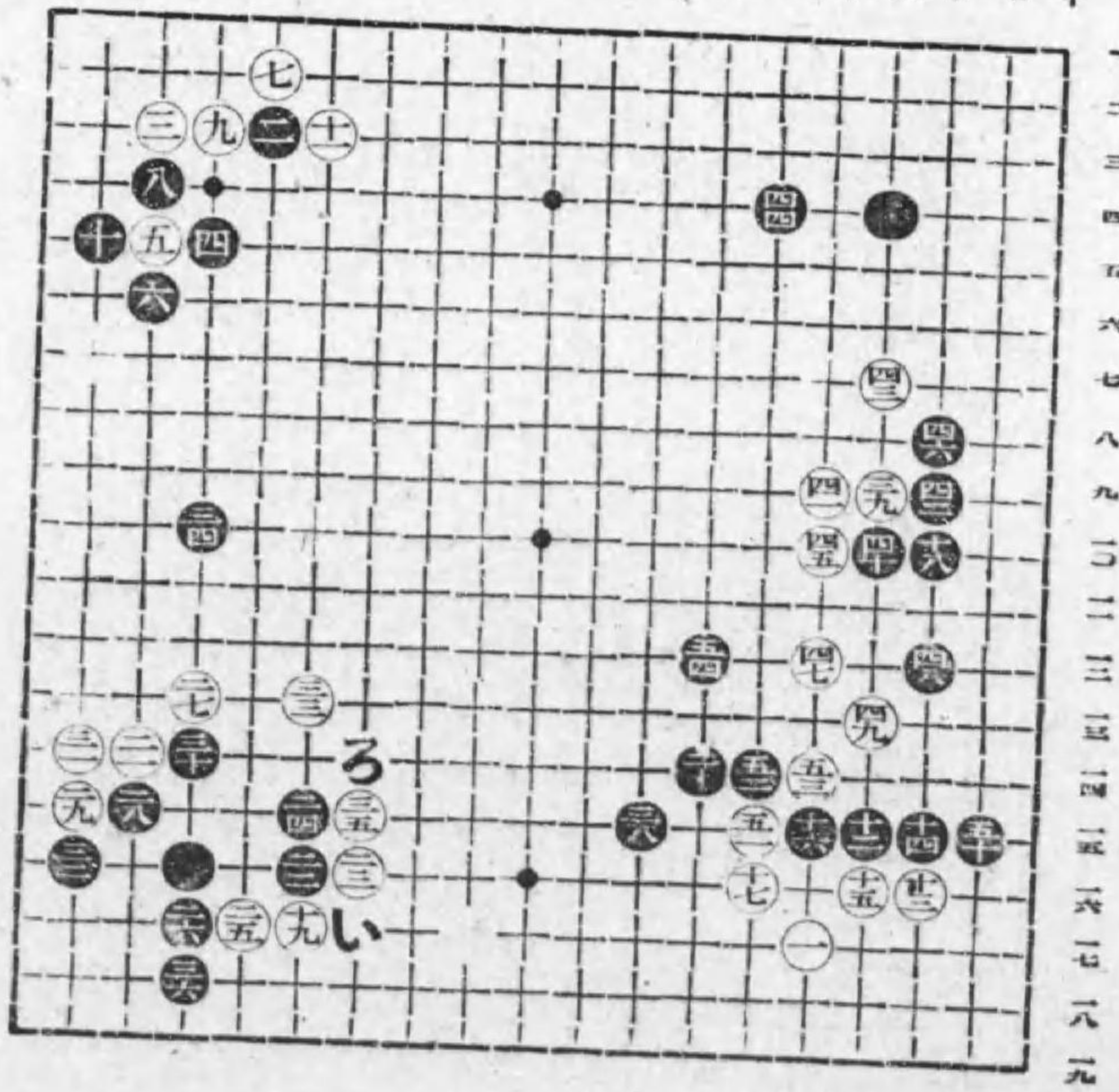
白十九なら黒は二十。白十九を二十なら、黒は(い)又は進んで三十七といふ所である。

黒三十四で(ろ)が定石であるが、三十四の好點を占め白に三十五と止められても、三十六で先手が取れる。白三十七は黒に(い)と切られることが大きいから。五十四となつて五十四以下を、白に取られる人は、天下井目の人に、又か井目置く人。

イロハニホヘトチリヌルヲカセヨ



イロハニホヘトチリヌルヲカセヨ



黒六を前譜の如く七でなく、白の欲するまゝ十二迄と受けてゐても好い。

白十一迄で地が出来た然し、其れには数がある。が黒十二迄は現在目数は明かではないが、後の善川如何で或いは、百目出来す基礎にもなる。

白十三で「レ」なら、黒は「ヌ」で良し。

黒十四は軍人の訓練と同じく、廻れ右で氣持が好い。白に十五と縮らせても悔む事はない。十四は大の好點。

黒十六は白一と十五の關係で其方が好い。白一が「イ」なら黒十六は「ヌ」の十七の方。

白十七を「ル」なら、黒二十二、白二十三、黒二十四が黒は善い。其れは黒大模様だ、大模様はなるべく與えぬものだ、其れで白は十七。

黒二十六は形ちの好い定石である。其の隅の黒四子が連結して。

イロハニホトヘチリヌルヲカヨレタ

